鳥取県教育文化財団調査報告書　46

主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　II

鳥取県鳥取市

NISIKATURAMI ISEKI

西桂見遺跡

—鷲谷口地区・鷲谷奥地区・堤谷地区—

KURAMI KOHUNGUN

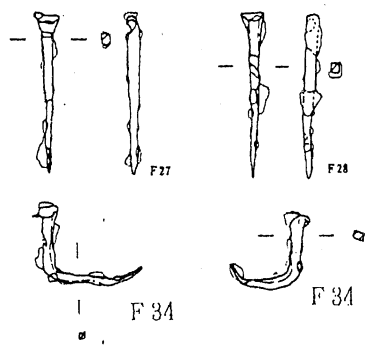
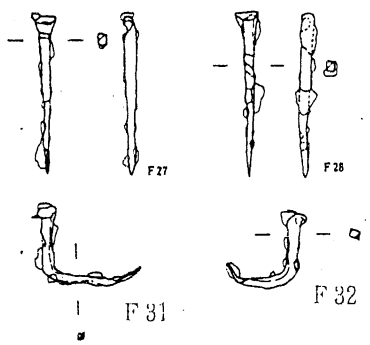
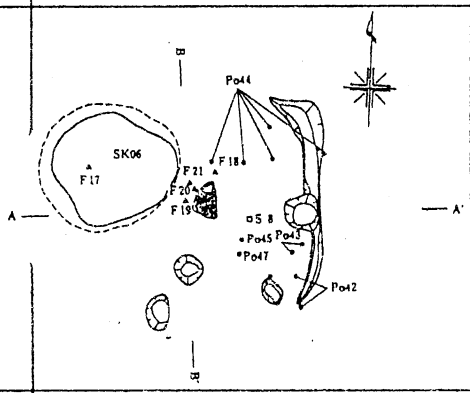
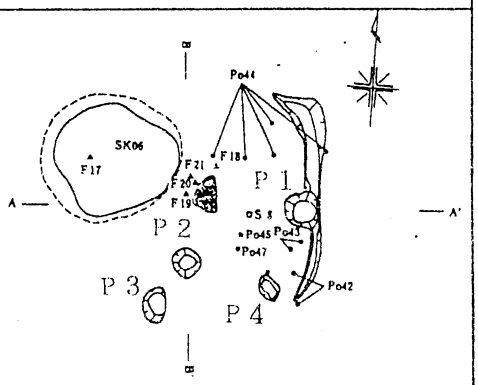
倉見古墳群

1996

財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県教育文化財団調査報告書 46
主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
『西桂見遺跡－鷲谷口地区・鷲谷奥地区・堤谷地区－・倉見古墳群』

正　誤　表

頁　　行	誤	正
背表紙	西桂見遺跡群	西桂見遺跡
例言	山田真司	山田真宏
文中写真	1995年度お払い	1995年度おはらい
Ｐ１　　17～18行目	鳥取土木事務所都市計画課	鳥取県土木部道路課及び鳥取土木事務所
Ｐ10　　28行目	炭化物や炭化物を	炭化物や焼土を
Ｐ19　　挿図15		
Ｐ42　　５行目	主柱穴は４本と	主柱穴は４個と
Ｐ44　　13行目	Ｐ19	Ｐ17
Ｐ49　　挿図43		
Ｐ83　　13行目	ＳＩ11・12・共に、	ＳＩ11・12共に、
Ｐ93　　14行目	Ｃ１～Ｃ13	Ｃ２～Ｃ14
Ｐ95　　２行目	Ｃ14～Ｃ24	Ｃ15～Ｃ25

序

湖山池周辺は、布勢古墳、天神山城などの史跡を含め、原始・古代からの数多くの遺跡が存在する、遺跡の宝庫であります。

当財団では、このような遺跡地帯の中で、鳥取土木事務所の委託を受け、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う発掘調査として、３カ年にわたって桂見遺跡・西桂見遺跡を調査いたしました。

その結果、西桂見遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡がまとまって検出されたほか、中世の礎石総柱建物跡、中世墓群なども検出され、当時の人々の生活ぶりを知る上で、大変おおきな成果をあげることができました。

今回、この調査結果を報告書にまとめることができましたが、本書が教育および学術研究のため広く活用され、歴史解明の一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が長く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、鳥取土木事務所並びに調査に参加して下さいました地元の方々はじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に対して心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成８年３月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長　田　渕　康　允

例　言

1．本書は、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う、鳥取市桂見字堤谷716、726他４筆、高住字鷲谷口847-1、847-2他３筆、高住字鷲谷奥848、852-2に所在する西桂見遺跡堤谷地区・鷲谷口地区・鷲谷奥地区および倉見古墳群の発掘調査報告書である。契約時及び調査時は、それぞれ桂見・高住所在遺跡群３区、桂見・高住所在遺跡群６区、桂見・高住所在遺跡群５区と呼称した。

2．本調査は、鳥取土木事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団東部埋蔵文化財調査事務所が1993年度から1995年度にかけて行った。なお、遺跡名は、鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取市教育委員会と協議した結果、当該地は鳥取市桂見・高住にかけて所在し、既に発掘調査報告がなされている遺跡と同一の丘陵上にあって、西桂見遺跡・倉見古墳群とされているため、その遺跡名を踏襲して命名し、既に調査された地区と区別するために主要な字名を地区名として付け、西桂見遺跡鷲谷口地区・鷲谷奥地区・堤谷地区とした。

3．西桂見遺跡鷲谷奥地区は、地形的特徴からＡ区・Ｂ区に、堤谷地区は、Ａ区・Ｂ区・Ｃ区に分けた。倉見古墳群のうち、倉見７号墳は周知の古墳であるが、倉見８号墳・９号墳は、新発見のため古墳群の一連の名称をつけた。

4．本報告書で示す標高は、ワールド航測コンサルタント株式会社による３級基準点１（Ｘ：-55719.667m、Ｙ：-14628.725）の30.516m、３級基準点２（Ｘ：-55734.756m、Ｙ：-14487.404m）の15.459mを起点とする標高値を使用し、方位は磁北を示す。Ｘ：、Ｙ：の数値は国土座標第Ｖ系の座標値である。

5．本報告書に記載の地形図は、鳥取市発行の1/50000地形図「鳥取市管内図」、調査区位置図は、鳥取市1/2500地形図「都市計画計画図1-19、1-24」を使用した。

6．報告書の作成は、調査員の討議に基づくものである。報告書本文については、調査員が協議のうえ分担して執筆し、執筆担当者名を目次に記載した。

　遺構図の浄写は、東部埋蔵文化財調査事務所で、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。

　遺構・遺物写真は発掘担当調査員が撮影した。

　本書の編集は牧本が行った。

7．遺構実測は基本的に調査員が行ったが、調査前および最終の地形測量については、ワールド航測コンサルタント株式会社に委託して行った。

8．竪穴住居跡内で出土した炭化材の樹種鑑定は、鳥取大学農学部農林総合科学科・古川郁夫教授・堤誠司氏・佐藤真美氏にお願いし、多忙にも関わらず玉稿をいただいた。

9．遺跡内出土の炭化物の^{14}Ｃ年代測定を、京都産業大学理学部・山田治教授に委託した。

10．中世墓出土の人骨についての所見を、鳥取大学医学部・井上晃孝教授にお願いしたところ、多忙にも関わらず玉稿をいただいた。

11．遺跡内出土の種子同定を、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

12．ラジコンヘリコプターによる遺構空中写真を、写測エンジニアリングおよび大橋保夫氏に委託した。

13．出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

14．現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導・御協力して頂いた。

　赤木三郎　赤沢秀則　高橋正弘　中野知照　西尾克己　平川　誠　三木　靖　山田真司　松山智弘

（敬称略）

凡　　例

1．発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、基本的に一致するが、以下のものは変更したものである。

調　　査　　時	報　告　書	調　　査　　時	報　告　書
斜面部黒色土落ち込み	ＳＫ０７	炭化米範囲	ＳＫ０８

2．本報告書における遺構記号は次のように表す。また、竪穴住居跡のピット番号は、調査時のものから変更したものがある。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＫ：土坑・土壙　ＳＤ：溝状遺構　ＳＳ：段状遺構

Ｐ：柱穴・ピット

3．本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。

(1)　遺構図―竪穴住居跡：1/60、掘立柱建物跡：1/60･1/80、土坑･土壙：1/30、1/60、溝状遺構：1/60･1/80･1/100

段状遺構：1/60･1/80、ピット群：1/60、1/80、床面遺物出土状況：1/20･1/30

土器溜り：1/30、1/100、埋葬施設：1/20･1/40･1/60、古墳：1/60･1/100

(2)　遺物実測図―土器：1/3･1/6･1/8、鉄製品：1/2、石器：1/2･1/3･1/4、玉製品：1/1、古銭：1/1

4．遺構の測定値のうち、ピットの規模は（長径×短径－深さ）cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。古墳墳丘の規模は、墳端（裾部）までの計測値である。

5．遺構図における表示は以下の通りである。

：焼土面、：貼床、：焼土、：炭化物、：炭・灰

●：土製品、　△：鉄製品、　□：石製品、　★：玉製品

6．本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po：土器・土製品　Ｓ：石器　Ｆ：鉄製品　Ｊ：玉製品　Ｂ：銅製品　Ｃ：古銭

7．土器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器・陶磁器は断面黒塗りで表現した。

遺物実測図中における記号は以下の通りにする。

→：ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）、……：擦り範囲、　―：敲打範囲、

：赤色塗彩、：敲打面、：擦り面・砥面

8．遺跡名は略号（西桂見遺跡＝ＮＫＭ）を用いた。

遺物には、遺跡名略号、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に明記した。実測した遺物については、実測者番号（FN－１等）をシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原図にもその番号を記した。

9．遺物観察表については以下の通りとする。

(1)　法量は、土器については基本的に口径、器高、胴部最大径、底部径を記載した。石器・鉄器・玉製品については基本的に最大長、最大幅、最大厚、重さを記載した。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には数値の前に※印、残存値は同様に△印を付した。

(2)　手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測図で表された方向である。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……（牧本）　1
　第２節　調査の経過と方法……（牧本）　1
　第３節　調査体制……（牧本）　4
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境……（高垣）　5
　第２節　歴史的環境……（高垣）　6
第３章　西桂見遺跡の調査（1994年度）
　第１節　西桂見遺跡鷲谷口地区の概要……（牧本）　9
　第２節　西桂見遺跡鷲谷口地区の調査結果……（高垣・牧本）　10
　第３節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ａ区の概要……（牧本）　41
　第４節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ａ区の調査結果……（小谷・高垣・牧本）　41
　第５節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ｂ区の概要……（牧本）　75
　第６節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ｂ区の調査結果……（小谷・高垣・牧本）　75
第４章　西桂見遺跡の調査（1995年度）
　第１節　西桂見遺跡堤谷地区Ａ区の概要……（牧本）　83
　第２節　西桂見遺跡堤谷地区Ａ区の調査結果……（牧本）　84
　第３節　西桂見遺跡堤谷地区Ｂ区の概要……（牧本）　107
　第４節　西桂見遺跡堤谷地区Ｂ区の調査結果……（牧本）　107
　第５節　西桂見遺跡堤谷地区Ｃ区の概要……（牧本）　114
　第６節　西桂見遺跡堤谷地区Ｃ区の調査結果……（牧本）　114
第５章　倉見古墳群の調査（1994年度）
　第１節　倉見古墳群の概要……（牧本）　126
　第２節　倉見７号墳の調査結果……（牧本）　126
　第３節　倉見８号墳の調査結果……（牧本）　130
　第４節　倉見９号墳の調査結果……（牧本）　133
第６章　考察
　第１節　西桂見・桂見遺跡における集落の構造……（牧本）　140
　第２節　湖山池周辺の横穴式石室について……（牧本）　143
　第３節　西桂見遺跡の土塁状遺構について……（牧本）　145
　第４節　中世墓について……（牧本）　146
註・参考文献……152
西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物観察表……（牧本）　153
特論１　西桂見遺跡出土の樹種鑑定結果……古川郁夫・堤誠司・佐藤真美　173
特論２　西桂見遺跡中世の土坑から検出された骨片の同定……パリノ・サーヴェイ株式会社　174
特論３　西桂見遺跡出土の種実遺体同定……パリノ・サーヴェイ株式会社　174
特論４　西桂見遺跡の液体シンチレーション^{14}Ｃ年代測定……山田　治　176
特論５　堤谷地区出土人骨……井上晃孝　180
写真図版

挿図目次

挿図１　西桂見遺跡調査区位置図
挿図２　鳥取市の位置図
挿図３　周辺遺跡分布図
挿図４　1994年度西桂見遺跡調査区全体図
挿図５　ＳＩ01遺構図
挿図６　ＳＩ01炭化物出土状況図
挿図７　ＳＩ01貼床除去後状況図
挿図８　ＳＩ01内ＳＫ１遺構図
挿図９　ＳＩ01出土遺物実測図
挿図10　ＳＩ02遺構図
挿図11　ＳＩ02出土遺物実測図
挿図12　ＳＩ03遺構図
挿図13　ＳＩ03出土遺物実測図
挿図14　ＳＫ01遺構図
挿図15　ＳＫ01出土遺物実測図
挿図16　ＳＫ02遺構図
挿図17　ＳＫ02出土遺物実測図
挿図18　ＳＤ01～ＳＤ03、ＳＲ01遺構図
挿図19　ＳＤ01出土遺物実測図
挿図20　ＳＤ04～ＳＤ06遺構図
挿図21　ＳＤ05出土遺物実測図
挿図22　ＳＤ07～ＳＤ10遺構図
挿図23　ＳＤ08出土遺物実測図
挿図24　ＳＤ09出土遺物実測図
挿図25　ＳＤ10出土遺物実測図
挿図26　ＳＳ01遺構図
挿図27　ＳＳ02遺構図
挿図28　ＳＳ02出土遺物実測図
挿図29　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(1)
挿図30　鷲谷地区土器溜り周辺地形図
挿図31　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(2)
挿図32　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(3)
挿図33　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(4)
挿図34　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(5)
挿図35　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(6)
挿図36　鷲谷口地区遺構外遺物実測図
挿図37　ＳＩ04出土遺物実測図
挿図38　ＳＩ04遺構図
挿図39　ＳＩ05遺構図
挿図40　ＳＩ05出土遺物実測図
挿図41　ＳＩ06出土遺物実測図
挿図42　ＳＩ06遺構図
挿図43　ＳＩ07遺構図
挿図44　ＳＫ06遺構図
挿図45　ＳＩ07出土遺物実測図
挿図46　ＳＫ06出土遺物実測図
挿図47　ＳＩ08出土遺物実測図
挿図48　ＳＩ08遺構図
挿図49　ＳＩ08Ｐ１内遺物出土状況図
挿図50　ＳＫ03遺構図
挿図51　ＳＫ03出土遺物実測図
挿図52　ＳＩ09・ＳＤ15遺構図
挿図53　ＳＩ09炭化物出土状況図
挿図54　ＳＩ09床面遺物出土状況図
挿図55　ＳＩ09出土遺物実測図
挿図56　ＳＤ15出土遺物実測図
挿図57　ＳＩ10出土遺物実測図
挿図58　ＳＩ10遺構図
挿図59　ＳＫ04遺構図
挿図60　ＳＫ04出土遺物実測図(1)
挿図61　ＳＫ04出土遺物実測図(2)
挿図62　ＳＫ05遺構図
挿図63　ＳＤ14出土遺物実測図
挿図64　ＳＤ11遺構図
挿図65　ＳＤ11出土遺物実測図
挿図66　ＳＤ14遺構図
挿図67　土塁状遺構、ＳＤ12・13全体図
挿図68　土塁状遺構遺構図
挿図69　ＳＤ12・13遺構図
挿図70　土塁状遺構出土遺物実測図
挿図71　鷲谷奥地区Ａ区遺構外遺物実測図
挿図72　ＳＫ07遺構図
挿図73　ＳＫ07出土遺物実測図(1)
挿図74　ＳＫ07出土遺物実測図(2)
挿図75　ＳＫ08遺構図
挿図76　ＳＫ08出土遺物実測図
挿図77　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り出土遺物実測図(1)
挿図78　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り出土遺物実測図(2)
挿図79　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り遺物出土状況図
挿図80　鷲谷奥地区Ｂ区遺構外遺物実測図(1)

挿図81　鷲谷奥地区Ｂ区遺構外遺物実測図(2)
挿図82　1995年度西桂見遺跡調査区全体図
挿図83　ＳＩ11・12遺構図
挿図84　ＳＩ11出土遺物実測図
挿図85　ＳＩ12出土遺物実測図
挿図86　ＳＩ13出土遺物実測図
挿図87　ＳＩ13遺構図
挿図88　ＳＩ15遺構図
挿図89　ＳＩ15出土遺物実測図
挿図90　ＳＢ01遺構図
挿図91　ＳＫ22出土遺物実測図
挿図92　ＳＫ22遺構図
挿図93　ＳＫ23遺構図
挿図94　ＳＫ24遺構図
挿図95　ＳＫ24出土遺物実測図
挿図96　ＳＫ09出土遺物実測図
挿図97　ＳＫ09遺構図
挿図98　ＳＫ10遺構図
挿図99　ＳＫ10出土遺物実測図
挿図100　ＳＫ11・ＳＤ16遺構図
挿図101　ＳＫ11遺構図
挿図102　ＳＫ11出土遺物実測図
挿図103　ＳＫ12・13遺構図
挿図104　ＳＫ12出土遺物実測図(1)
挿図105　ＳＫ12出土遺物実測図(2)
挿図106　ＳＫ14・ＳＤ17遺構図
挿図107　ＳＫ14遺構図
挿図108　ＳＫ14出土遺物実測図
挿図109　ＳＫ15遺構図
挿図110　ＳＫ15出土遺物実測図
挿図111　ＳＫ16・ＳＤ18遺構図
挿図112　ＳＫ16遺構図
挿図113　ＳＫ16出土遺物実測図
挿図114　ＳＫ17遺構図
挿図115　ＳＫ17出土遺物実測図
挿図116　ＳＫ18遺構図
挿図117　ＳＫ18出土遺物実測図
挿図118　ＳＫ19遺構図
挿図119　ＳＫ20遺構図
挿図120　ＳＫ20出土遺物実測図
挿図121　ＳＫ21遺構図
挿図122　ＳＫ21出土遺物実測図
挿図123　ＳＫ27遺構図
挿図124　ピット群01遺構図
挿図125　ピット群02・溝状遺構遺構図
挿図126　ピット群02出土遺物実測図
挿図127　堤谷地区Ａ区遺構外出土遺物実測図
挿図128　ＳＩ14遺構図
挿図129　ＳＩ14出土遺物実測図
挿図130　ＳＩ16出土遺物実測図
挿図131　ＳＩ16遺構図
挿図132　ＳＩ17遺構図
挿図133　ＳＫ25遺構図
挿図134　ＳＫ25出土遺物実測図(1)
挿図135　ＳＫ25出土遺物実測図(2)
挿図136　ＳＫ26遺構図
挿図137　ＳＫ26出土遺物実測図
挿図138　ＳＤ19遺構図
挿図139　ピット群03遺構図
挿図140　堤谷地区Ｂ区遺構外出土遺物実測図
挿図141　ＳＢ02Ｐ13内遺物出土状況図
挿図142　ＳＢ02Ｐ14内遺物出土状況図
挿図143　ＳＢ02遺構図
挿図144　ＳＢ02出土遺物実測図
挿図145　ＳＳ03出土遺物実測図
挿図146　ＳＳ03遺構図
挿図147　倉見７号墳墳丘測量図
挿図148　倉見７号墳主体部遺構図
挿図149　倉見７号墳出土遺物実測図
挿図150　倉見８号墳墳丘測量図
挿図151　倉見８号墳出土遺物実測図(1)
挿図152　倉見８号墳出土遺物実測図(2)
挿図153　倉見９号墳横穴式石室実測図
挿図154　倉見９号墳墳丘測量図
挿図155　倉見９号墳石室墓壙実測図
挿図156　倉見９号墳周溝内埋葬施設実測図
挿図157　倉見９号墳出土遺物実測図
挿図158　西桂見遺跡調査区位置図
挿図159　西桂見遺跡・桂見遺跡遺構全体図
挿図160　西桂見遺跡・桂見遺跡集落変遷図
挿図161　倉見９号墳石室実測図
挿図162　葦岡長者古墳（吉岡１号墳）石室実測図
挿図163　山ケ鼻古墳（古海13号墳）石室実測図

図版目次

図版１　1994年度西桂見遺跡全景（上空より）
1994年度西桂見遺跡全景（南東上空より）
図版２　鷲谷口地区完掘状況（上空より）
ＳＩ01完掘状況（西より）
ＳＩ01貼床除去後状況（西より）
ＳＩ01炭化物検出状況（西より）
図版３　ＳＩ02完掘状況（西より）
ＳＩ03完掘状況（南より）
ＳＤ01・02完掘状況（西より）
ＳＤ01東端部完掘状況（北東より）
図版４　ＳＤ04完掘状況（西より）
ＳＤ04土層断面（Ａ－Ａ’断面）（西より）
ＳＤ05完掘状況（西より）
ＳＤ09完掘状況（東より）
図版５　ＳＤ10完掘状況（南より）
ＳＫ01検出状況（東より）
ＳＫ01完掘状況（東より）
ＳＫ02遺物出土状況（北より）
図版６　ＳＳ01完掘状況（南より）
ＳＳ02完掘状況（東より）
鷲谷口地区南側土器溜り検出状況（北西より）
鷲谷口地区北側土器溜り検出状況（西より）
図版７　鷲谷奥地区Ａ区南側完掘状況（上空より）
鷲谷奥地区Ａ区北側完掘状況（上空より）
ＳＩ04完掘状況（南より）
ＳＩ05検出状況（東より）
図版８　ＳＩ05完掘状況（東より）
ＳＩ06完掘状況（南より）
ＳＩ06中央ピット土層断面（南西より）
ＳＩ07完掘状況（東より）
図版９　ＳＫ06完掘状況（東より）
ＳＩ08完掘状況（南より）
ＳＫ03完掘状況（西より）
ＳＩ08Ｐ１内遺物出土状況（西より）
図版10　ＳＩ09・ＳＤ15完掘状況（北より）
ＳＩ09床面遺物出土状況（南東より）
ＳＤ15遺物出土状況（北より）
ＳＩ10完掘状況（北より）
図版11　ＳＫ04完掘状況（東より）
ＳＫ04遺物出土状況（東より）
ＳＫ05完掘状況（東より）
ＳＤ11完掘状況（西より）
図版12　土墨状遺構検出状況（北より）
土墨状遺構盛土状況（Ｃ－Ｃ’断面）（北より）
ＳＤ12・13完掘状況（北より）
ＳＤ13調査区南際完掘状況（北より）
図版13　ＳＤ14完掘状況（東より）
鷲谷奥地区Ｂ区完掘状況（東より）
ＳＫ07遺物出土状況（南より）
鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り検出状況（南より）
図版14　1995年度西桂見遺跡堤谷地区調査前状況（西より）
1995年度西桂見遺跡堤谷地区調査区全景（上空より）
ＳＩ11・12完掘状況（北西より）
ＳＩ11・12完掘状況（東より）
図版15　ＳＩ11完掘状況（北西より）
ＳＩ11床面土器出土状況（北より）
ＳＩ11排水溝土層断面（西より）
ＳＩ12排水溝土層断面（西より）
図版16　ＳＩ12暗渠状排水溝検出状況（東より）
ＳＩ13完掘状況（西より）
ＳＩ15完掘状況（西より）
ＳＫ22完掘状況（東より）
図版17　ＳＫ23完掘状況（北より）
ＳＫ24完掘状況（北東より）
ＳＫ09完掘状況（南西より）
ＳＫ10完掘状況（南より）
図版18　ＳＫ10遺物出土状況（南より）
ＳＫ11・ＳＤ16・ＳＢ01完掘状況（北より）
ＳＫ11完掘状況（南より）
ＳＫ11古銭出土状況（南より）

図版19　ＳＫ12・13完掘状況（南より）
ＳＫ12古銭出土状況（南より）
ＳＫ14・ＳＤ17完掘状況（北より）
ＳＫ14完掘状況（南より）
図版20　ＳＫ14人骨・古銭出土状況（西より）
ＳＫ14埋土空洞部検出状況（南より）
ＳＫ15完掘状況（南より）
ＳＫ16・ＳＤ18完掘状況（南東より）
図版21　ＳＫ16完掘状況（南東より）
ＳＫ17完掘状況（南より）
ＳＫ18完掘状況（西より）
ＳＫ19完掘状況（南より）
図版22　ＳＫ20完掘状況（北より）
ＳＫ21完掘状況（南より）
ＳＫ27完掘状況（西より）
溝状遺構・ピット群02完掘状況（北西より）
図版23　ＳＩ14完掘状況（西より）
ＳＩ16完掘状況（西より）
ＳＩ16Ｐ１内砥石出土状況（北より）
ＳＩ17完掘状況（西より）
図版24　ＳＫ25完掘状況（西より）
ＳＫ25短刀出土状況（北西より）
ＳＫ26完掘状況（東より）
ＳＤ19完掘状況（西より）
図版25　ピット群03完掘状況（南西より）
ＳＢ02完掘状況（北東より）
ＳＢ02Ｐ13内遺物出土状況（南東より）
ＳＢ02Ｐ14内遺物出土状況（北より）
図版26　ＳＳ03完掘状況（東より）
ＳＳ03盛土状況（北より）
倉見７号墳完掘状況（上空より）
倉見７号墳主体部完掘状況（北より）
図版27　倉見７号墳南側周溝内遺物出土状況（南より）
倉見８号墳完掘状況（北より）
倉見９号墳完掘状況（北上空より）
倉見９号墳横穴式石室完掘状況（西より）
図版28　倉見９号墳横穴式石室基底石検出状況（西より）
倉見９号墳横穴式石室基底石検出状況（南より）
倉見９号墳横穴式石室奥壁石積み状況（北より）
倉見９号墳横穴式石室東側壁石積み状況（西より）
図版29　倉見９号墳横穴式石室玄門部石積み状況（南より）
倉見９号墳横穴式石室羨道部石積み状況（西より）
倉見９号墳主体部墓壙完掘状況（南より）
倉見９号墳周溝内埋葬施設完掘状況（西より）
図版30　SI01、SI02、SI03出土遺物
図版31　SI03、SK01、SK02、SS02出土遺物
図版32　鷲谷口地区土器溜り出土遺物
図版33　鷲谷口地区土器溜り出土遺物
図版34　鷲谷口地区土器溜り出土遺物
図版35　鷲谷口地区土器溜り、鷲谷口地区遺構外、SI04、SI05、SI06、SI07出土遺物
図版36　SI07、SI08、SK03、SI09出土遺物
図版37　SI09、SD15、SI10、SK04出土遺物
図版38　SK04、SD11、SD14、土塁状遺構出土遺物
図版39　鷲谷奥地区A区遺構外、SK07出土遺物
図版40　SK07、SK08、鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り出土遺物
図版41　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り出土遺物
図版42　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り、鷲谷奥地区B区遺構外出土遺物
図版43　SI11、SI12、SI15、SK22出土遺物
図版44　SK24、SK09、SK10、SK11出土遺物
図版45　SK11、SK12出土遺物
図版46　SK12、SK14、SK15、SK16出土遺物
図版47　SK17、SK18、SK20出土遺物
図版48　SK20、SK21、SI14出土遺物
図版49　SI14、SI16、SK25、SK26出土遺物
図版50　SB02出土遺物
図版51　SS03出土遺物
図版52　倉見7号墳、倉見8号墳、倉見9号墳出土遺物

文中写真

写真１　1995年度お払い
写真２　1995年度重機表土剝ぎ作業
写真３　整理作業風景
写真４　発掘調査参加者

挿表目次

挿表１　西桂見遺跡竪穴住居跡一覧表
挿表２　西桂見遺跡鷲谷口・堤谷地区中世墓一覧表
挿表３　ＳＫ10出土銅銭一覧表
挿表４　ＳＫ11出土銅銭一覧表
挿表５　ＳＫ12出土銅銭一覧表
挿表６　ＳＫ14出土銅銭一覧表
挿表７　ＳＫ18出土銅銭一覧表
挿表８　ＳＫ20出土銅銭一覧表
挿表９　堤谷地区Ａ区ピット群01一覧表
挿表10　堤谷地区Ａ区ピット群02一覧表
挿表11　堤谷地区Ｂ区ピット群03一覧表
挿図12～15　中世墓一覧表
挿表16～40　西桂見遺跡出土遺物観察表

付　　図

付図１　西桂見遺跡鷲谷口・鷲谷奥・堤谷地区、桂見遺跡堤谷西地区調査前地形測量図
付図２　1994年度西桂見遺跡調査区全体図
付図３　1995年度西桂見遺跡調査区全体図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

主要地方道鳥取鹿野倉吉線

鳥取市西部の湖山池南東岸周辺は、近年の都市計画整備事業によって大きく変貌を遂げている地域である。この地域では、鳥取市西部地域の交通混雑緩和を図るために、主要地方道鳥取鹿野倉吉線の道路整備事業が進められている。

工事区間のうち、鳥取市桂見と鳥取市高住をむすぶルートの計画地内及び周辺は、周知の桂見（かつらみ）遺跡・西桂見（にしかつらみ）遺跡・青島（あおしま）遺跡など、重要な文化財が存在している遺跡密集地域である。

西桂見遺跡

西桂見遺跡・倉見（くらみ）古墳群が立地する丘陵は、数多くの遺構が存在し、先端部では、1980年～1981年にかけて鳥取市教育委員会によって現地調査が行われている。この調査によって、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓では日本最大級の西桂見墳丘墓の他、同時期の土壙墓群、古墳時代前期の古墳、中世墓群などが検出されるなど、山陰地方の弥生時代から古墳時代への移行を考える上で、大変貴重な遺跡である。

調査計画

計画地内は、周知の西桂見遺跡・倉見古墳群(1)(2)が立地する同一丘陵上にあり、鳥取土木事務所都市計画課は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当文化財団が発掘計画を作成し、それに基づき、東部埋蔵文化財調査事務所が、桂見遺跡とあわせて1993年度から1995年度にかけての３か年で発掘調査を担当することとなった。

発掘調査

1993年度は、西桂見遺跡鷲谷口（わしだにぐち）地区・鷲谷奥（わしだにおく）地区・堤谷（つつみだに）地区の一部の調査を行った。1994年度は、西桂見遺跡鷲谷口地区・鷲谷奥地区・倉見７号墳5475m²を調査する予定であったが、調査終了時には3956.2m²に変更となった。1995年度は、西桂見遺跡堤谷地区1828m²を調査した。

第２節　調査の経過と方法

調査区は、狭く急峻な丘陵上に立地し、また、付近に民家等があるために、排土等が流失しないよう、調査区際に土留めを設置した後調査に取りかかった。排土はすべて調査区外へ搬出するために、ベルトコンベヤー・重機によって調査区外へ一時仮置きした後、ダンプで場外搬出した。

調査区は、主要な小字名を地区名とし、西方に舌状に延び出す低丘陵を鷲谷口地区、この地区の上方に当たる南北に延びる丘陵を鷲谷奥地区、谷を挟んで南東に延びる丘陵を堤谷地区とした。また、地形的特徴から、鷲谷奥地区丘陵上を鷲谷奥地区Ａ区、東斜面部を同Ｂ区、堤谷地区丘陵上を堤谷地区Ａ区、東斜面部を同Ｂ区、西斜面部を同Ｃ区の各小区に便宜的に分けることとする。

1993年度調査

1993年度は、当該地における調査計画をより綿密なものとするために、西桂見遺跡鷲谷口地区、鷲谷奥地区、堤谷地区の一部を調査した。

1994年度調査

1994年度は、西桂見遺跡鷲谷口地区・鷲谷奥地区Ａ区・鷲谷奥地区Ｂ区が調査対象地区となり、まず道路センター杭を利用して、調査区を10mグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から１～19、東西軸は北からＡ～Ｉとなった。グリッド名は、東西南北軸の交点の北西側の杭の名称を取って呼称することとした。

調査は４月６日から開始し、古墳と考えられる部分及び小型重機が進入できない鷲谷奥地区Ａ区を除いて、鷲谷口地区から表土剝ぎ作業を行った。鷲谷口地区・鷲谷奥地区Ｂ区西側は地形の起伏が激しく重機を搬入することができない箇所があるために、人力によっても表土剝ぎ作業を行った。鷲谷

奥地区Ａ区はすべて人力によって表土剝ぎを行った。鷲谷口地区の重機剝ぎ作業は４月26日に終了し、鷲谷奥地区Ｂ区の重機剝ぎ作業は５月９日から５月20日にかけて行った。

検出作業の結果、鷲谷口地区では弥生時代後期後半の竪穴住居跡３棟、同時期の土坑１基、段状遺構２基、溝状遺構10条、中世の火葬墓１基、古墳時代後期の古墳２基、土器溜りを検出した。

鷲谷奥地区Ａ区では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡７棟、同時期の土坑・土壙５基、時期不明の溝状遺構５条、土塁状遺構１基、古墳時代前期の古墳１基を検出した。

鷲谷奥地区Ｂ区では、弥生時代後期前半から後半の土坑１基、土器溜り、平安時代の炭化米を埋蔵した土坑１基を検出した。

鷲谷口地区・鷲谷奥地区Ａ区合せて10棟の竪穴住居跡のうち、焼失住居跡が２棟あり、炭化材の出土状況及び炭化材樹種の現地での鑑定を鳥取大学農学部古川郁夫教授に依頼し、現地指導・助言を仰いだ。

古墳については、鷲谷口地区で検出した２基の古墳は、新発見のため倉見古墳群の一連の番号をつけ、倉見８・９号墳と命名した。なお、鷲谷奥地区Ａ区で検出したものは周知の倉見７号墳である。

遺構の個別写真は、ローリングタワーからおよびラジコンヘリコプターによって行い、遺跡全体の写真は、ラジコンヘリコプターによって行った。

西桂見遺跡鷲谷口地区・鷲谷奥地区の調査は、発掘作業は８月１日に終了し、その後調査後地形測量を業者委託し、９月１日に終了した。

1995年度調査

1995年度は、西桂見遺跡堤谷地区が調査対象地区となり、前年度にならって同様に調査区全体を10ｍグリッドに区画し、基準杭を設定した。その結果、南北軸は西から24～31、東西軸は北からＣ～Ｆとなった。グリッド名は、前年度にならって命名した。

調査は、５月19日から５月26日にかけて重機による表土剝ぎ作業を行い、検出作業は５月30日から開始し、一次中断があり、本格的には６月19日から始めた。

検出作業の結果、堤谷地区Ａ区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡４棟、掘立柱建物跡１棟、貯蔵穴と考えられる袋状土坑３基、中世と考えられる土葬・火葬墓14基、時期不明の土坑１基、ピット群２か所、溝状遺構８基を検出した。

堤谷地区Ｂ区では、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居跡３棟、中世と考えられる土壙墓１基、近世と考えられる土坑１基、時期不明の溝状遺構１基、ピット群１か所を検出した。

堤谷地区Ｃ区では、中世と考えられる礎石総柱建物跡１棟、中世以降の段状遺構を検出した。

堤谷地区Ａ区の中世墓のうち、ＳＫ14・ＳＫ17からは遺存状態は悪かったが人骨が出土しており、現地指導及び取り上げを、鳥取大学医学部井上晃孝助教授にお願いし、多忙にもかかわらず玉稿を頂いた。

遺構の個別写真は、ローリングタワーから行い、遺跡全体写真は、ラジコンヘリコプターによって行った。

西桂見遺跡堤谷地区の調査は、発掘作業は11月10日に終了し、その後地形測量を業者委託し、12月７日に終了した。

調査日誌抄

〈1994年〉

４月６日　西桂見遺跡・倉見古墳群調査開始
４月13日　火葬墓おはらい
５月２日　ＳＫ01、ＳＤ01・02完掘
５月９日　倉見９号墳石室掘り下げ
５月17日　倉見９号墳ラジコンヘリによる空中撮影
５月20日　倉見８号墳完掘
５月24日　鳥取市立世紀小学校６年生体験発掘
５月27日　山陰中央テレビ取材
６月６日　ＳＩ01完掘
６月７日　鳥取市立世紀小学校６年生体験発掘
６月16日　土塁状遺構断ち割り
６月22日　倉見７号墳主体部掘り下げ

7月8日　ＳＩ05床面検出
7月9日　現地説明会開催。約120名参加。
7月25日　ＳＩ09完掘
7月28日　ＳＫ08で炭化米検出
8月1日　検出作業終了
9月1日　調査後地形測量終了
〈1995年〉
5月19日　表土剝ぎ作業開始
6月20日　ＳＫ09完掘
6月22日　ＳＫ11・15・16完掘
6月26日　中世墓群おはらい
6月28日　ＳＫ14人骨出土。ＳＩ11・12検出
7月4日　ＳＫ14・17人骨取り上げ
7月13日　ＳＩ11・12床面検出
7月27日　ＳＩ11・12完掘
8月3日　ＳＩ13完掘
8月21日　ＳＩ14完掘。ＳＫ23・24完掘。ＳＫ25短刀出土
9月4日　ＳＳ03検出
9月13日　ＳＢ02検出
9月20日　ＳＢ02完掘
10月28日　現地説明会開催。約100名参加
10月30日　堤谷地区Ｂ区東側検出作業
11月10日　検出作業終了
12月7日　調査後地形測量終了

写真1　1995年度おはらい

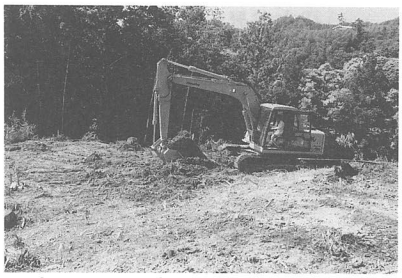


写真2　1995年度重機表土剝ぎ作業

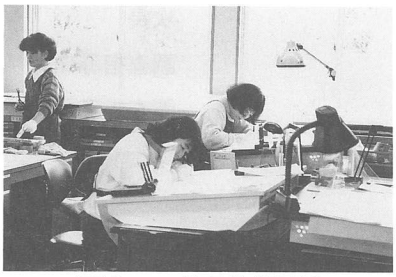
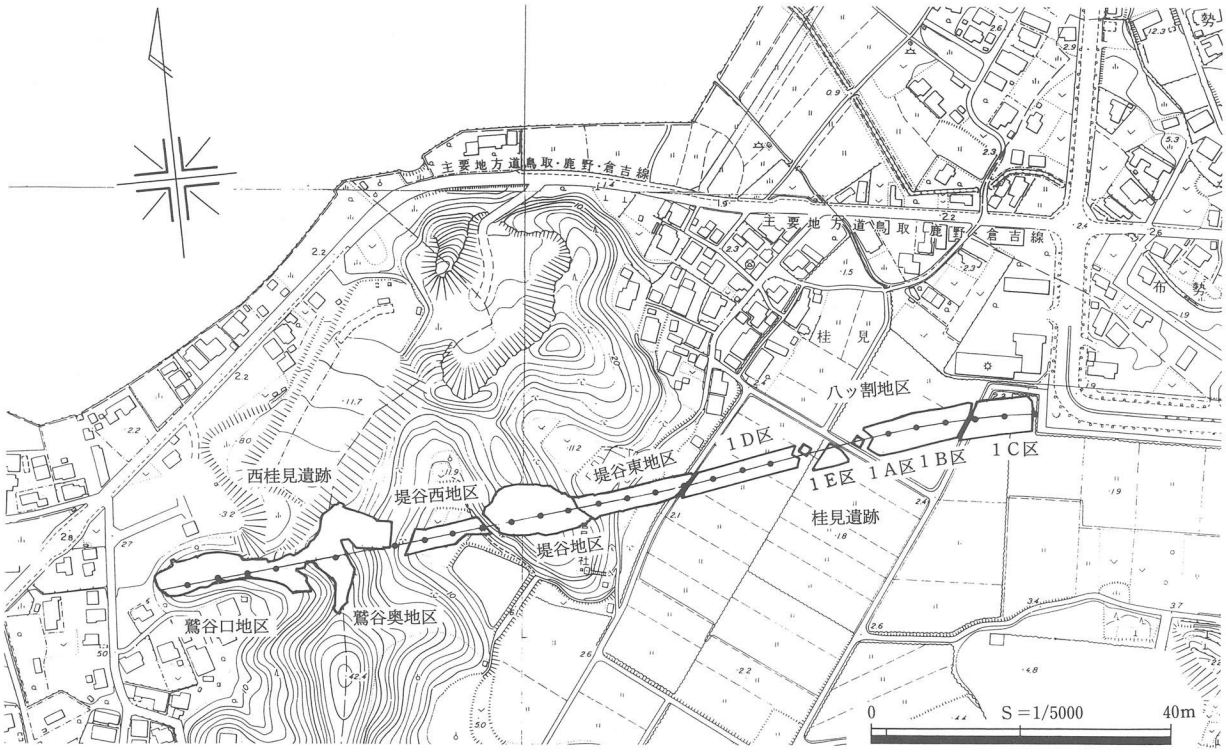


写真3　整理作業風景

写真4
発掘調査参加者



挿図1　桂見遺跡・西桂見遺跡調査区位置図

第３節　調査体制

調査は、下記の体制で実施された。

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田渕康允（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事	上田　徹（鳥取県教育委員会次長）
事務局長	若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

所長	宮谷正信（鳥取県教育委員会文化課長）
次長	八木谷昇
調査指導係長	田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
調査指導係	久保穰二朗
	長岡充展
	山枡雅美
庶務係長	梅山昭美（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）
主任事務職員	米村康夫

○調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　東部埋蔵文化財調査事務所

所長	谷尾喜代治
主任調査員	牧本哲雄
	小谷修一
調査員	高垣陽子（旧姓津村）
整理員	山下孝子

○調査指導　鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○主な発掘調査・整理作業従事者

青木根玄、新　征憲、有田顕泰、有田やす子、池添幸子、石田誠和、井関和正、伊藤恵美子、稲垣美智恵、今石克久、岩崎康子、太田垣喜代子、太田垣直市、太田良一、岡野悦子、奥田秀雄、小田桐清、小野惣一、表　明美、影井なみ子、影井春枝、影井治美、懸山貞幸、加藤　敦、川上正人、岸田倉之助、岸本義弘、北山敏恵、北山英男、北脇寿夫、北脇冨士枝、北脇まつ子、北脇善治、木下敏江、熊沢時夫、小谷寿枝、小谷美代子、小林源市、小林美佐恵、小山菜穂子、沢田武男、清水房子、杉山　茂、厨子章子、鈴木　敦、砂田三恵子、竹中成代、田中郁之亮、田中美里、田中美智枝、田中陽子、谷口幸枝、谷本　剛、塚北寿美恵、綱田良夫、坪倉秀幸、時高政志、富山泰三、中島寿次、中谷沢子、中原　淳、中原千恵、中西政之、中村大士、西本美佐子、橋本一郎、橋本　豊、長谷高恵美子、花田富子、花田登美枝、浜本喜代政、藤井俊治、福田周二、福田延子、福田末子、古谷京子、本庄　豊、毎野静枝、松田和之、水原義幸、南田泰孝、村上松江、森田清正、森本操子、安井弘義、山縣一雅、山添龍雄、山田佳子、山中貴美子、山根　都、山根智津、山本清子、山本光雄、山本博子、山本幸正、吉村正彦、米村末子、米山麻紀、若林正明

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

西桂見遺跡は、鳥取市高住字鷲谷口・鷲谷奥、桂見字堤谷に所在する。

鳥取市　西桂見遺跡の所在する鳥取市は鳥取県東部に位置し、面積237.25㎢、人口14万人余りで、鳥取県の県庁所在地である。東は岩美郡国府町・福部村、西は気高郡気高町、南は八頭郡郡家町・河原町と接し、北は日本海に面している。市の東・西・南の三方は山に囲まれ、北は日本一広いことで知られる国立公園の鳥取砂丘が広がっている。市の中央部には中国山地から流れる千代川が鳥取平野を二分して南北方向に流れ、日本海へとそそぐ。また、市の西側には池としては日本一の広さを誇る潟湖、湖山池がある。

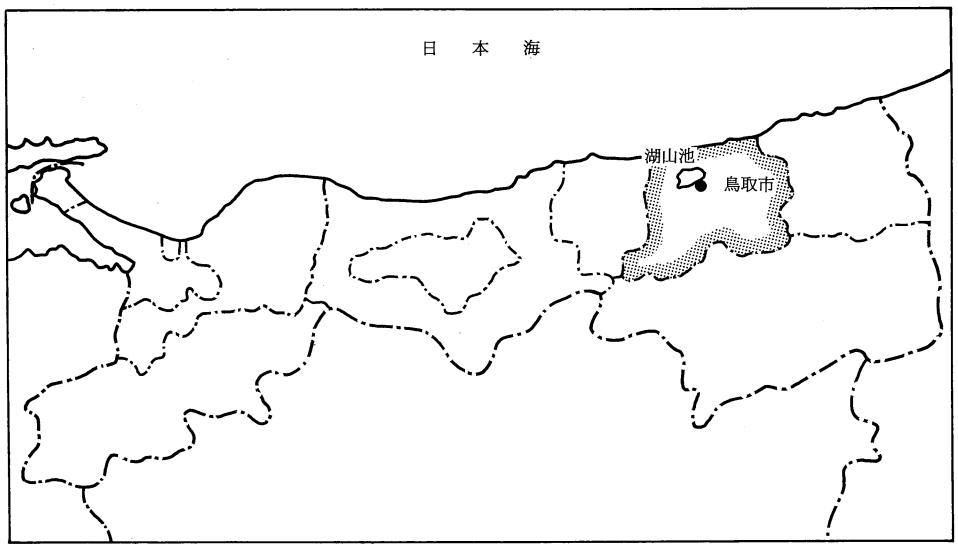
千代川・鳥取平野　鳥取県の南側、岡山県との県境である八頭郡智頭町の山中に源を発する千代川は総延長56.8㎞の一級河川であり、大小合わせて70数本の支流を集めながら北へと流れ、鳥取市を経て日本海へとそそぐ。この下流域に発達した鳥取平野は、洪積世から沖積世初期には鳥取湾（鳥取潟）と称される入海あるいは潟湖であって、縄文時代前期以降の海退による湖泥化と、古墳時代以降に千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積により形成された沖積低地である。

湖山池　鳥取市西部に位置する湖山池は、周囲約16㎞、面積約6.8㎢を測る日本一広い池である。この湖山池は、千代川による堆積作用と湖山砂丘の発達により、かつては入海であったものが湖泥した潟湖であり、旧海島である青島、天神山、山王山、足山などが、内湾であった面影を今に伝えている。

湖山池周辺の土壌は、北には湖山池を潟湖とした砂丘、東には低位泥炭土壌・細粒灰色低地土壌、南と西側の支稜線上に沿っては褐色森林土壌、谷底平野には灰色低地土壌・グライ土壌が広がっている。(3)

西桂見遺跡　西桂見遺跡は、湖山池南部の放射状に広がる丘陵に位置している。調査範囲としたのは、東西及び南東に延びる標高約15～20ｍの低丘陵と、南北方向に延びる標高約30ｍの丘陵および斜面である。この丘陵の基盤層は、風化花崗岩である。

丘陵より北を臨むと、そこには湖山池がひろがり晴れの日などは絶景である。東側を見ると、ほとんど障害もなく久松山の全景をうかがうことができる。



挿図２　鳥取市の位置

第2節　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

因幡地域では明確な旧石器遺跡は確認されていないが、鳥取砂丘で黒曜石の有茎尖頭器が採集されており[4]、その存在を想像させる。

鳥取平野西部・千代川左岸には数多くの遺跡がある。中でも湖山池周辺の低湿地に立地した縄文時代後期を主体とした遺跡が多い。主な遺跡に青島遺跡[5]、布勢(ふせ)遺跡[6]、東桂見(ひがしかつらみ)遺跡[7]、桂見遺跡[8]などがあげられる。西桂見遺跡の東に隣接する桂見遺跡は、縄文時代中期末頃から中津式に並行する後期初頭、縁帯文を経て凸帯文を持つ晩期へと移行する遺跡で、後期の丸木舟をはじめ、数多くの遺物を出土している。そのさらに東の東桂見遺跡では後期全般の土器を出土しており、その東150mの布勢遺跡では後期中頃の布勢式土器、漆塗りの壺型木製品や椀、もじり編みのカゴ、耳栓など後期の遺物を多数出土している。いずれも低湿地性遺跡のためクルミやトチの実などの植物遺体が多数出土しており、当時の植生を知る上で貴重な資料を提供している。

晩期の遺跡としては、野坂川流域の大桷(だいかく)遺跡[9]、天神山遺跡[10]、湖山(こやま)第2遺跡[11]などのほか、千代川左岸の自然堤防上に営まれる古海遺跡[19]などがあげられる。古海遺跡の南、山ヶ鼻遺跡[12]では後期末から晩期初頭の土器が多数出土している。

弥生時代

前期の遺跡は沖積地や海岸砂丘とその背後の低湿地に立地している。湖山第2遺跡、桂見遺跡などは前期の土器を出土している遺跡である。また、岩吉遺跡[13]は多数の土器が出土しており、前期から後期まで引き続いて集落が営まれていたことが推測されている遺跡である。さらに土層の観察により、海面変化による水位上昇に伴って東から西へと次第に高い場所に居住地を移動させていることも推測されている。

中期になると岩吉遺跡や青島遺跡のように前期から引き続く遺跡のほかに、自然堤防や丘陵地にまで居住の場を広げる遺跡が現れるようになる。岩吉遺跡の分村と考えられている大桷遺跡はその南東に位置し、その例の一つといえよう。また、桂見遺跡でも中期の完形の壺が2点出土し、周辺に集落の存在が推定される。

青島遺跡の対岸・塞ノ谷(さいのたに)遺跡[14]では中期の土器に伴って分銅型土製品が出土している。そして、この遺跡の南東約400mの丘陵地では流水文銅鐸が見つかっており[15]、宗教的な色彩が感じられる。

後期になると、布勢第2遺跡[6]で玉作工房跡が調査されている。また、帆城(はんじょう)遺跡[16]で玉製品や玉砥石などが出土しており、この地域に玉造りの集団がいたことが想像される。岩吉(いわよし)遺跡では水田面が確認され、桂見、東桂見遺跡、服部(はつとり)遺跡[4]などでも田下駄が多数出土している。また、鳥取大学構内の湖山第2遺跡、松原谷田(まつばらたにだ)遺跡[17]などで竪穴住居跡が確認され、湖山池湖底遺跡から土器が採取されるなど、湖山池周辺での遺跡、遺物の確認がたいへん多くなっている。

以上のように湖山池周辺には多くの弥生遺跡が存在するが、これは湖山池周辺の低湿地を中心に稲作を営んだ集落が多く存在したためと考えられる。これらの集落は次第に大きくなり社会的集団へと発展していく。そしてその集団の中で力を得、いわゆる首長として一帯を治めた権力者は、それを象徴するかのように大きな墓を残している。それは湖山池南岸の丘陵部にそびえた、1980年度調査で確認された日本最大規模の西桂見遺跡・四隅突出型墳丘墓であると考えられる。そこでは特殊な形をした大型器台付特殊壺が出土しており、その特異な権力を感じさせる。

古墳時代

古墳時代になると湖山池周辺の遺跡はさらに拡大していく。布勢第2遺跡、湖山第1・第2遺跡、大桷遺跡・岩吉遺跡・古海(ふるみ)遺跡など平野部で集落が営まれる。

前期では、水田遺構・井戸などが検出された岩吉遺跡、古海遺跡など、弥生時代中期から営まれている集落が引き続き見られる。

中期では、子持勾玉などが出土した青島遺跡、多量の木製品などが出土した塞ノ谷遺跡などの、祭

挿図３　周辺遺跡分布

① 桂見遺跡
② 西桂見遺跡
③ 東桂見遺跡
④ 桂見墳墓群
⑤ 倉見古墳群
⑥ 西桂見墳丘墓
⑦ 布勢鶴指奥墳墓群
⑧ 布勢第１遺跡
⑨ 布勢古墳群
⑩ 帆城遺跡
⑪ 布勢１号墳
⑫ 布勢遺跡
⑬ 天神山遺跡
⑭ 天神山城
⑮ 湖山第１遺跡
⑯ 湖山第２遺跡
⑰ 大熊段１号墳
⑱ 三浦古墳
⑲ 湖山池湖底遺跡
⑳ 青島遺跡
㉑ 塞ノ谷遺跡
㉒ 高住古墳群
㉓ 高住銅鐸出土地
㉔ 良田古墳群
㉕ 松原古墳群
㉖ 松原谷田遺跡
㉗ 丸山城跡
㉘ 吉岡古墳群
㉙ 葦岡長者古墳
㉚ 防己尾城跡
㉛ 三ケ崎本陣山城跡
㉜ 堀越遺跡
㉝ 岩吉遺跡
㉞ 里仁古墳群
㉟ 里仁横穴群
㊱ 湯山城跡
㊲ 桝間１号墳
㊳ 桝間古墳群
㊴ 大桝遺跡
㊵ 古海36号墳
㊶ 古海古墳群
㊷ 古海遺跡
㊸ 山ヶ鼻遺跡
㊹ 菖蒲遺跡
㊺ 菖蒲廃寺跡
㊻ 秋里遺跡

周辺の主な遺跡

祀に関わる遺跡が見られる。

また、千代川下流右岸の秋里遺跡[20]は、古墳時代を中心として弥生時代後期から、奈良・平安時代まで続く祭祀遺構として考えられている。

集落周辺の丘陵には大小様々の古墳が築かれているが、時期が判明しているものは少ない。この中で前期のものは、桂見古墳群[21]では舶載の斜縁獣帯鏡と内行花文鏡が出土した桂見2号墳、その他に倉見古墳群などがある。前期初頭には前方後円墳は確認されておらず、墳形はほとんどが方墳であり、因幡地域で前方後円墳が出現するのは、前期後半になってからである。

中期になると、県東部で最大規模の全長92mの桷間1号墳[22]、国史跡の布勢古墳[23]、鳥取大学構内の三浦古墳[24]、大熊段1号墳[25]、古海36号墳[25]などの前方後円墳・前方後方墳が出現し、県内でも前方後円墳の密集する地域として知られている。その他、里仁32号墳[26]では鰭付円筒埴輪や竪櫛が出土している。

後期古墳では、桂見6号墳[27]などの前方後円墳が調査されている。また、横穴式石室が知られているものとして、吉岡1号墳（葦岡長者古墳）[28]、倉見9号墳、高住12号墳等があるが、千代川右岸域に比べてその数は少ない。古海13号墳（山ケ鼻古墳）[29]では刳り抜きの横口式石槨が知られており、この辺りの古墳の重要性を感じさせ、これからの調査に期待が持たれるところである。

歴史時代
奈良・平安

律令体制下のこの地域は、高草郡に組み込まれ、東大寺領高庭荘として開発されていたことが『東大寺東南院文書』の「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」でうかがわれる。これによると南北10条にわたり、条、里、郷、坪名が記載されており、条里制が執行されていたようであるが、実態は明らかでない。この頃の高草郡の中心は土師百井式軒丸瓦を出土し、現在も塔の礎石が残る菖蒲遺跡東方の菖蒲廃寺跡[30]、同北方の大野見宿禰神社のある古海郷にあったと考えられている。また、古代山陰道が通ったとされることも踏まえて、高草郡衙がこの地周辺にあったと考えられるだろう。『因幡民談記』によると、菖蒲廃寺とその西・釣山との間に官衙またはそれに類するものが存在したと考えられるが、明確な位置ははっきりしていない。因幡国造浄成女に代表される古代因幡氏の本拠地は高草郡と考えられており、因幡国府のおかれた法美郡とともにこの地は古代の因幡の中心地であったと思われる。

この時期の遺跡の実態はいまだ明らかではなく、桂見遺跡において、谷部で密集状態の掘立柱建物群、平野に面した斜面部に整地を施した総柱掘立柱建物跡が見つかっている程度である。

中・近世

中世のこの地域は、布勢第2遺跡で建物跡が見つかっているほか、大熊段遺跡[31]、三浦遺跡[32]、里仁古墳群[26]、桂見古墳群[21]、西桂見遺跡[1][2]などで多数の中世墓が確認されている。特に現在布勢総合運動公園になっている布勢鶴指奥墳墓群[7]では、84基もの土壙墓が検出されており、中世にこの地に大規模な墓域が構えられていたことがうかがえる。

15世紀になると因幡守護山名氏が湖山池東岸に布勢天神山城[33]を築城し、因幡支配の拠点とした。天神山城に関する記録は『因幡民談記』などに比較的よく残っている。城跡にも堀切りや井戸跡などが現存している。また、1994年度の西桂見遺跡の調査で約45mの土塁状遺構が検出され、中・近世の研究に新しい資料を提供している。後、因幡国の拠点は久松山の鳥取城に移り、この間しばらくの間は静かな農村地帯であった。

以上のように、湖山池周辺は原始より因幡の中心として重要な位置を占めている地なのである。

第３章　1994年度調査

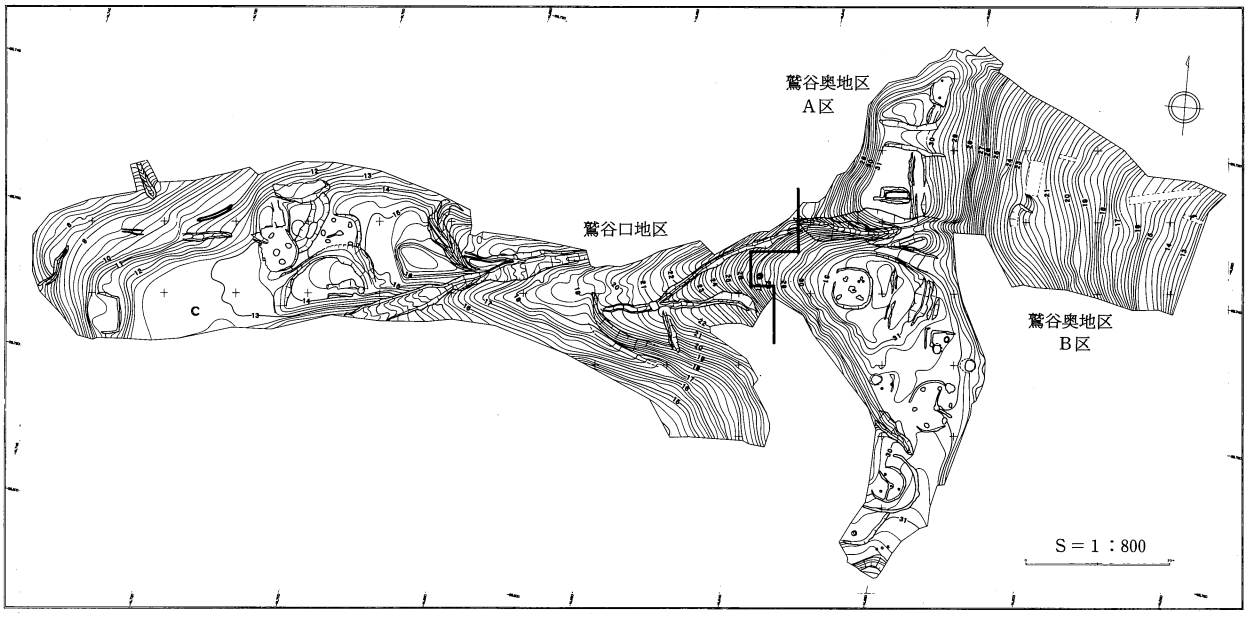
第１節　西桂見遺跡鷲谷口地区の概要

位　　置　　1994年・95年に調査した西桂見遺跡は、これまでに調査された地区と区別するために西から鷲谷口地区、鷲谷奥地区、堤谷地区とし、さらに、立地的特徴を考慮し鷲谷奥地区をＡ区・Ｂ区に分けて呼ぶことにした。このうち、1994年度は鷲谷口地区・鷲谷奥地区が調査対象区となった。鷲谷口地区は標高７ｍ～27.3ｍの西側に舌状に延びる低丘陵上及び谷斜面部の地区である。

遺　　構　　この地区で検出した遺構は、竪穴住居跡３基、火葬墓１基、貯蔵穴と考えられる袋状土坑１基、溝状遺構10基、段状遺構２基、道路状遺構１基、古墳２基である。このうち、古墳については倉見古墳群に属するため、章を改めて述べる事とする。

竪穴住居跡は弥生時代後期のもので、このうちの１棟（ＳＩ01）は焼失住居跡で、複数の樹種を用いて建てられたものであった。この時期には屋外貯蔵穴（ＳＫ02）が併存している。

中世頃と考えられる火葬墓（ＳＫ01）は１基のみ検出された。この時期の墓は群集するのが常態であるが、単独で見られたことから、周辺の中世墓とは異なる事情があったことが推察される。



挿図４　1994年度西桂見遺跡調査区全体図

第２節　西桂見遺跡鷲谷口地区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＳＩ01（挿図５～９、図版２・30）

位　　置　鷲谷口地区丘陵部中央６Ｃ・Ｄグリッド、標高約14.0～15.0mに位置する。南側は倉見８号墳の周溝によって切られ、西側も横穴式石室をもつ倉見９号墳によって切られている。北側にはＳＳ02が隣接している。

形　　態　西側、南側が切られているため遺存状態はよくないが、残り二壁より平面形は隅丸方形を呈す。規模は東西5.17m以上、南北4.3m以上を測り、床面積は19.7m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.80mである。

柱穴は床面上で８個検出された。このうち、主柱穴はＰ１～Ｐ４で、それぞれの規模は順に（34×58－73）cm、（64×48－56）cm、（131×43－64）cm、（68×61－51）cmを測る。

主柱穴間距離はＰ１～Ｐ２間から順に2.44m、3.13m、3.13m、2.32mである。なお、Ｐ１では底の方より柱を固定したと思われる石皿Ｓ１が検出された。

Ｐ１－２、Ｐ２－３、Ｐ３－４の間に補助柱穴と考えられるＰ６、Ｐ７、Ｐ８がある。規模はそれぞれ（33×25－28）cm、（81×43－32）cm、（58×54－34）cmである。

壁溝は、壁の残存する北側及び東側で検出された。規模は幅８～29cm、深さ４～15cmを測り、断面逆台形を呈す。壁構内に小ピットが数個検出されたが、これは壁溝内に立てたと考えられる板を支える杭状のものと思われる。

中央ピット　中央ピットＰ５は上縁部の一部を深さ７cm掘って二段掘りしており、規模は（80×53－31）cmである。南西方向に、長さ1.73m、幅0.12m、深さ0.15～0.33mを測る溝が延びる。中央ピットの埋土中に、炭化物を多量に含む層をもつ。

焼 土 面　床面上で10数カ所の、大小の焼土面が検出された。これらは、継続的に火を使用したものではなく、火災の際に焼けたものと考えられる。主に柱穴の周囲に広がっており、柱が立ったまま焼けていったものであることが窺える。

炭化材・焼土　床面の北側、南側より多量の炭化材が検出された。中央部ではほとんど検出されていない。遺存状態はあまり良くなくほとんどがどの部分であるかは特定できないが、壁際で検出されたものは垂木の可能性がある。また、柱穴中に残っている炭化物もあり、その出土状況より柱材であると考えられる。また、床面上・床面近くの層は、炭化物や炭化物を多量に含む層が広がる。

貼　　床　住居の西側半分で、小礫、炭化物少混の暗黄褐色土、暗褐色土による貼床が施されている。範囲は南北4.2m、東西2.2m、深さ25～35cmである。

土　　坑　住居の床面上西端にＳＫ１が検出された。貼床を楕円形状に掘り込んでおり、規模は（0.92×0.63－0.22）mである。埋土は㉑層単層である。検出状況より、屋内貯蔵穴と考えられる。

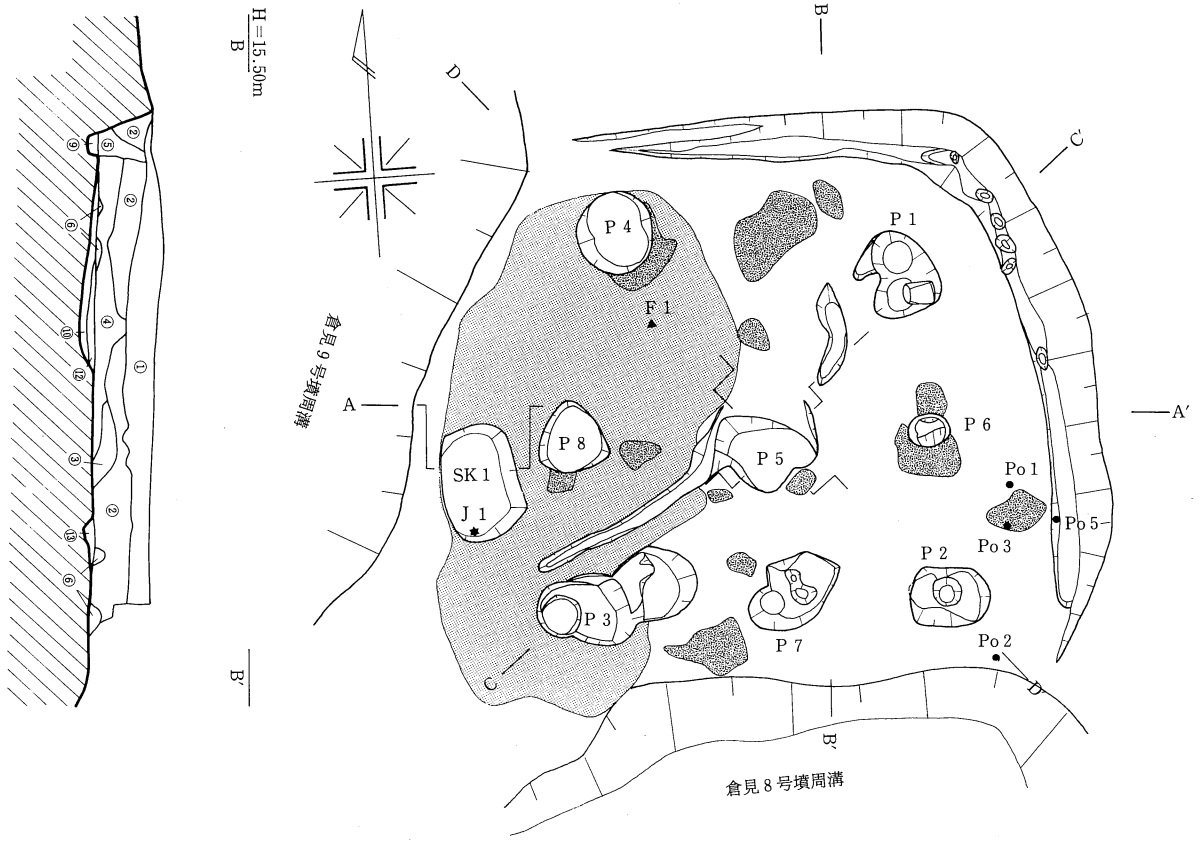
埋　　土　埋土は13層に分層できる。このうち、⑥層は炭化物で、その他床面付近は炭化物・焼土を含む層が多い。⑦層は焼け落ちた焼土である。

ピット中の埋土も多くが炭化物を含む。

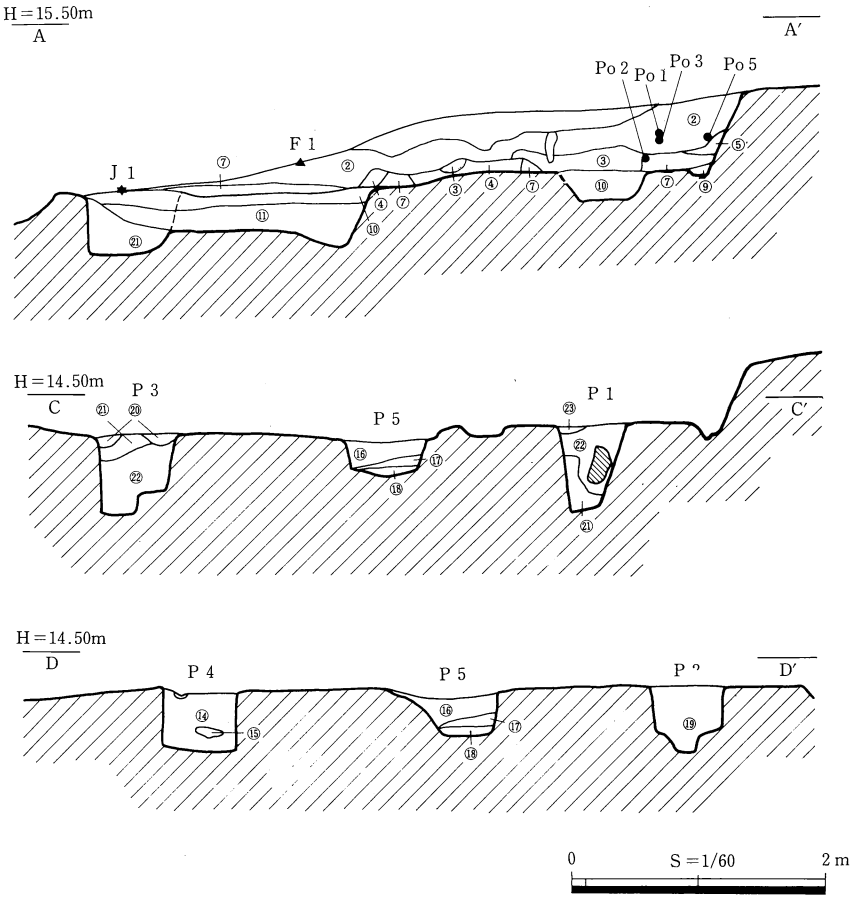
遺物出土状況　出土遺物には、図化できたものに甕Po１～Po３、高杯脚Po４・５、石皿Ｓ１、鉄片Ｆ１～Ｆ４、管玉Ｊ１がある。

このうち、床面からはPo２、Ｊ１が出土している。また、Ｐ１内よりＳ１が出土している。その他の遺物は、埋土下層中からの出土である。

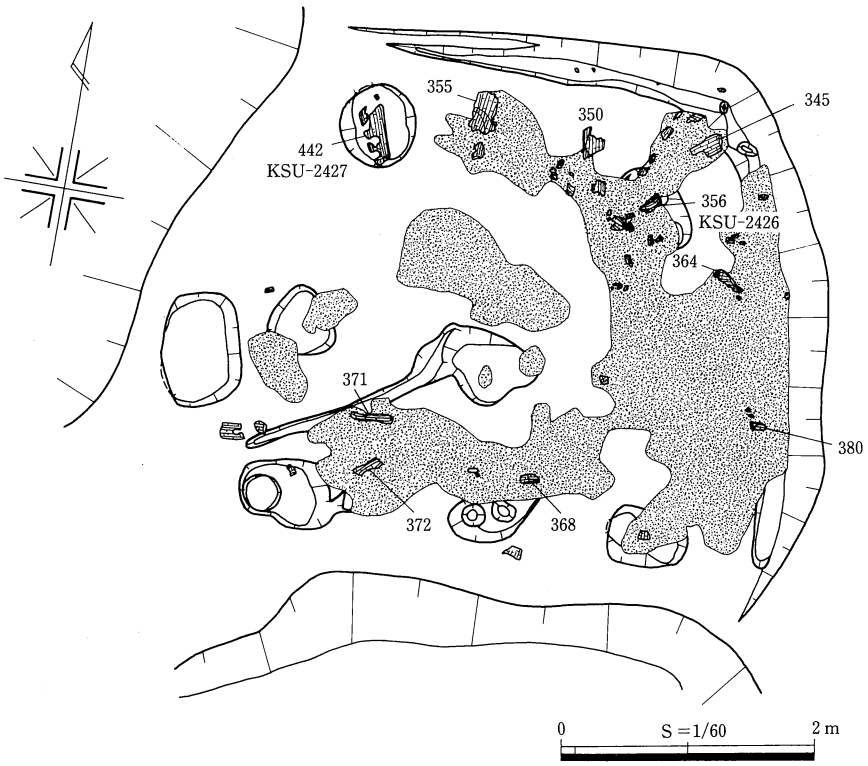
時　　期　出土遺物より、ＳＩ01の時期は岩吉編年Ⅲ（新）期[34]・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



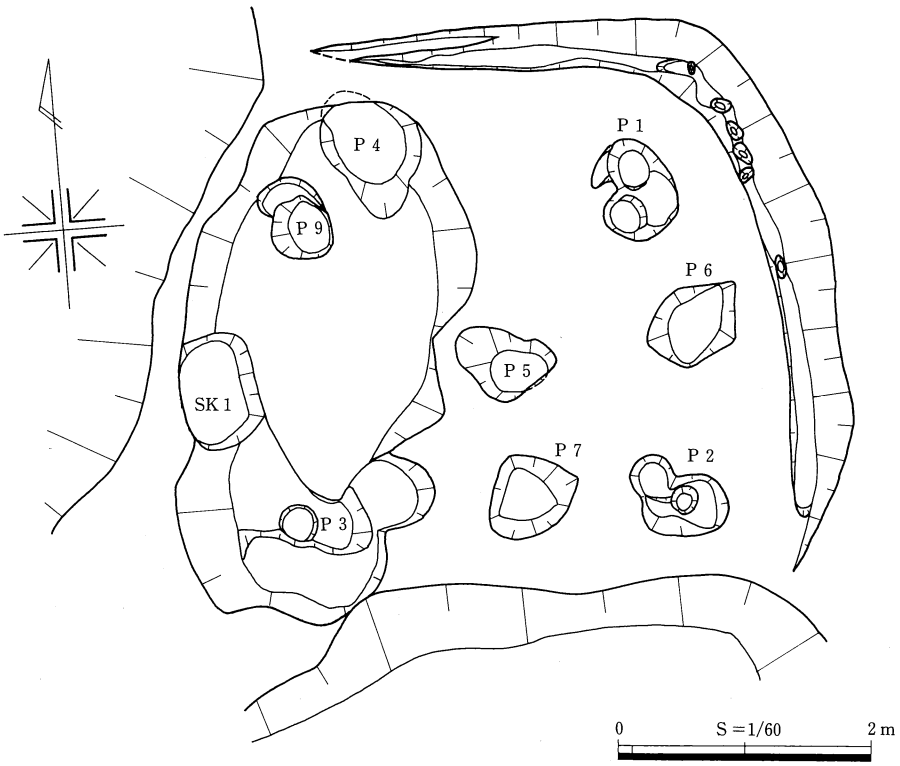
① 黒褐色土
② 暗黄褐色土
③ 暗褐色土（焼土粒、焼土塊多混）
④ 黒褐色土（炭化物多含）
⑥ 炭化物
⑦ 赤褐色土（焼け落ち焼土）
⑧ 淡黄褐色土（後世の溝埋土）
⑨ 褐色土（炭化物⑧、焼土粒含）
⑩ 暗褐色土（小礫、炭化物少混）
⑪ 暗黄褐色土（炭化物少混）
⑫ 赤褐色土（焼土、小礫、炭化物少混）
⑬ 黄灰色土（柔かい）
⑭ 暗黄褐色土（炭化物わずかに混）
⑮ 黒色土（炭化物層）
⑯ 暗褐色土
⑰ 黒褐色土（炭化物多混）
⑱ 暗褐色土（基盤粒含）
⑲ 暗黄褐色土（砂質）
⑳ 黄褐色土
㉑ 黄褐色土
㉒ 暗黄褐色土
㉓ 淡赤黄色土



挿図5　ＳＩ01遺構図

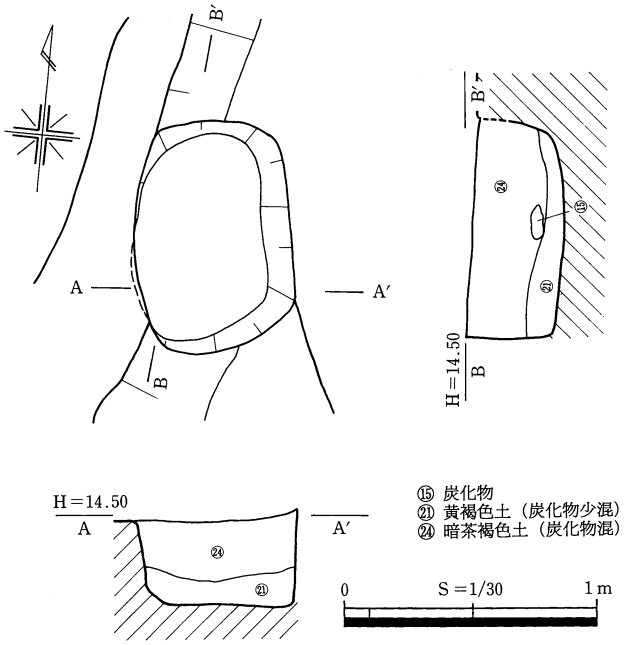


挿図６　ＳＩ01炭化物出土状況図

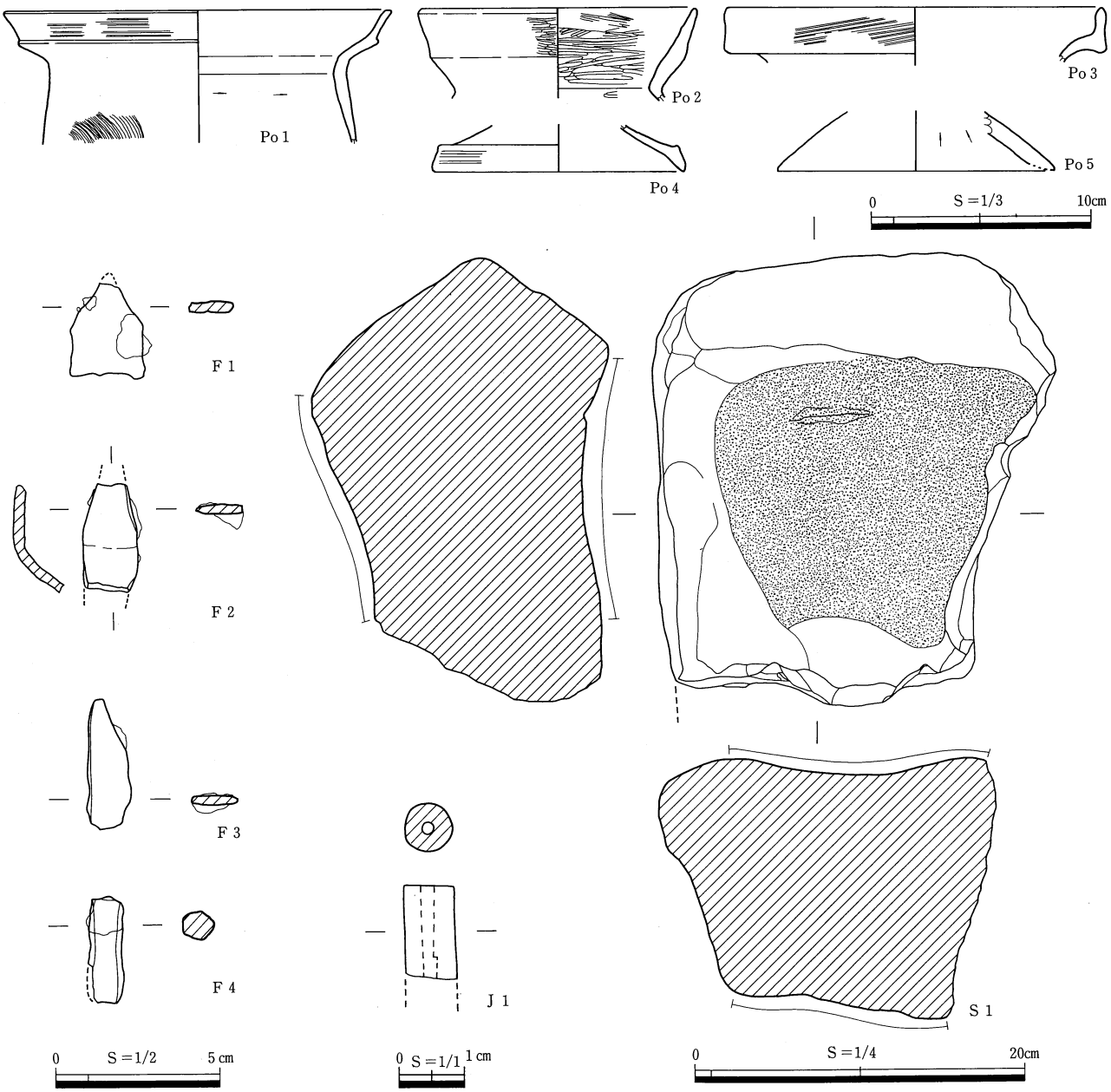


挿図７　ＳＩ01貼床除去後状況図

また、Ｐ１・Ｐ４の柱材の^{14}Ｃ年代測定を行った結果、№356（KSU-2426）はBP1740±25、№442（KSU-2427）はＢＰ1640±20であった。この測定値から換算される絶対年代は、それぞれ３世紀後半、５世紀前半と幅があり、土器編年が示す年代観とずれるものがある。



挿図８　ＳＩ01内ＳＫ１遺構図



挿図９　ＳＩ01出土遺物実測図

ＳＩ02（挿図10・11、図版３・30）

位　　置　　鷲谷口地区のほぼ中央南側の６Ｄ・Ｅグリッドにあり、標高14.0～14.8mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。倉見８号墳の基盤層中で検出された。南側の大半をＳＤ14によって壊されていた。

形　　態　　遺存状況は非常に悪く、壁溝と考えられる鉤状の溝を検出し、竪穴住居跡と判断した。遺存する壁溝から、平面は方形ないしは隅丸方形と考えられる。規模は不明である。

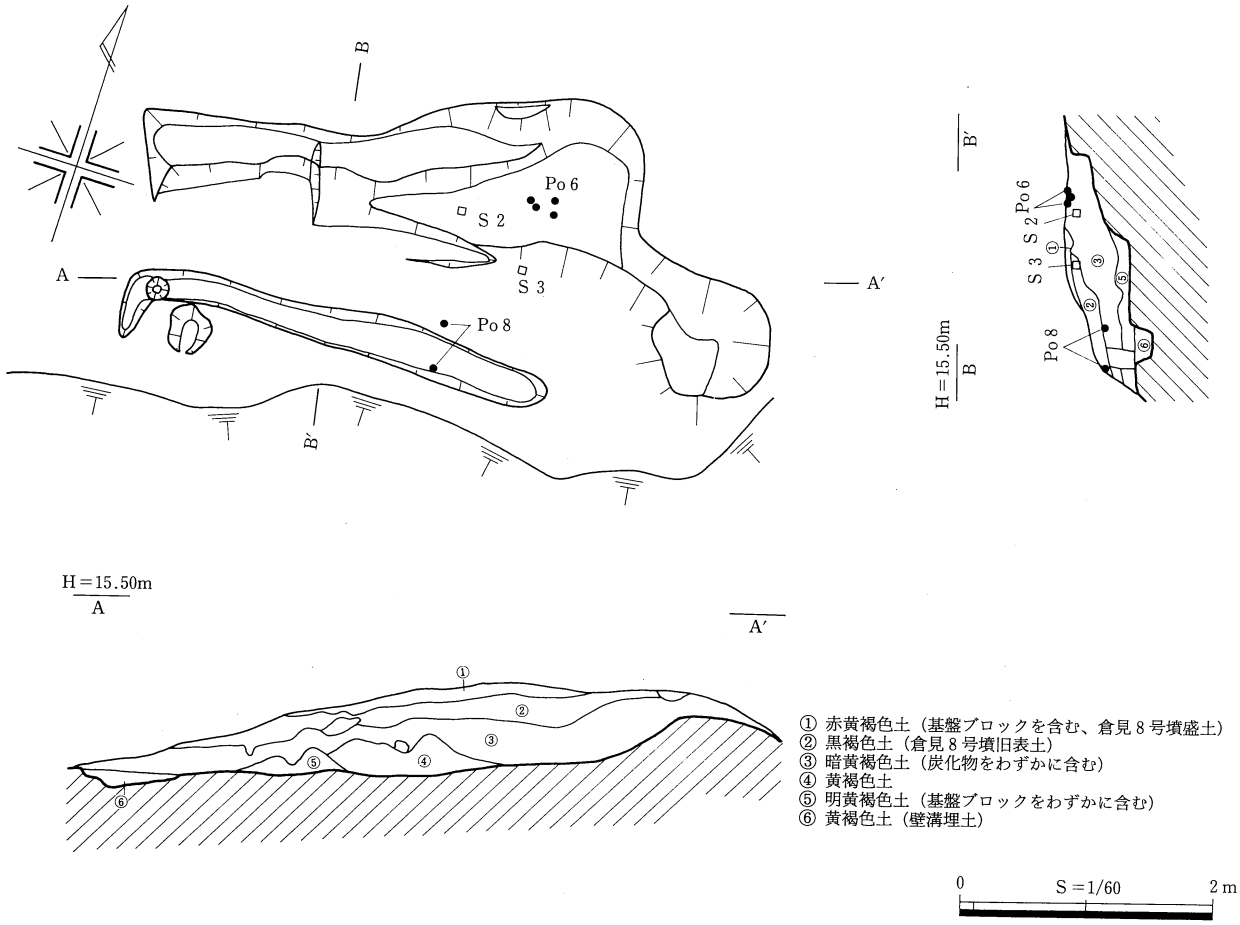
壁溝は、幅0.24～0.38m、深さ８～15cmを測り、断面逆台形状を呈す。壁溝内にはピットがある。

埋　　土　　埋土は５層に分層できた。これらは中心部に向かって自然堆積した状況が窺われる。このうち③層中には炭化物がわずかに含まれている。

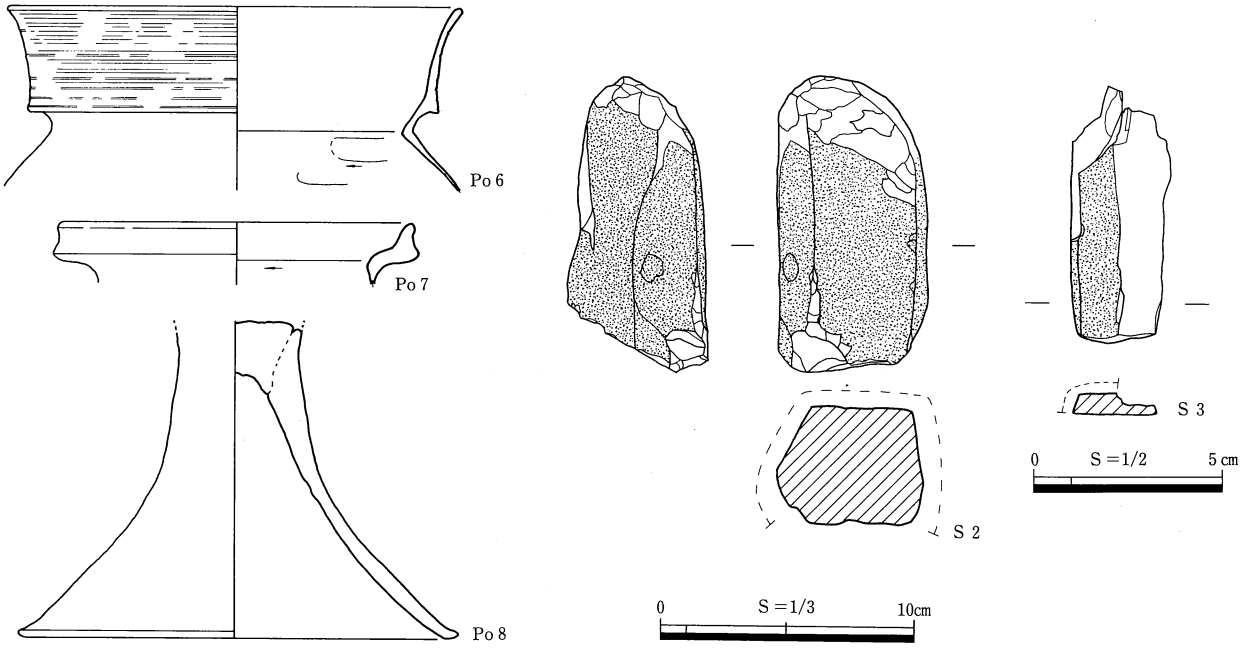
貼床は認められなかった。

遺物出土状況　　ＳＩ02内で図化できたものには、甕Po６・Po７、高杯Po８、砥石Ｓ１・Ｓ２がある。いずれも住居東側の埋土上層からの出土であるが、Po６は後述するＳＩ03出土の土器片と接合した。

時　　期　　埋土中の土器から、ＳＩ02は岩吉編年Ⅳ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図10　ＳＩ02遺構図



挿図11　ＳＩ02出土遺物実測図

ＳＩ03（挿図12・13、図版３・30）

位　　置　　鷲谷口地区のやや西側の５Ｄグリッドにあり、標高13.7mの平坦面に位置する。倉見９号墳の基盤層中で検出された。北東側約７ｍにはＳＩ01がある。

形　　態　　ＳＩ03は、少なくとも２回の建て替えがあったものと考えられ、それぞれＳＩ03－１、ＳＩ03－２とした。

ＳＩ03-1　　遺存状況は悪く、北側は倉見９号墳によって、西側は後世の削平によって削り取られている。遺存する壁の状態から円形ないしは多角形を呈すものと考えられる。規模は、東西5.24m以上、南北6.06ｍを測り、床面積は24.9m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北東壁で最大0.56mを測る。

ＳＩ03－1に伴う壁溝は、検出されなかった。

主柱穴はＰ１～Ｐ５と考えられるが、柱穴の並びを考えると本来は６個あったものと考えられる。それぞれの規模は、Ｐ１（72×53－59）cm、Ｐ２（98×86－93）cm、Ｐ３（90×70－62）cm、Ｐ４（50×42－67）cm、Ｐ５（48×43－52）cmを測る。

主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に、2.6m、2.0m、2.3m、2.5mである。

中央ピットは、二段掘りのＰ11と考えられ、上縁部（85×83－15）cm、中央部（56×44－17）cm掘り込む。埋土は１層である。

ＳＩ03-2　　ＳＩ03－1の内側で検出された壁溝と考えられる溝から存在を考えた。形態・規模ともに不明である。

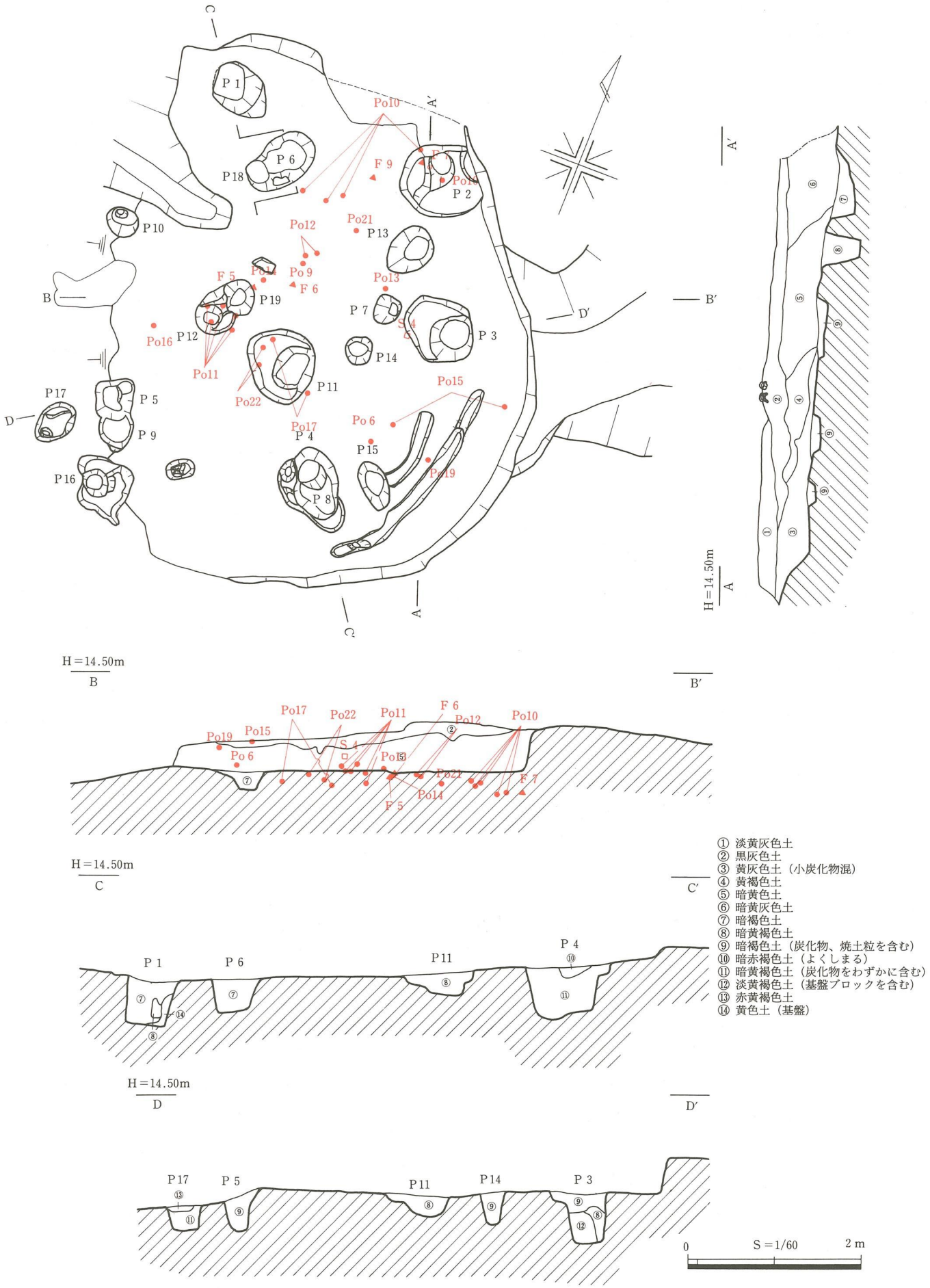
主柱穴は、Ｐ６～Ｐ10の５個と考えられ、それぞれの規模は、Ｐ６（63×55－40）cm、Ｐ７（34×33－30）cm、Ｐ８（36×32－57）cm、Ｐ９（42×38－23）cm、Ｐ10（37×35－27）cmを測る。

主柱穴間距離はＰ６～Ｐ７間から順に、2.2m、2.3m、2.5m、2.4m、1.9mである。

壁溝は、南東側で２条検出できた。幅18cm、深さ２～９cmを測り、断面「U」字状を呈す。

この他に、床面上で多数のピットが検出されたが、用途は不明である。しかし、壁溝が二重に巡る事から、上記の建て替え以外にも建て替えがあったものと推察される。

埋　　土　　埋土は６層に分層できた。これらは中心部に向かって自然堆積した状況が窺われる。このうち③層中には炭化物がわずかに含まれている。



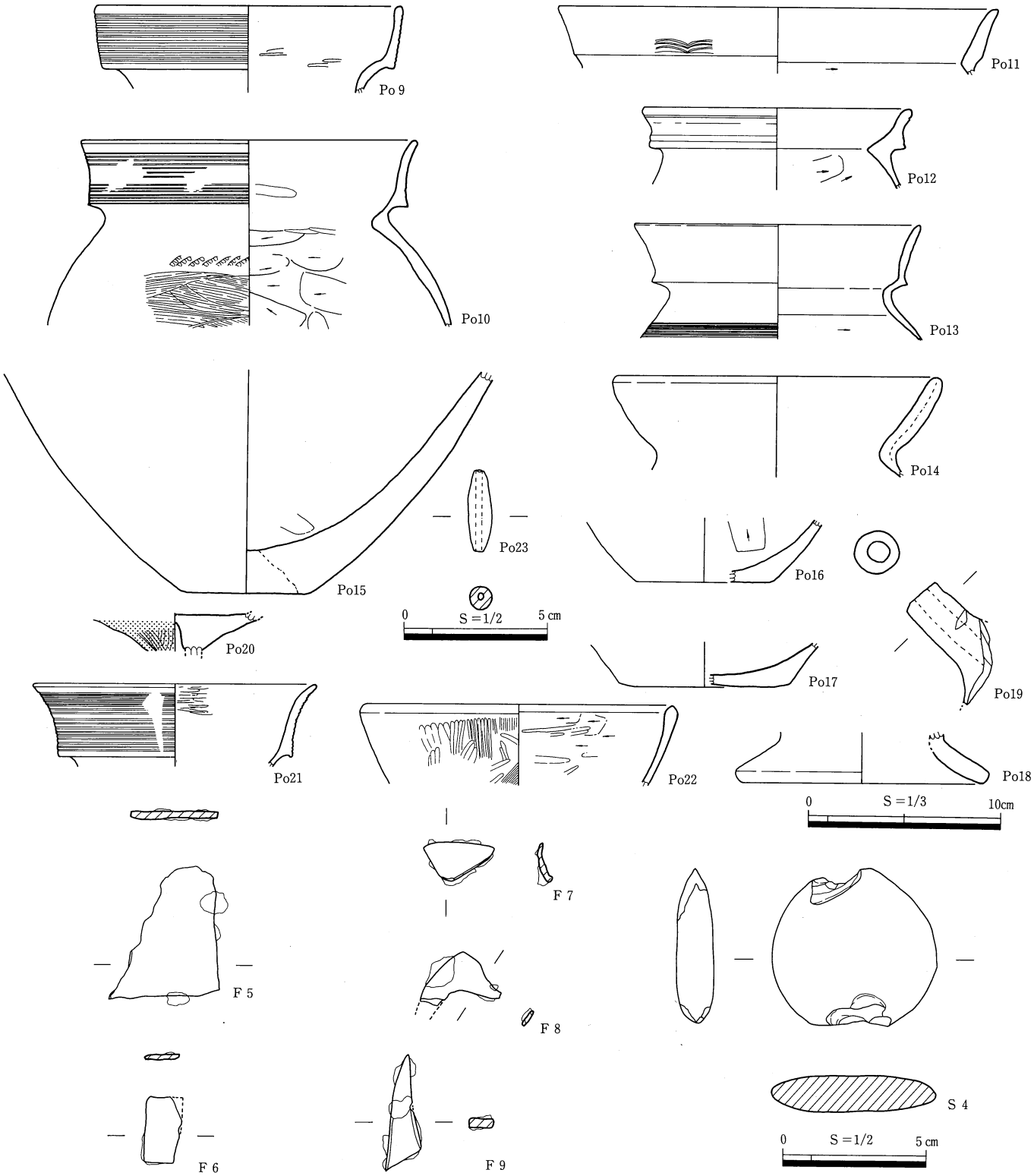
挿図12　ＳＩ03遺構図

遺物出土状況　ＳＩ03内で図化できたものには、壺Po９、甕Po10～Po14、底部Po15～Po17、脚部Po18、注口土器Po19、高杯Po20、鼓形器台Po21、鉢Po22、土錘Po23、石錘Ｓ４、鉄片Ｆ５～Ｆ９がある。

このうち床面中央ピット周辺でPo17、中央部でPo21が出土している。埋土下層からは、Po９～Po14、Po16、Po18、Po22、Ｓ４、鉄片が出土している。その他は、埋土上層からの出土である。

なお、出土している鉄片は、三角形状から長方形状を呈し、いずれも製品とは考えられない。

時　期　床面及び埋土下層中の土器から、ＳＩ03は岩吉編年Ⅳ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられるが、ピットの深さが03－１のものの方が深く、外側に配置されることから、ＳＩ03－２→03－１の順で建て替えがあったものと考えられる。



挿図13　ＳＩ03出土遺物実測図

2．土坑・土壙

ＳＫ01（挿図14・15、図版５・31）

位　　置　鷲谷口地区東側の10Ｅグリッドにあり、標高約20.8～21.0mの西側に傾斜する斜面に位置する。検出位置はＳＤ01の埋土中で、ほぼ溝幅いっぱいに掘り込まれている。

形　　態　ＳＤ01検出中に存在を確認したため、検出面では非常に浅い墓壙の検出に終わった。平面は角の取れた長方形で、規模は、基底部で南北1.10m、東西0.93m、深さ0.38mを測る。断面は逆台形状を呈す。長軸方向は、Ｎ－27°－Ｗである。

埋　　土　埋土は３層に分層できた。①層中には炭化物の他骨片・鉄釘などの遺物も含む。②層は炭化物層、③層は炭化物を含む焼土層である。

焼土・炭化物　底面・埋土中で骨片・焼土・炭化物が検出されたことから、ＳＫ01は火葬墓と判明した。

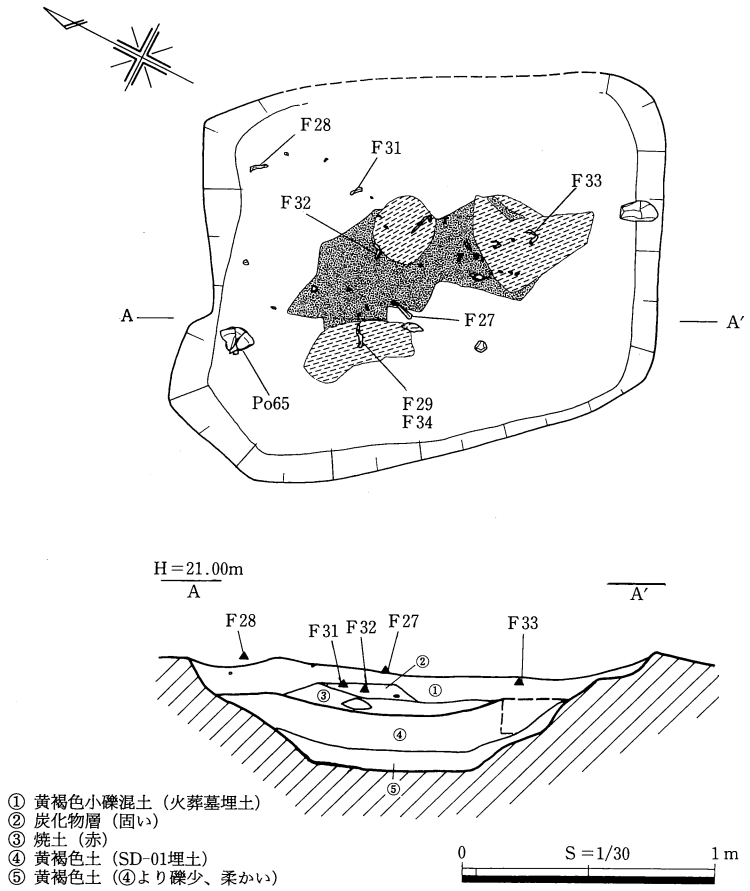
遺物出土状況　出土遺物には、図化できたものに土師質土器皿Po65、鉄釘Ｆ27～Ｆ34がある。いずれも底面直上またはやや浮いた状態での出土である。Po65は北壁際で、鉄釘は底面中央を中心に検出された。

鉄釘には直線状を呈すＦ27～Ｆ30、折れ曲がるＦ31～Ｆ34の２種類が使用されていたものと考えられる。

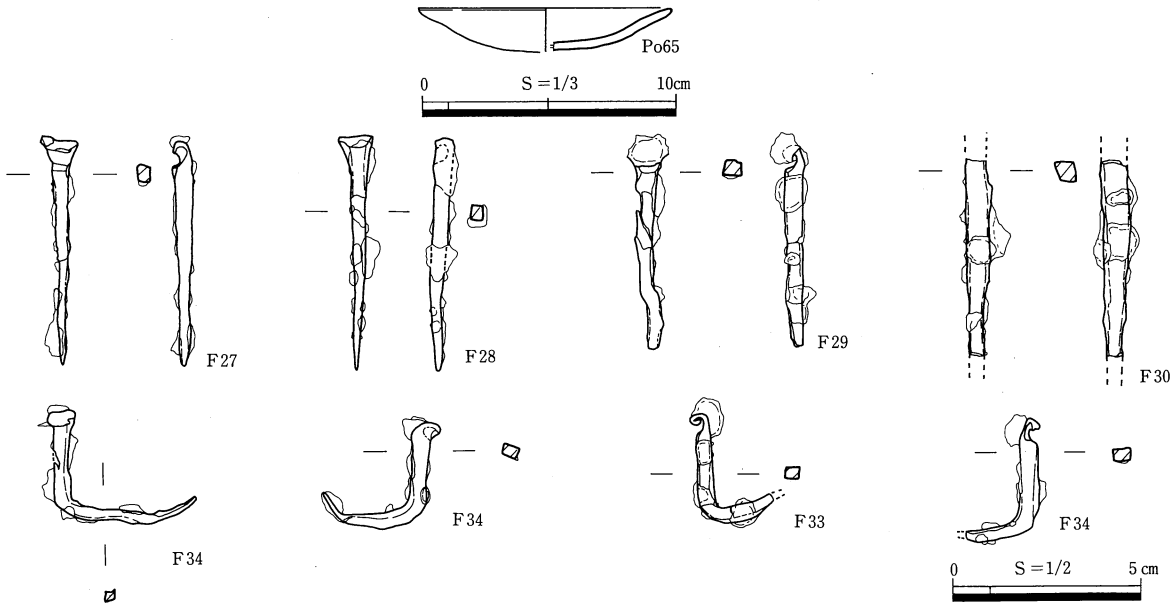
また、埋土中から骨片がわずかに検出された。いずれも小片のため部位は同定できなかったが、鑑定の結果人骨の可能性が指摘された。

時　　期　出土土器から、ＳＫ01は中世末頃のものと考えられる。ＳＤ01との切り合い関係は、明らかにＳＤ01の埋土中に掘り込まれていることから、ＳＤ01が埋没した後で作られたものといえる。

性　　格　ＳＫ01は、火葬墓と考えられるが、単独で検出され、周辺には立地的に墓が作られた形跡はなく、群集するこの地域の中世墓の形態とは異なるあり方を示す。



挿図14　ＳＫ01遺構図



挿図15　ＳＫ01出土遺物実測図

ＳＫ02（挿図16・17、図版５・31）

位　　置　　鷲谷口地区南西側の４Ｅグリッドにあり、標高約13mの広くなった平坦面の南側に位置する。北東側約10mにはＳＩ03、西側約10mにはＳＳ01がある。

形　　態　　遺存状況は非常に悪く、上部は後世の削平を受けており、基底部のみ検出された。平面は楕円形、断面逆台形状を呈す。規模は、基底部で長軸1.17m、短軸0.95m、深さ0.16mを測る。

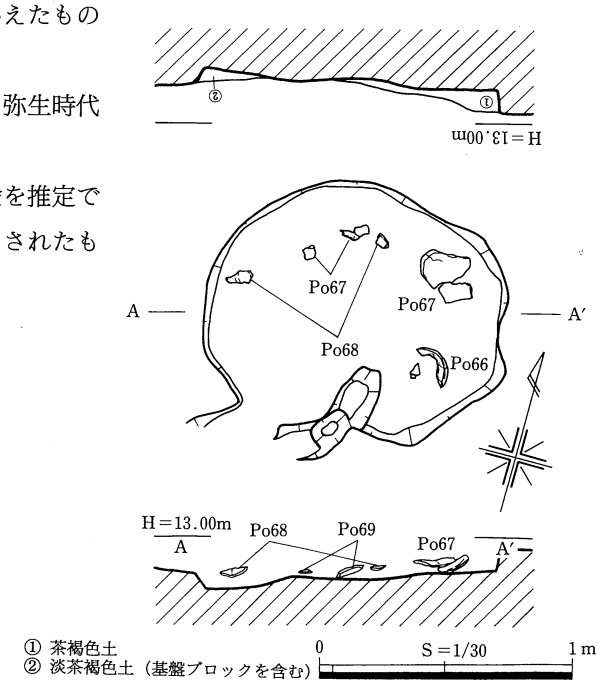
埋　　土　　埋土は、わずかに２層に分層できた。

遺物出土状況　　出土遺物には、図化できたものに甕Po66、胴部Po67、小型甕Po68、高杯Po69がある。いずれも底面直上からの出土である。

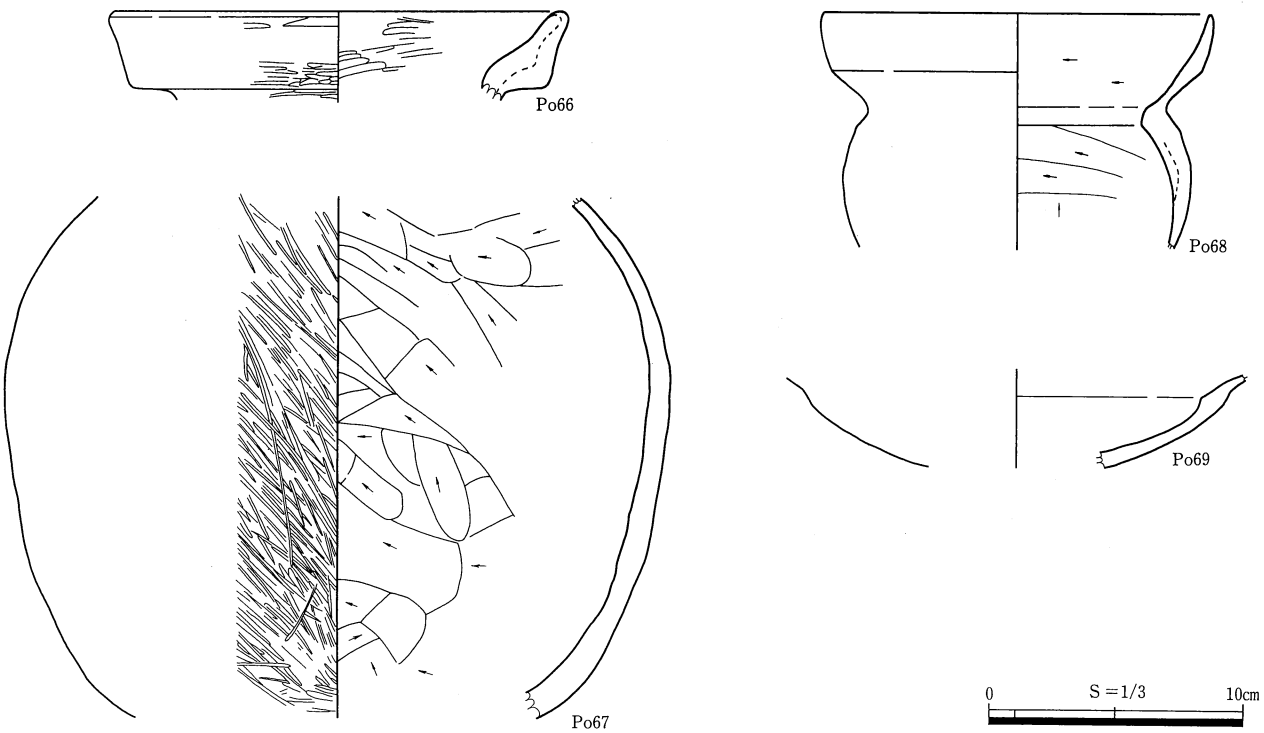
このうち、鈍い厚手の複合口縁をもつPo66は、断面を観察すると、短く外反する複合口縁をもつ甕の外側に粘土を継ぎ足して器壁を厚く作りかえたものと考えられるものである。

時　　期　　底面出土土器から、ＳＫ02は岩吉編年Ⅳ期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性　　格　　ＳＫ02は基底部のみ検出され、形態から用途を推定できないが、遺物出土状況から貯蔵穴として使用されたものと考えられる。



挿図16　ＳＫ02遺構図



挿図17　ＳＫ02出土遺物実測図

３．溝状遺構

ＳＤ01～ＳＤ03、ＳＲ01（挿図18・19、図版３）

位　　置　　鷲谷口地区北東側の10Ｅ・11Ｄ・11Ｅ・12Ｄ・12Ｅグリッドにあり、標高約19.3～26.7mの急斜面に３本の溝が一部接しながら位置する。ＳＤ01と02は10Ｅグリッドで接続し、10・11ＥグリッドでＳＤ02と03が近接して造られている。10Ｅグリッドでは、ＳＤ01の埋土中に火葬墓であるＳＫ01が掘り込まれている。

形　　態　　ＳＤ01は、斜面中腹をほぼ東西方向に、やや湾曲しながら走っている。急斜面に造られているため

ＳＤ01　　に北西側は流失し、また、東端部はＳＤ11によって削り取られ、西端部は後世の削平によって途切れており、全体的には遺存状況は必ずしも良好ではない。東端部は底面が一部階段状を呈す。

規模は残存値で、全長29m、幅0.6～1.05m、深さ0.1～0.6mを測る。断面は逆台形状または「Ｕ」字状を呈す。

ＳＤ02　　ＳＤ02は、斜面中腹をほぼ東西方向に、やや湾曲しながら走っている。急斜面に造られているために、東端部は流失している。

規模は残存値で、全長13m、幅0.7 ～1.0m、深さ0.1～0.52mを測る。断面は逆台形状または「Ｕ」字状を呈す。

ＳＤ03　　ＳＤ03は、ＳＤ02と直交するように、斜面に沿って南北方向に直線的に走っている。急斜面に造られているために、南端部は流失している。

規模は、全長３m、幅0.8～1.3m、深さ0.1～0.4mを測る。断面は「Ｕ」字状を呈す。

ＳＲ01　　ＳＲ01は、南西側へ傾斜する急斜面を段状に加工したものである。南東側は流失している。この遺構は、調査前地形でも確認できたものである。

規模は、全長13.5m以上、幅0.75～4.4mを測る。

埋　　土　　ＳＤ01の埋土は、３～６層に分層できた。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

ＳＤ02の埋土は、２層に分層できた。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

ＳＤ03の埋土は、茶褐色土単層である。皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

遺物出土状況　ＳＤ01の出土遺物には、図化できたものが甕Po125　１点のみある。この土器は、東側の②層中からの出土であり、鷲谷奥地区Ａ区の他の遺構からの混入と考えられる。

ＳＤ02・03、ＳＲ01からは遺物は出土していない。

時　期　これらの遺構に伴う土器が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、ＳＤ01・02はほぼ同時期で、また、ＳＤ01はＳＤ11より遡るものと考えられる。

用　途　ＳＤ01は、東端部底面の形態上の特徴から、道として使用された可能性がある。

ＳＤ02・03については、用途は不明であるが、ＳＤ01と同様の性格があった可能性がある。

ＳＲ01は尾根と谷部を結ぶ道路として機能したものと考えられ、現在まで使用されたものである。

ＳＤ04～ＳＤ06（挿図20・21、図版４）

位　置　鷲谷口地区中央の６Ｅ・７Ｃ・７Ｄ・７Ｅ・８Ｃ・８Ｄ・９Ｄグリッドにあり、ＳＤ04～06の溝が一部接しながら、標高13.0～14.2mの斜面に位置する。ＳＤ04は、６Ｅグリッドで倉見８号墳を大きく壊し、８ＤグリッドでＳＤ05、９ＤグリッドでＳＤ06と接している。

形　態　ＳＤ04は、調査区を南西～北東方向に斜めに直線的に横切る形で検出されたが、北東側調査区外にも延びており、現状でもＢ区西側急斜面中腹にテラス状の平坦面が見られる。

ＳＤ04

規模は残存値で、全長32.5mを測る。幅1.1～3.1mの範囲で掘削が行われ、さらに、２～４本の複数の溝が掘り込まれている。６Ｅ・７Ｅグリッドでは轍状を呈している。深さは、カット面から底面まで2.0m、中の小さな溝は５～18cmを測る。それぞれの小さな溝の断面は、逆台形状または「Ｕ」字状を呈す。

ＳＤ05　ＳＤ05は、調査区の北側斜面を弧状に下っており、北側は調査区外へ延びている。南東側はＳＤ04によって削り取られている。

規模は、全長13.2m以上、幅1.2 ～2.0m、深さ0.2 ～1.2mを測る。断面は逆台形状を呈し、一部段状を呈す。

ＳＤ06　ＳＤ06は、ほぼＳＤ04と平行するように走っており、東端はＳＤ04と接している。

規模は、全長7.0m以上、幅0.5 ～0.9m、深さ0.16～0.2m測る。断面は、逆台形状を呈す。

埋　土　ＳＤ04の埋土は、２～15層に分層できた。中央部から西側は、現代も利用されていたものといわれており、埋土の堆積はわずかである。なお、調査区北東際のＡ－Ａ'の土層断面を観察すると、４～６回掘り返されているものと考えられる。このうち、⑤～⑨層は非常に固く締まったものである。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

ＳＤ05の埋土は、７層に分層できた。①層は周辺を削り出した時のものと考えられる。

ＳＤ06の埋土は、２層に分層できた。埋土の状況はＳＤ04と類似している。

遺　物　表土中及び埋土中から土器片が出土しているが、わずかに図化できたものは、ＳＤ05の埋土中から出土した備前焼擂鉢Po126 のみである。また、ＳＤ04から図化できなかったが、須恵器杯身片が出土している。この須恵器は、倉見８号墳からの流れ込みと考えられる。

時　期　時期を比定できる遺物が出土していないため、それぞれの時期は不明である。遺構の切り合い関係から考えると、ＳＤ04・06は、ほぼ同時期のもの、また、ＳＤ05はＳＤ04によって切られていること

から、３本の溝の中では最も遡るものと考えられる。

用　　途　　これらの溝状遺構の用途は不明であるが、道として使用された可能性がある。

ＳＤ07～ＳＤ10（挿図22～25、図版４・５）

位　　置　　鷲谷口地区西側の２Ｄ・３Ｃ・３Ｄ・４Ｃ・４Ｄグリッドに４条の溝状遺構が検出された。周辺は後世の耕作等により大きく削平されており、いずれの溝も遺存状態はよくない。

ＳＤ07・08は、３Ｄ・４Ｃ・４Ｄグリッドにあり、標高約9.3 ～12.0mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。北側のものがＳＤ08、南側のものがＳＤ07である。

ＳＤ09は、最も西側の２Ｄグリッドにあり、標高約7.0 ～9.5mの西側に傾斜する斜面に位置する。南東側約６ｍにはＳＳ01が、北東側約８ｍにはＳＤ07がある。

ＳＤ10は、３Ｃグリッドにあり、標高約5.7 ～8.4mの北側に傾斜する斜面に位置する。南側約４ｍにはＳＤ07がある。

形　　態　　ＳＤ07は、４Ｄ杭付近で途切れるものの、ほぼ直線状に東西方向に走っている。規模は、全長約15.5

ＳＤ07　　ｍ、幅0.4～1.2m、深さ0.08～0.21mを測る。断面は「Ｕ」字状を呈す。

ＳＤ08　　ＳＤ08は、やや北側斜面に向かって湾曲するものの、ほぼ東西方向に走っている。規模は、全長約5.5m、幅0.53m、深さ0.03～0.21mを測る。断面は「Ｕ」字状を呈す。

ＳＤ09　　ＳＤ09は、西側斜面を、蛇行しながらほぼ南北方向に走っている。規模は残存値で、全長7.0m、幅0.5 ～0.95m、深さ0.26～0.49mを測る。断面は「Ｖ」字状を呈す。

ＳＤ10　　ＳＤ10は、北側急斜面を直線的に南東～北西方向に走っている。北側は、掘り込みが非常に不明瞭である。規模は、全長5.7m、幅0.65～1.2m、深さ0.36mを測る。断面は「Ｕ」字状を呈す。

埋　　土　　ＳＤ07の埋土は、２層に分層できた。これらは皿状の堆積をしており、自然堆積したものと考えら

ＳＤ07　　れる。

ＳＤ08　　ＳＤ08の埋土は、わずかに暗黄褐色土１層である。なお、ＳＤ08の北側には、溝埋土と同色の土層の下に黒褐色土層が堆積しており、ＳＤ08埋没以前の旧表土と考えられる。

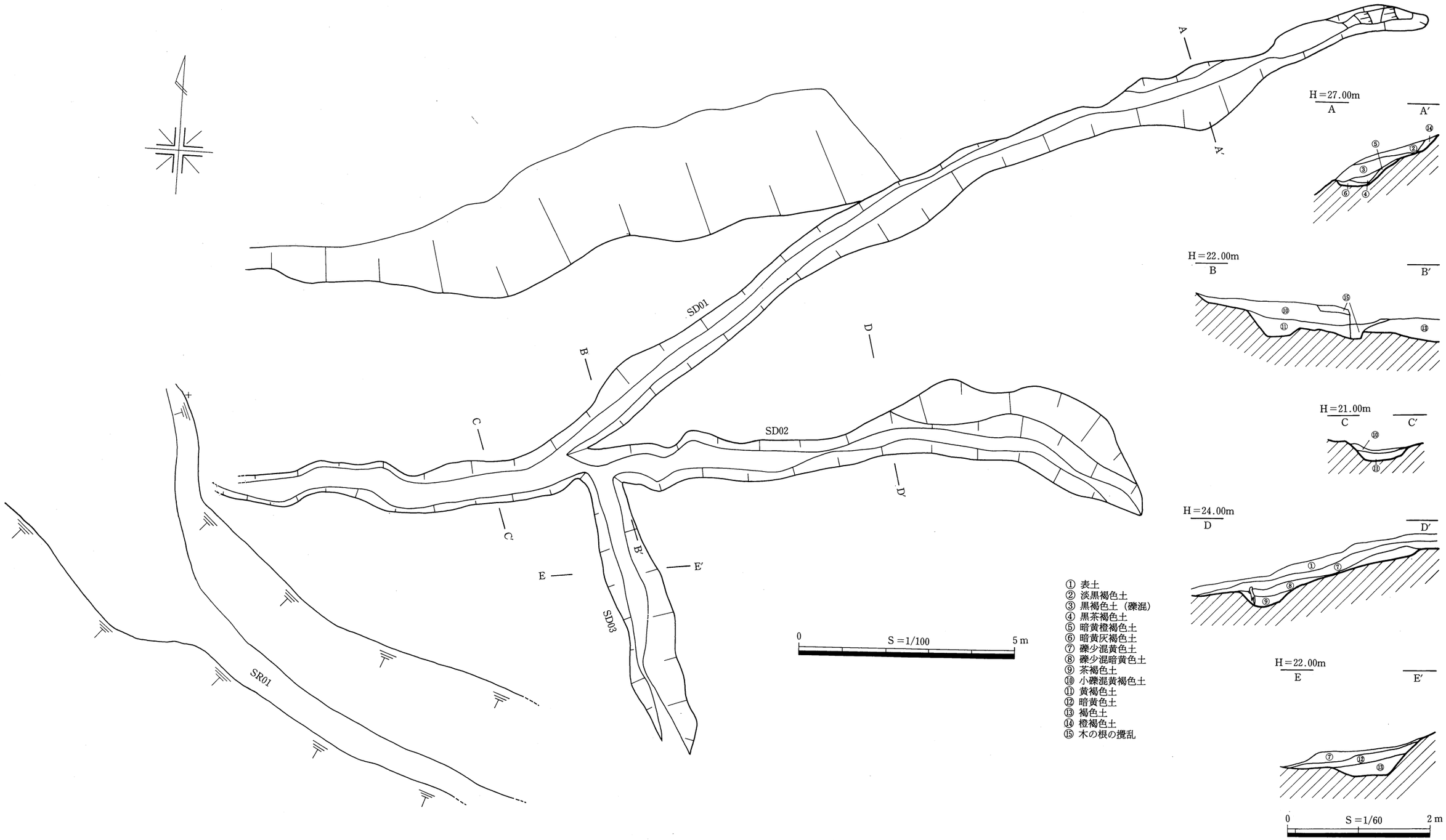
ＳＤ09　　ＳＤ09の埋土は、３層に分層できた。これらは皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

ＳＤ10　　ＳＤ10の埋土は、４層に分層できた。このうち、⑦層は締まりがないものである。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

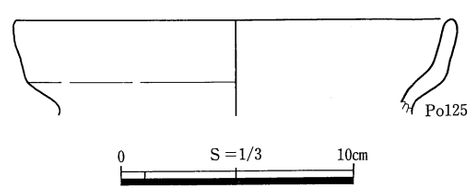
遺　　物　　ＳＤ07からは遺物は検出されなかった。ＳＤ08からは、埋土中から須恵器高杯Po127が出土している。ＳＤ09からは、埋土中から土器片が出土しているが、図化できたものがわずかに施釉陶器Po128のみである。また、ＳＤ10からは、埋土中から陶器片Po129が出土している。

時　　期　　ＳＤ08のPo127 は古墳時代後期～奈良時代頃のものと考えられるが、周辺からの流入と考えられ、この遺構に伴うものとは考えられない。その他の遺物は、中世～近世にかけてのものと考えられる。

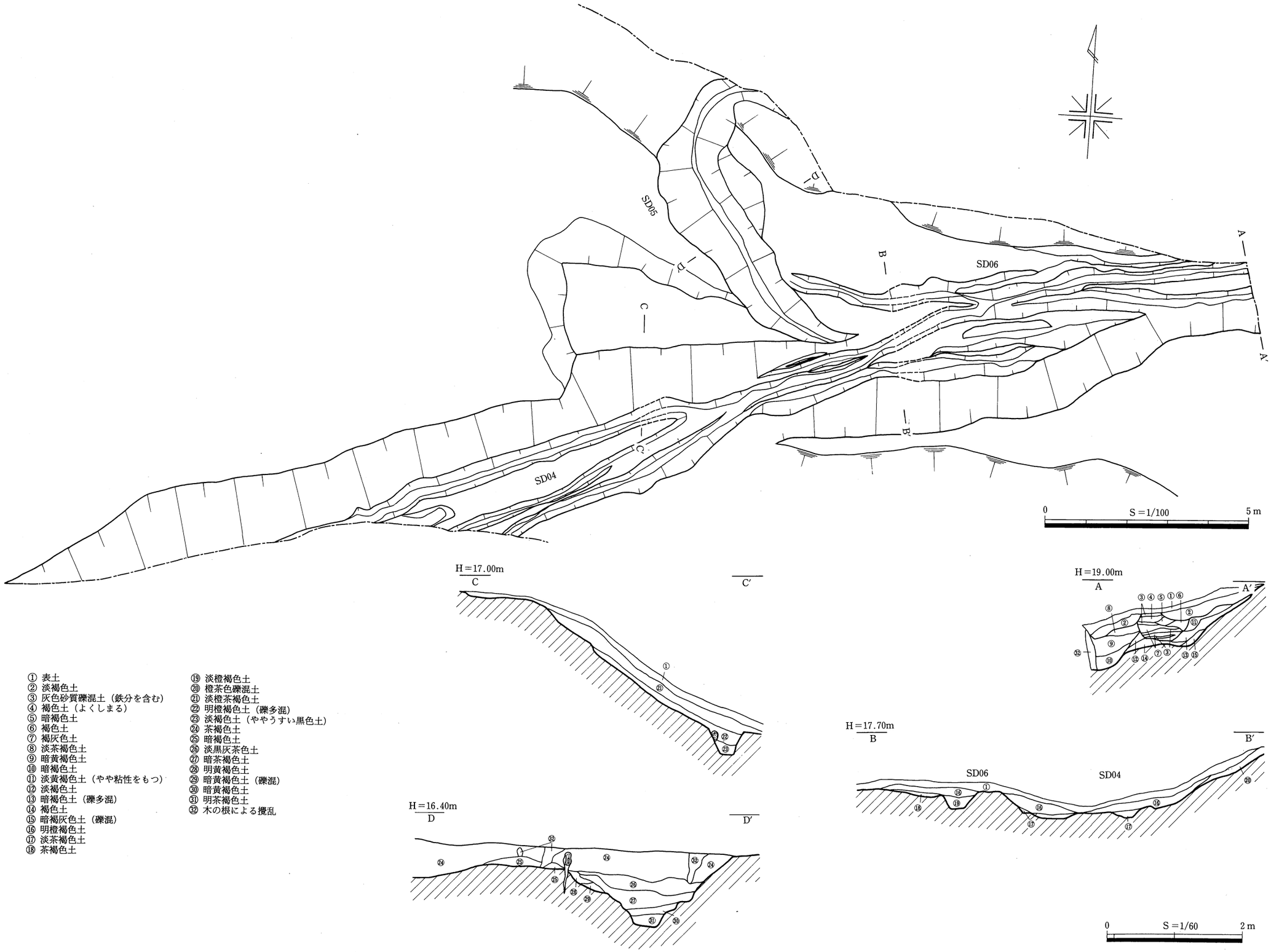
用　　途　　用途はいずれの溝も不明である。



挿図18　ＳＤ01～ＳＤ03、ＳＲ01遺構図

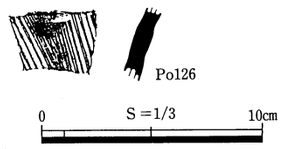


挿図19　ＳＤ01出土遺物実測図

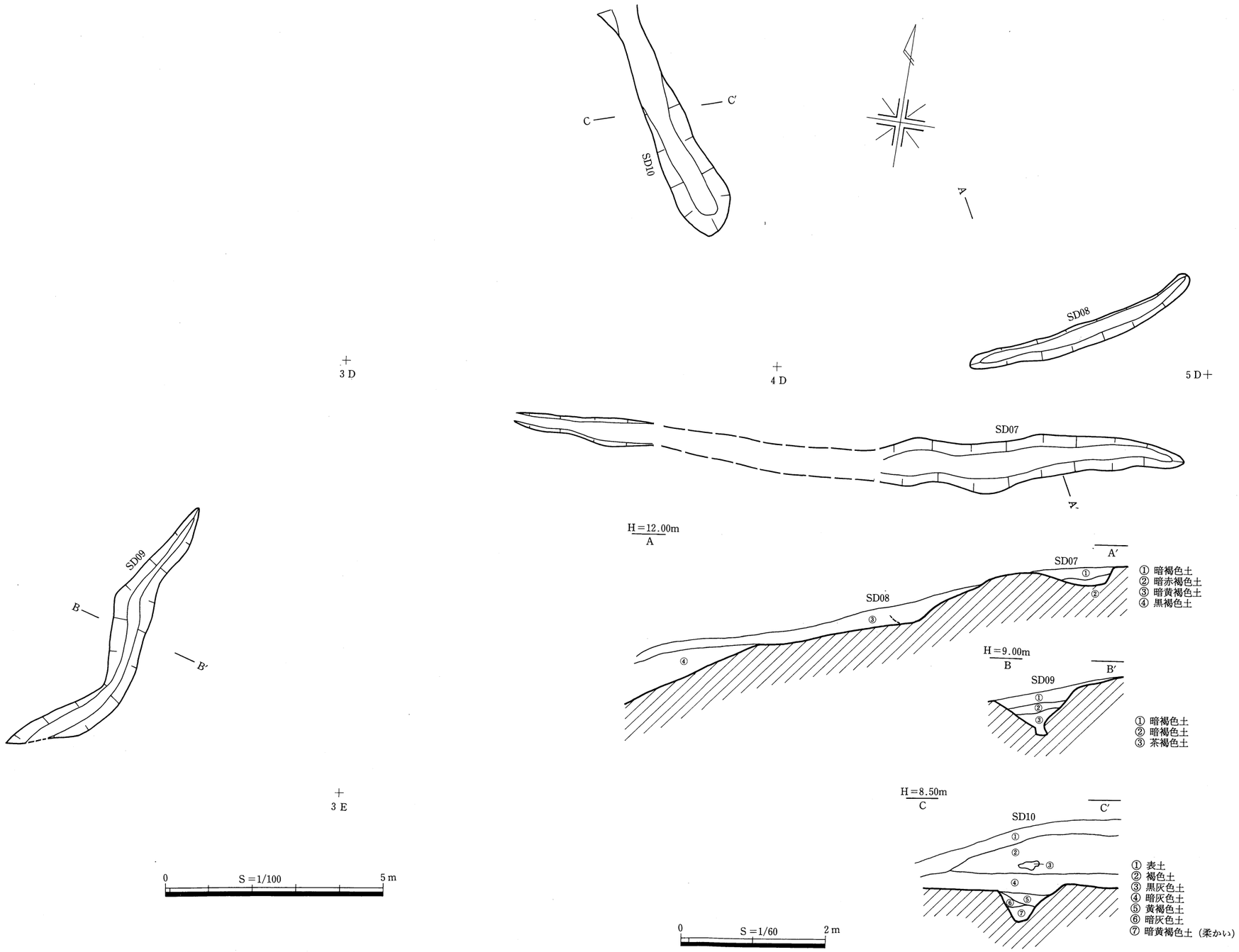


① 表土
② 淡褐色土
③ 灰色砂質礫混土（鉄分を含む）
④ 褐色土（よくしまる）
⑤ 暗褐色土
⑥ 褐色土
⑦ 褐灰色土
⑧ 淡茶褐色土
⑨ 暗黄褐色土
⑩ 暗褐色土
⑪ 淡黄褐色土（やや粘性をもつ）
⑫ 淡褐色土
⑬ 暗褐色土（礫多混）
⑭ 褐色土
⑮ 暗褐灰色土（礫混）
⑯ 明橙褐色土
⑰ 淡茶褐色土
⑱ 茶褐色土
⑲ 淡橙褐色土
⑳ 橙茶色礫混土
㉑ 淡橙茶褐色土
㉒ 明橙褐色土（礫多混）
㉓ 淡褐色土（ややうすい黒色土）
㉔ 茶褐色土
㉕ 暗褐色土
㉖ 淡黒灰茶色土
㉗ 暗茶褐色土
㉘ 明黄褐色土
㉙ 暗黄褐色土（礫混）
㉚ 暗黄褐色土
㉛ 明茶褐色土
㉜ 木の根による攪乱

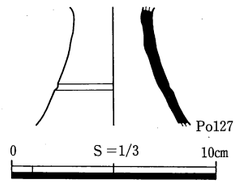
挿図20　ＳＤ04～ＳＤ06遺構図



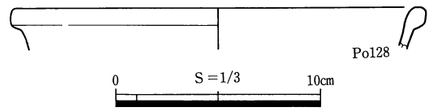
挿図21　ＳＤ05出土遺物実測図



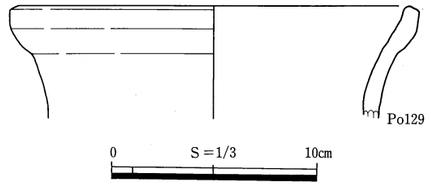
挿図22　ＳＤ07～ＳＤ10遺構図



挿図23　ＳＤ08出土遺物実測図



挿図24　ＳＤ09出土遺物実測図



挿図25　ＳＤ10出土遺物実測図

4．段状遺構

ＳＳ01（挿図26、図版６）

位　　置　　鷲谷口地区西側の３Ｅグリッドにあり、標高約10.3～11.1mの西側に傾斜する斜面部に位置する。西側約６ｍにはＳＤ09がある。

形　　態　　斜面をカットし、現状で長方形を呈す平坦面を作っている。西側は流失しており、遺存状態は必ずしも良好ではない。平坦面の規模は、南北5.1m、東西3.8m以上、深さは最も遺存状態のよい東側壁で最大0.39mを測る。平坦面の面積は、18m²以上である。

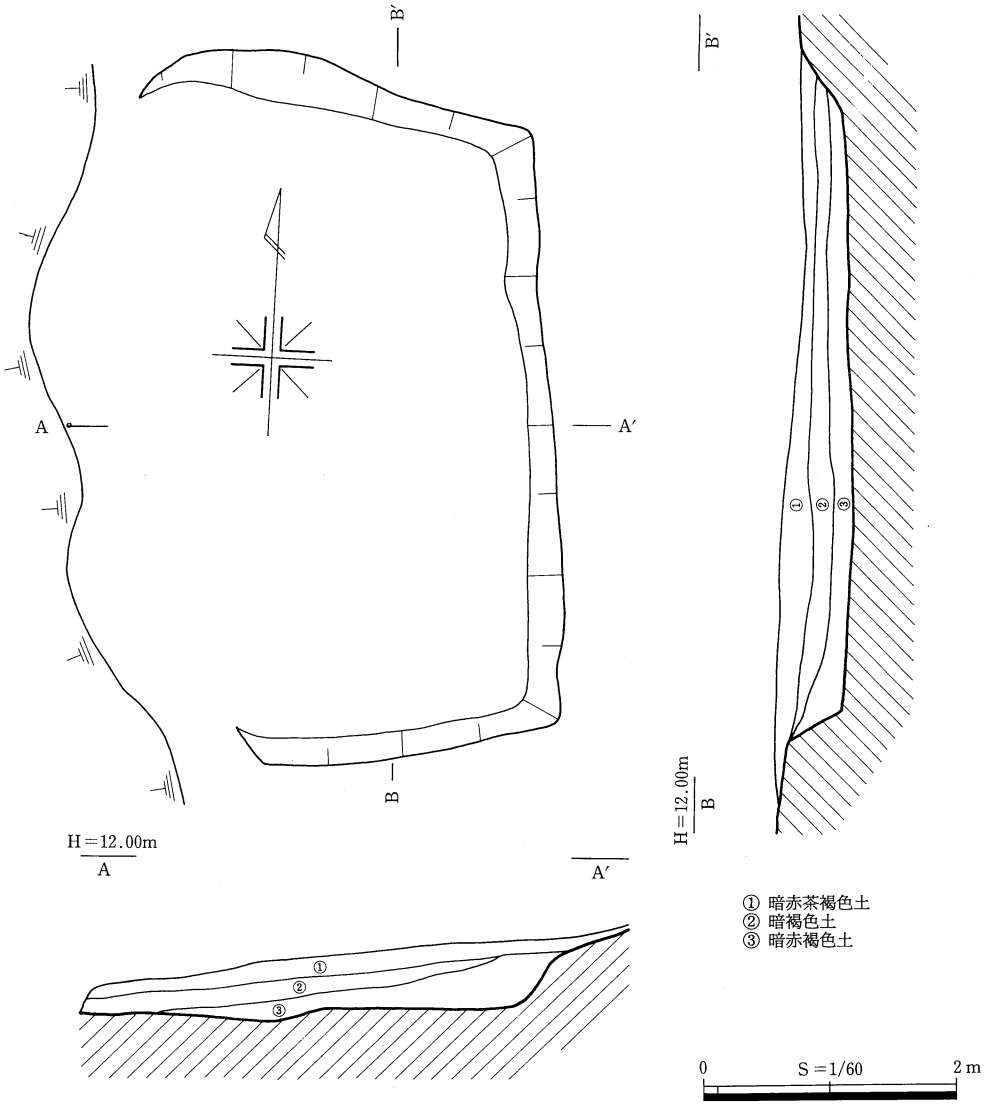
床面上ではピットなどは検出されなかった。

埋　　土　　埋土は、３層に分層できた。いずれも締まりのないものである。

遺　　物　　埋土中から、土師器片・須恵器片が出土しているが、図化できなかった。

時　　期　　埋土中の須恵器片から、古墳時代後期後半～奈良時代頃のものと考えられる。

用　　途　　用途は不明であるが、斜面部に作られた竪穴住居跡の可能性も考えられる。



挿図26　ＳＳ01遺構図

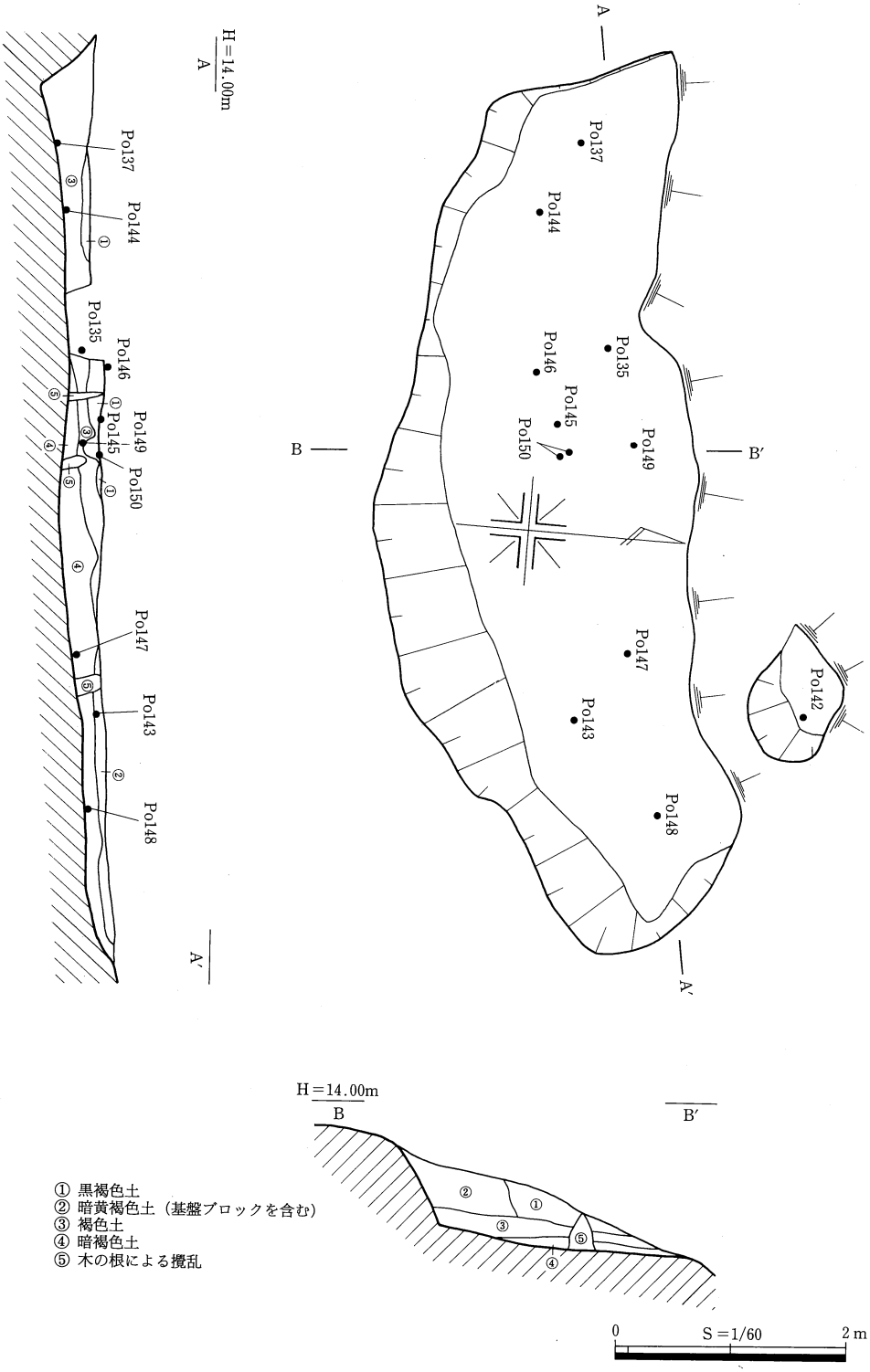
ＳＳ02（挿図27・28、図版６・31）

位　　置　　鷲谷口地区北側の５Ｃ・６Ｃグリッドにあり、標高約12.7～14.0mの北側に傾斜する斜面部に位置する。北側は流失している。南側は埋土上に倉見９号墳周溝が掘り込まれている。

形　　態　　斜面をカットし、不整楕円形状を呈す平坦面を作っている。北側は流失しており、遺存状態は必ずしも良好ではない。平坦面の規模は、南北2.2m以上、東西7.5m、深さは最も遺存状態のよい南側壁で最大1.06mを測る。平坦面の面積は、12.4m²以上である。

床面上ではピットなどは検出されなかった。

埋　　土　　埋土は、４層に分層できた。



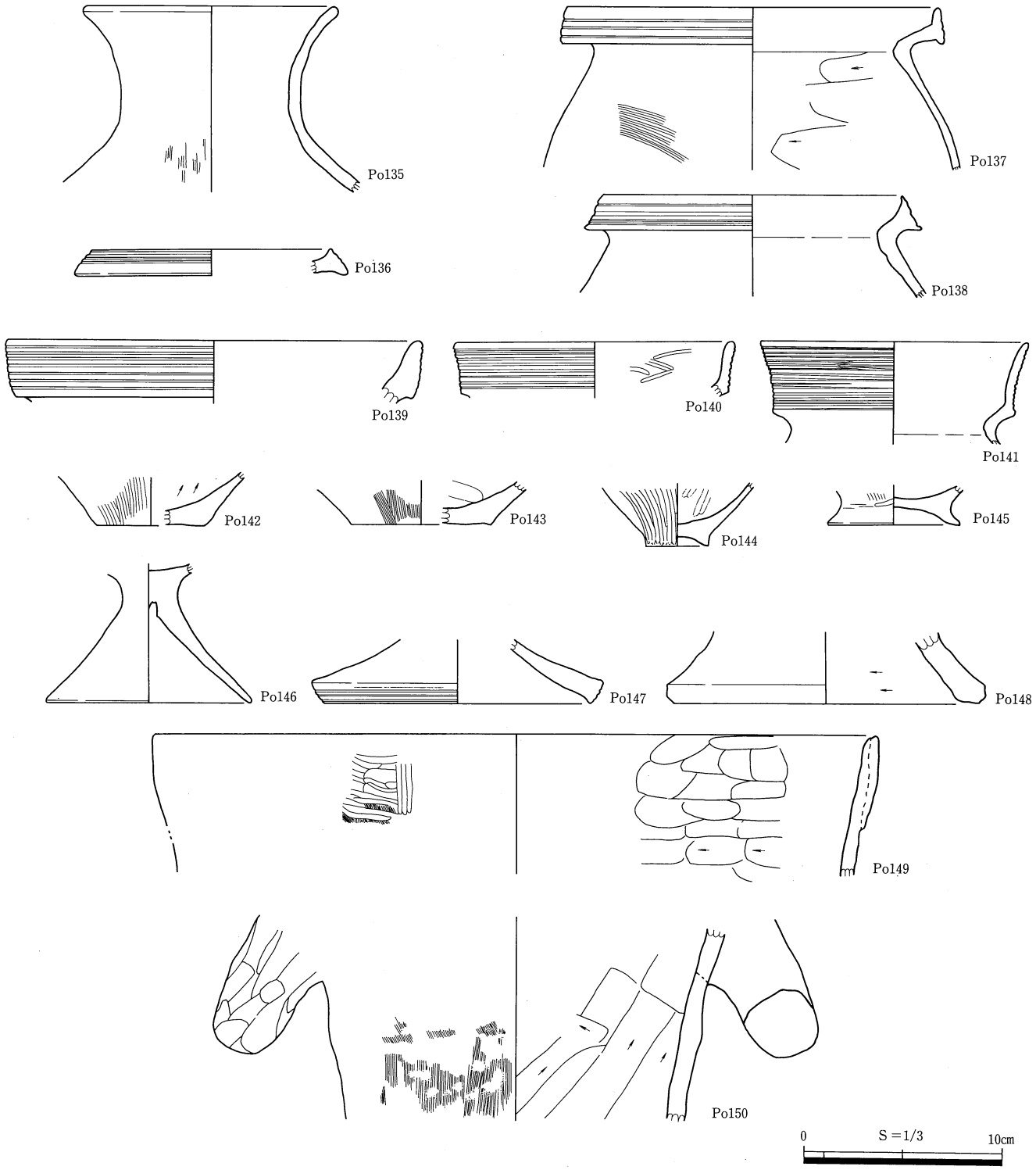
挿図27　ＳＳ02遺構図

遺物出土状況　出土遺物のうち図化できたものには、単純口縁をもつ壺Po135、甕Po136～Po141、底部Po142～Po145、高杯脚部Po146・Po147、脚部Po148、甑Po149・Po150がある。

これらは、西側半分に集中して見られ、いずれも埋土中から出土している。

時　期　埋土中の土器は、岩吉編年II（古）～III（新）期、弥生時代後期前葉～後半にかけてのものと幅があるが、ＳＳ02の時期はこのうちの最も新しい岩吉III（新）期、弥生時代後期後半頃のものとすることができよう。

用　途　用途は不明である。



挿図28　ＳＳ02出土遺物実測図

5．鷲谷口地区土器溜り（挿図29～35、図版6・32～35）

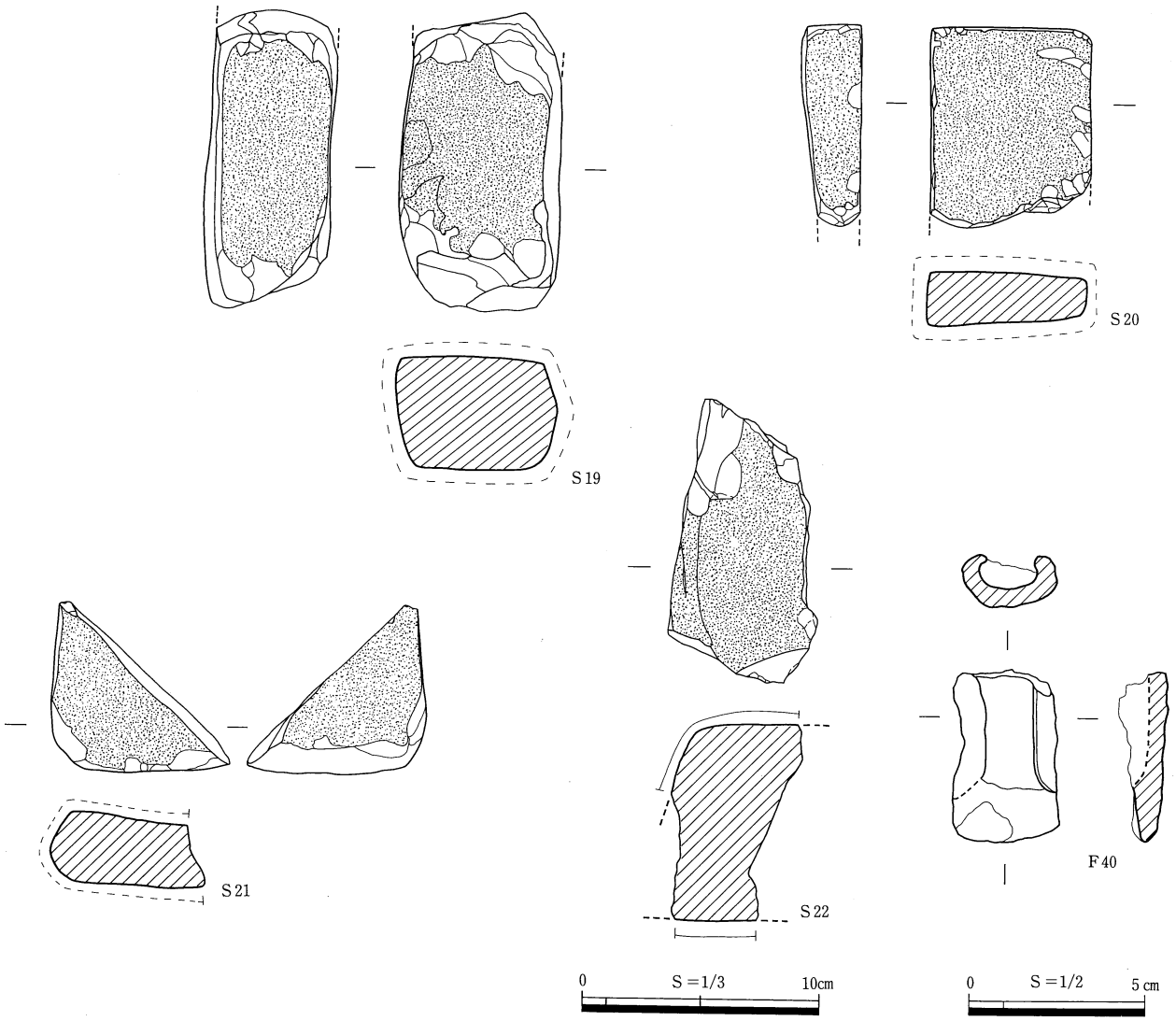
位　　置　鷲谷口地区の最も南東の11F・11G・12F・12Gグリッドにあり、標高14.0～21.0mの南西側に傾斜する急斜面～谷部に位置する。

埋　　土　埋土は27層に分層でき、いずれも二次堆積したものと考えられる。土層を観察すると、黒褐色土と黄褐色土が互層状に堆積しており、谷部への堆積が一次的なものではないことが言える。

遺物出土状況　図化できたものには、複合口縁をもつ壺Po156～Po163、凹線文をもつ壺頸部Po164、直口壺Po165～Po168、小型甕Po170、複合口縁をもつ甕Po171～Po225、「く」字状口縁をもつ甕Po226～Po228、胴部Po229、底部Po230～Po242、高杯Po243～Po250、鼓形器台Po251～Po256、蓋Po257、脚部Po258、低脚杯脚部Po259・Po260、甑Po261～Po263、波佐見焼系椀Po264、砥石S19～S22、袋状鉄斧F40がある。

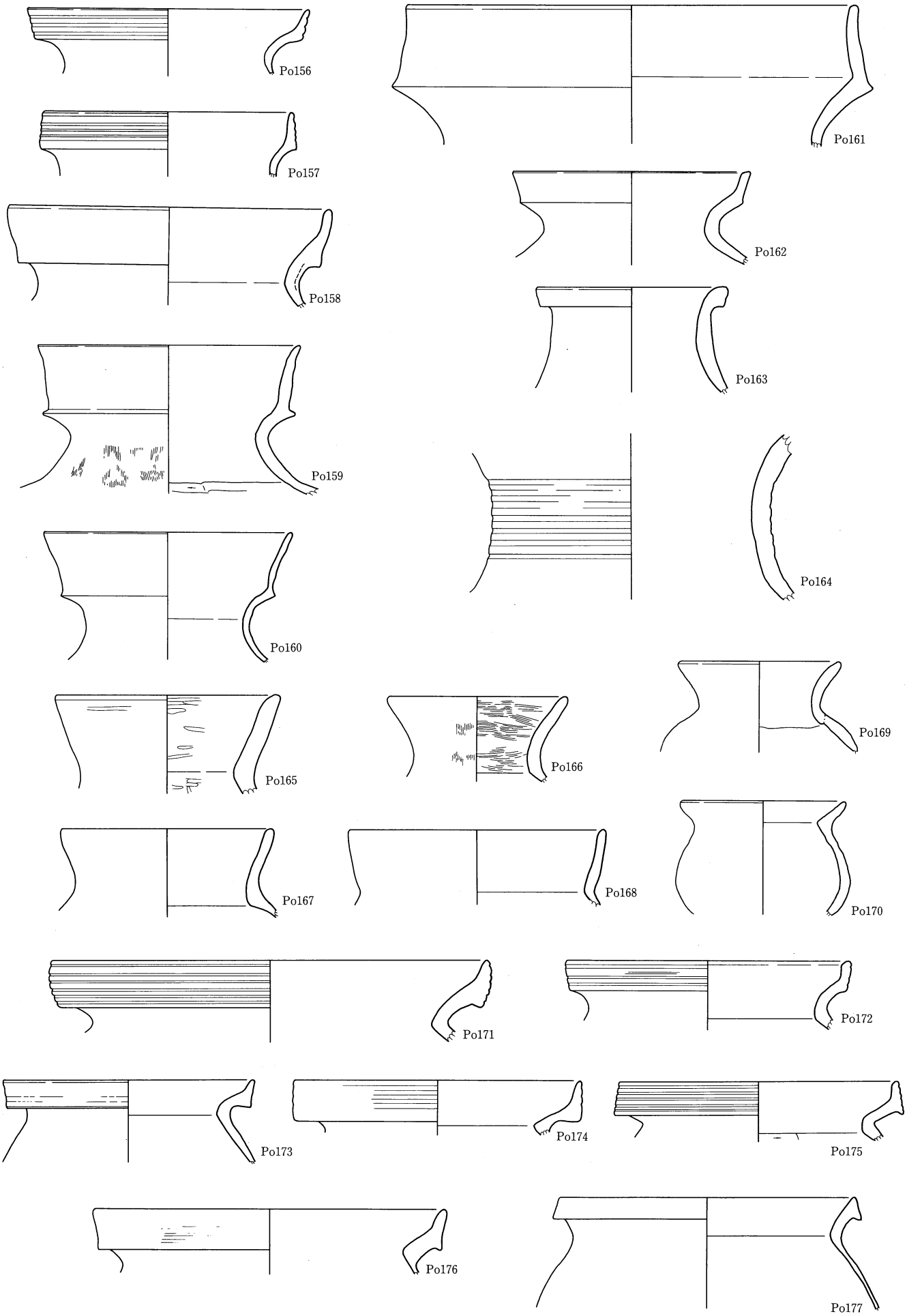
出土位置がわかるものを見ると、遺物のまとまりは大きく2群に分かれる。東寄りの一群からは、Po169・175・188・192・195・196・213・217・228・244・247・252・257・263が出土している。

西寄りの一群からは、Po156・158・159・160・165・167・168・176・178・180・182・185・186・187・189・198・200・205～209・211・214～216・218・220・221・224・225・227・230～234・236・238・239・242・243・245・246・248・249・251・253～256・258～260・262が出土している。

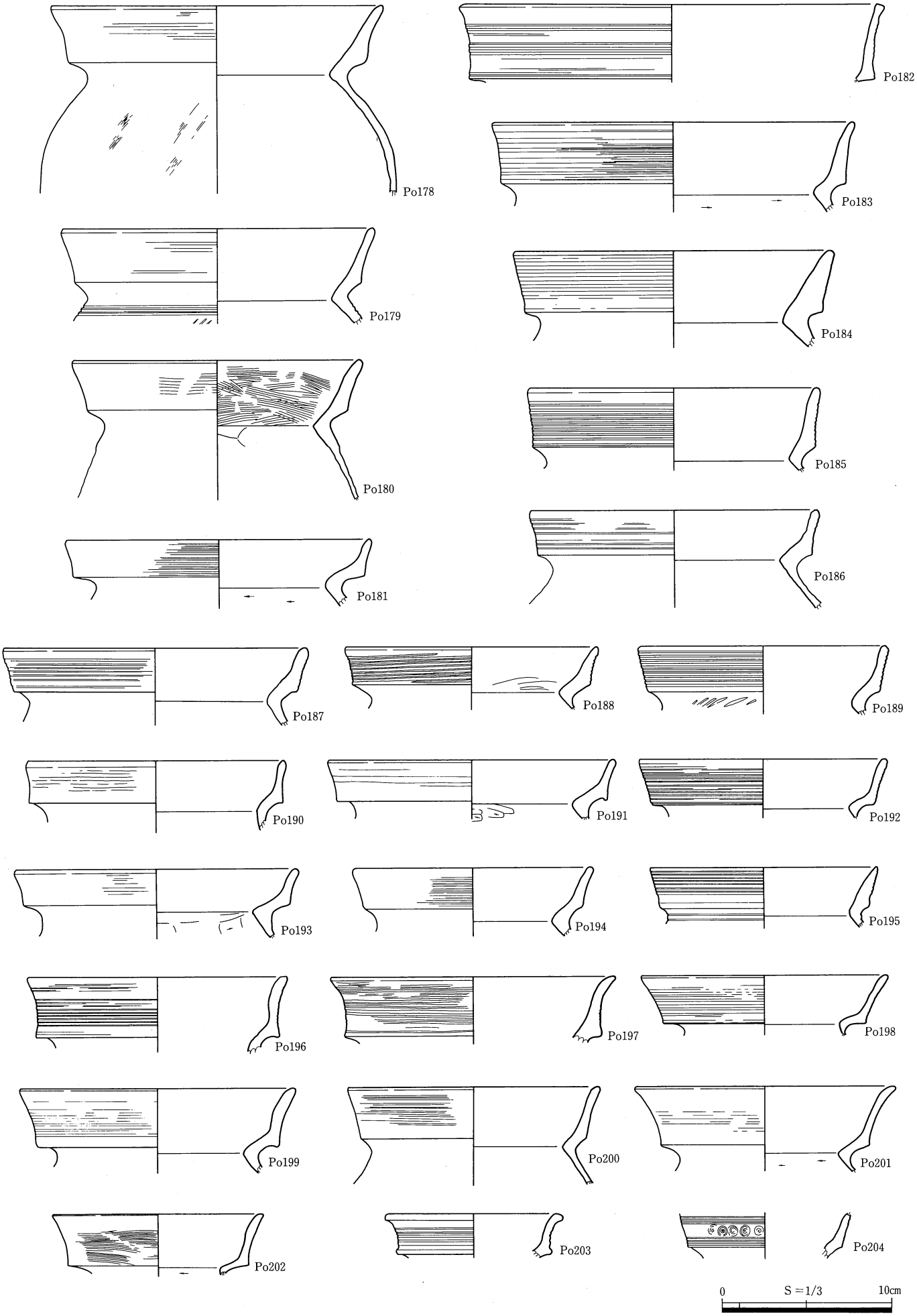


挿図29　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(1)

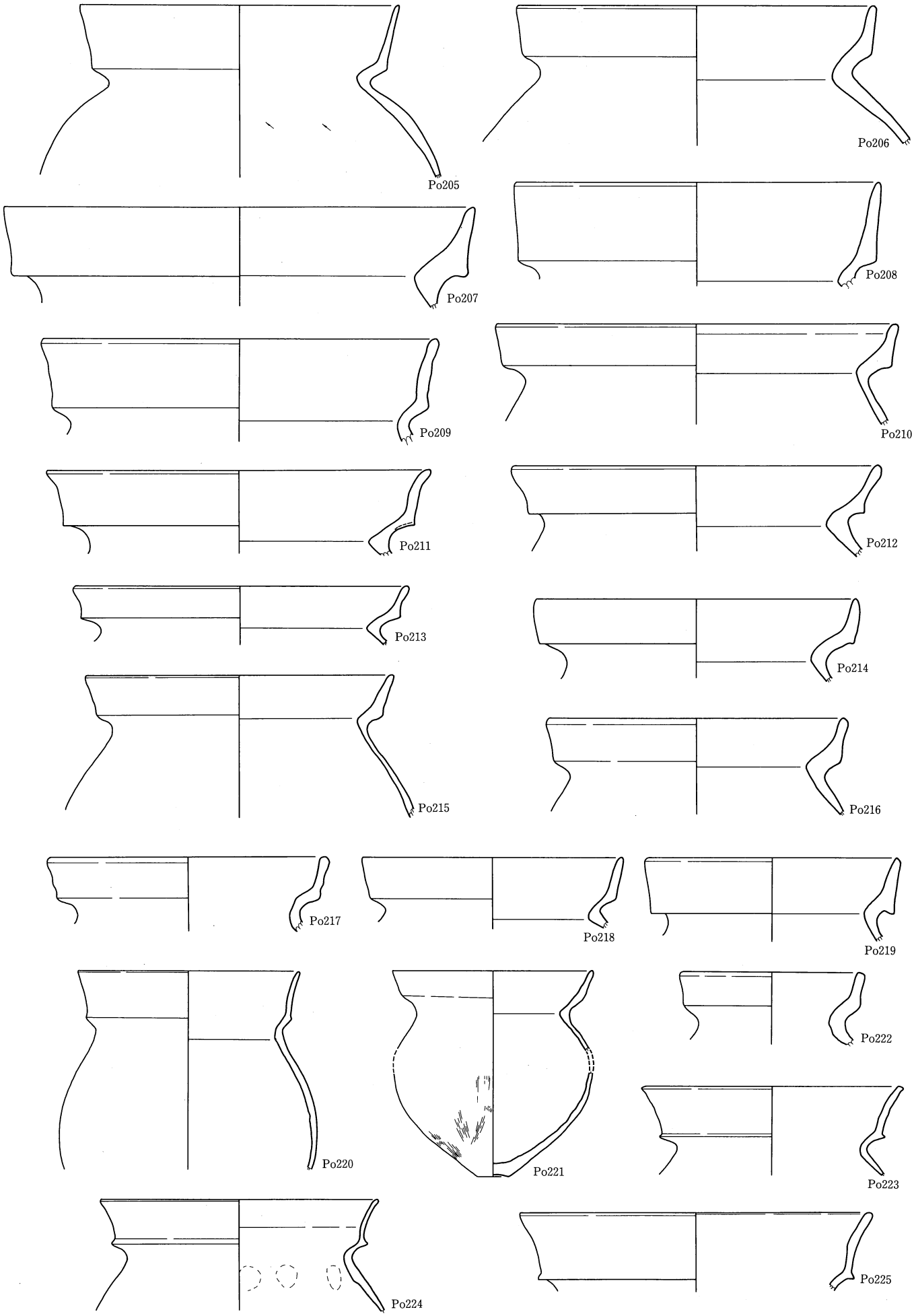
挿図30　鷲谷地区土器溜り周辺地形図



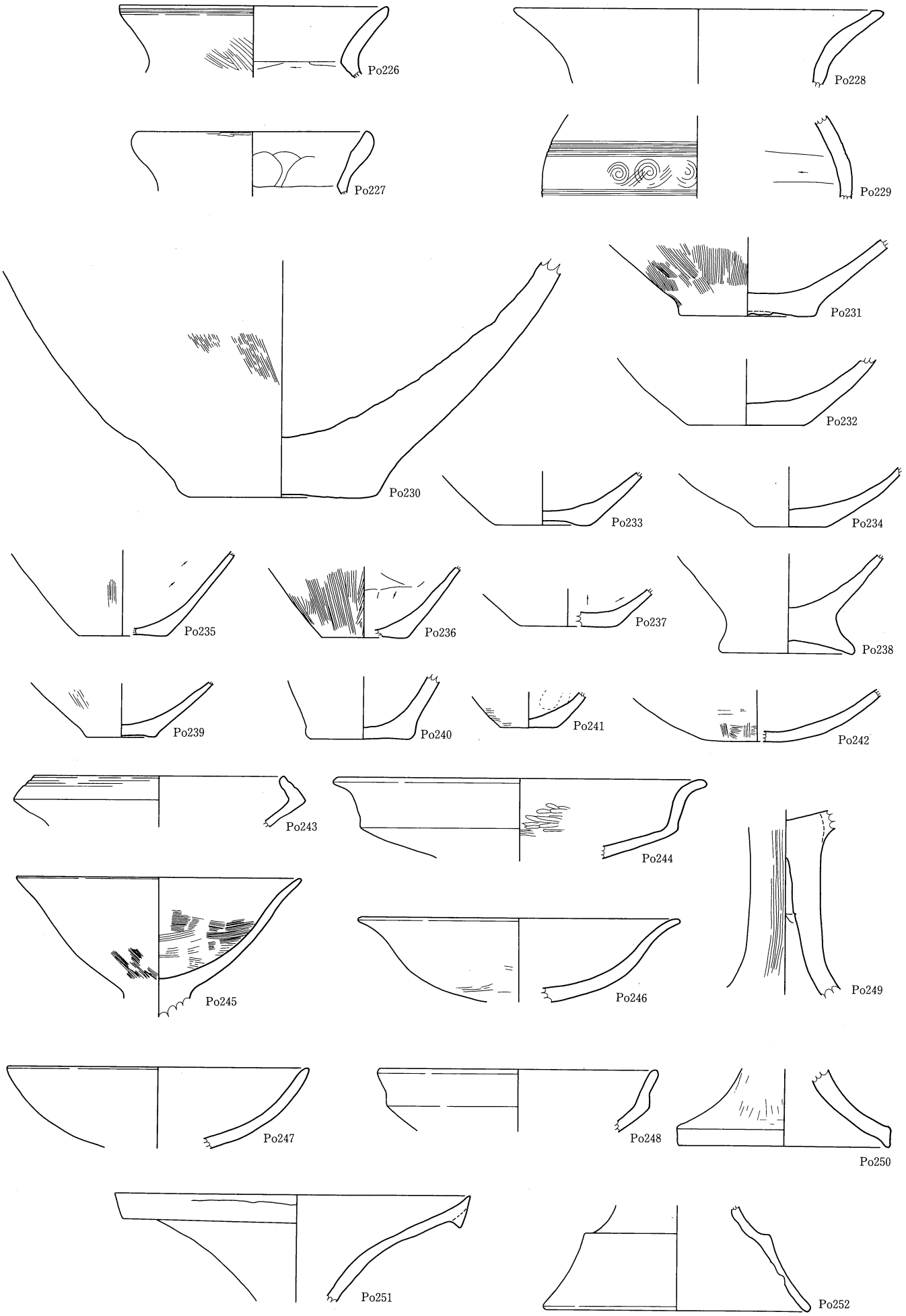
挿図31　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(2)



挿図32　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(3)



挿図33　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(4)

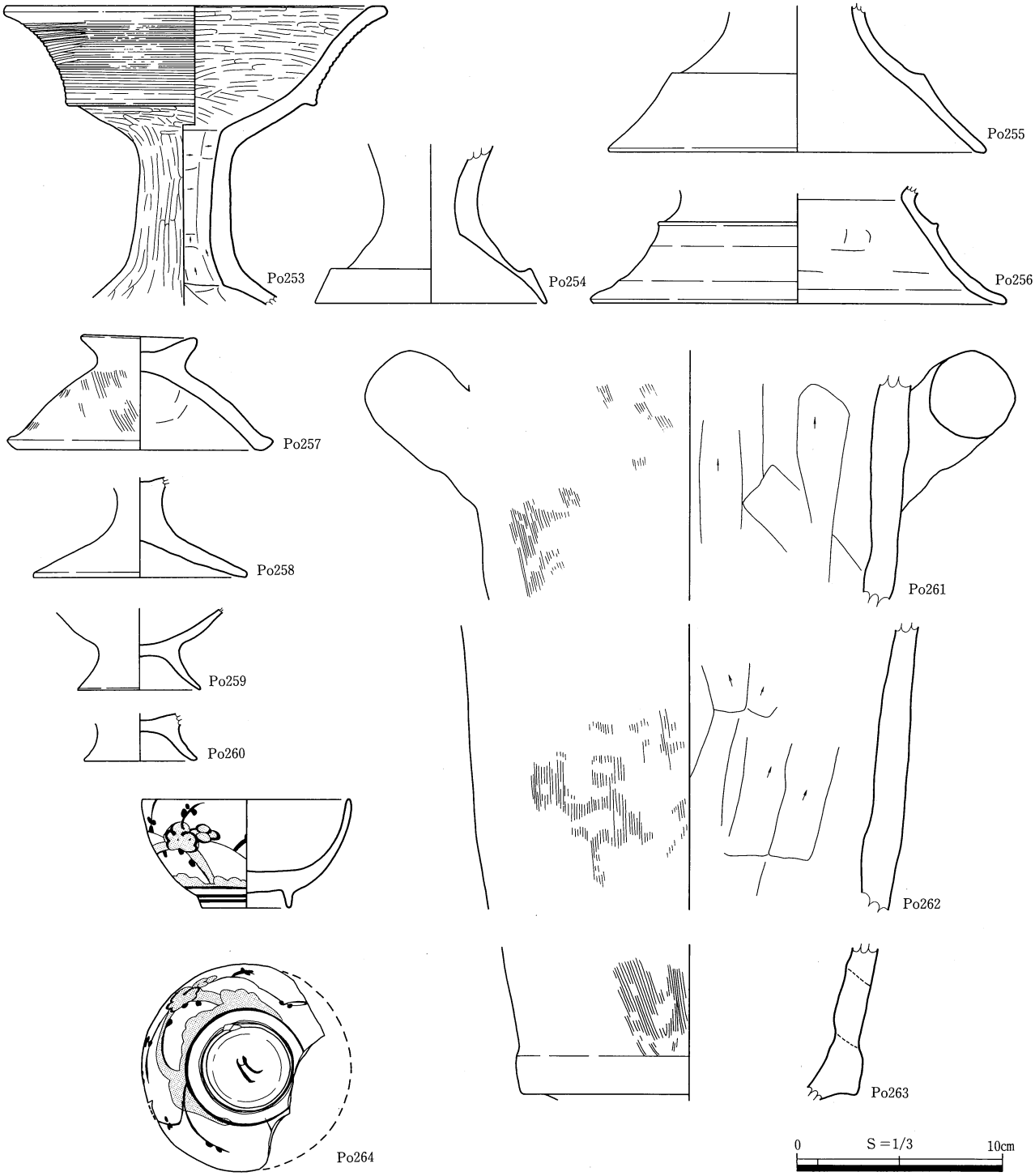


挿図34　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(5)

0　S＝1/3　10cm

時　期　これらの遺物は、Po264 を除けば岩吉編年II（新）期～V（新）期、弥生時代後期前半～古墳時代前期のものと考えられる。これらは、上方の鷲谷奥地区A区から転落したものと考えられる。今回の調査では鷲谷奥地区には岩吉II（新）期に遡る遺構は見当たらなかったが、本来鷲谷奥地区には岩吉II（新）期の遺構があったものと考えられる。なお、Po264は18～19世紀のものと考えられる。

また、図化できなかったが、縄文土器も出土しており、周辺にはこの時期の遺構の存在も推定される。



挿図35　鷲谷口地区土器溜り出土遺物実測図(6)

6．鷲谷口地区遺構外遺物（挿図36、図版35）

ここでは、鷲谷口地区の遺構に伴わない遺物を一括して述べる事とする。

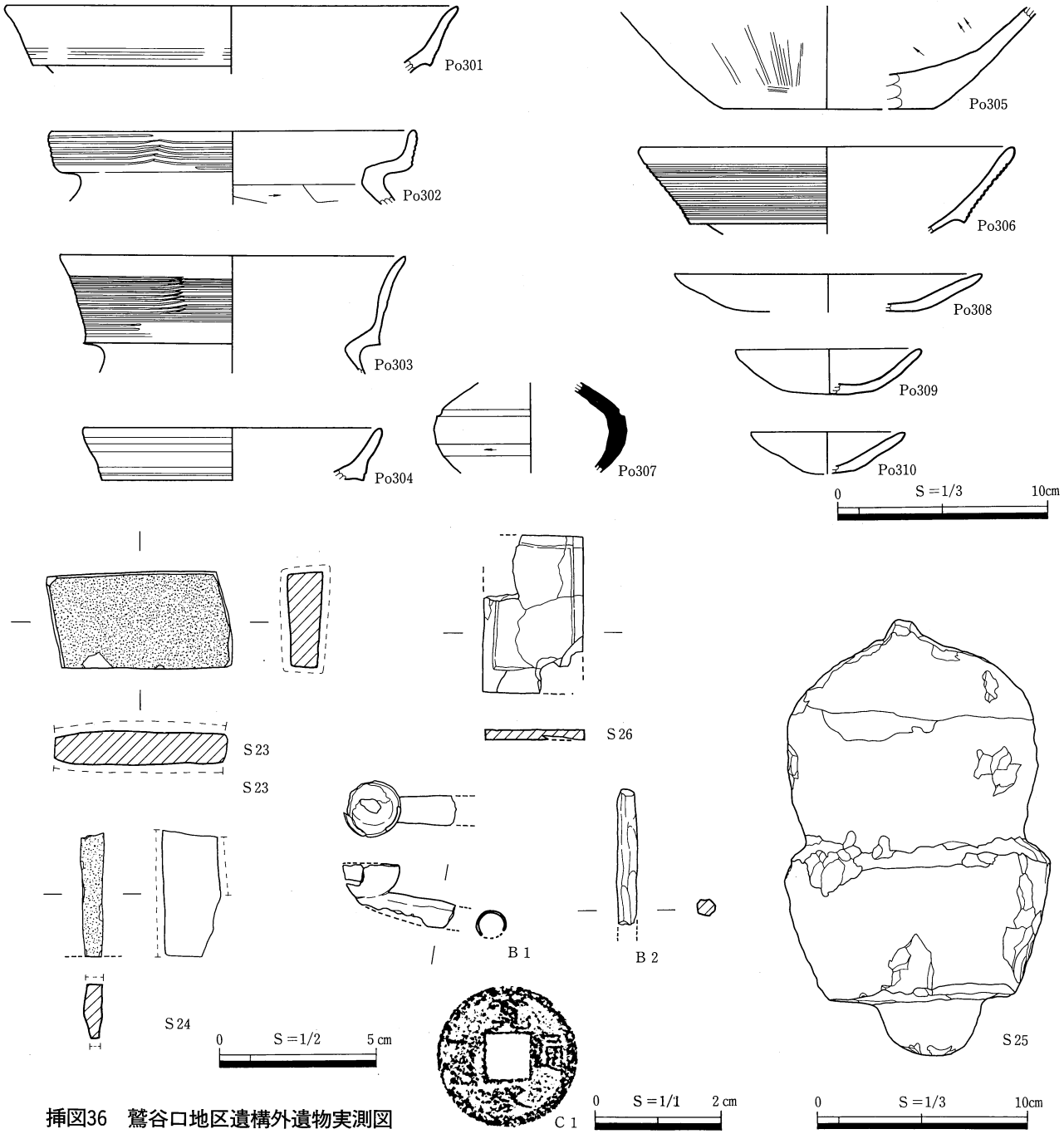
図化できたものには、弥生土器甕Po301～Po304、底部Po305、鼓形器台Po306、須恵器甑Po307、土師質皿Po308～Po310、砥石Ｓ23・Ｓ24、五輪塔空風輪Ｓ25、硯Ｓ26、煙管雁首Ｂ１、不明青銅器Ｂ２、寛永通寶Ｃ１がある。

弥生土器のうちPo302は岩吉編年Ⅲ（古）期、Po301・Po304～Po306は岩吉編年Ⅲ（新）期、Po303は岩吉編年Ⅳ期に並行するものと考えられ、鷲谷口地区の遺構とほぼ同時期のものである。

甑Po307は古墳時代後期のものと考えられ、後述する倉見８・９号墳とほぼ同時期と考えられる。

土師質皿は、中世末頃のものと考えられ、ＳＫ01とほぼ同時期のものと考えられる。

砥石Ｓ23・Ｓ24、硯Ｓ26、煙管Ｂ１、不明青銅器Ｂ２は、10Ｅグリッド付近で出土している。いずれも近世頃のものと考えられる。



挿図36　鷲谷口地区遺構外遺物実測図

第３節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ａ区の概要

位　　置　鷲谷奥地区は標高12m～32mの南北方向に延びる狭い丘陵上～斜面にかけての地区で、さらに、地形的特徴からＡ区・Ｂ区に分けた。

Ａ区は、標高27m～32mの丘陵上～西側斜面にかけての地区である。

遺　　構　この地区で検出した遺構は、鷲谷口地区同様弥生時代後期～中世にかけてのものがほとんどで、竪穴住居跡７基、貯蔵穴と考えられる袋状土坑３基、不明土壙１基、溝状遺構５基、土塁状遺構１基、古墳１基である。このうち、古墳については倉見古墳群に属するため、章を改めて述べる事とする。

竪穴住居跡（ＳＩ04～ＳＩ10）は弥生時代後期～古墳時代前期のもので、以前に調査された西桂見墳丘墓・土壙墓群とほぼ同時期のものである。この時期には屋外貯蔵穴（ＳＫ04）・屋内貯蔵穴（ＳＫ03？・06）が併存している。

土塁状遺構は、時期は不明であるが、この地区の遺構の中では最も時期が下るものである。部分的な検出であったが、この尾根上に累々と築かれたものと考えられる。

第４節　西桂見遺跡鷲谷地区Ａ区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＳＩ04（挿図37・38、図版７・35）

位　　置　鷲谷奥地区Ａ区の最も北側の14Ｂグリッドにあり、標高30.75mの狭い尾根上に位置する。南側約５ｍには倉見７号墳がある。

形　　態　遺存状況は悪く東側半分以上は流失しているが、平面形は、遺存する壁の状態から円形または隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.37m以上、南北3.98m以上を測り、床面積は7.7 ㎡以上である。壁高は、最も遺存状態のよい南壁で最大0.57mを測る。

壁溝は、南壁際でわずかに検出されたに過ぎない。幅18cm、深さ６cm、断面「Ｕ」字状を呈す。

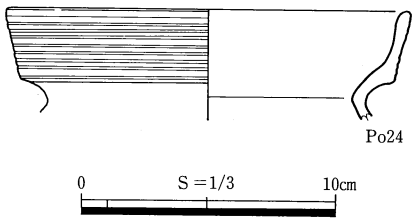
検出された主柱穴はＰ１・Ｐ２の２個であるが、本来は４個あったものと考えられる。それぞれの規模は、Ｐ１（33×25－56）cm、Ｐ２（45×30－56）cmを測る。

主柱穴間距離は、2.4mである。

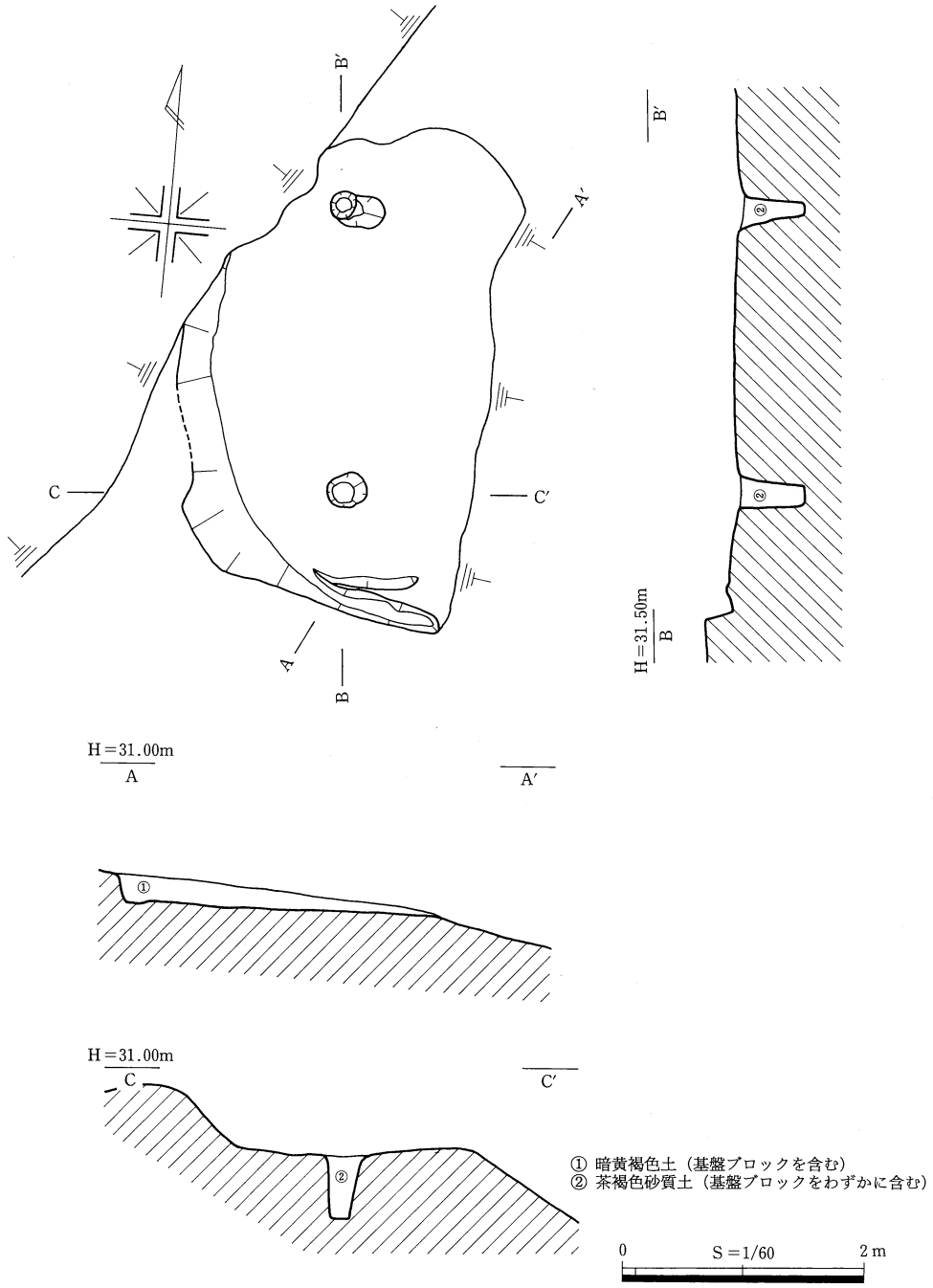
埋　　土　埋土は暗黄褐色土１層である。

遺　　物　図化できたものには、床面直上から出土した甕Po24のみである。

時　　期　床面出土の土器から、岩吉編年Ⅲ（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図37　ＳＩ04出土遺物実測図



挿図38　ＳＩ04遺構図

ＳＩ05（挿図39・40、図版７・８・35）

位　　置　　鷲谷奥地区Ａ区のほぼ中央の13Ｄ・Ｅグリッド、標高約31～32mに位置する。丘陵上の平坦な地に孤立した形で存在する。北側にはＳＤ11、東側には用途不明であるが中・近世のものと思われる土塁状遺構がある。西側は急な斜面となっている。

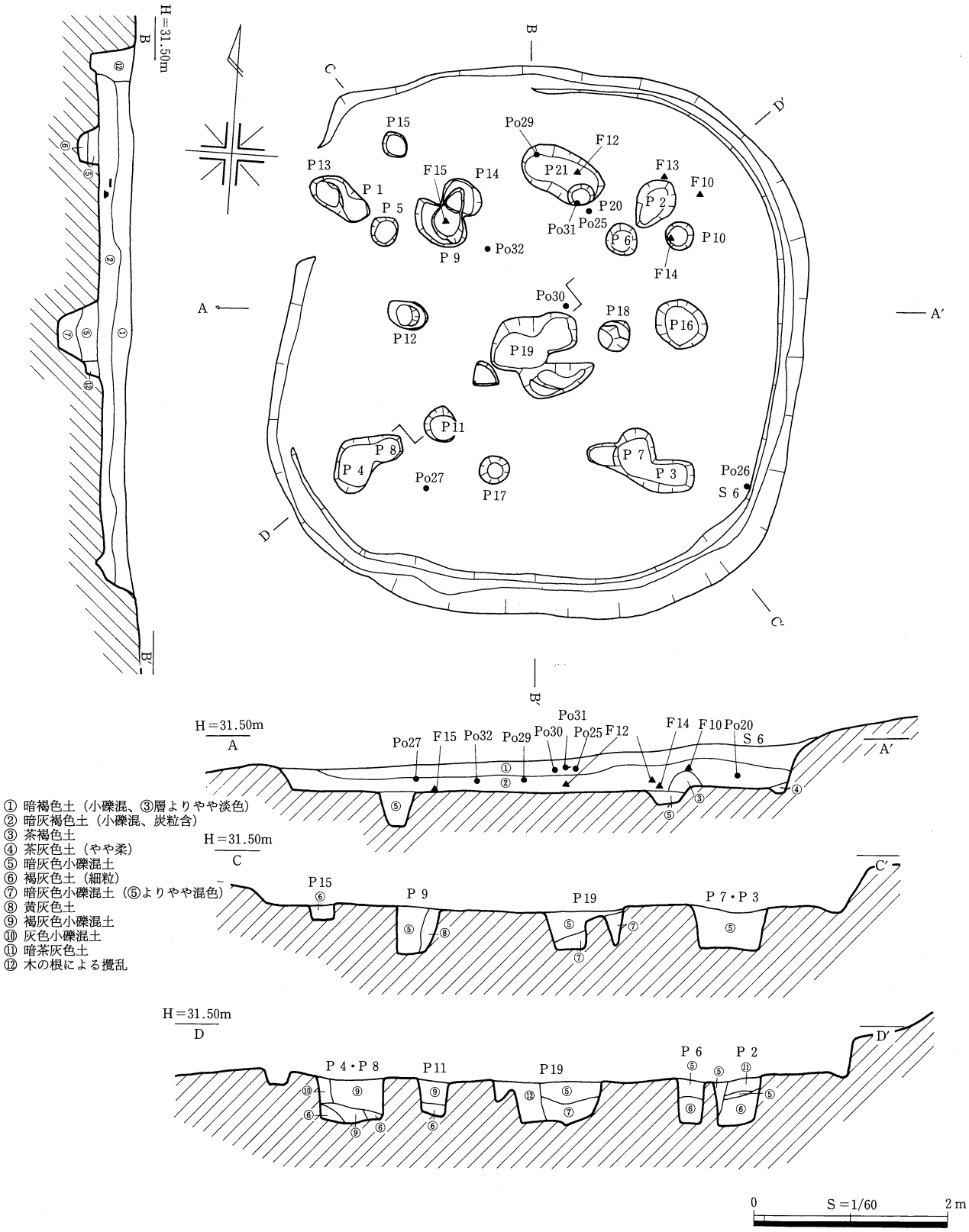
形　　態　　遺存状態は比較的良く、壁はほぼ全周する。平面形は隅丸方形を呈す。主柱穴は４本と考えられるが、１か所に３個以上のピットが見られることから、３回以上の建て替えが考えられる。同一床面上でピットを検出したため、それぞれの床面規模は不明であるが、最も新しいものは、南北5.3m、東西5.2m、床面積は23.6㎡を測る。

残存壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.60mである。

壁溝は西側1/3を除く部分で検出されたが、本来は全周していたものと考えられる。断面は逆台形を呈し、幅は6～20cm、深さは4～6cmである。

時期の前後は不明であるが、小さいものからＰ３・９・10・11を主柱穴とするものをＳＩ05－１、同じくＰ５・６・７・８をＳＩ05－２、Ｐ１・２・３・４をＳＩ05－３とし、以下に記述する。

なお、Ｐ３は横長のピットで、ＳＩ05－１、－３が共有していたものと判断した。



挿図39　ＳＩ05遺構図

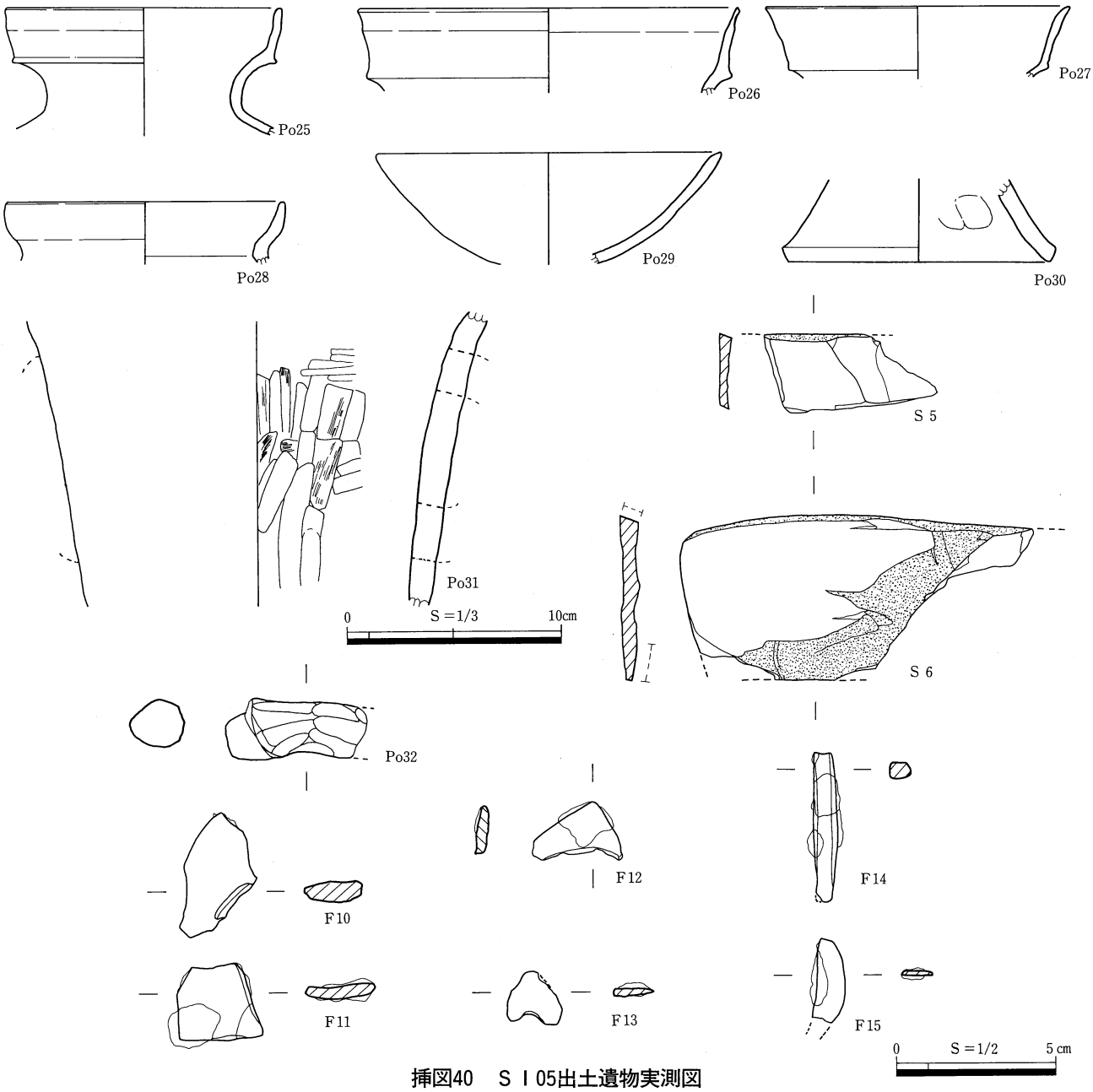
ＳＩ05-1　主柱穴の規模は上述順に（57×35－41）cm、（45×34－47）cm、（31×30－35）cm、（38×32－36）cmで、柱穴間距離はＰ９～Ｐ10が2.46m、Ｐ10～Ｐ３が2.32m、Ｐ３～Ｐ11が2.42m、Ｐ11～Ｐ９が2.16mである。

ＳＩ05-2　主柱穴の規模は上述順に（29×31－44）cm、（34×34－47）cm、（54×42－36）cm、（34×34－42）cmで、柱穴間距離はＰ５～Ｐ６が2.30m、Ｐ６～Ｐ７が2.27m、Ｐ７～Ｐ８が2.60m、Ｐ８～Ｐ５が2.30mである。

ＳＩ05-3　主柱穴の規模は上述順に（49×33－43）cm、（60×41－52）cm、（57×35－41）cm、（55×40－49）cmで、柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が3.2m、Ｐ２～Ｐ３が2.9m、Ｐ３～Ｐ４が3.3m、Ｐ４～Ｐ１が2.8mである。

中央ピットをはさんで東西に、（35×32－27）cmを測るＰ18、（43×31－40）cmを測るＰ12があり、これらはＳＩ05－１に伴う棟持柱と考えられる。

また、Ｐ２～Ｐ３間には（58×47－17）cmを測るＰ16、Ｐ３～Ｐ４間には（30×28－35）cmを測るＰ19があり、これらは補助柱穴と考えられる。



挿図40　ＳＩ05出土遺物実測図

中央ピット　中央ピットＰ19の平面形は、(54×60－45) cmと (42×42－45) cmの円形のピットを合わせた形となっている。建て替えの際に、中央ピットも掘り替えられたものと考えられる。

この他にも床面上でピットが検出されているが、性格は不明である。

埋　土　埋土は３層に分層できるが、基本的には２層である。全体的に小礫を含み、黒ずんでいる。

遺物出土状況　出土遺物には、図化できたものに甕Po25～Po28、高杯Po29・Po30、甑Po31、砥Ｓ５・６、鉄片Ｆ10～15がある。このうち鉄片は床面から出土し、その他は埋土中・下層からの出土である。

鉄片が多数出土しているが、いずれも製品とは考えられないものである。

時　期　出土遺物より、岩吉編年Ｖ（古）期・弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃のものと考えられる。

ＳＩ05－１、２、３の明確な前後関係は不明であるが、ＳＩ05－２と－３で重複する主柱穴Ｐ４がＰ８を切っていることから、ＳＩ05－２が－３に先行すると考えることができる。また、西桂見遺跡の他の住居跡は、おおむね拡張傾向を示していることから、ＳＩ05－１→－２→－３の順で建て替えが行われたものと考えられる。

ＳＩ06（挿図41・42、図版８・35）

位　置　鷲谷奥地区Ａ区南側の14Ｆグリッドにあり、標高約30mの尾根上のやや広くなった平坦面に位置する。北側約４mにはＳＩ08、南側約７mにはＳＩ09がある。

形　態　遺存状況は悪く、上部は後世の削平を受けて周壁が失われているものと考えられ、ピット及び壁溝のみ遺存している。床面上に多数のピットが検出されているが、並びを考えると少なくとも２回の建て替えがあったものと考えられ、それぞれＳＩ06－１、ＳＩ06－２とした。

ＳＩ06-1　平面形は、遺存する壁溝の状態から楕円形または多角形を呈すものと考えられる。規模は、東西6.05m、南北6.73mを測り、床面積は約32.2m²である。壁高は、不明である。

壁溝は、東側・西側で途切れる部分があるものの、ほぼ全周していたものと考えられる。幅13～26cm、深さ８～15cm、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴はＰ１～Ｐ７と考えられ、それぞれの規模は、Ｐ１（35×30－45）cm、Ｐ２（69×65－58）cm、Ｐ３（31×30－41）cm、Ｐ４（40×34－28）cm、Ｐ５（50×40－32）cm、Ｐ６（56×51－58）cm、Ｐ７（56×52－42）cmを測る。

主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に、2.1m、2.2m、2.8m、2.4m、2.5m、2.4m、2.4mである。

ＳＩ06-2　ＳＩ06－２は、06－１の内側で検出された６個のピットから存在を判断した。平面形・規模とも不明である。

主柱穴はＰ８～Ｐ13で、それぞれの規模は、Ｐ８（28×28－70）cm、Ｐ９（35×27－67）cm、Ｐ10（52×40－42）cm、Ｐ11（100×69－49）cm、Ｐ12（63×57－47）cm、Ｐ13（69×67－61）cmを測る。

主柱穴間距離は、Ｐ８～Ｐ９間から順に、1.9m、3.0m、2.2m、2.5m、2.9m、2.8mである。

中央ピットは不整形に二段に掘り込まれたＰ14で、上縁部（156×120－11）cm、中央部（84×70－29）cmを測る。中央ピットから外側に向かって２本の溝が延びている。北側のものは、長さ２m、幅16cm、深さ５cmを測り、Ｐ２によって切られている。南東側のものは、長さ2.16m、幅22～32cm、深さ15～20cmを測る。

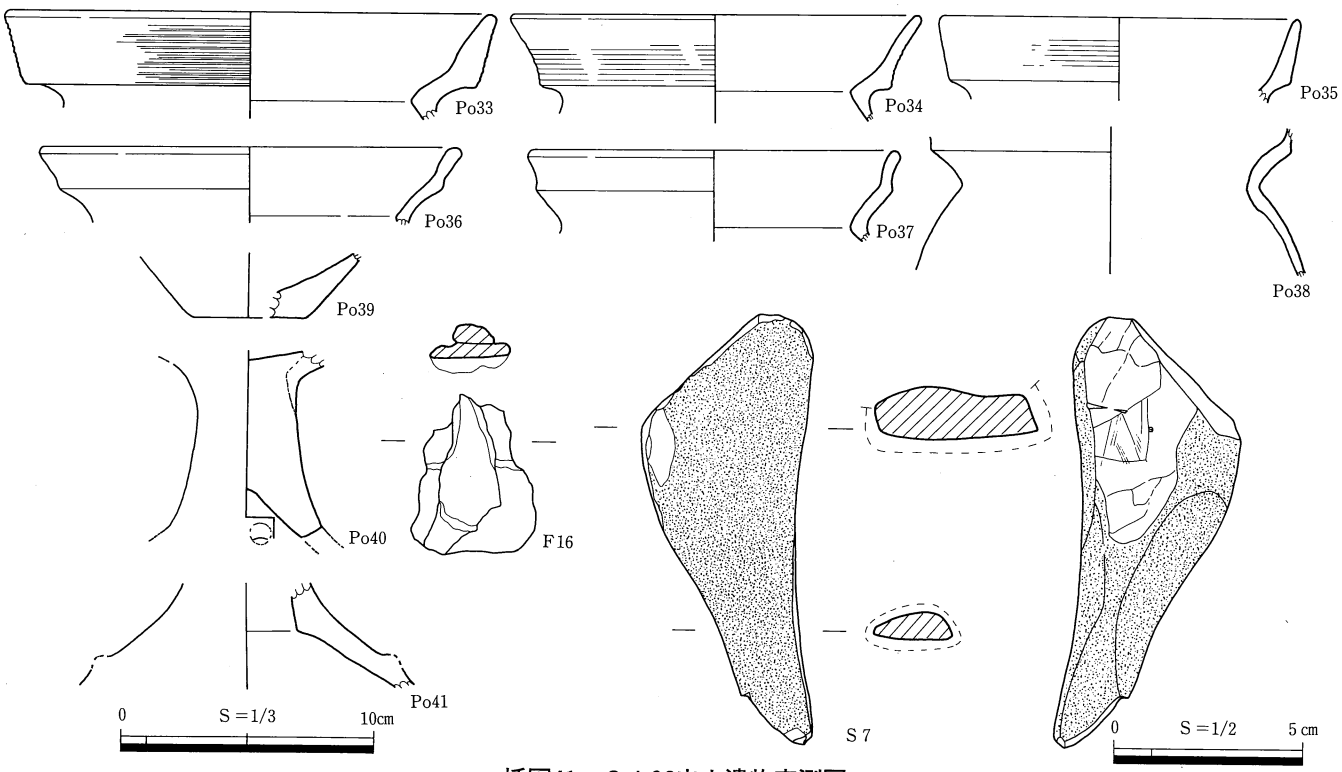
その他に、床面上で多数のピットが検出されたが、用途は不明である。しかし、Ｐ１・Ｐ８・Ｐ10の周辺には明らかに主柱穴と考えられるものがあり、ＳＩ06－１、06－２以外にも上記の主柱穴を利用した建て替えの住居があったものと考えられる。

埋　　土　　埋土は暗褐色土１層である。

遺物出土状況　　出土遺物には、甕Po33～Po38、底部Po39、高杯Po40、鼓形器台Po41、砥石Ｓ７、鉄片Ｆ16がある。このうち、床面からは、Po１、Po３、Po９が出土している。また、Ｐ６内からPo６が出土している。その他のものは、埋土下層中からの出土である。

Ｆ16は３～４個の鉄片が付着したもので、いずれも製品とは考えられない。

時　　期　　床面出土の土器は、岩吉編年Ⅲ（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。ＳＩ06－１、06－２の確かな先後関係は不明であるが、中央ピットから延びる溝のうち、北側のものがＳＩ06－１のピットによって切られている事から、この溝がこの住居のうちの先行するものの溝と考えると、ＳＩ06－２→ＳＩ06－１に拡張されたものと考えられる。この場合、ＳＩ06－１は上記の時期のものと考えられ、ＳＩ06－２は若干遡るものと考えられる。



挿図41　ＳＩ06出土遺物実測図

ＳＩ07・ＳＫ06（挿図43～46、図版８・９・35・36）

位　　置　　鷲谷奥地区Ａ区西側の14Ｆグリッドにあり、標高約30mの尾根上のやや広くなった平坦面の西側に位置する。北東約３mにはＳＩ08、南西側約３mにはＳＩ06がある。

形　　態　　遺存状況は悪く、上部は後世の削平を受けて周壁が失われているものと考えられ、ピット及び壁溝のみ遺存している。壁溝の遺存状態から考えると、平面方形ないし長方形を呈していたものと考えられる。規模は西側を復元すると、東西2.6m、南北3.0m程度となり、床面積約７㎡と推定される。

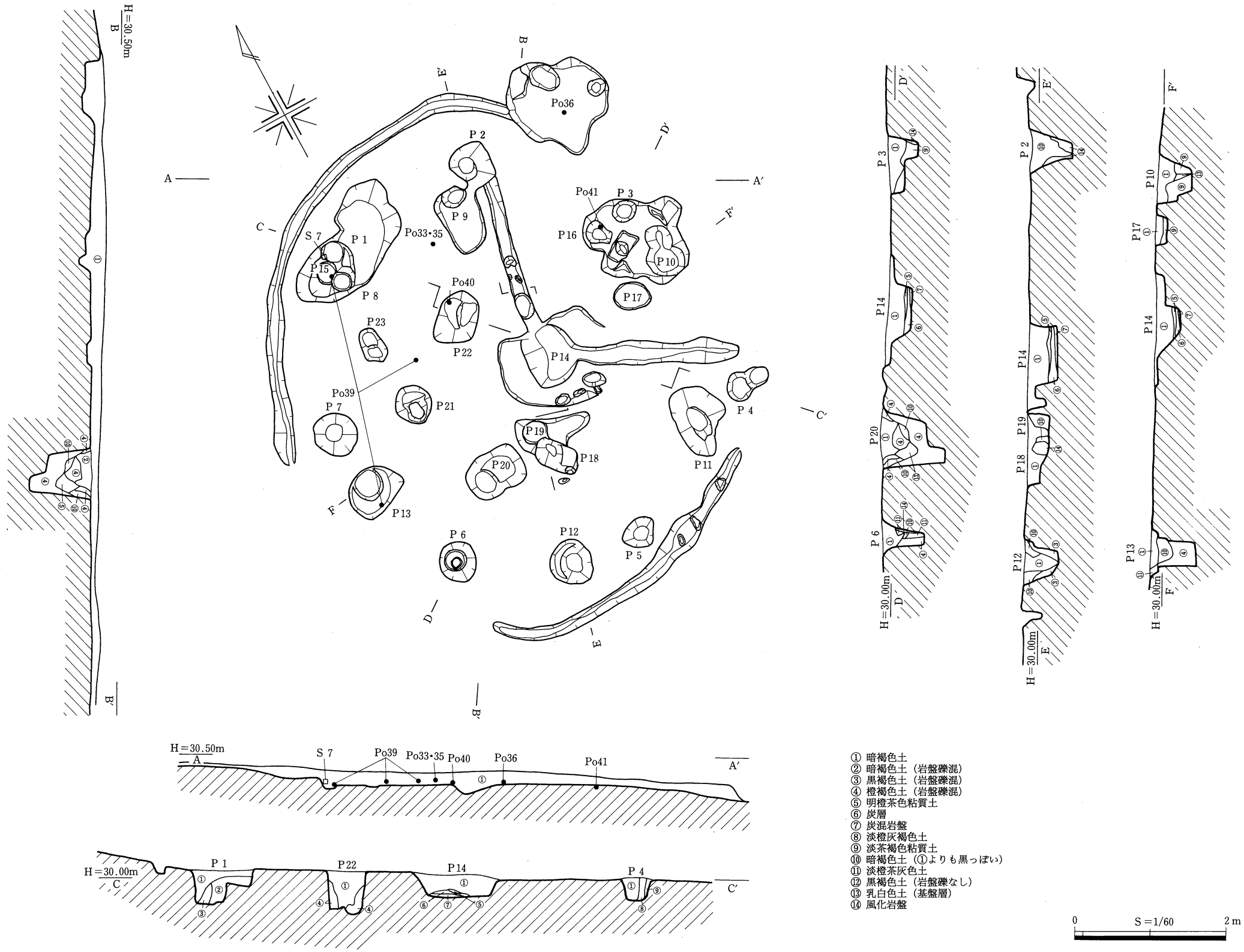
壁溝は、東側で部分的に検出された。幅13～22cm、深さ６～15cm、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、床面上で４個のピットを検出した。それぞれの規模は、Ｐ１（46×43－56）cm、Ｐ２（35×35－31）cm、Ｐ３（41×27－42）cm、Ｐ４（34×21－19）cmを測る。これらの用途は不明である。

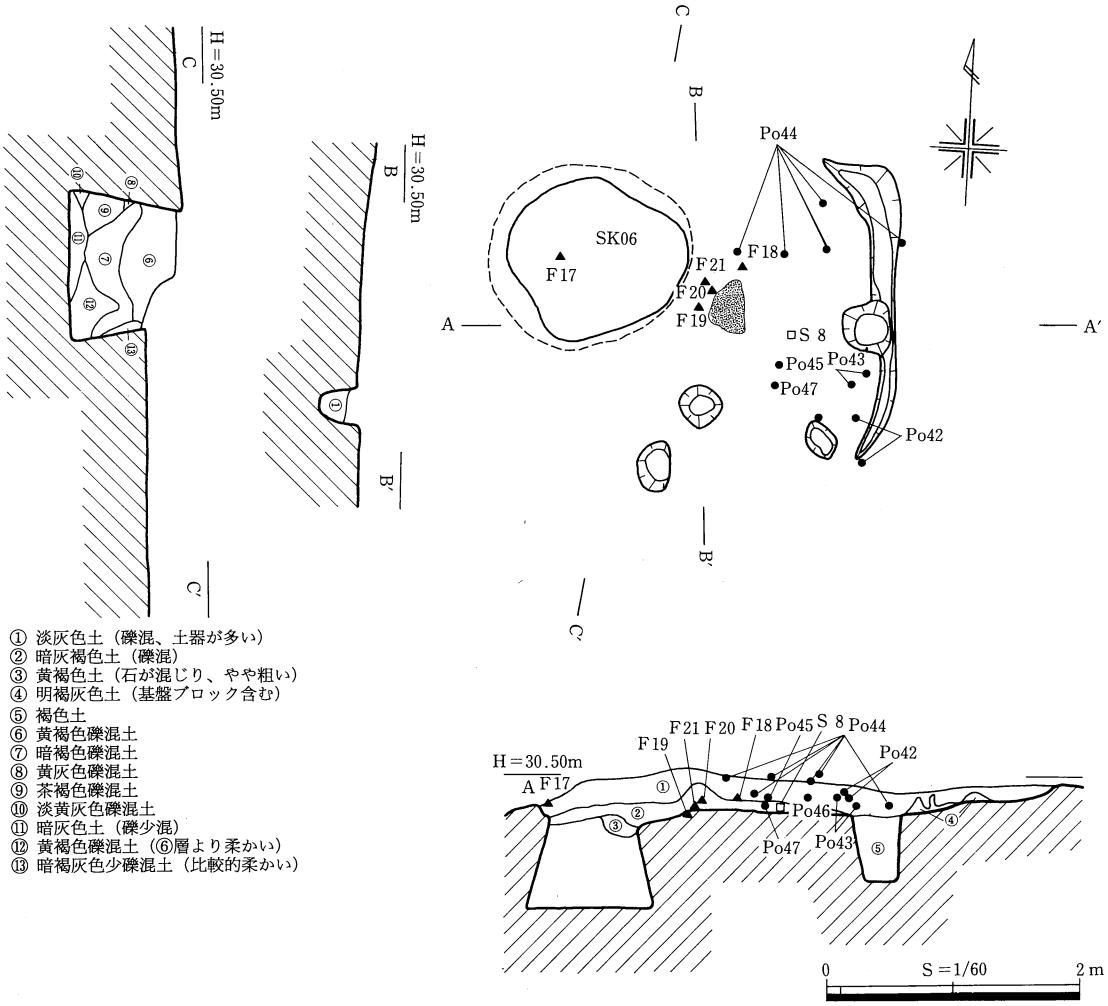
床面ほぼ中央部で、焼土面を１カ所検出した。

埋　　土　　埋土は、２層に分層できた。

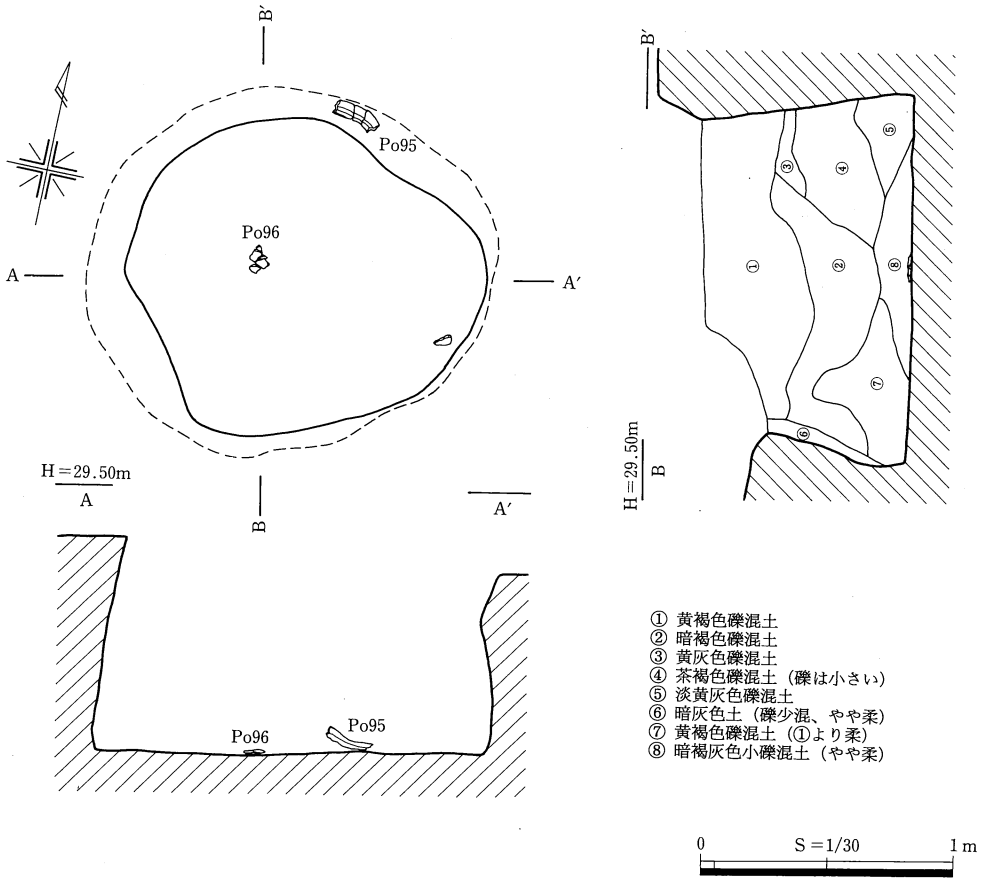
ＳＫ06　　床面南西側でＳＫ06が検出された。遺存状況は比較的よく、平面は上縁部不整楕円形、底面楕円



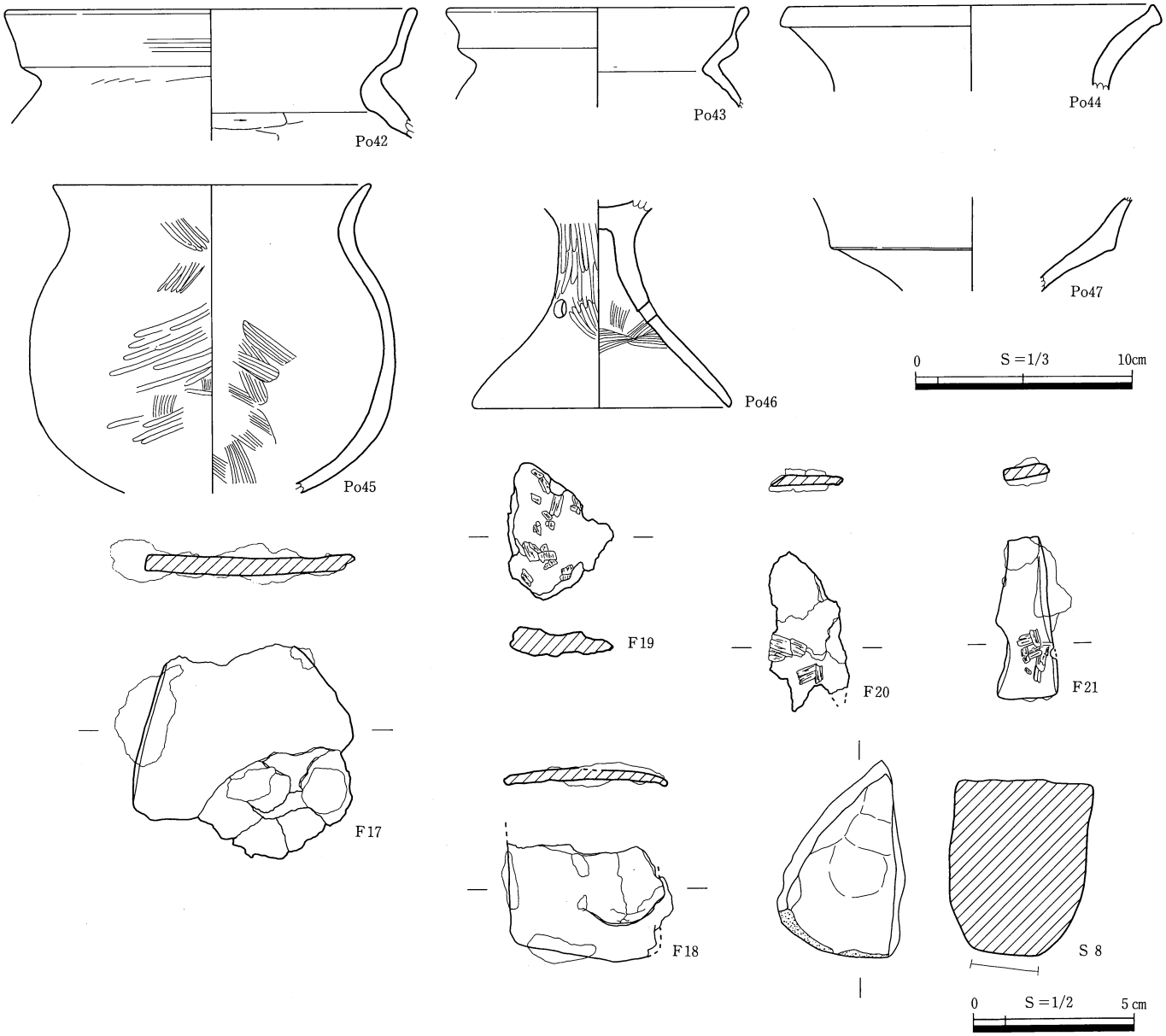
挿図42　ＳＩ06遺構図



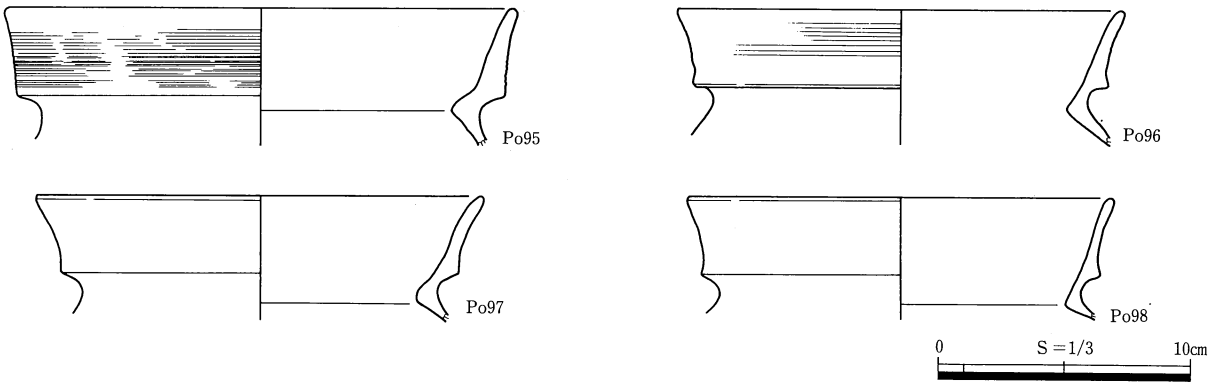
挿図43　ＳＩ07遺構図



挿図44　ＳＫ06遺構図



挿図45　ＳＩ07出土遺物実測図



挿図46　ＳＫ06出土遺物実測図

形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.45m、短軸1.27m、基底部で長軸1.61m、短軸1.46m、深さ1.03mを測る。

埋土は、８層に分層できた。いずれも基盤礫を含むもので、壁が崩落しながら堆積したものと考えられる。

形態上の特徴から及び検出位置から、ＳＫ06はこの住居に伴う屋内貯蔵穴と考えられる。

遺物出土状況　出土遺物には、図化できたものには甕Po42～Po45、高杯Po46、鼓形器台Po47、鉄片Ｆ17～Ｆ21、敲石Ｓ８がある。

いずれも埋土下層からの出土である。鉄片は、板状を呈すもので、Ｆ19～Ｆ21には炭化物が付着している。

ＳＫ06からは甕Po95～Po98が出土している。このうち、底面上ではPo95が北側壁際で、Po96が中央部で出土している。その他のものは、埋土中からの出土である。

時　期　埋土下層出土の土器及びＳＫ06出土土器から、ＳＩ07は、岩吉編年Ⅲ（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

ＳＩ08・ＳＫ03（挿図47～51、図版９・36）

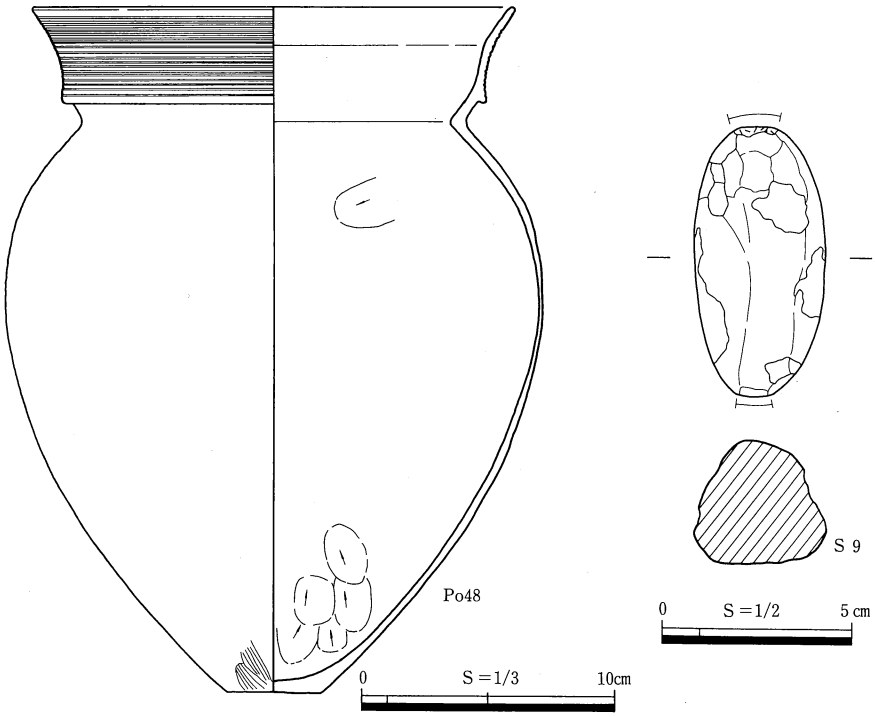
位　置　鷲谷奥地区Ａ区南側の14Ｅグリッドにあり、標高約30mの尾根上のやや広くなった平坦面の北側に位置する。南側約４mにはＳＩ06、南東側約２mにはＳＫ04がある。

形　態　遺存状況は悪く、上部は後世の削平を受けて周壁が失われ、ピット及び二重に巡る壁溝のみ遺存している。壁溝の遺存状態から考えると、平面方形ないし長方形を呈していたものと考えられる。規模は東側・南側を復元すると、東西約４m、南北約3.0m程度となり、床面積約12m²と推定される。

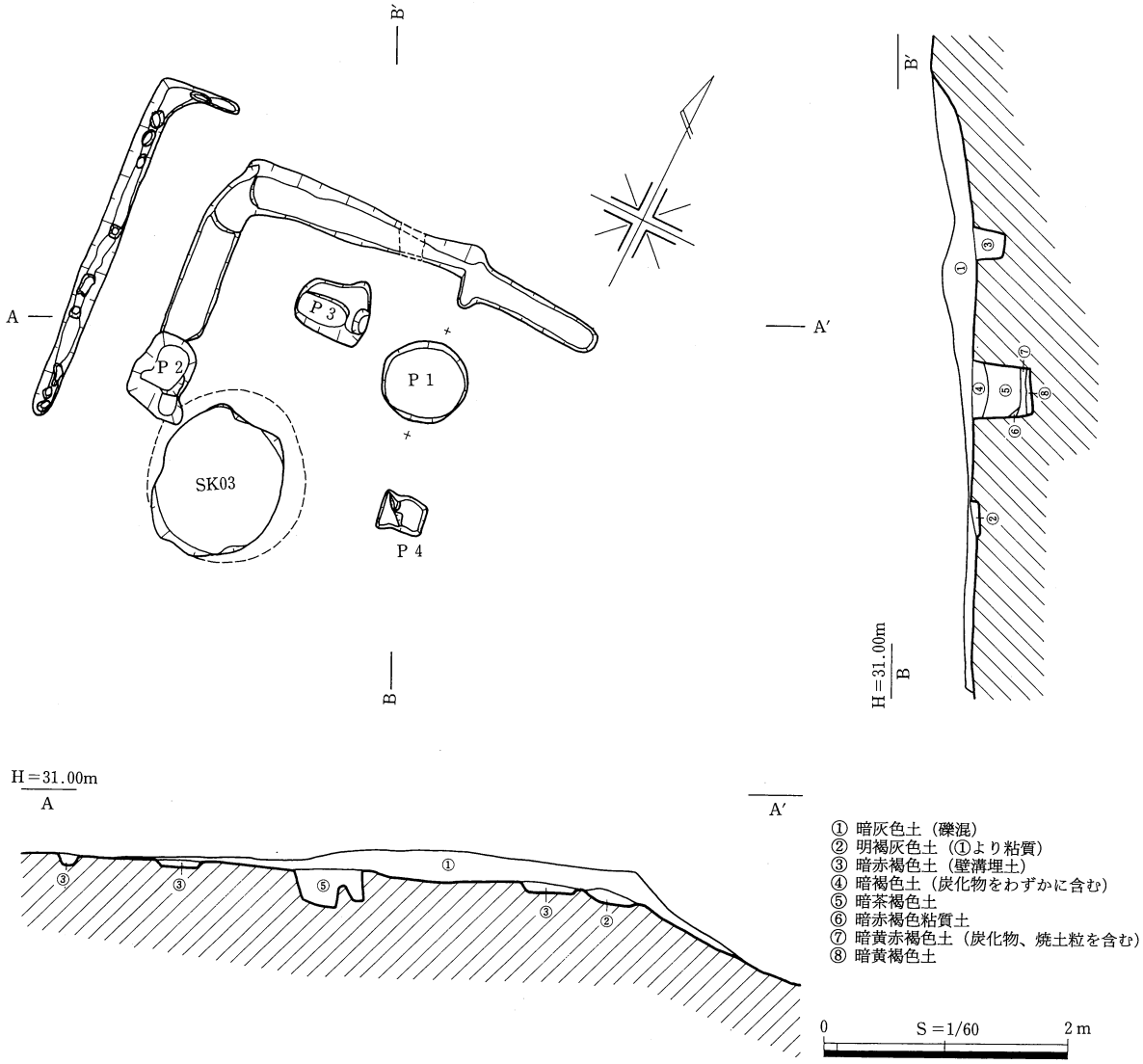
壁溝は、北側～西側で検出された。外側のものは幅９～20cm、深さ９cmを測り、断面逆台形状を呈す。壁溝内には、径10cm程度の小ピットが掘り込まれている。

内側のものは、幅24～34cm、深さ８～14cmを測り、断面逆台形状を呈す。

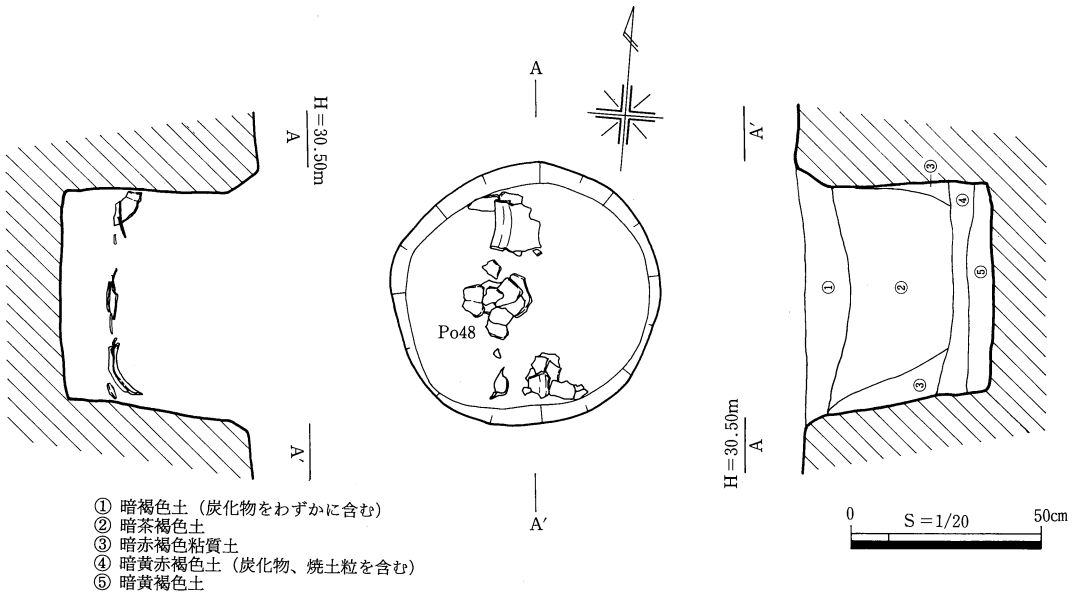
主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、床面上で４個のピットを検出した。それぞれの規模は、Ｐ１（74×70－51）cm、Ｐ２（64×45－40）cm、Ｐ３（63×44－32）cm、Ｐ４（48×31－16）cmを測る。



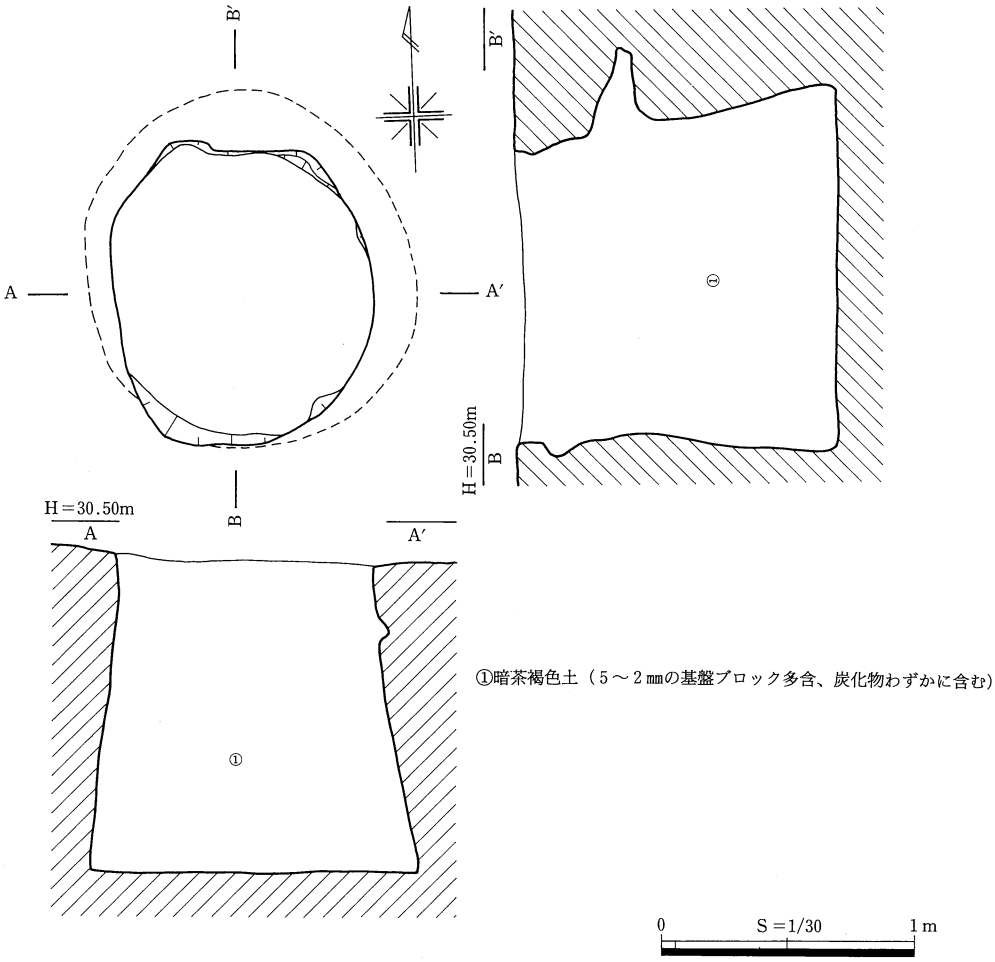
挿図47　ＳＩ08出土遺物実測図



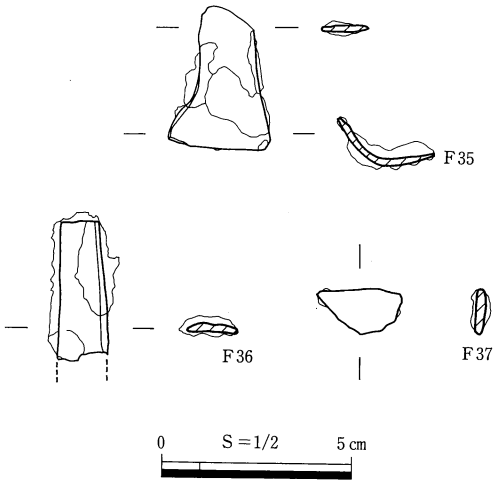
挿図48　ＳＩ08遺構図



挿図49　ＳＩ08 Ｐ１内遺物出土状況図



挿図50　ＳＫ03遺構図



挿図51　ＳＫ03出土遺物実測図

埋　　土　　埋土は、暗灰色土１層のみである。

ＳＫ03　　床面西側で、ＳＫ03が検出された。

遺存状況は非常によく、平面は上縁部楕円形、底面円形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.19m、短軸1.03m、基底部で長軸1.44m、短軸1.32m、深さ1.26mを測る。

底面から0.8～1.0mのところに幅８～15cm、深さ３～30cmを測る刳り込みが、ほぼ円形に設けられ

ており、土坑上面をふさぐ蓋などを受けるためのものと考えられる。

埋土は、炭化物をわずかに含む暗茶褐色土単層である。

形態上の特徴及び検出位置から、ＳＫ03はこの住居に伴う屋内貯蔵穴と考えられる。

遺物出土状況　出土遺物には、図化できたものにＰ１から出土した甕Po48、敲石Ｓ９がある。また、ＳＫ03埋土中から土器片、鉄片Ｆ35～Ｆ37が出土している。鉄片は、三角形状・長方形状を呈すもので、いずれも製品とは考えられないものである。土器片は、小片のため図化できなかった。

時　期　Ｐ１内出土土器から、ＳＩ08は岩吉編年Ⅳ期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

ＳＩ09・ＳＤ15（挿図52～56、図版10・36・37）

位　置　鷲谷奥地区Ａ区南側の13Ｇ・14Ｇグリッドにあり、標高約29.8～30.6mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。南側約２mにはＳＩ10がある。また、周囲には約1.3～1.5m離れて、ＳＤ15が半環状に巡っている。

形　態　西側が流失しているものの遺存状況は比較的よく、平面は円形を呈す。規模は、東西4.13m、南北4.54mを測り、床面積15.3m²である。残存壁高は、最も遺存状況がよい東側壁で最大0.67mを測る。

壁溝は、西側が流失しているがほぼ全周していたものと考えられる。幅７～18cm、深さ２～５cmを測り、断面逆台形状を呈す。北東側壁溝内には、径10cm程度の小ピットが掘り込まれている。

主柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ３の３個である。それぞれの規模は、Ｐ１（48×42－57）cm、Ｐ２（39×39－33）cm、Ｐ３（41×36－38）cmを測る。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２間から順に、2.7m、2.7m、2.4mである。

中央ピットはＰ４で、（85×75－49）cmを測る。埋土は、炭化物をわずかに含む暗灰褐色土単層である。中央ピットから壁溝に向かって南北２本の溝が接続している。北側のものは、長さ2.5m、幅24～38cm、深さ16cmを測る。南側のものは、長さ1.7m、幅14～24cm、深さ13cmを測る。断面はいずれも「U」字状を呈す。

この他に、床面北側で（28×24－32）cmを測るＰ５が検出されているが、用途は不明である。

炭化材・焼土　床面上で、中央部より南東側で構造材と考えられる炭化材が検出され、ＳＩ09が焼失したことを裏づけるものである。遺存状況はあまりよくなかったが、南側のものは明らかに垂木と推定された。Ｐ２・Ｐ５上で検出されたものも垂木と考えられるが、柱の可能性もある。これらの炭化材は、樹種鑑定の結果スダジイ・スギ・ミズキと判明した。また、南側では炭化材上で焼土が検出された。この焼土は、焼失の際に焼け落ちたものと考えられるが、南側部分にのみ検出されており、出土状況から見ると不自然である。消火の際に投げこまれた可能性もある。この焼土下に、Po49・Po50が潰れるように検出された。

埋　土　埋土は、８層に分層できた。いずれも炭化物を多量に含むもので、焼失の際に堆積したものと考えられる。なお、⑧層は土塁状遺構の盛土の可能性がある。

ＳＤ15　ＳＩ09の後背部に1.3 ～1.5m離れて半環状に巡るＳＤ15が検出された。この溝は全周するものではない。規模は全長17.7m、幅0.21～0.68m、深さ0.13～0.3mを測る。断面は逆台形状を呈す。

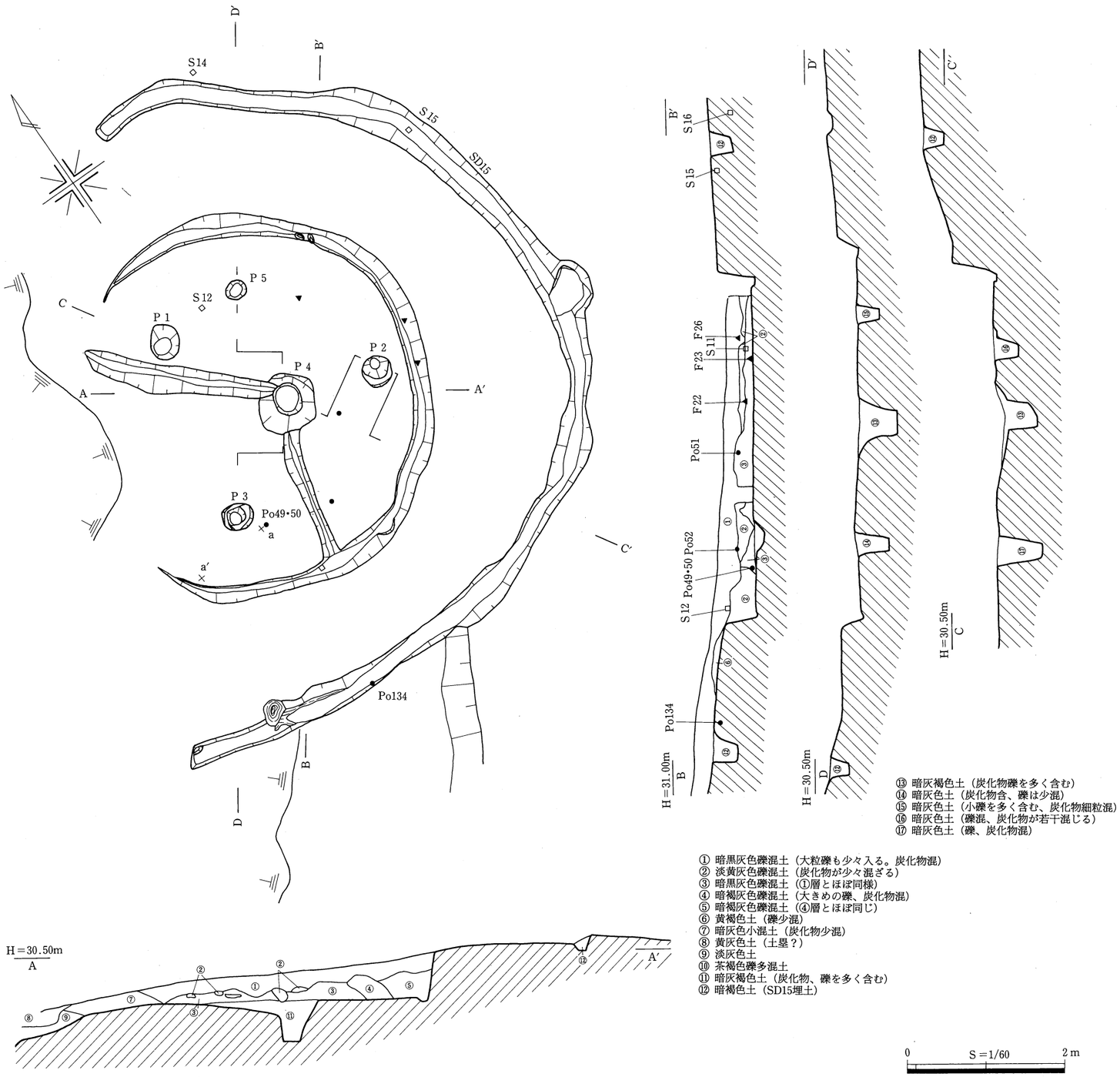
埋土は暗褐色土単層である。

ＳＩ09の周囲を巡ることから、この住居に伴う排水溝と考えられる。

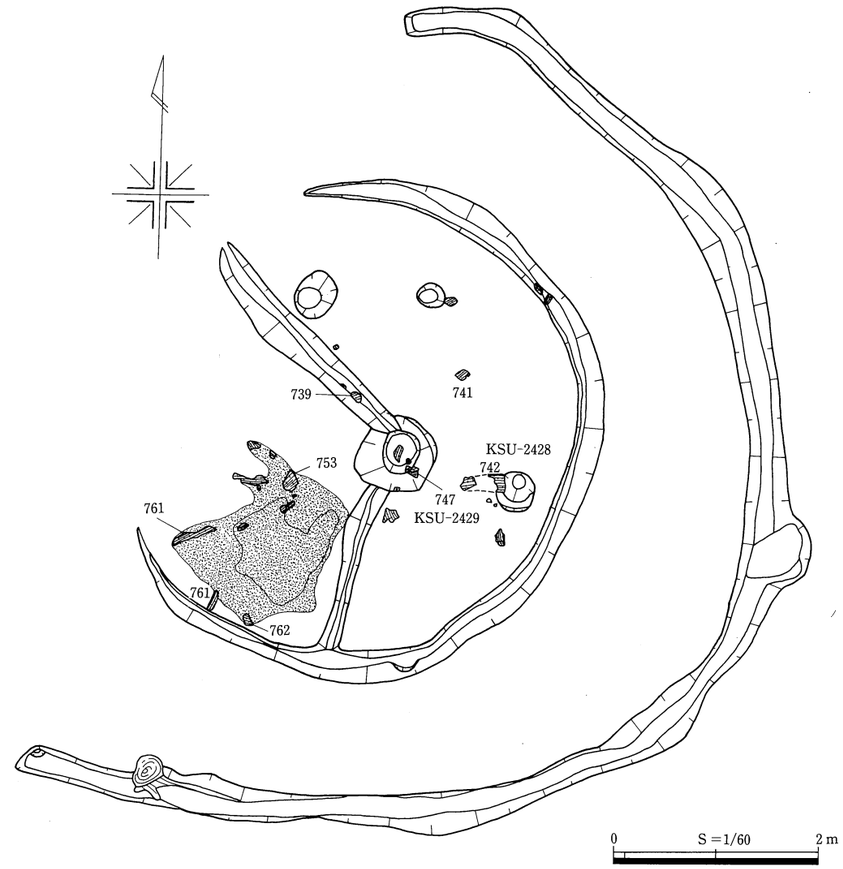
遺物出土状況　出土遺物には、ＳＩ09で図化できたものに大型甕Po49・Po50、甕Po51・Po52、底部Po53、鼓形器台Po54、鉄片Ｆ22～Ｆ26、敲石Ｓ10、磨石Ｓ11、擦石Ｓ12がある。

このうち、床面南側で焼土下で潰れたようにPo49・Po50が出土している。その他のものはいずれも埋土中からの出土である。

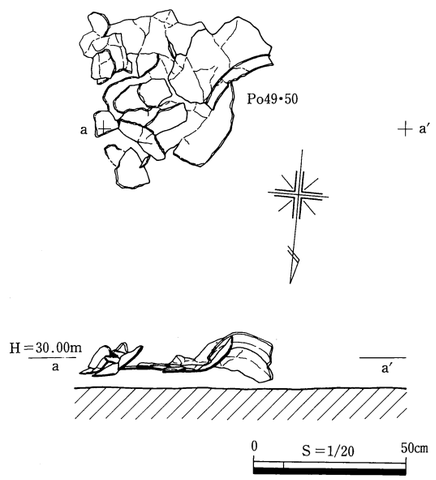
鉄片は、いずれも製品とは考えられないもので、埋土下層で出土している。



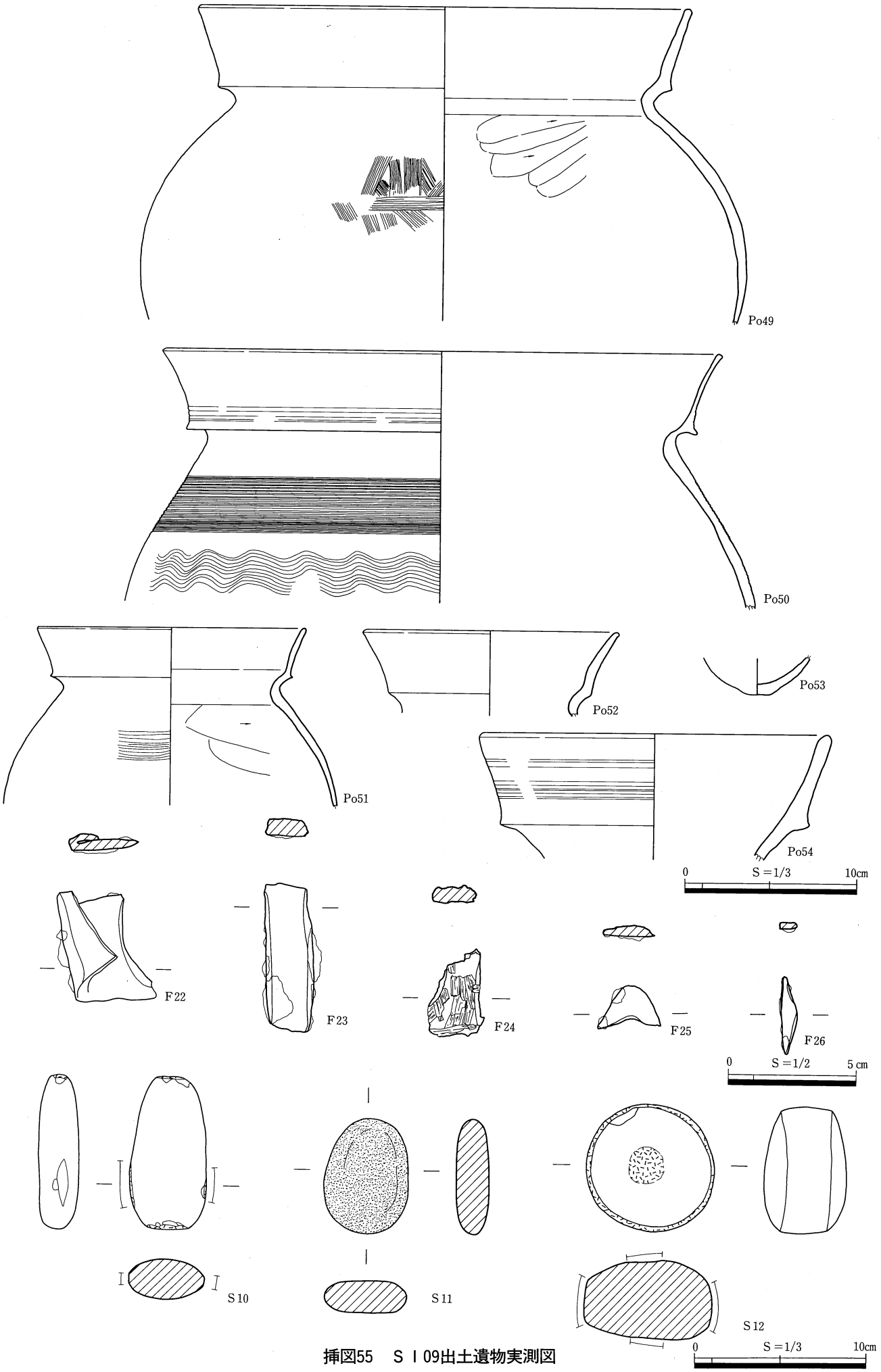
挿図52　ＳＩ09・ＳＤ15遺構図



挿図53　ＳＩ09炭化物出土状況図



挿図54　ＳＩ09床面遺物出土状況図



挿図55　ＳＩ09出土遺物実測図

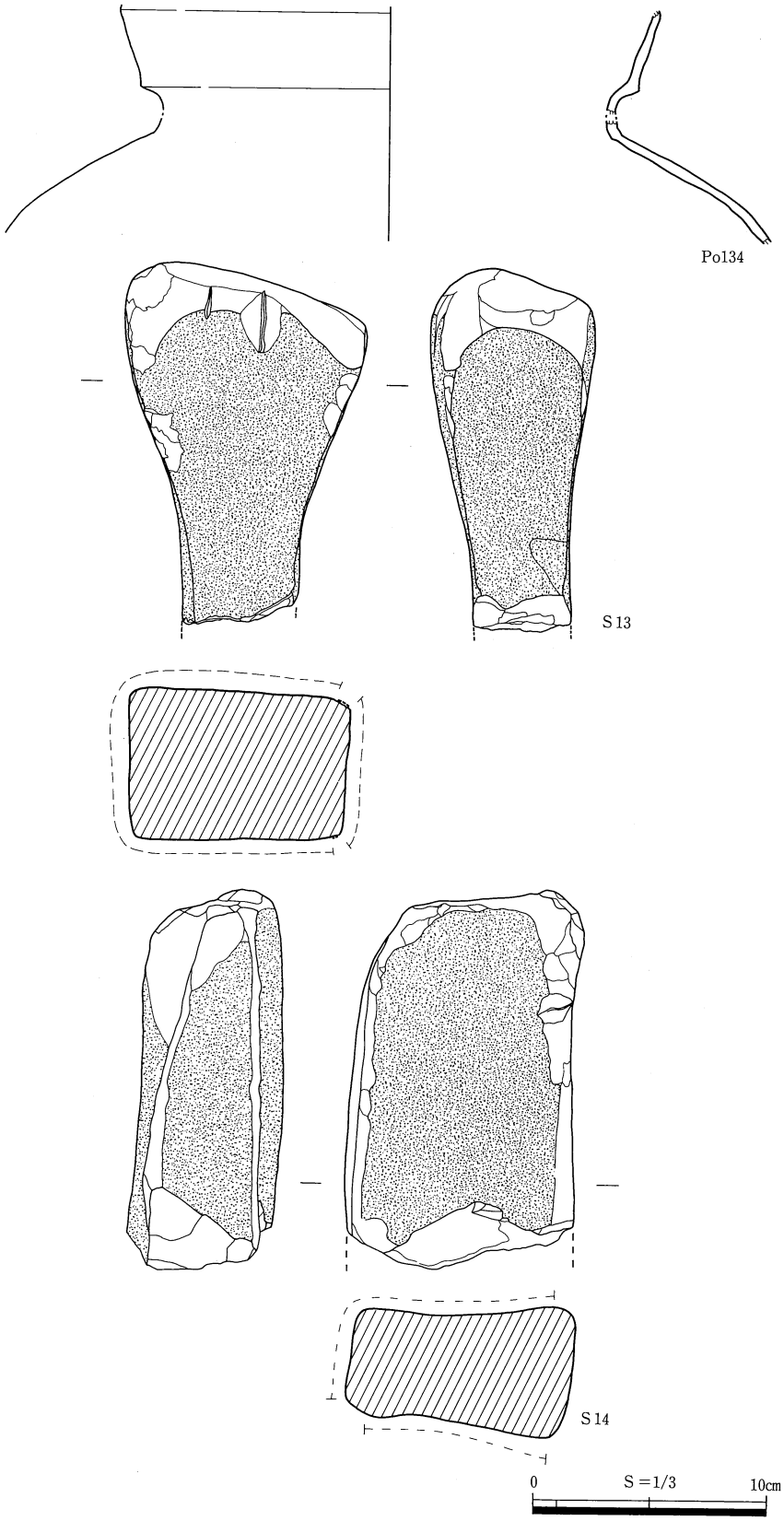
ＳＤ15からは、図化できたものに甕Po134、砥石Ｓ13・Ｓ14がある。このうち、Po134は、南側壁際に張り付くように、口縁部を逆さにして出土している。また、Ｓ13は東側中央部で、Ｓ14は北側周辺で出土している。

また、図化できなかったが、鉄片が出土している。

なお、砥石Ｓ13の端部には鉄錆が付着しており、砥石として機能した以外に、鉄製品の製造に関わったものと考えられる。

時　期　ＳＩ09床面出土土器及びＳＤ15出土土器から、ＳＩ09は岩吉編年Ｖ（古）期・弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃のものと考えられる。

なお、炭化材№742（ＫＳＵ-2428）、№747（ＫＳＵ-2429）の^{14}Ｃ年代測定の結果、前者はB.P1570±20、後者はB.P1580±20という年代値が示された。この年代から与えられる絶対年代は、５世紀前半であり、土器型式が示す年代とは約半世紀以上の開きがあるものと思われる。



挿図56　ＳＤ15出土遺物実測図

ＳＩ10（挿図57・58、図版10・37）

位　　置　　鷲谷奥地区Ａ区南側の13Ｈグリッドにあり、標高約30.7～31.2ｍの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。北側はＳＤ15・ＳＩ09によって切られている。西側は流失している。

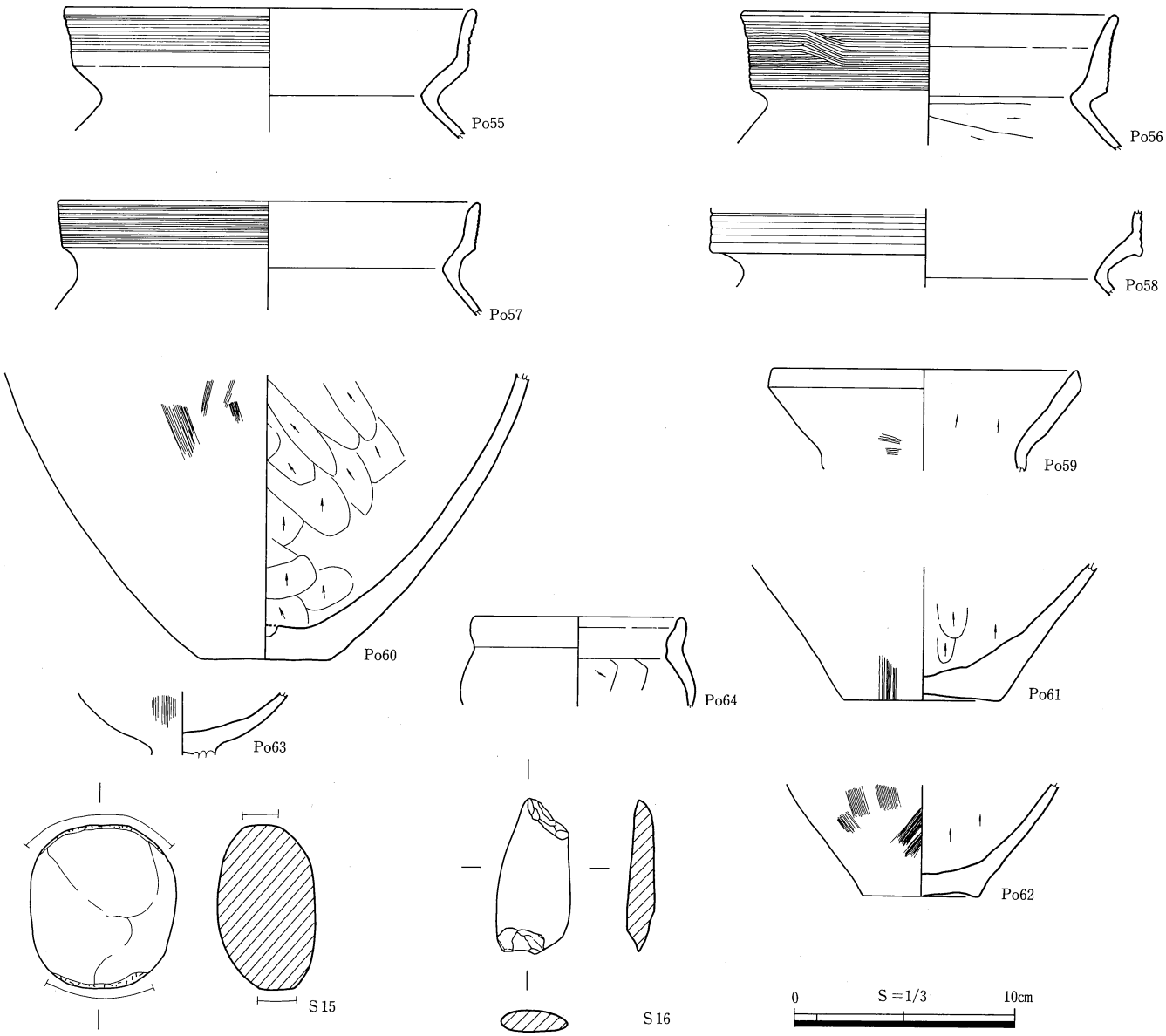
形　　態　　北側・西側が消失しており、確かな形態は不明であるが、遺存する壁の形態から平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.06ｍ以上、南北6.5ｍ程度測り、床面積10.5㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状況がよい南東側壁で最大0.81ｍを測る。

壁溝は、浅いものの南側で検出できた。本来は全周していたものと考えられる。幅14～40㎝、深さ３～５㎝を測り、断面「Ｕ」字状を呈す。

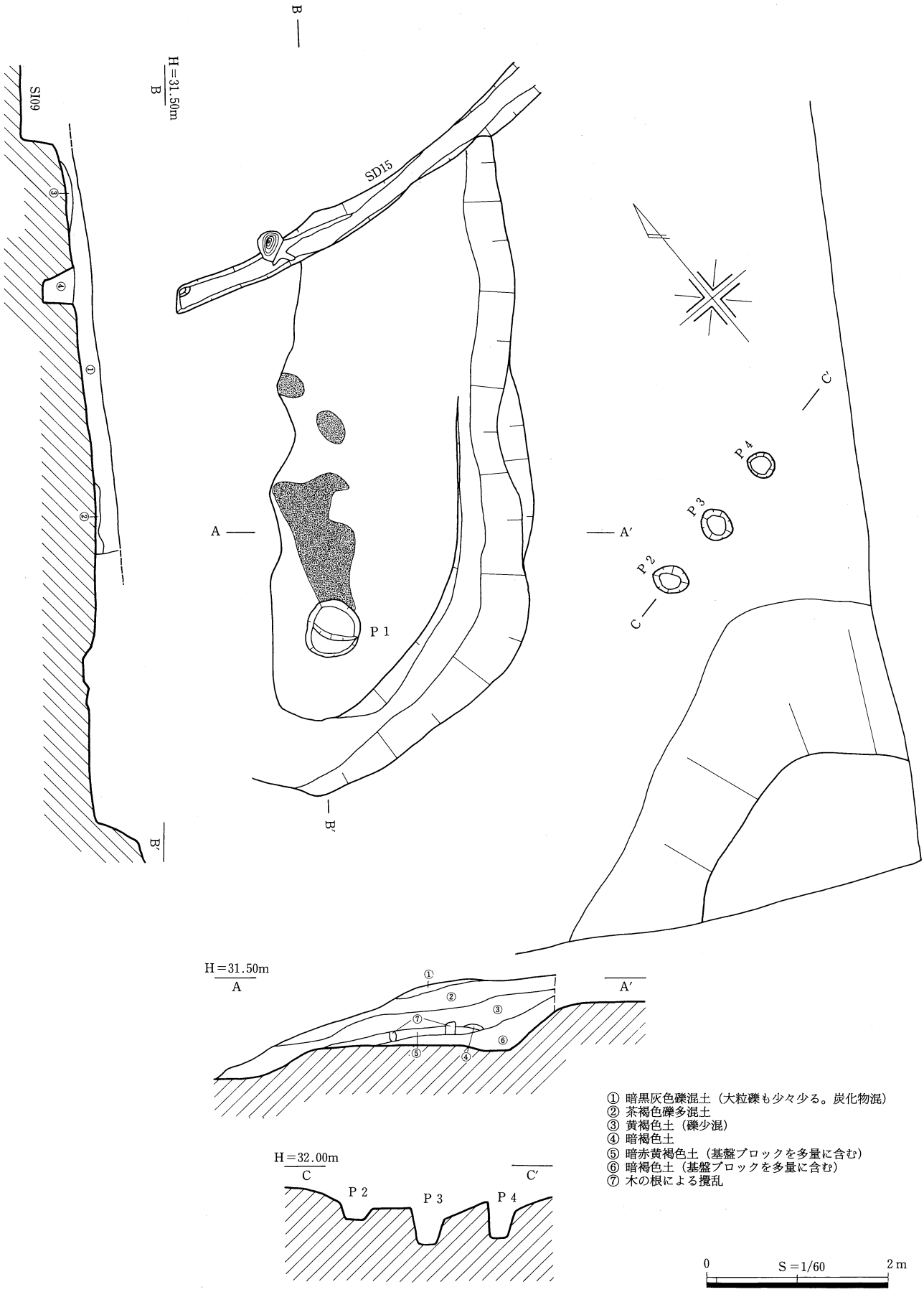
主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、南壁側で（63×60－16）㎝を測るＰ１が検出された。

焼 土 面　　Ｐ１周辺の床面上で焼土面を３か所検出した。焼失した痕跡がないことから、床面上で火を使用したものと考えられる。

埋　　土　　埋土は、６層に分層できた。このうち①層は土塁状遺構の盛土と思われ、純粋な埋土は、②層以下の５層である。いずれも中央に向かって流れた状況を示し、自然堆積したものと考えられる。



挿図57　ＳＩ10遺物実測図



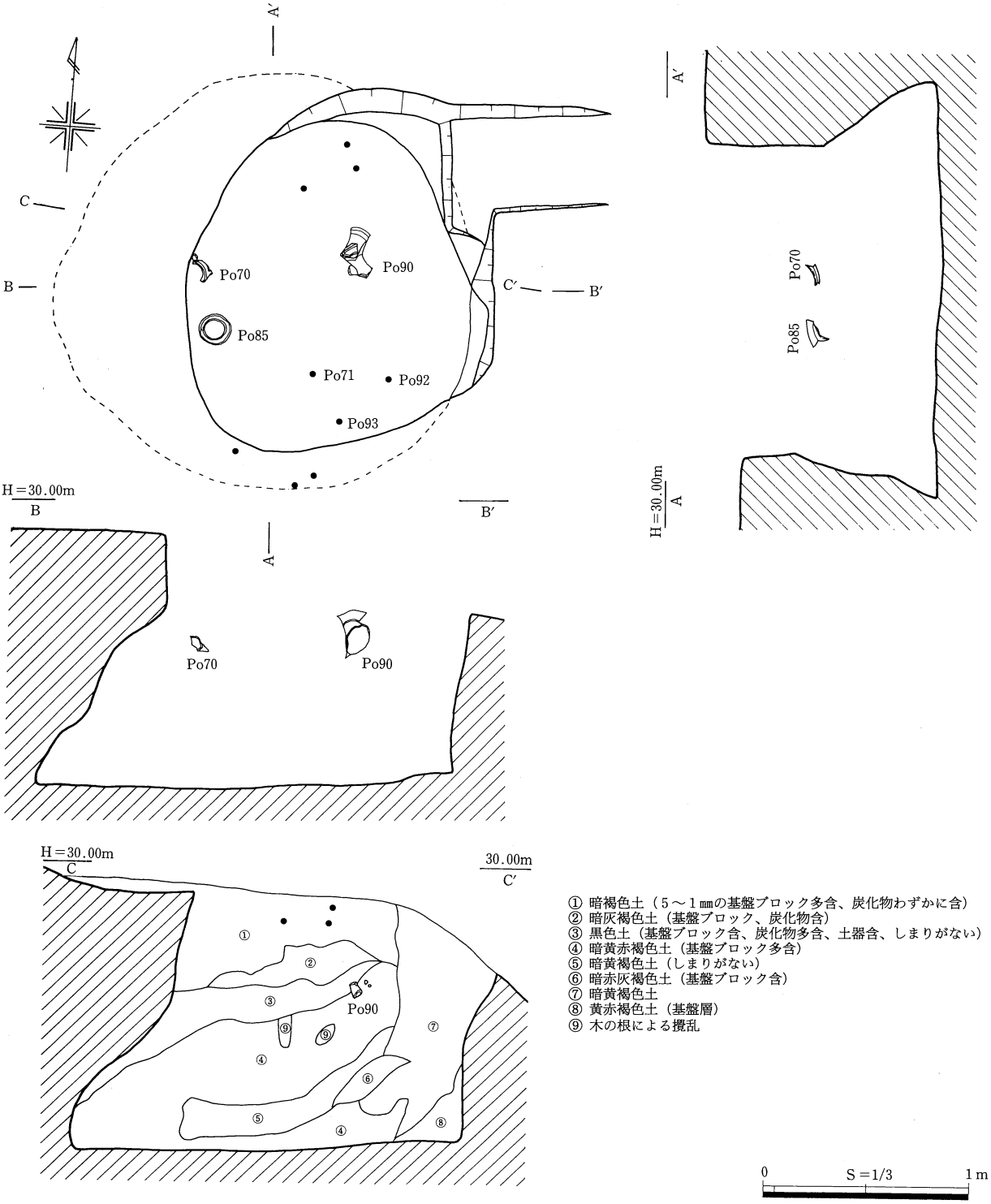
挿図58　ＳＩ10遺構図

周辺ピット　南東コーナー周辺で３個のピットが一直線上に並んで検出された。これらは、径約40cm、深さ約20～40cmを測る。住居の方向とは一致せず、垂木尻ピットのような直接住居に関わるものとは考えられず、周辺に柵列状のものがあったものと考えられる。

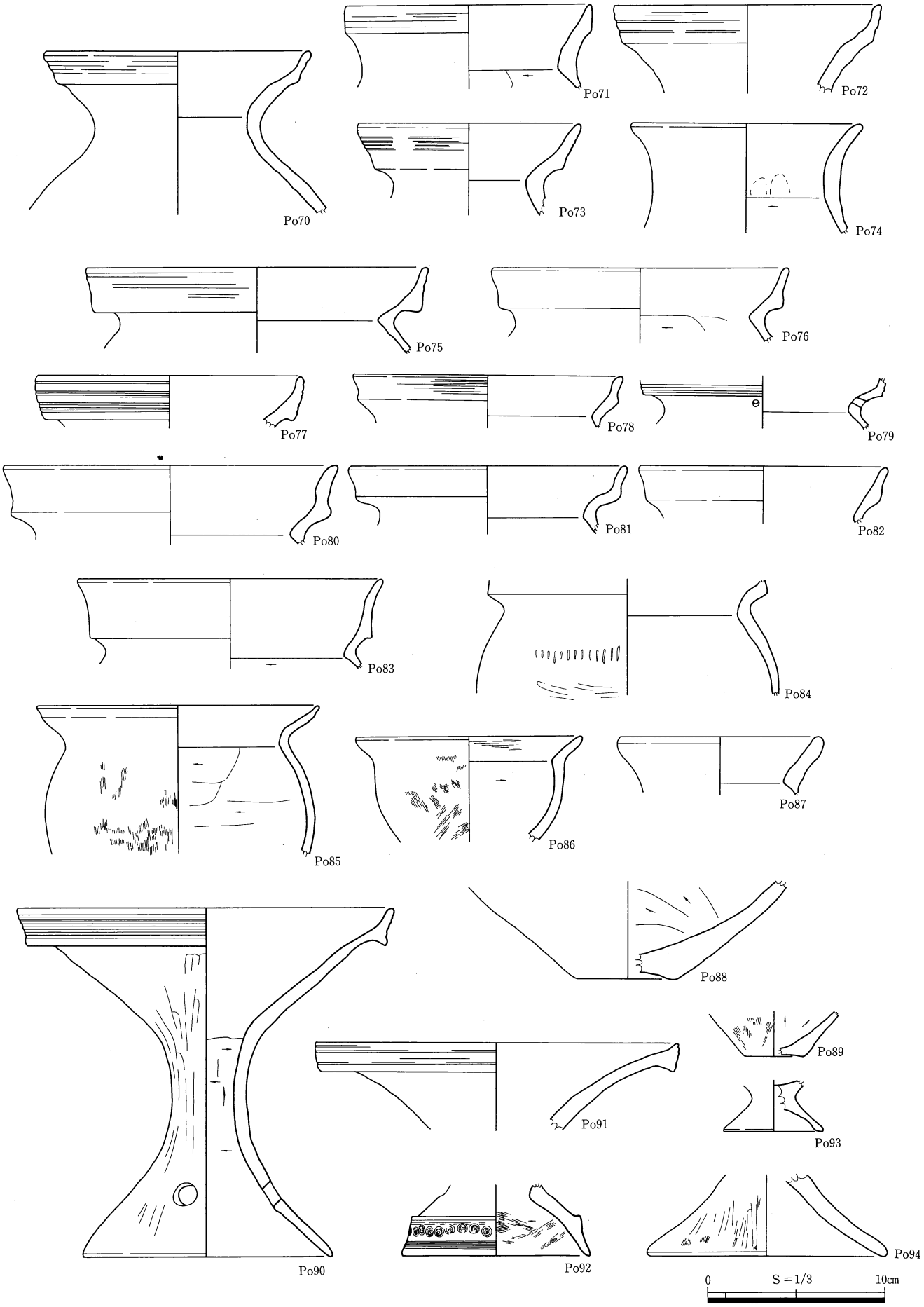
遺物出土状況　出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po55～Po58、単純口縁をもつ甕Po59、底部Po60～Po62、低脚杯Po63、小型甕Po64、敲石Ｓ15、石錘Ｓ16がある。

このうち、床面北側でPo57、Po63、Po64が出土している。また、Po56は南側周辺から出土している。その他のものは南側でまとまって埋土中から出土している。

時　期　床面出土の土器から、ＳＩ10は岩吉編年Ⅲ（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図59　ＳＫ04遺構図



挿図60　ＳＫ04出土遺物実測図(1)

2．土坑・土壙

ＳＫ04（挿図59～61、図版11・37・38）

位　　置　鷲谷奥地区Ａ区中央部の15Ｅ・15Ｆグリッドにあり、標高約29.5～30mの緩やかに東側に傾斜する斜面に位置する。ＳＫ04の北東側約４mにはＳＩ08が、南西側約３mにはＳＩ06がある。

形　　態　平面は上縁部楕円形、底面円形呈す。断面は、東側はほぼ垂直に掘り込まれるが、西側は袋状を呈す。規模は、上縁部で長軸1.62m、短軸1.49m、基底部で長軸2.06m、短軸2.05m、深さ1.17mを測る。

埋　　土　埋土は、７層に分層できた。③層には、炭化物を多量に含んでいる。⑦層は堆積状況が異なり、埋没後掘り込まれたものと考えられる。

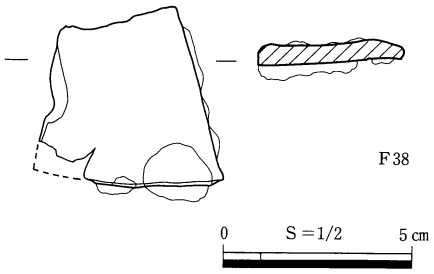
遺物出土状況　埋土中及び周辺から比較的多くの土器が出土している。図化できたものには、壺Po70～Po74、甕Po75～Po87、底部Po88・Po89、器台Po90～Po92、低脚杯Po93、蓋Po94、鉄片Ｆ38がある。

このうち、③層以下の埋土下層から出土しているものには、Po73・Po77・Po82・Po83・Po92・Po93がある。その他のものは、埋土上層からの出土である。

鉄片Ｆ38はやや厚手の撥形を呈す。

時　　期　埋土下層中の土器から、ＳＫ04は岩吉編年Ⅲ（古）～Ⅳ期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

出土状況を見ると、埋土上層の土器は下層のものより遡るものであり、時期が逆転している。上層のものは、ＳＫ04が埋没した後に掘り返され、周辺の古い時期の土器を捨てたものと思われる。



挿図61　ＳＫ04出土遺物実測図(2)

性　　格　形態上の特徴から、ＳＫ04は貯蔵穴として利用されたものと考えられるが、後に掘り返され捨て場として使用されたものと考えられる。

ＳＫ05（挿図62、図版11）

位　　置　鷲谷奥地区Ａ区西側の12Ｄグリッドにあり、標高約27.3～27.6mの西側に傾斜する斜面に位置する。東側約10mにＳＩ05がある。

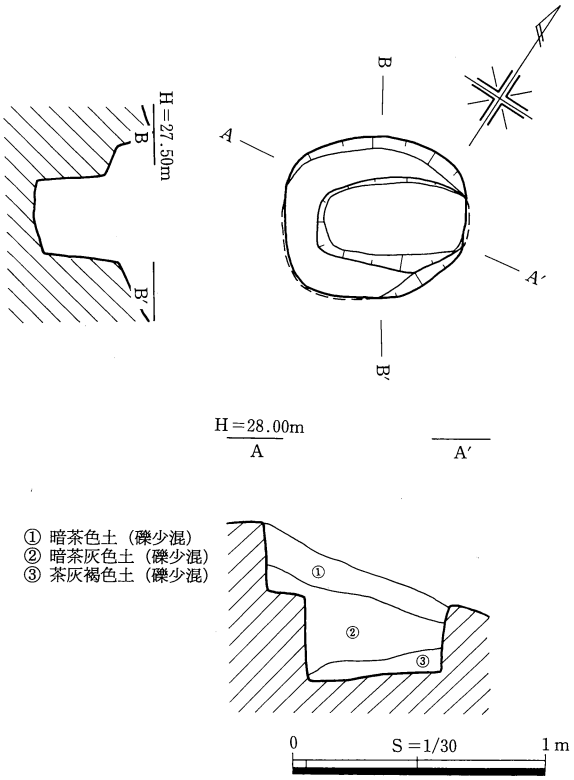
形　　態　遺存状況は比較的よく、二段に掘り込まれている。平面は上縁部楕円形に長軸0.72m、短軸0.67m、深さ0.27mに掘り、幅15cmのテラスを設けた後さらに長軸0.6m、短軸0.37m、深さ0.33mに掘り込んでいる。

埋　　土　埋土は、３層に分層できた。いずれも基盤礫を含むものである。

遺　　物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物がないため、時期は不明である。

性　　格　性格は不明である。



挿図62　ＳＫ05遺構図

3．溝状遺構

ＳＤ11（挿図64・65、図版11・38）

位　　置　鷲谷奥地区Ａ区のほぼ中央部の12Ｃ・12Ｄ・13Ｃ・13Ｄ・14Ｃ・14Ｄグリッドにあり、標高約25.8～30.8mの斜面～尾根頂部に位置する。中央部で倉見７号墳を大きく掘削している。また、東側では土墨状遺構に伴うと考えられるＳＤ13によって切られている。

形　　態　鷲谷奥地区Ａ区尾根中央部を東西方向に横断するかたちで検出された。東端部は流失している。

規模は、全長22m以上、幅3.1 ～5.1m、深さ0.6～2.5mを測る。断面は「Ｕ」字状を呈す。

この溝は少なくとも２回掘り返されているものと考えられ、13Ｄグリッドのものを ＳＤ11－１、14Ｄグリッドのものを ＳＤ11－２とした。

ＳＤ11－１は長さ15m、幅1.5～3.5m、最も深いところで深さ2.5mを測る。

ＳＤ11－２は長さ13m以上、幅2.0～3.2m、最も深いところで深さ0.6mを測る。

埋　　土　埋土は、周辺の土層と合せて計24層に分層できたが、Ａ－Ａ'断面では③～⑨層が、また、Ｂ－Ｂ'断面では⑰～㉑層がこの遺構に伴う純粋な埋土と考えられる。Ｂ－Ｂ'断面のうちの㉒～㉔層は倉見７号墳周溝埋土である。

Ｂ－Ｂ'断面を見ると、⑰・⑳・㉑層を切り込むような堆積状況が窺われ、２回の掘削が行われたものといえ、ＳＤ11－１が埋没した後にＳＤ11－２が掘り込まれたものと考えられる。

遺物出土状況　埋土中から、わずかに土器片が出土している。図化できたものには、弥生土器甕片Po130・Po131、須恵器杯片Po132がある。Po130・131は④層中から、Po132は⑰層中からの出土である。

時　　期　切り合い関係では、ＳＤ11－１→ＳＤ11－２の順に作られている。また、周辺の遺構との関係を見ると、倉見７号墳を掘削していることから古墳時代前期以降、また、土墨状遺構に伴うものと考えられるＳＤ13によって切られていることから、土墨状遺構以前のものと考えられる。

また、出土遺物から見ると、弥生土器甕は弥生時代後期後半、岩吉編年Ⅲ（新）期～Ⅳ期頃のものと考えられる。これらはＢ区頂部の遺構から二次的に流入したものと考えられる。

また、須恵器杯Po132 は奈良時代頃のものと考えられ、ＳＤ11－１にともなう可能性がある。ＳＤ11－２の確実な時期は不明である。

用　　途　用途は不明である。

ＳＤ14（挿図63・66、図版13・38）

位　　置　鷲谷奥地区Ａ区南側の13Ｆ・14Ｆ・14Ｇグリッドにあり、標高29.0～30.2mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。

北東側約２ｍにはＳＩ08、南側約３ｍにはＳＩ09がある。

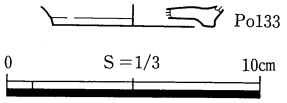
形　　態　緩やかに湾曲しながら、南東～北西方向に走っている。西側は、調査区外へ延びているものと思われる。規模は全長7.1m以上、幅1.1～2.4m、深さ0.2～0.95mを測る。断面は逆台形状を呈す。

埋　　土　埋土は３層に分層できた。いずれも皿状に堆積しており、自然堆積したものと思われる。なお、④層は基盤層である。

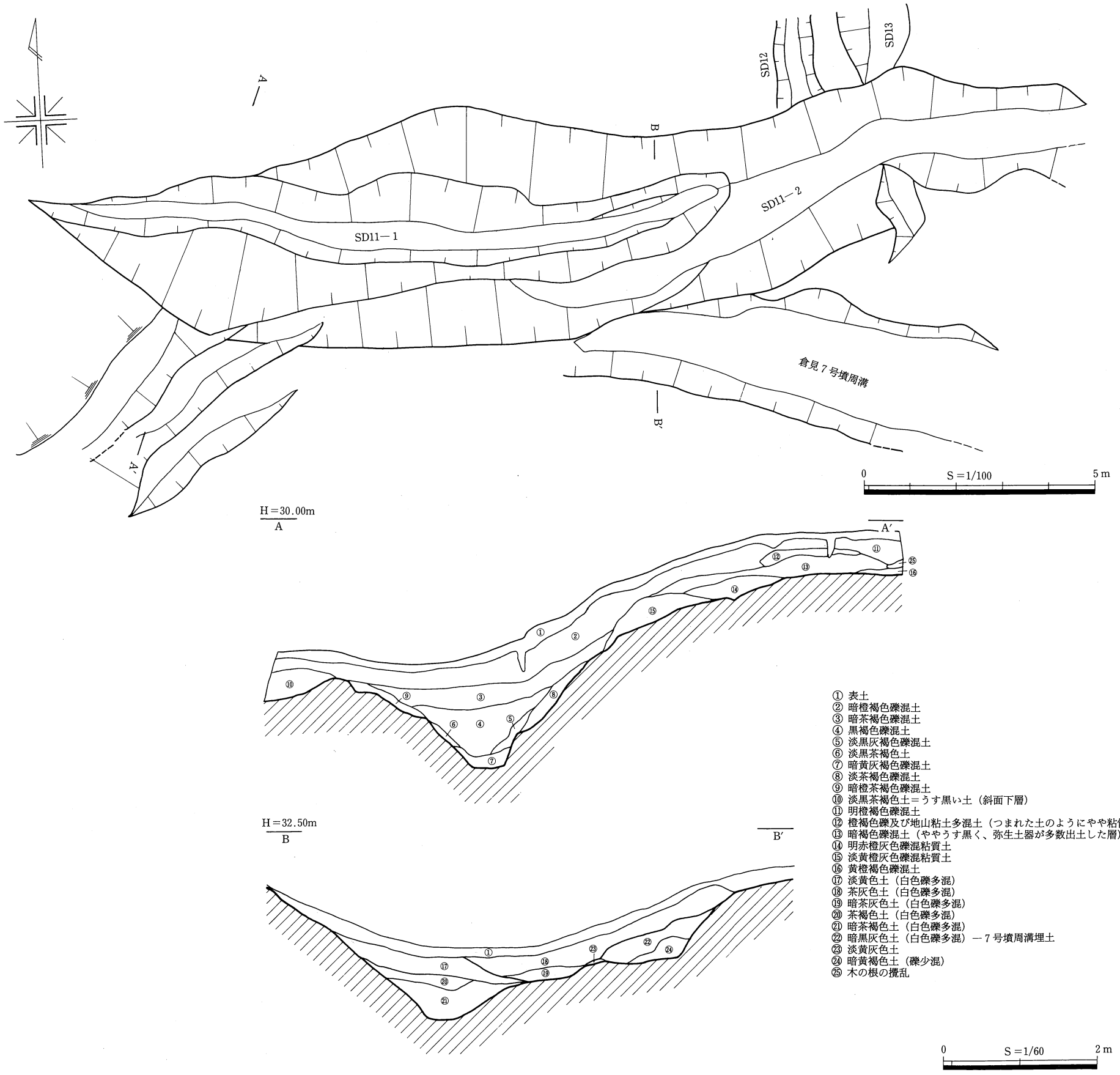
遺　　物　遺物は、埋土中から土師器杯Po133が出土している。低く貼り付けの高台をもつものである。

時　　期　埋土中の遺物から、奈良～平安時代のものと考えられる。

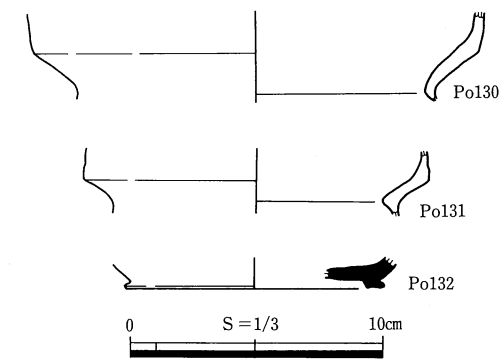
用　　途　用途は不明である。



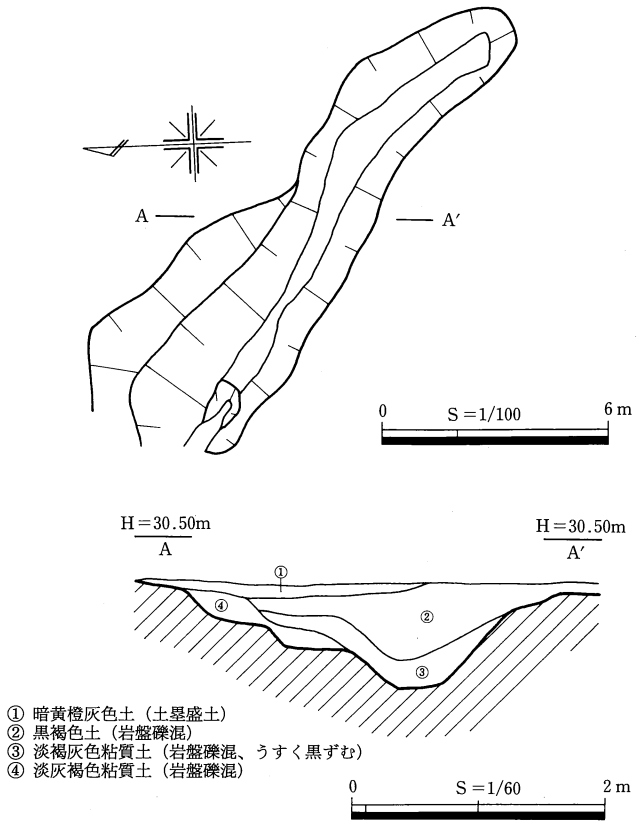
挿図63　ＳＤ14出土遺物実測図



挿図64　ＳＤ11遺構図



挿図65　ＳＤ11出土遺物実測図



挿図66　ＳＤ14遺構図

4．土塁状遺構・ＳＤ12・13（挿図67～70、図版12・38）

立　地　鷲谷奥地区Ａ区の最も高い部分、標高31.5～33mの幅約10～15mの狭い尾根の頂部に、尾根に沿って南北方向に築造されている。

形　態　この土塁状遺構は、全て盛土によって築造されている。断面台形状を呈すが、西側は緩やかで、東側は急になり、平坦面に続いている。頂部平坦面は尾根中心より西側にある。

14Ｇグリッドで二股状に分かれる部分があったが、この部分より北側の14ＥＧは流失しており、本来の形状を保っているものかどうかは疑わしい。

規　模　調査区ほぼ中央部の14Ｅグリッドでは既に流失していたが、南北調査区外に延びるようである。遺存している部分では、長さ約45m以上、幅約10m、高さは東側平坦面からは0.4m、旧表土面下面からは最も残りのよい部分で高さ1.7mを測る。頂部平坦面は、南側部分で幅0.4 ～1.2m、二股部分で幅0.15～0.6m、高さ0.7 ～1.6mを測る。

盛　土　盛土は、最も遺存状態のよい部分で1.7m施されているが、中心部は①層（岩盤破砕礫層と暗灰褐色砂質土層と明黄橙色土が互層状に、非常に固く突き固められている）が柱状にみられる。①層の周囲は中心部に比べて締まりがない。①層の断面は、ジグザグになっており、盛土を行う際に中心部のみを突き固めながら、盛られたものと考えられる。

また、旧表土の状況を見ると、土塁状遺構築造以前の旧地形の頂部は土塁の平坦部にあたり、盛土は東側に比べて西側が厚くなっている。

溝状遺構　この地区の頂部平坦面東側、14Ｂ・14Ｃ・14Ｄ・14Ｅ・13Ｈグリッドに、南北方向に途切れとぎれではあるが、ほぼ平行する２本の溝を検出した。２本の溝のうち西側のものをＳＤ12、東側のものをＳＤ13とした。

14Eグリッド付近では土墨状遺構の盛土下にも溝状遺構が掘り込まれるものがあるが、14Dグリッド以北のものと一連のものと考えた。

14DグリッドではＳＤ11・倉見７号墳周溝によって切られているように見えるが、確実な切り合い関係は不明ではあるが、本来はＳＤ11埋土上に掘り込まれたものと考えられる。

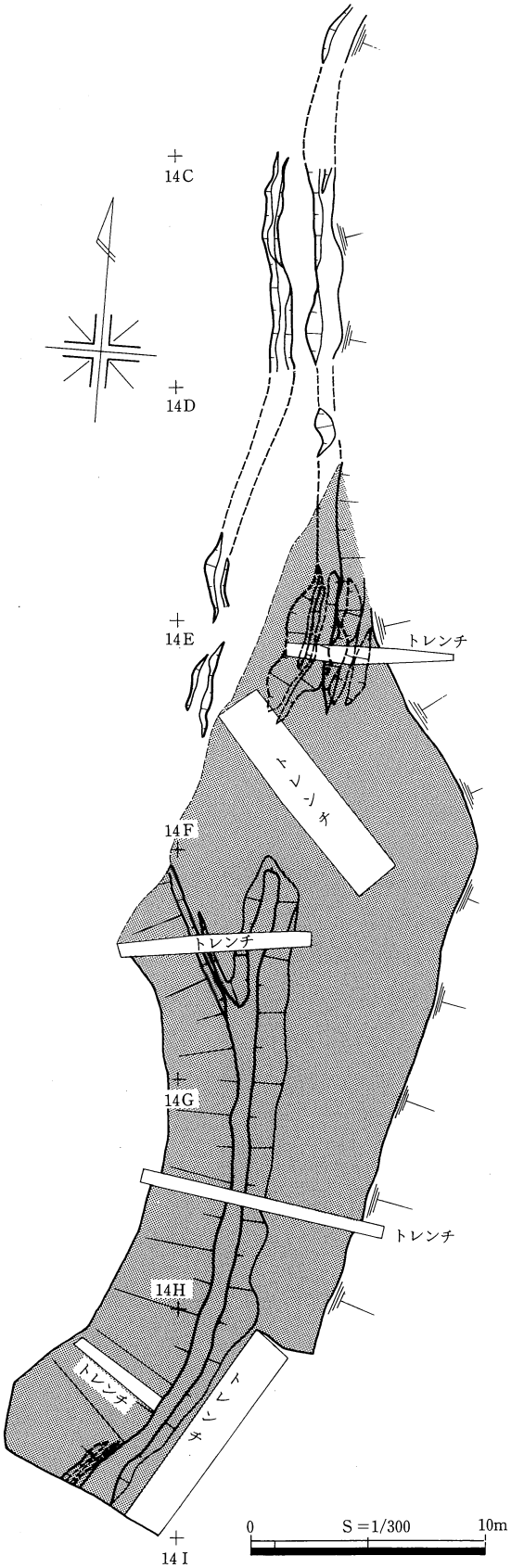
ＳＤ12　ＳＤ12は、薄い表土を除去した段階で検出されたため、遺存状態は非常に悪い。14D・14Eグリッドで途切れるものの、ほぼ南北方向に走っている。途切れる部分を復元すると、全長は検出面で約26m、幅0.5 ～0.9m、深さ７～30cmを測る。断面はいびつな逆台形状を呈す。

ＳＤ13　ＳＤ13は、14Cグリッドでは表土除去した段階で、14D・14E・13Hグリッドでは土墨状遺構盛土を除去した段階で検出された。14Dグリッドでは東側にも短い溝を検出し、また、13Hグリッドでも溝を検出し、これらも一連のＳＤ13として考えた。14Cグリッドでは東側肩が流失しており、遺存状況は非常に悪い。14C～14Eグリッドで検出したものは、途切れた部分も復元すると全長約30m、幅最大1.9m、深さ20～40cmを測り、断面「U」字状を呈す。13Hグリッドで検出したものは、長さ３ｍ以上、幅0.5m、深さ２～20cmを測り、断面「U」字状を呈す。ＳＤ13はさらに調査区外南側に延びているものと思われる。

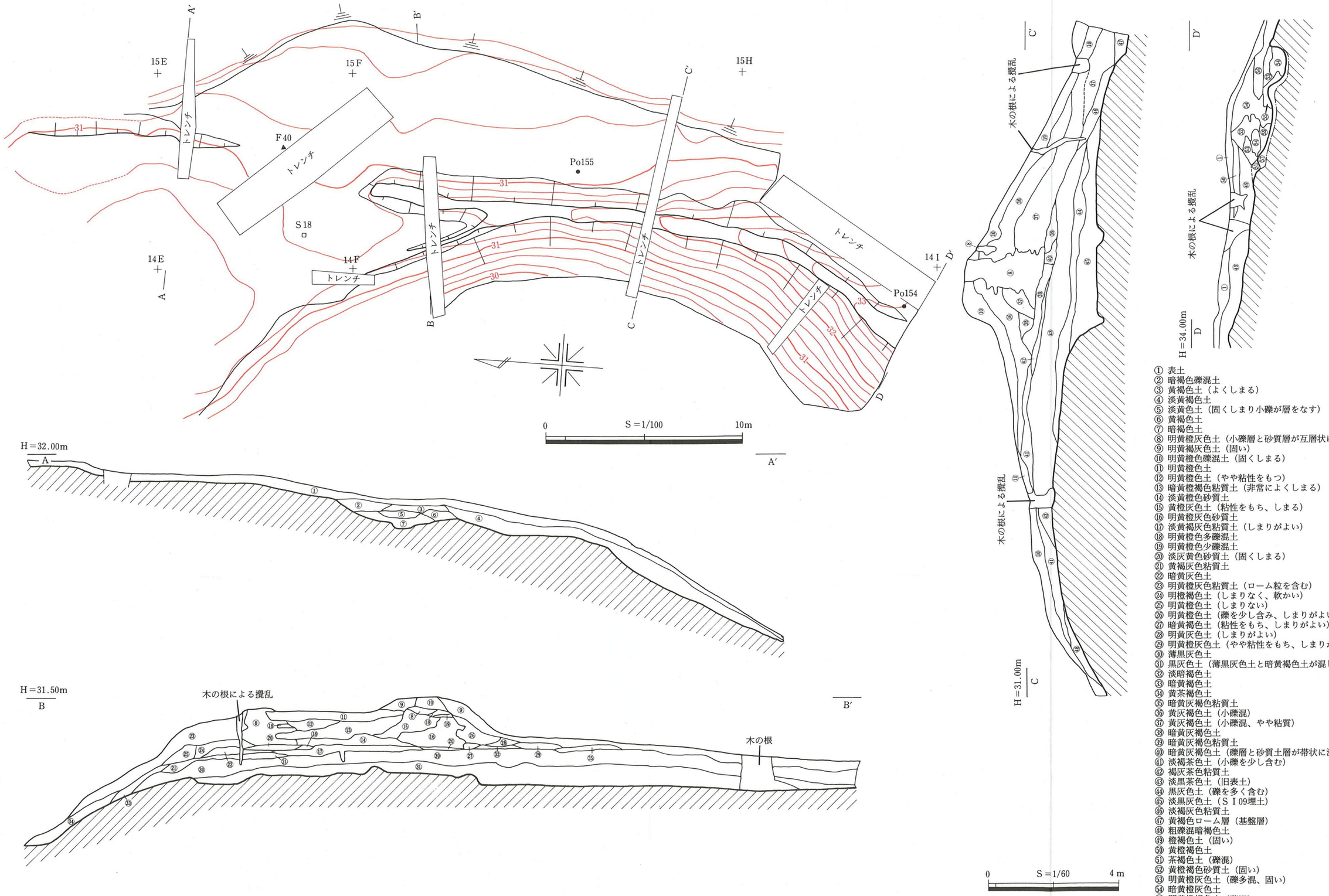
ＳＤ12の埋土は、観察できた箇所では均質な黄褐色土単層である。

ＳＤ13の埋土は、土墨状遺構の盛土と同質なもので、一部叩き締められた砂質層が認められた。これらの層は、明らかに人為的なものと考えられる。

遺物出土状況　図化できたものには、盛土下層内から須恵器高台杯Po152、須恵器甕胴部Po153、碧玉製管玉未製品Ｓ18、鉄刀片Ｆ39が、盛土上層から須恵器底部Po154が、表土中から備前焼擂鉢Po155が、旧表土中より須恵器甕Po151、

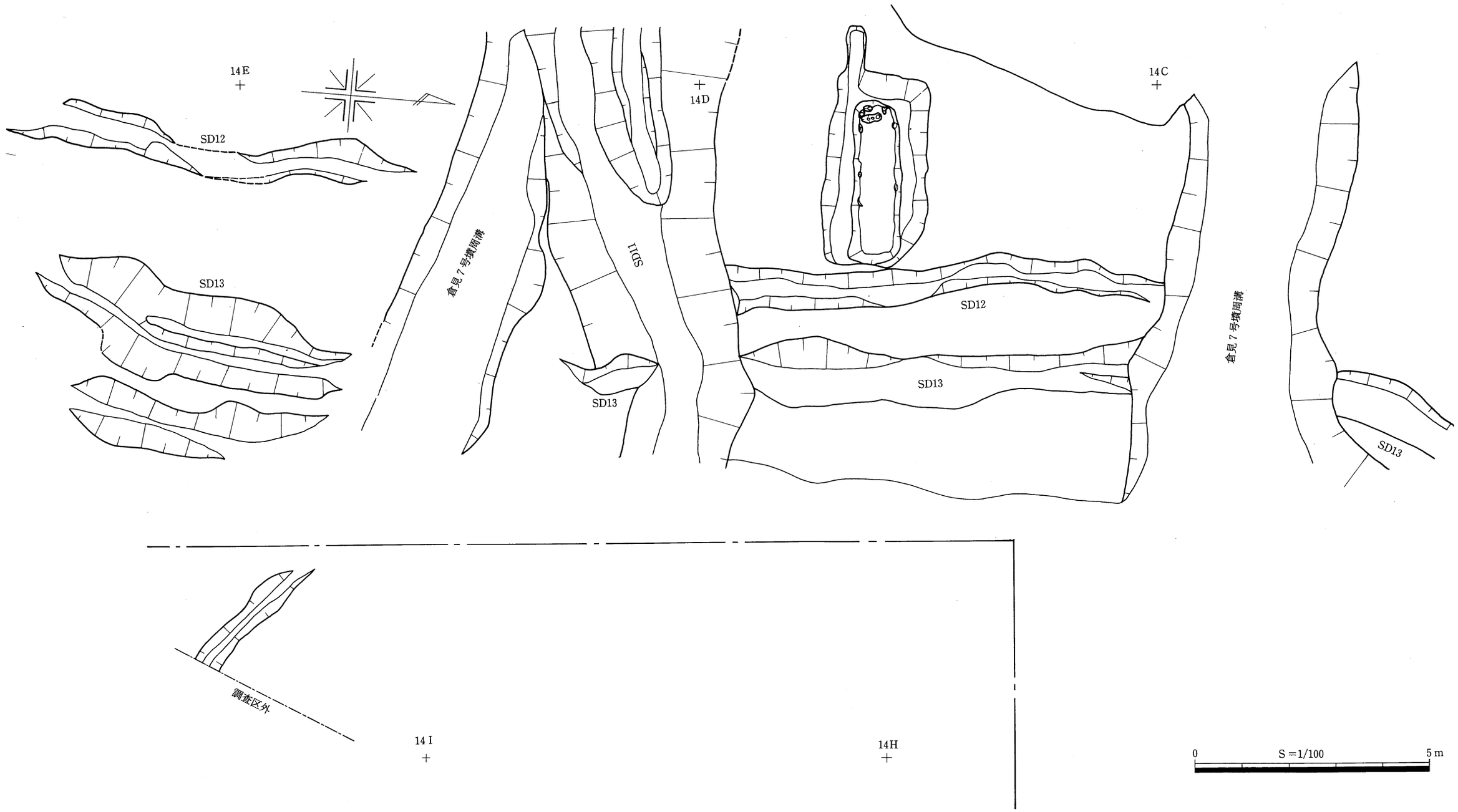


挿図67　土墨状遺構、ＳＤ12・13全体図



① 表土
② 暗褐色礫混土
③ 黄褐色土（よくしまる）
④ 淡黄褐色土
⑤ 淡黄色土（固くしまり小礫が層をなす）
⑥ 黄褐色土
⑦ 暗褐色土
⑧ 明黄橙灰色土（小礫層と砂質層が互層状になる。固くしまる）
⑨ 明黄褐灰色土（固い）
⑩ 明黄橙色礫混土（固くしまる）
⑪ 明黄橙色土
⑫ 明黄橙色土（やや粘性をもつ）
⑬ 暗黄橙褐色粘質土（非常によくしまる）
⑭ 淡黄橙色砂質土
⑮ 黄橙灰色土（粘性をもち、しまる）
⑯ 明黄橙灰色砂質土
⑰ 淡黄褐灰色粘質土（しまりがよい）
⑱ 明黄橙色多礫混土
⑲ 明黄橙色少礫混土
⑳ 淡灰黄色砂質土（固くしまる）
㉑ 黄褐灰色粘質土
㉒ 暗黄灰色土
㉓ 明黄橙灰色粘質土（ローム粒を含む）
㉔ 明橙褐色土（しまりなく、軟かい）
㉕ 明黄橙色土（しまりない）
㉖ 明黄橙色土（礫を少し含み、しまりがよい）
㉗ 暗黄褐色土（粘性をもち、しまりがよい）
㉘ 明黄灰色土（しまりがよい）
㉙ 明黄橙灰色土（やや粘性をもち、しまりがよい）
㉚ 薄黒灰色土
㉛ 黒灰色土（薄黒灰色土と暗黄褐色土が混じる。旧表土）
㉜ 淡暗褐色土
㉝ 暗黄褐色土
㉞ 黄茶褐色土
㉟ 暗黄灰褐色粘質土
㊱ 黄灰褐色土（小礫混）
㊲ 黄灰褐色土（小礫混、やや粘質）
㊳ 暗黄灰褐色土
㊴ 暗黄灰褐色粘質土
㊵ 暗黄灰褐色土（礫層と砂質土層が帯状に混じる）
㊶ 淡褐茶色土（小礫を少し含む）
㊷ 褐灰茶色粘質土
㊸ 淡黒茶色土（旧表土）
㊹ 黒灰色土（礫を多く含む）
㊺ 淡黒灰色土（ＳＩ09埋土）
㊻ 淡褐灰色粘質土
㊼ 黄褐色ローム層（基盤層）
㊽ 粗礫混暗褐色土
㊾ 橙褐色土（固い）
㊿ 黄橙褐色土
(51) 茶褐色土（礫混）
(52) 黄橙褐色砂質土（固い）
(53) 明黄橙灰色土（礫多混、固い）
(54) 暗黄橙灰色土
(55) 明黄橙褐色土（礫混）
(56) 明黄橙褐色土
(57) 黒褐色小礫少混土

挿図68　土塁状遺構遺構図



挿図69　ＳＤ12・13遺構図

不明石器Ｓ17が出土している。

その他に、磁器片が出土しているが図化できなかった。

ＳＤ12・13からは遺物は検出されなかった。

時　期　遺構の切り合い関係を見ると、古墳時代前期の倉見７号墳の周溝を削り込んでいるＳＤ11上にも、土墨状遺構の盛土が認められていることから、ＳＤ11より後に築かれたものといえる。ＳＤ11は奈良時代～平安時代頃のものと考えられることから、それ以降のものであろう。

また、出土遺物が示す時期を考えると、旧表土及び盛土内から出土しているものは、古墳時代後期後半～奈良時代後半頃と時期幅をもつものであり、土墨状遺構構築以前の遺物と考えられる。

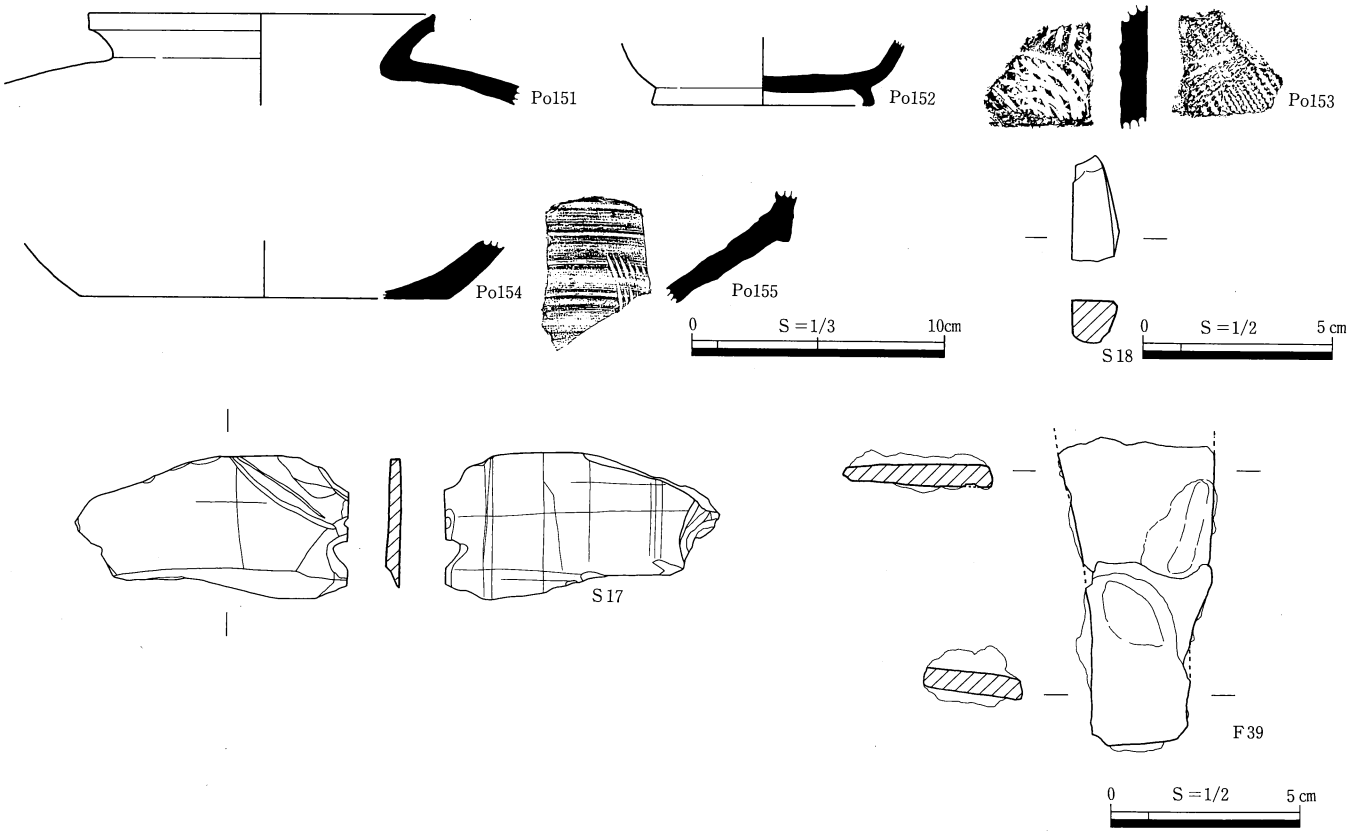
また、表土中の備前焼擂鉢は備前Ｖ期（16世紀後半頃）、また、倉見７号墳北側周溝から出土している土師質土器皿Po435もほぼ同時期のものと考えられることから、築造時期としてはこの時期に近いものが考えられる。しかし、確実に土墨状遺構に伴う遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

また、ＳＤ12・13の時期については、ＳＤ13は切り合い関係を見ると倉見７号墳・ＳＤ11よりは後出するもので、また、埋土の状況は土墨状遺構の盛土と同質であることから、土墨状遺構築造に伴う溝と考えられる。

ＳＤ12についてもＳＤ13とほぼ平行し、また、土墨状遺構も固く締まった層が14Ｅグリッドで二股に分かれる状況が窺われることから、土墨状遺構に伴ったものと考えることができよう。

性　格　この土墨状遺構は尾根に沿って築かれており、現在の字名もこの尾根を境に西側が高住字鷲谷口・字鷲谷奥、東側が桂見字堤谷になることから、地境に使われたものとも考えられるが、非常に丁寧な作りとなっていることから、それ以外の用途も考えなければならないだろう。

特に、断面形態を見ると東側に平坦面を作っている事、土墨の中心部が尾根の西側にずれており、西側が厚く盛られている事などから見ると、西側に対して作られたものと考えられる。



挿図70　土墨状遺構出土遺物実測図

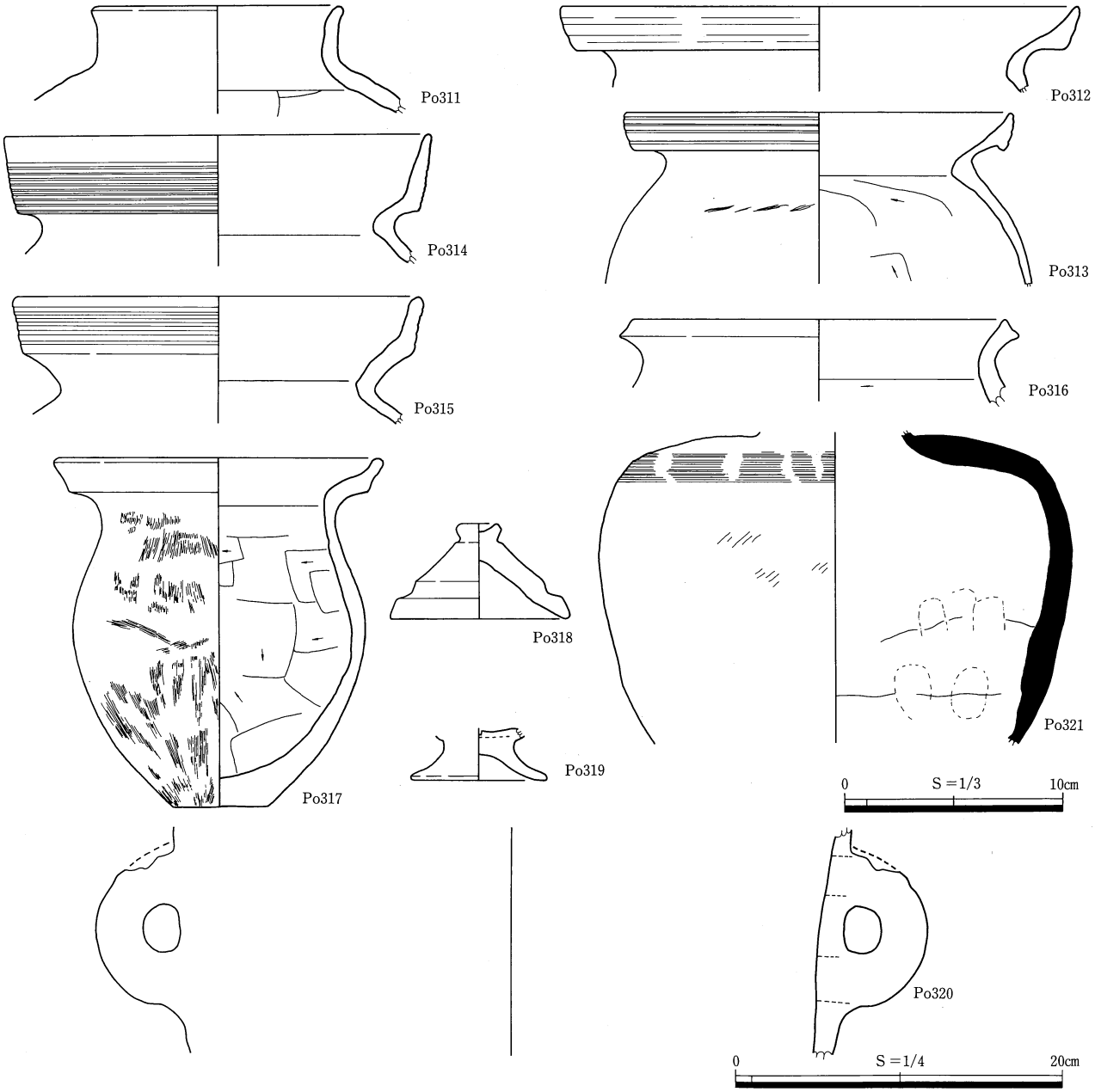
5．鷲谷奥地区Ａ区遺構外遺物（挿図71、図版39）

ここでは、鷲谷奥地区Ａ区の遺構に伴わない遺物を一括して述べる事とする。

図化できたものには、弥生土器壺Po311、弥生土器甕Po312～Po317、蓋Po318、低脚杯Po319、甑Po320、須恵器壺Po321がある。

弥生土器のうちPo312・Po313・Po316は岩吉編年Ⅲ（古）期、Po314・Po315・Po317・Po318は岩吉編年Ⅲ（新）期、Po319・Po320は岩吉編年Ⅴ期に並行するものと考えられ、鷲谷奥地区の遺構とほぼ同時期のものである。

須恵器壺Po321は古墳時代後期～奈良時代にかけてのものと考えられる。



挿図71　鷲谷奥地区Ａ区遺構外遺物実測図

第５節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ｂ区の概要

位　　置　　鷲谷奥地区Ｂ区は標高12m～29mの、鷲谷奥地区の東側の斜面部地区である。

遺　　構　　この地区で検出した遺構は、鷲谷口地区・鷲谷奥地区Ａ区同様弥生時代後期～古代にかけてのもので、不明土坑２基（ＳＫ07・08)、土器溜り１か所である。

土坑は、弥生時代後期のもの（ＳＫ07）と、平安時代後期のもの（ＳＫ08）がある。ＳＫ08の埋土中では、炭化米が出土している。

土器溜りは、大型の甕などを含み、弥生時代後期のものと考えられる。

なお、表土及び流土と考えられる暗褐色土中から多量の土器片が出土しており、これらは、鷲谷奥地区Ａ区から流れ落ちてきたものと考えられる。

第６節　西桂見遺跡鷲谷奥地区Ｂ区の調査結果

１．土坑

ＳＫ07（挿図72～74、図版13・39・40）

位　　置　　鷲谷奥地区Ｂ区西側の15Ｃ・16Ｃグリッドにあり、標高約21.6～22.9mの急斜面に位置する。ＳＫ07の北東側約10mには土器溜りがある。

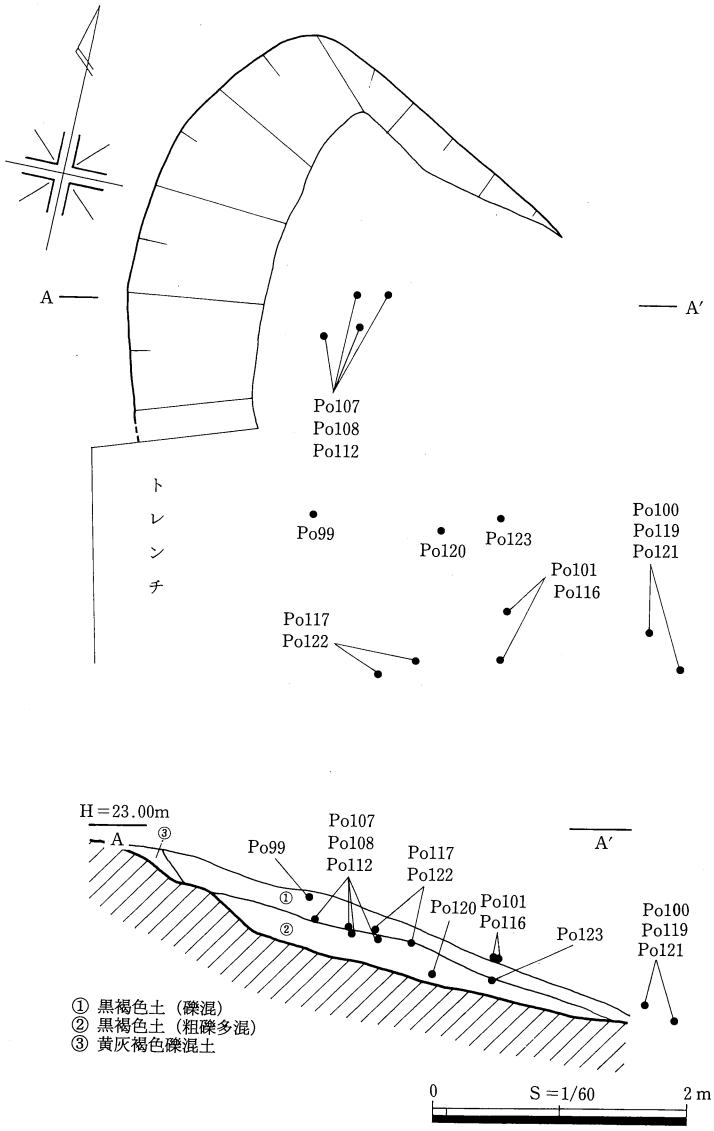
形　　態　　南側はトレンチによって削平されており、正確な規模及び平面形は不明であるが、遺存している状況から、平面は上縁部長方形、断面は傾斜をもつ皿状を呈していたものと思われる。規模は、長軸3.5m以上、短軸3.2m、深さ0.61mを測る。

埋　　土　　埋土は、３層に分層できた。いずれも基盤礫を多量に含むものである。

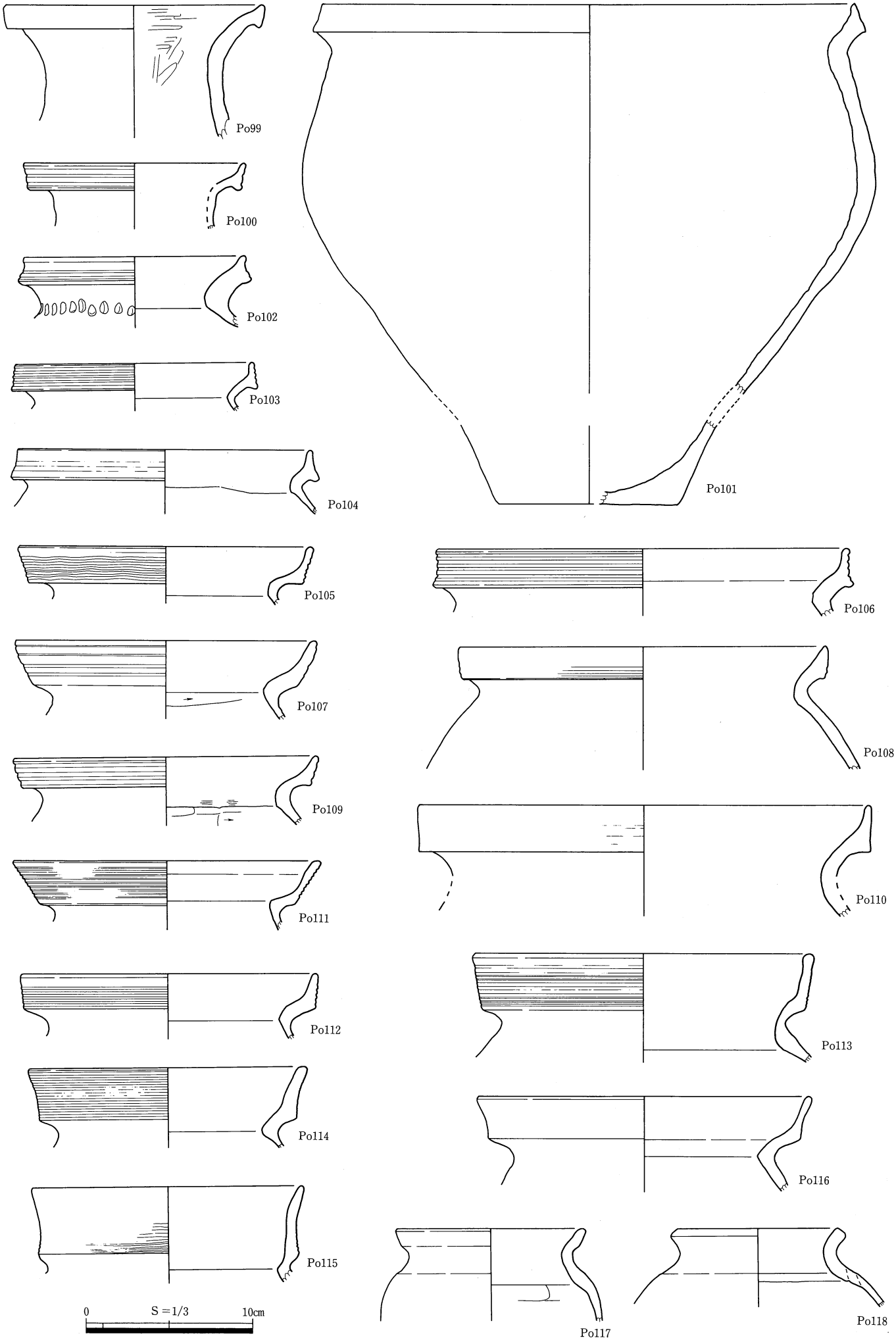
遺物出土状況　　埋土中及び周辺から多量の土器が出土している。図化できたものには、壺Ｐｏ９９・Ｐｏ１００、甕Ｐｏ１０１～Ｐｏ１１８、把手付土器Ｐｏ１１９、高杯Ｐｏ１２０・Ｐｏ１２１、鼓形器台Ｐｏ１２２、甑把手Ｐｏ１２３がある。

時　　期　　埋土中の土器から、ＳＫ07は岩吉編年Ⅲ（新）期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

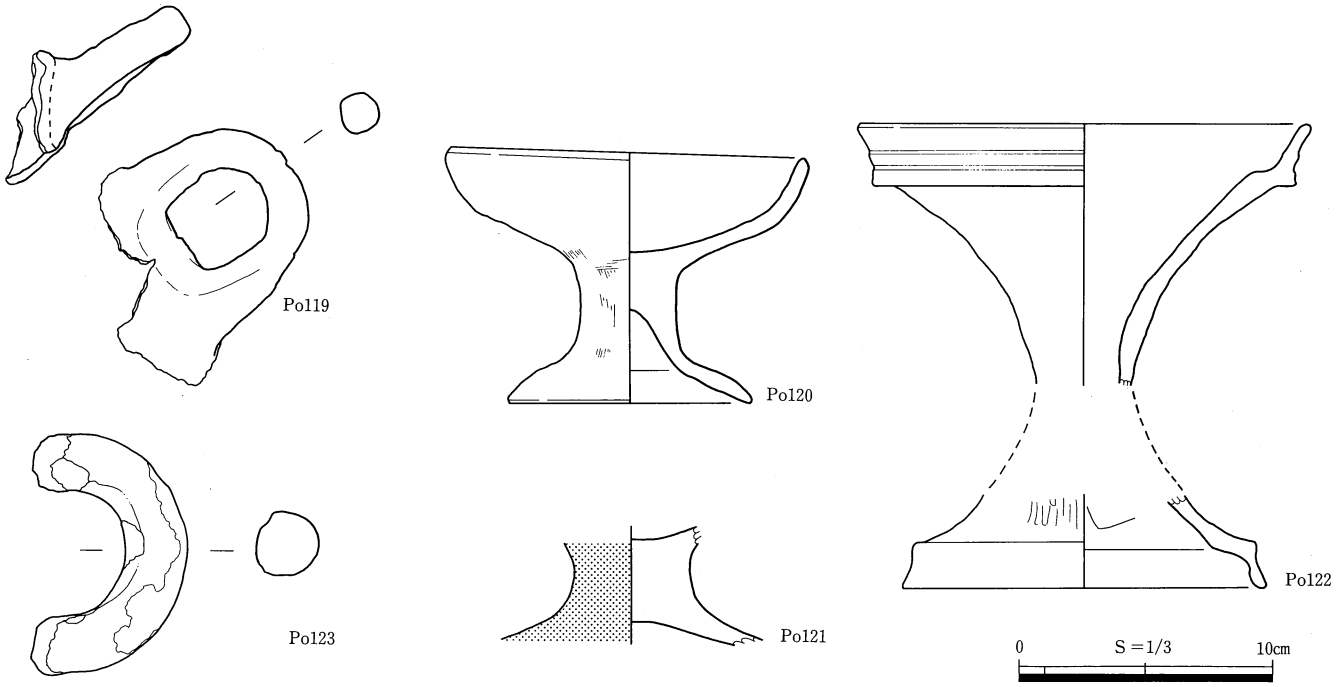
性　　格　　性格は不明である。



挿図72　ＳＫ07遺構図



挿図73　ＳＫ07出土遺物実測図(1)



挿図74　ＳＫ07出土遺物実測図(2)

ＳＫ08（挿図75・76、図版40）

位　　置　　鷲谷奥地区Ｂ区東側の18Ｃグリッドにあり、標高約13.0～13.5mの斜面に位置する。ＳＫ08の西側約12mにはＣ区土器溜りがある。

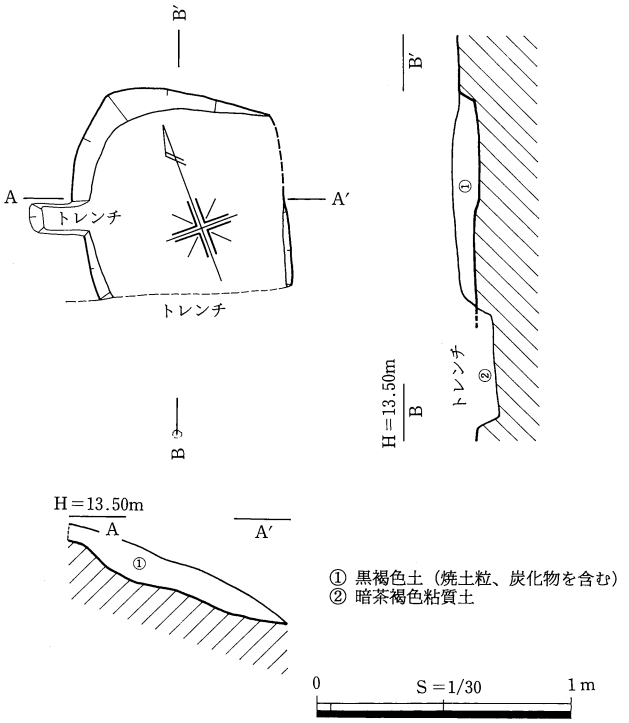
形　　態　　平面は隅丸方形、底面は傾斜をもつ皿状を呈す。規模は、長軸0.85m以上、短軸0.82m、深さ0.22mを測る。

埋　　土　　埋土は、炭化物・焼土粒を含む黒褐色土単層である。

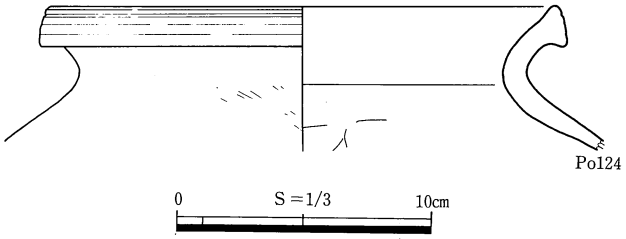
炭 化 米　　埋土中から炭化米342.5gが出土している。これらはすべて底面から浮いた状態で検出された。

遺物・時期　　埋土中から甕Po124が出土している。これは、岩吉編年II（古）期・弥生時代後期初頭頃のものと考えられるが、炭化米の^{14}Ｃ年代測定の結果、B.P.1060±20年（A.D.930年前後）という年代が出ており、この時期に近いものと考えられる。

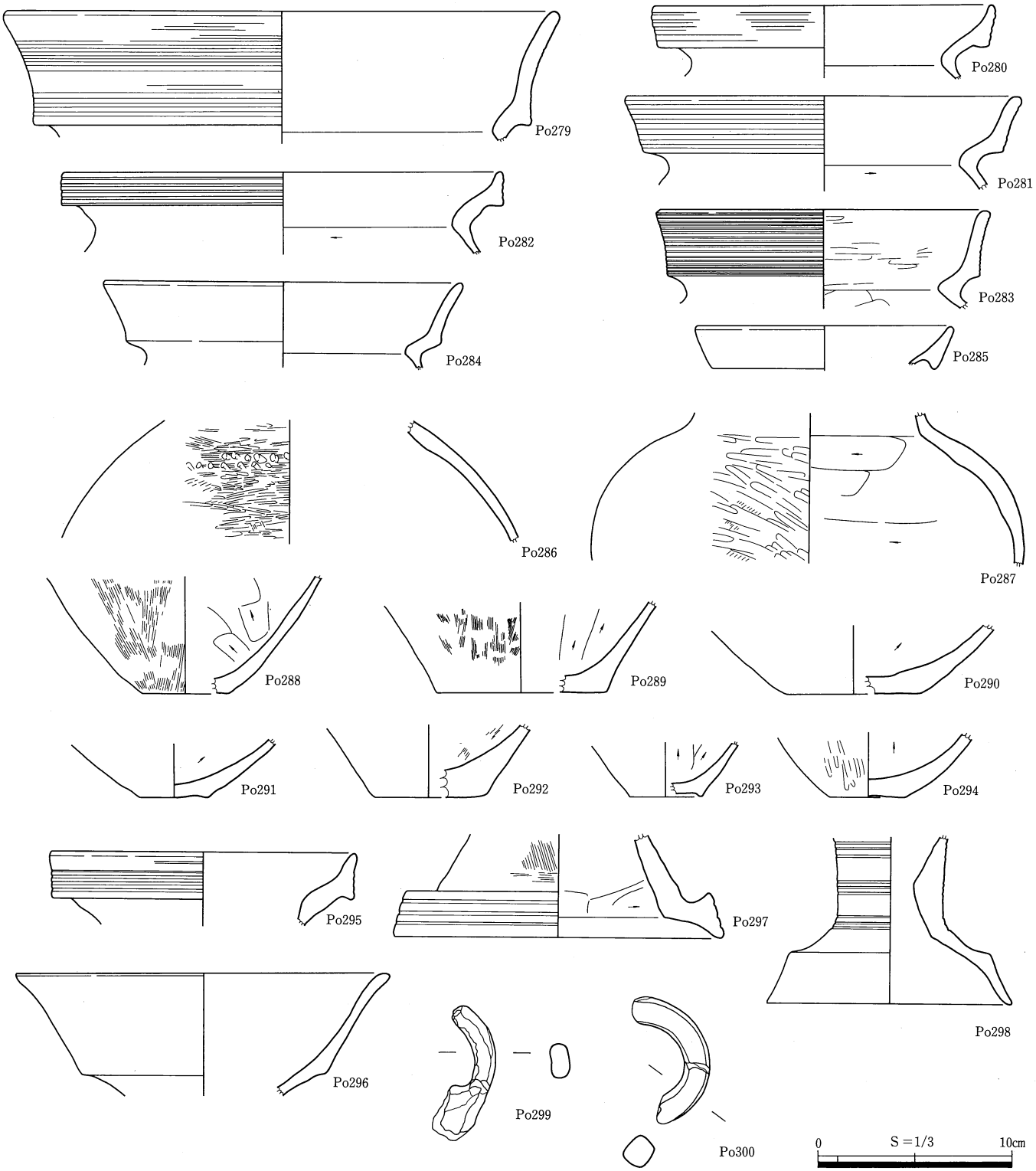
性　　格　　炭化米が出土しているが、形態上の特徴から貯蔵穴とは考え難く、炭化米を廃棄した穴と思われる。



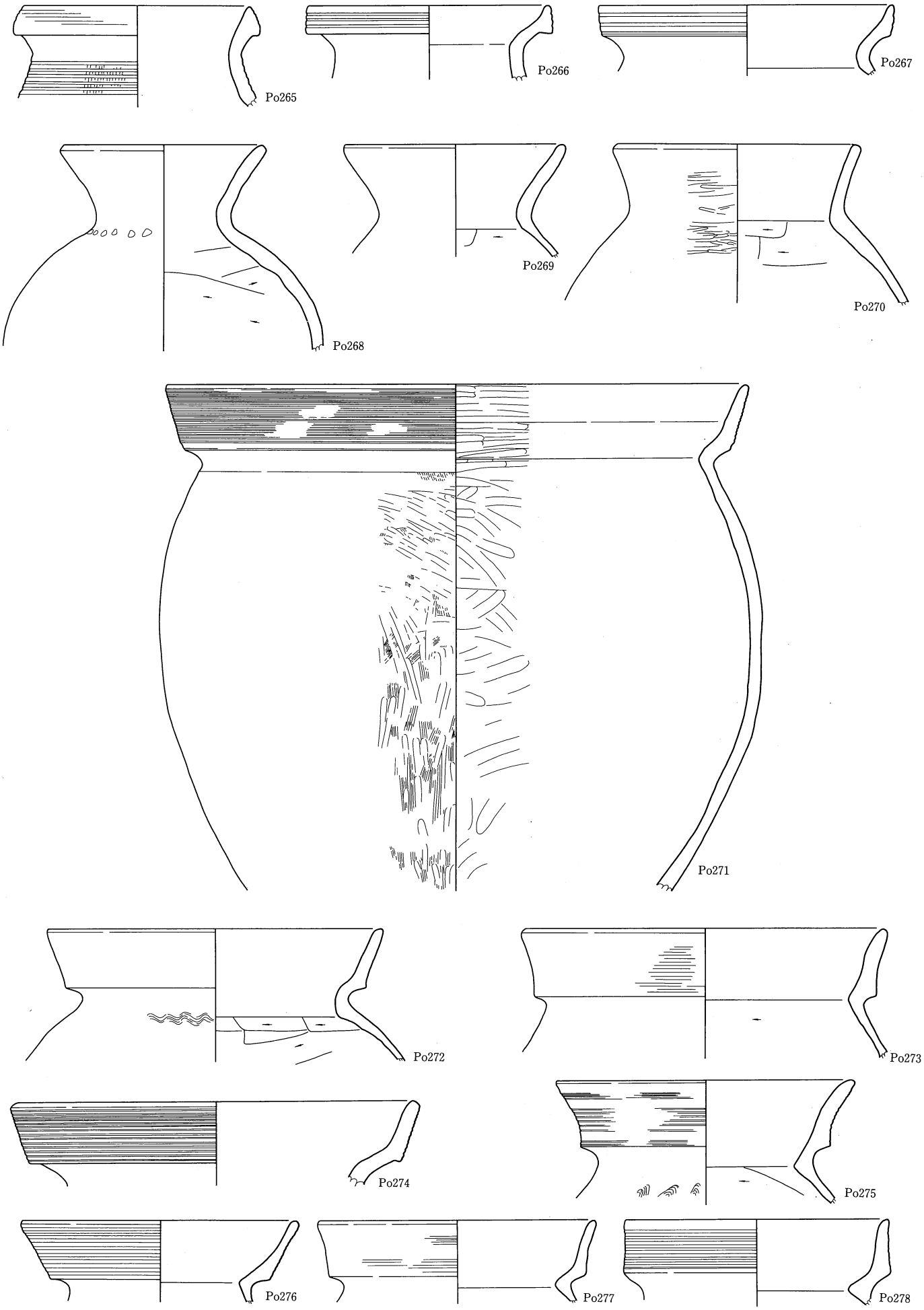
挿図75　ＳＫ08遺構図



挿図76　ＳＫ08出土遺物実測図



挿図77　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り出土遺物実測図(1)



挿図78　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り出土遺物実測図(2)

2．鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り（挿図77～79、図版13・40～42）

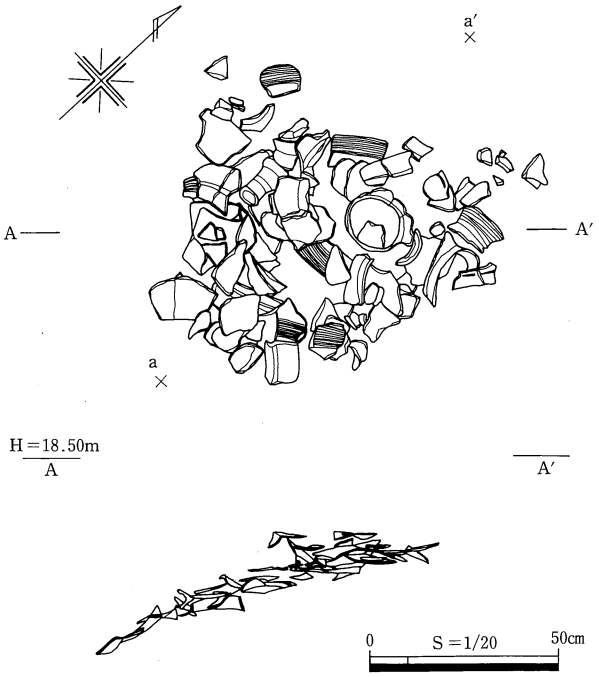
位　　置　鷲谷奥地区Ａ区より東側に下る斜面中央、やや北寄りの15Ｂ・Ｃグリッドにあり、標高約18mの急斜面がやや緩やかになった地点に位置する。北西側約10mにはＳＫ07がある。

遺物出土状況　約36個体の土器が折り重なるように出土している。上方から転落したものとは考え難く、この場所に破棄されたものと考えられる。

図化できたものに壺Po265～Po270、甕Po271～Po287、底部Po288～Po294、鼓形器台Po295～Po298、把手Po299・300がある。

壺は複合口縁をもち外面口縁部に擬凹線のあるものと、「く」の字状口縁をもつものの２種類がある。

甕はいずれも複合口縁をもつ。Po279は外面口縁部の平行沈線をナデ消し、Po272・284・285は外面口縁部を全体にナデている。Po271は非常に大型の甕である。



挿図79　鷲谷奥地区Ｂ区土器溜り遺物出土状況図

時　　期　これらの土器には多少の時期差があり、一括遺物としては考えにくいが、おおよそ岩吉編年III（古）期～III（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

3．鷲谷奥地区Ｂ区遺構外遺物（挿図80・81、図版42）

ここでは、鷲谷奥地区Ｂ区の遺構に伴わない遺物を一括して述べる事とする。

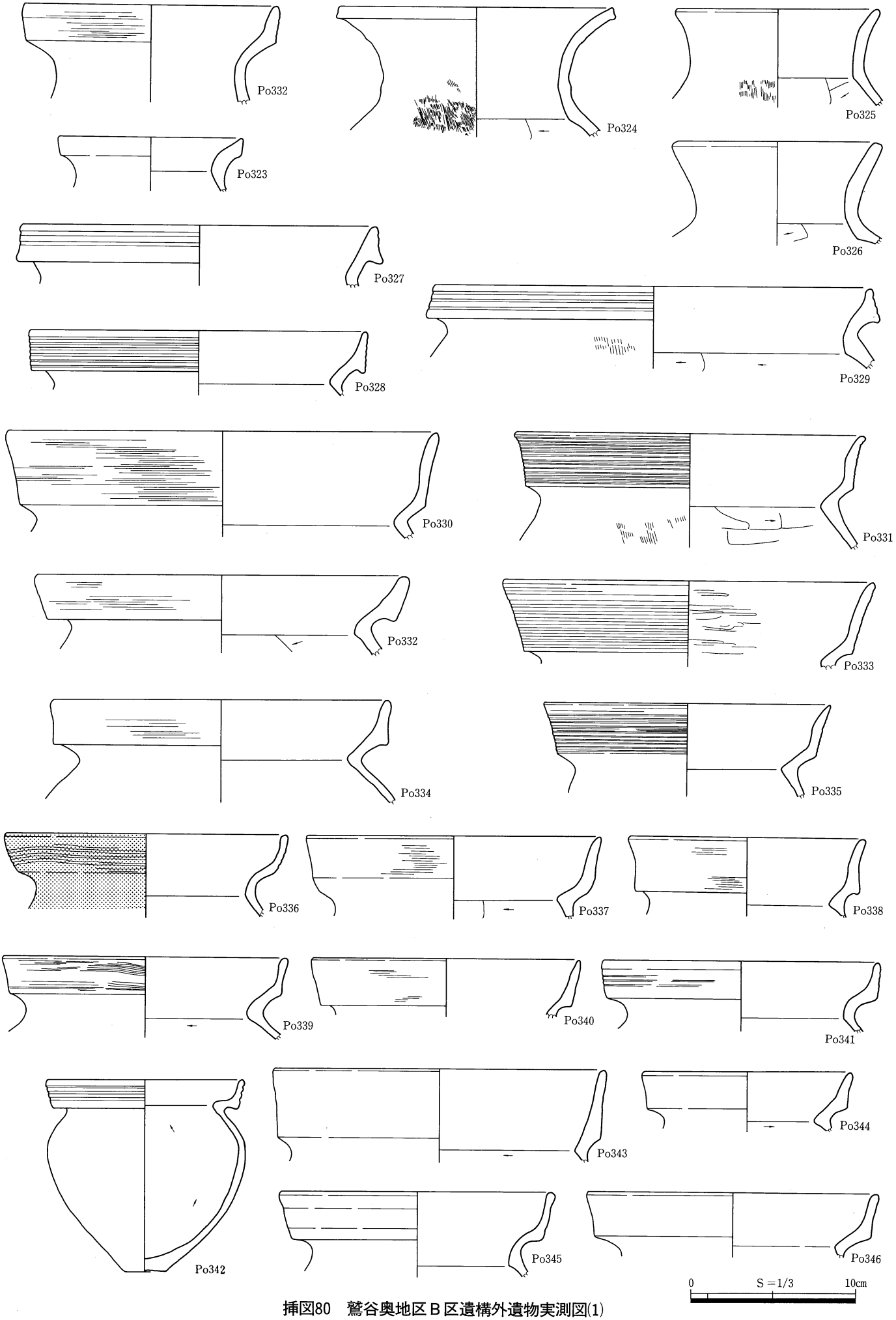
図化できたものには、壺Po322～Po326、甕Po327～Po348、底部Po349～Po357、注口土器Po358、小型特殊壺Po359、高杯Po360～Po362、鼓形器台Po363～Po365、脚付椀Po366、低脚杯Po367、蓋Po368がある。

これらは大半が弥生土器と考えられ、Po327～Po329は岩吉編年II（新）期、Po322～Po326、Po330～Po346、Po349～Po368は岩吉編年III（新）期頃のものと考えられる。

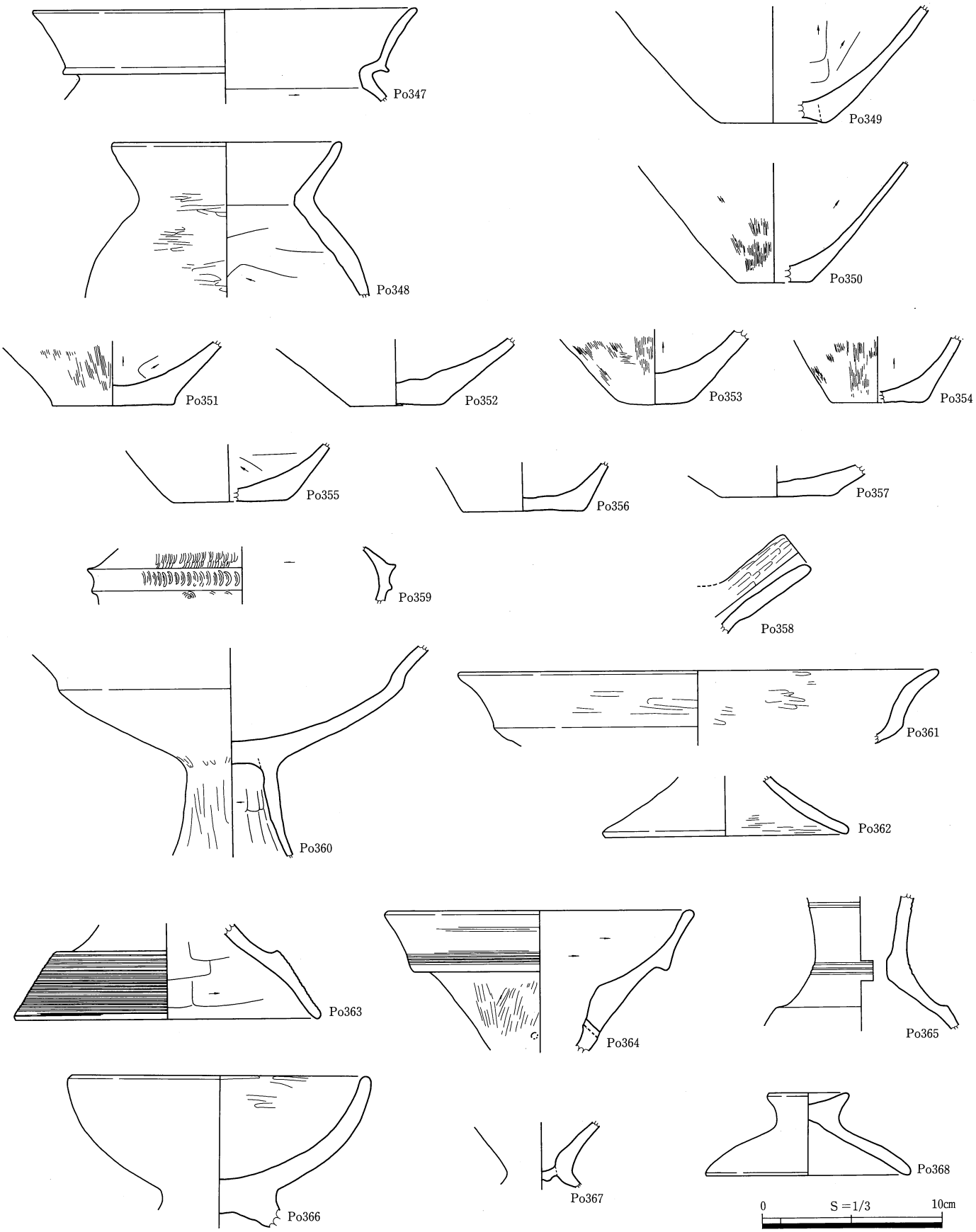
Po347は岩吉編年Ｖ期、古墳時代前期頃のものと考えられる。

これらは、鷲谷奥地区Ａ区の遺構とほぼ同時期のものであり、鷲谷奥地区Ａ区から流れ落ちてきたものと考えられる。

なお、Po359は一般的な集落遺構に伴うものではなく、墳墓関連の遺物と考えられ、以前鳥取市教育委員会によって調査された、この丘陵先端部の四隅突出型墳丘墓、土壙墓群などに関わるものと考えられる。



挿図80　鷲谷奥地区Ｂ区遺構外遺物実測図(1)



挿図81　鷲谷奥地区Ｂ区遺構外遺物実測図(2)

第４章　西桂見遺跡の調査（1995年度）

第１節　西桂見遺跡堤谷地区Ａ区の概要

位　　置　堤谷地区は、標高９～21mの南東方向に延びる狭い丘陵上～斜面にかけての地区で、さらに、地形的特徴から丘陵頂部をＡ区、東斜面部をＢ区、西斜面部をＣ区に分けた。

Ａ区は、標高16～21mの丘陵上の平坦面地区である。

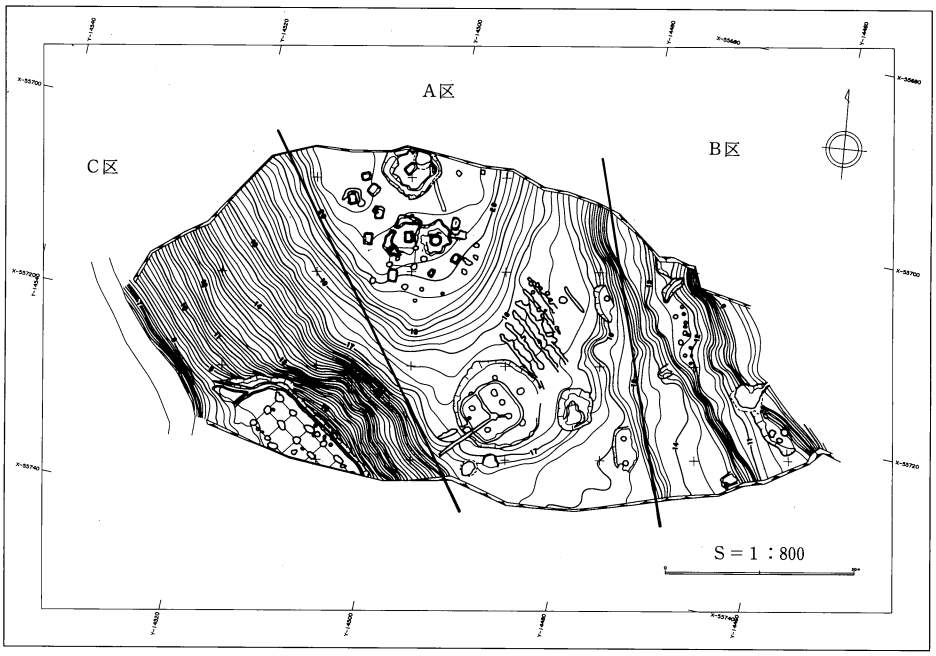
遺　　構　この地区で検出した遺構は、弥生時代後期～中世にかけてのもので、竪穴住居跡４棟、掘立柱建物跡１棟、貯蔵穴と考えられる袋状土坑３基、中世墓13基、不明土坑１基、ピット群２か所、溝状遺構８基である。

弥生時代後期では竪穴住居跡（ＳＩ12）と、掘立柱建物跡（ＳＢ01)、屋外貯蔵穴と考えられる土坑（ＳＫ22～24)、ピット群がセットで検出されている。ピット群01は、一段高い平坦面の縁辺部に並んでおり、杭列または柵であった可能性がある。

古墳時代前期では、竪穴住居跡（ＳＩ11・13・15）が検出されている。

比較的大型のＳＩ11・12・共に、屋外へ延びる排水溝を備えており、竪穴住居の構造的特徴に、他地域からの影響が窺われる。

中世では、墳墓が13基検出された。このうち、周溝を巡らすもの（ＳＫ11・14・16）があり、墓壙のみのものとに階層差があったものと考えられる。また、これらは、土葬墓（ＳＫ11・13・14・16・18・20・21)、火葬墓（ＳＫ09・10・12・15・17・19）に分けることができ、さらに、火葬墓は、荼毘に付したものと火葬骨を埋葬したものに分けることができる。



挿図82　1995年度西桂見遺跡調査区全体図

第２節　西桂見遺跡堤谷地区Ａ区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＳＩ11・12（挿図83～85、図版14～16・43）

位　　置　堤谷地区Ａ区南側の27・28Ｅグリッド、標高約17.3～17.7mの一段低くなった平坦面に、２棟の竪穴住居跡が切りあって位置する。切り合い関係から、一回り小さいものをＳＩ11、ＳＩ11の外側にあるものをＳＩ12とした。東側２mにはＳＫ27が、南東約８mにはＳＩ13がある。また、南西側にはＳＫ23・24が隣接している。

形　　態　ＳＩ11は、遺存状態は非常によく、平面形は隅丸方形を呈す。

ＳＩ11　規模は東西5.1m、南北4.88mを測り、床面積は29.7m²である。壁高は、最も遺存状態のよい東壁で最大0.28mである。

柱穴は床面上で13個検出された。このうち、ＳＩ11に伴うものはＰ１～Ｐ５で、残りはＳＩ12に伴うものと考えられる。主柱穴Ｐ１～Ｐ４のそれぞれの規模は、（48×46－29）cm、（63×58－55）cm、（60×44－68）cm、（52×52－52）cmを測る

主柱穴間距離はＰ１～Ｐ２間から順に2.8m、2.8m、2.8m、2.7mである。

壁溝は、周壁際を全周し、幅10～18cm、深さ４～８cmを測り、断面逆台形を呈す。壁構内に小ピットが数個検出されたが、これは壁溝内に立てたと考えられる板を止める杭状のものと思われる。

中央ピット　中央ピットＰ５は二段掘りを呈すもので、上縁部（80×70－８）cm、下段（46×42－64）cmを測る。中央ピットに向かって、北側壁溝およびＰ３から、幅11～34cm、深さ４～14cmを測る溝が延びている。中央ピットの埋土は２層に分層できたが、⑥層は、炭化物層である。

排 水 溝　また、中央ピットから、南西方向に長さ6.84m、幅22～40cm、深さ13～66cmを測る溝が、住居外へ延びている。底面には、工具痕が明瞭に残っている。この溝の底面は、住居外へ向かって傾斜していることから、排水溝と考えられる。排水溝の底面と中央ピットの底面には段差が認められ、排水溝の方が48cm高い。

貼　　床　中央ピットＰ５の北側で、⑰層による貼床が一部認められた。この部分は、ＳＩ12に伴うと考えられる中央ピットＰ12があり、ＳＩ11の床面整形時にこのピットを埋めるかたちで貼床が施されたものと考えられる。

床面上では焼土面は検出されなかった。

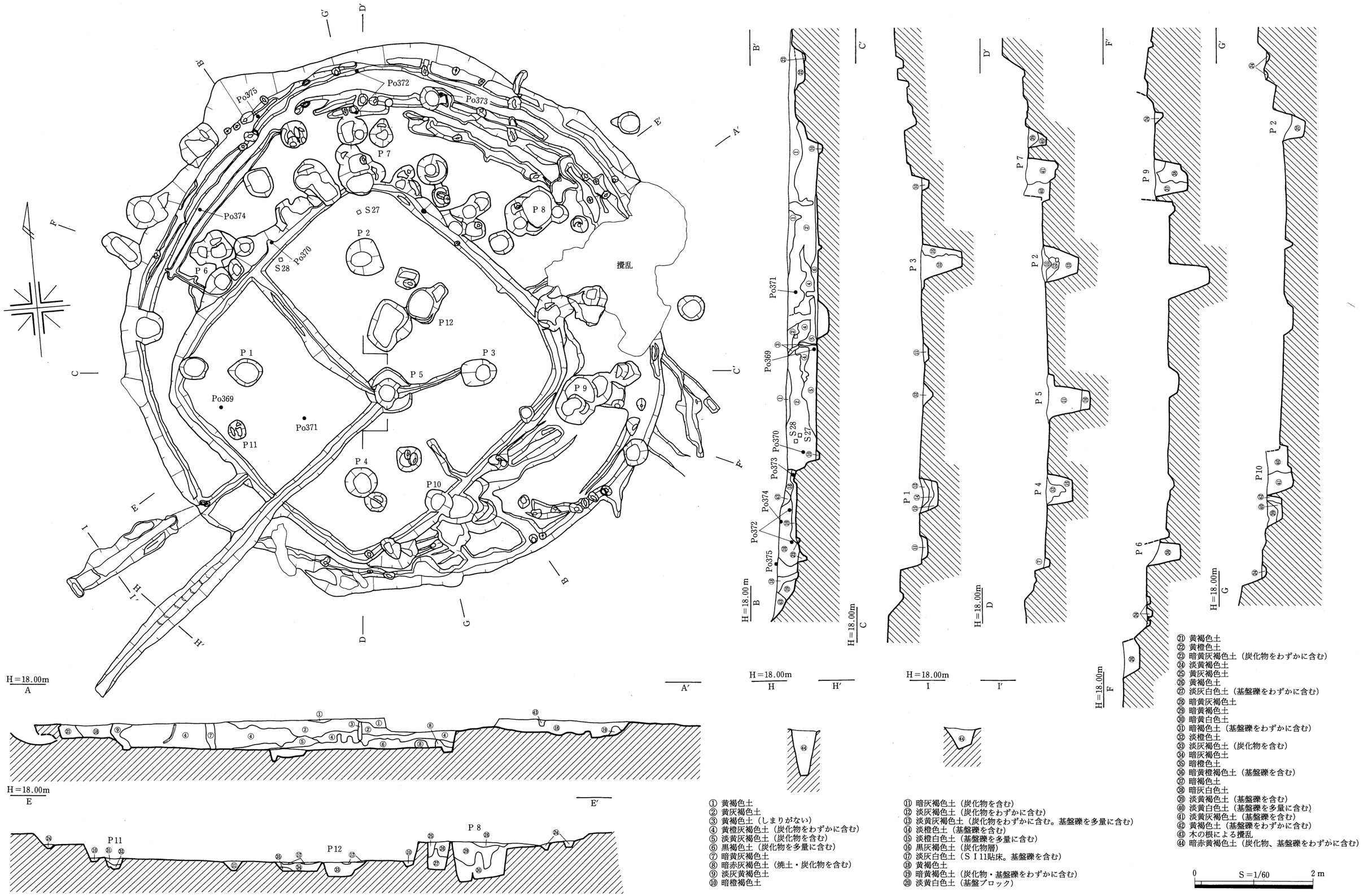
ＳＩ12　ＳＩ12はＳＩ11によって中央部分を切られ、また、東側は後世に攪乱を受けており、遺存状態は余りよくない。周壁の遺存状態から、平面は不整な六角形を呈すものと考えられる。

規模は、東西9.04m、南北8.8mを測り、床面積は60.4m²と非常に大型である。壁溝は、最も遺存状態のよい北側壁で最大0.43mである。

柱穴は、床面上及び一部ＳＩ11の床面上にも遺存するものが多数あり、この住居跡は数回の建て替えがあったことが窺われる。最終的な主柱穴はＰ６～Ｐ11の６個と考えられ、規模は、Ｐ６（50×39－54）cm、Ｐ７（94×62－49）cm、Ｐ８（93×70－65）cm、Ｐ９（80×62－54）cm、Ｐ10（50×40－65）cm、Ｐ11（32×30－27）cmを測る。このうちＰ７は３個のピットが切り合うように検出され、また、Ｐ11はＳＩ11床面上で検出された。

壁溝は、周壁際をほぼ全周し、幅12～20cm、深さ６～12cmを測り、断面「Ｕ」字状を呈す。壁溝内に小ピットが検出されており、これらは壁溝内に立てた板などを止めるための杭跡と考えられる。

また、床面上には同心円状に走る壁溝と考えられる溝が３本認められることから、この住居は少なくとも３回の建て替えがあったものと推察される。



挿図83　ＳＩ11・12遺構図

中央ピット　ＳＩ12に伴う中央ピットは、ＳＩ11床面上で検出されたＰ12と考えられる。規模は、(53×52－25)cmを測る。埋土は３層に分層できた。

埋　　土　ＳＩ11の埋土は10層に分層できた。このうち、⑥層は炭化物を多量に含む層である。また、⑨層は壁溝から立ち上がるように検出されたもので、板が腐朽したものと考えられる。

ＳＩ12の埋土は３層に分層できた。

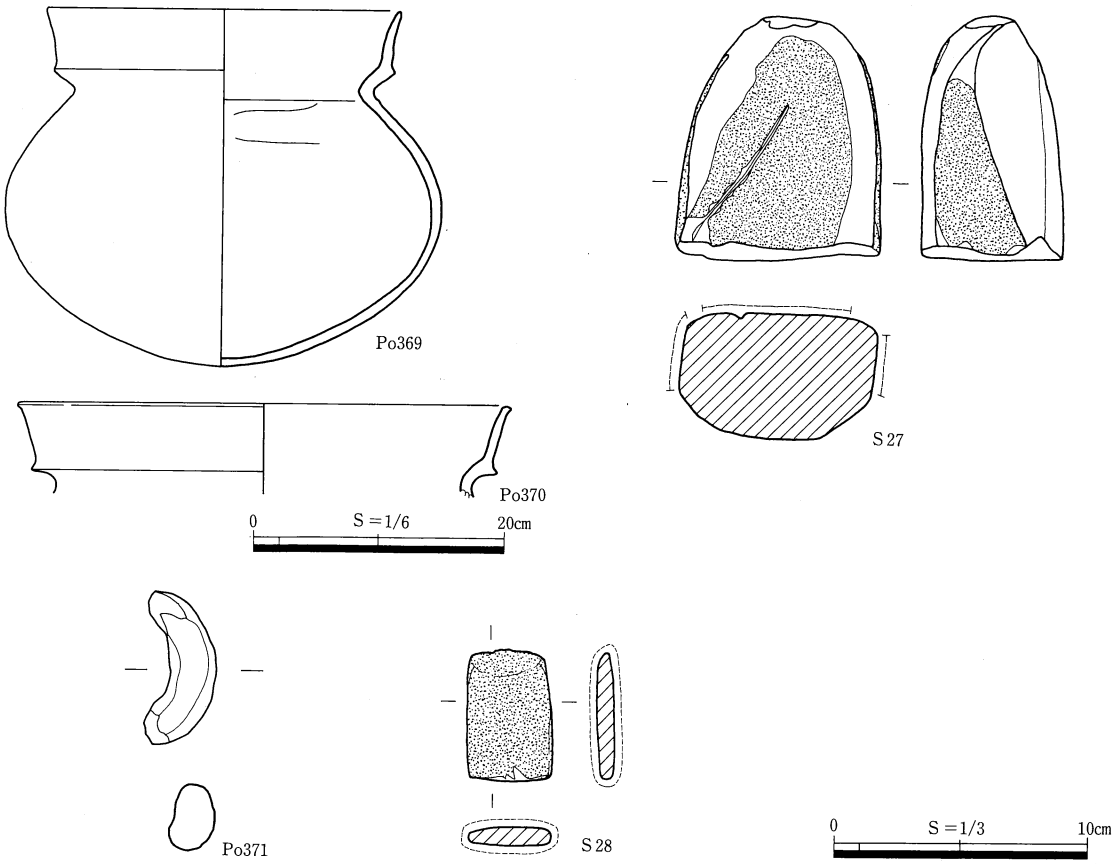
遺物出土状況　ＳＩ11の出土遺物には、図化できたものに、甕Po369・Po370、把手Po371、砥石Ｓ27・Ｓ28がある。

このうち、北西側床面からPo369が出土している。その他の遺物は、埋土中からの出土である。

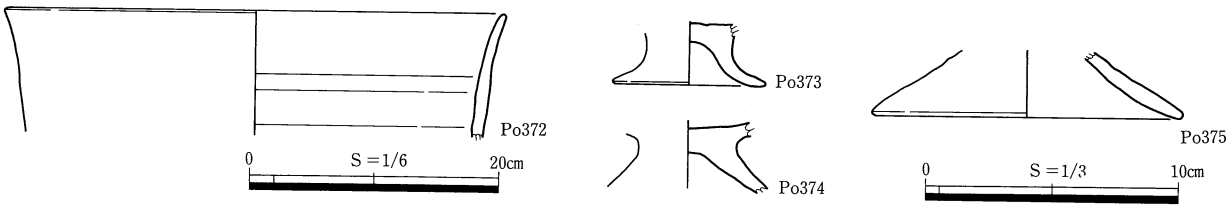
ＳＩ12の出土遺物には、図化できたものに、甑Po372、低脚杯Po373・Po374、蓋Po375がある。

いずれも埋土中からの出土である。

時　　期　出土遺物より、ＳＩ11の時期は岩吉編年Ｖ（新）～Ⅵ（古）期・古墳時代前期前半頃のものと考えられる。一方ＳＩ12はＳＩ11より遡るもので、岩吉編年Ｖ期（古）・弥生時代後期後半～古墳時代前期頃のものと考えられる。



挿図84　ＳＩ11出土遺物実測図



挿図85　ＳＩ12出土遺物実測図

ＳＩ13（挿図86・87、図版16）

位　　置　堤谷地区Ａ区の南東側の28Ｆ・29Ｆグリッドにあり、標高15.7～16.2mの平坦面に位置する。西側約10mにはＳＩ12がある。

形　　態　遺存状況は悪く、東側半分以上が流失し、また、南側が攪乱を受けている。平面形は、遺存する壁の状態から隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.2m以上、南北4.3m以上を測り、床面積は7.7m²以上である。

周辺は、後世の攪乱で削平されたものと思われ、壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.13mと低い。

壁溝はほぼ全周するものと考えられ、幅６～24cm、深さ４～７cm、断面「Ｕ」字状を呈す。

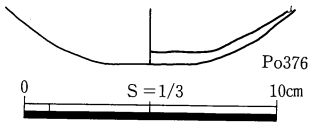
検出された主柱穴はＰ１・Ｐ２の２個であるが、本来は４個あったものと考えられる。それぞれの規模は、Ｐ１（51×46－53）cm、Ｐ２（52×51－66）cmを測る。

主柱穴間距離は、2.7mである。

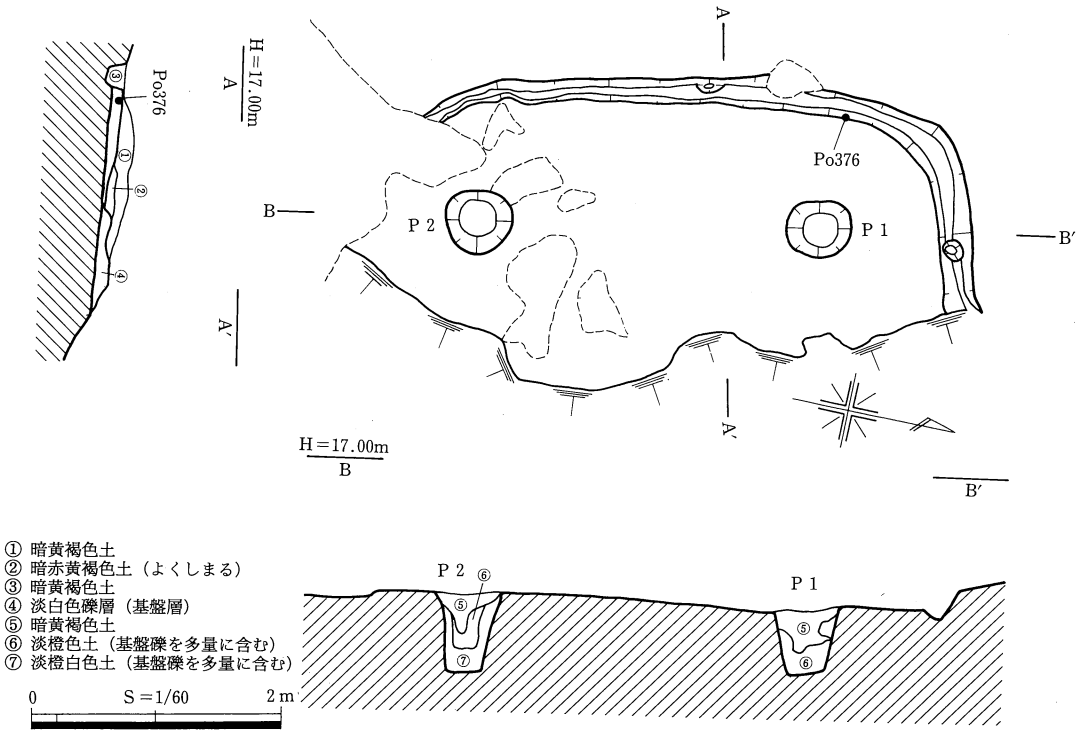
埋　　土　埋土は暗黄褐色土１層で、②④層は貼床または基盤層と考えられる。

遺物出土状況　図化できたものには、北西側床面直上から出土した底部Po376のみである。Po376は、わずかに平底を呈すものである。

時　　期　床面出土の土器から、岩吉編年Ｖ（古）期、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃のものと考えられる。



挿図86　ＳＩ13出土遺物実測図



挿図87　ＳＩ13遺構図

ＳＩ15（挿図88・89、図版16・43）

位　　置　堤谷地区Ａ区の中央東側の28・29Ｄグリッドにあり、標高16～17.1mの東側に傾斜する斜面に位置する。南側約11mにはＳＩ13がある。

形　　態　遺存状況は悪く、東側半分以上は流失している。平面形は、遺存する壁の状態から隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西1.4m以上、南北3.8m以上を測り、床面積は3.7㎡以上である。

壁高は、最も依存状態のよい西壁で最大0.97mを測る。

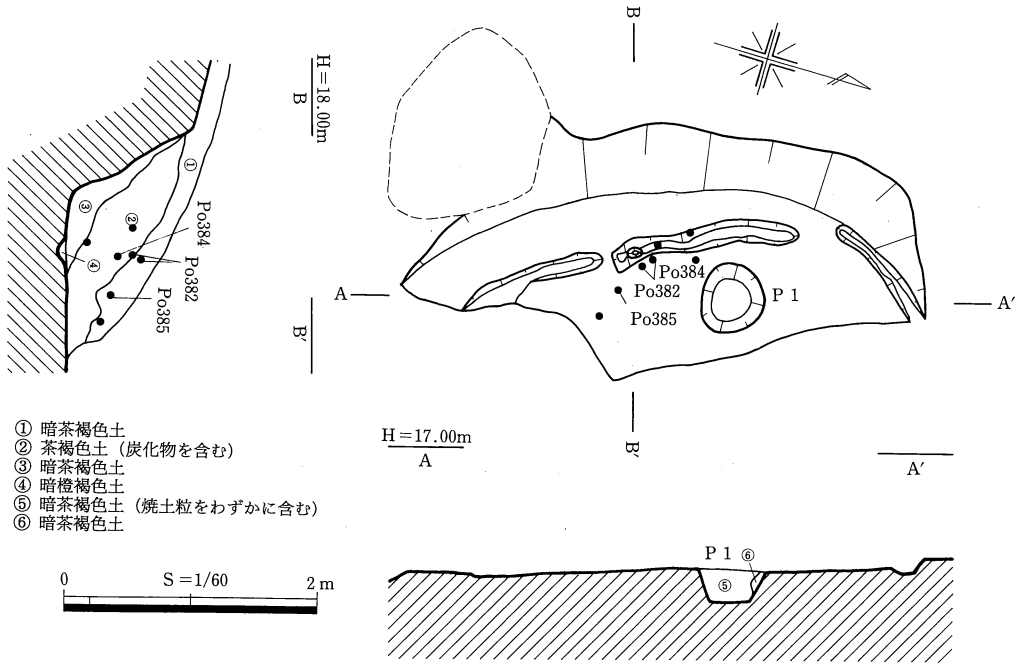
壁溝は周壁の内側で検出された。幅14～20㎝、深さ３～６㎝、断面「Ｕ」字状を呈す。

主柱穴と考えられるものはＰ１のみで、（56×48－26）㎝を測る。

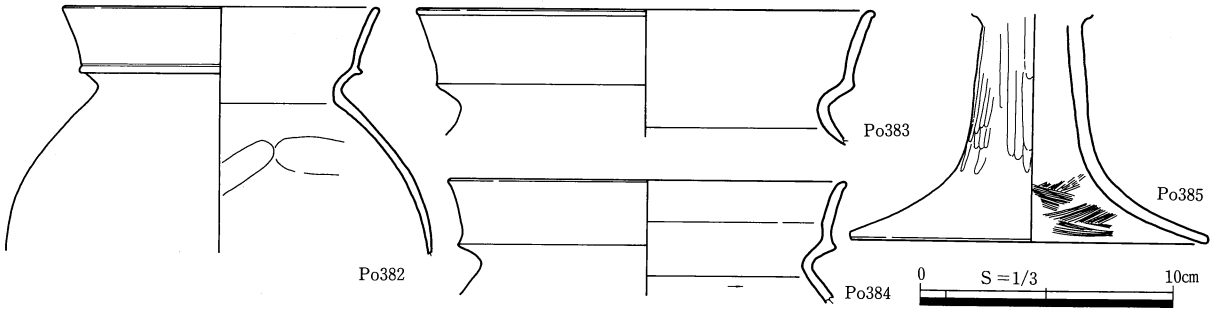
埋　　土　埋土は３層に分層できた。いずれも住居中央に向かって傾斜しており、自然堆積したものと考えられる。②層中には炭化物を含んでいる。

遺物出土状況　図化できたものには、甕Po382～Po384、高杯脚部がある。甕は口縁端部が平坦面を持つものである。いずれも埋土上層中からの出土である。

時　　期　出土土器から、岩吉編年Ⅵ（古）期、古墳時代前期頃のものと考えられる。



挿図88　ＳＩ15遺構図



挿図89　ＳＩ15出土遺物実測図

2．掘立柱建物跡

ＳＢ01（挿図90、図版18）

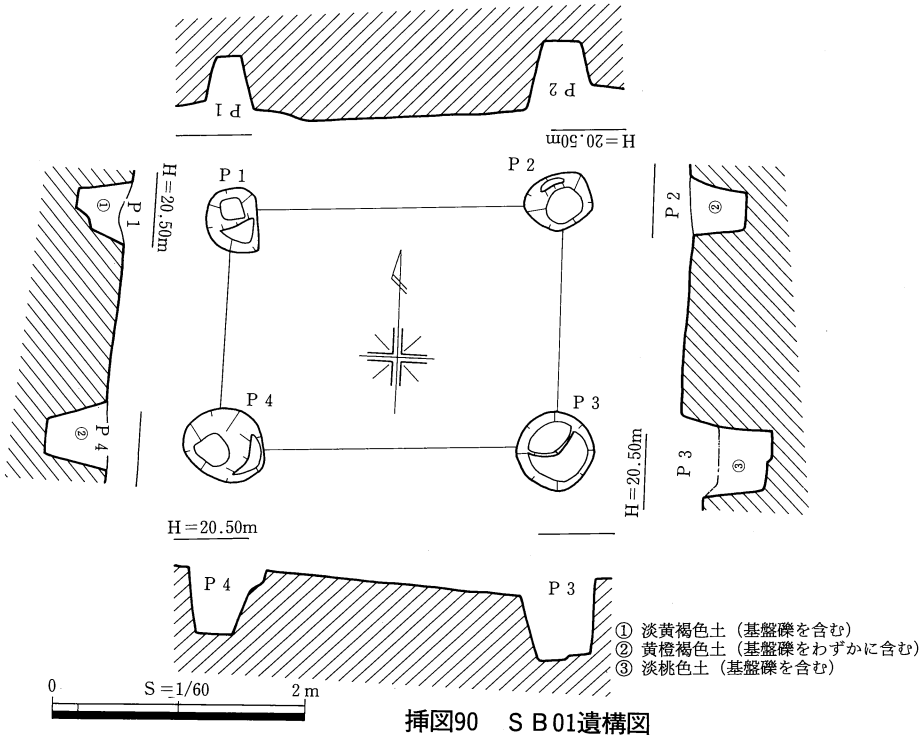
位　　置　　堤谷地区Ａ区の中央部の26Ｃ・27Ｃグリッドにあり、標高20.4mの一段高くなった平坦面に位置する。北側約10mにはＳＫ22がある。

形　　態　　桁行１間、梁行１間の掘立柱建物跡である。主軸方向は、Ｎ－90°－Ｅと東西方向を向く。柱穴はＰ１～Ｐ４の４個で、それぞれの規模は、Ｐ１（51×40－43）cm、Ｐ２（50×44－57）cm、Ｐ３（61×60－60）cm、Ｐ４（68×57－54）cmを測る。主柱穴間距離は、Ｐ１～Ｐ２から順に、2.7m、1.8m、2.7m、1.9mである。

埋　　土　　埋土は、Ｐ１が①層、Ｐ２・Ｐ４が②層、Ｐ３が③層それぞれ単層で入る。

遺　　物　　遺物は出土していない。

時　　期　　時期を比定できる遺物が出土していないために、時期は不明であるが、埋土の状況から中世墓以前のものと考えられ、おそらく、弥生時代後期頃のものと推察される。



挿図90　ＳＢ01遺構図

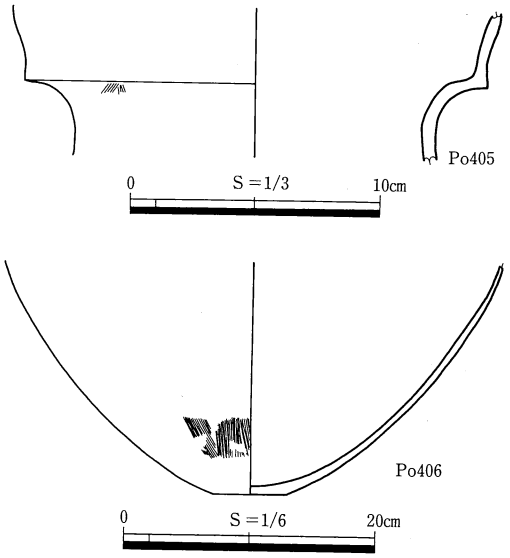
3．土坑・土壙

ＳＫ22（挿図91・92、図版16・43）

位　　置　　堤谷地区Ａ区北側調査区際の26Ｂグリッドにあり、標高約20.8mの一段高くなった平坦面に位置する。南西側がＳＫ16と接している。

形　　態　　ＳＤ18掘り下げ中に検出されたために、上部は削平され、遺存状況はあまりよくない。平面は上縁部不整楕円形、底面円形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部長軸1.65m、短軸1.36m、底面長軸1.95m、短軸1.85m、深さ1.45mを測る。

埋　　土　　埋土は、７層に分層できた。いずれも基盤礫を多量に含むもので、壁が崩落しながら埋



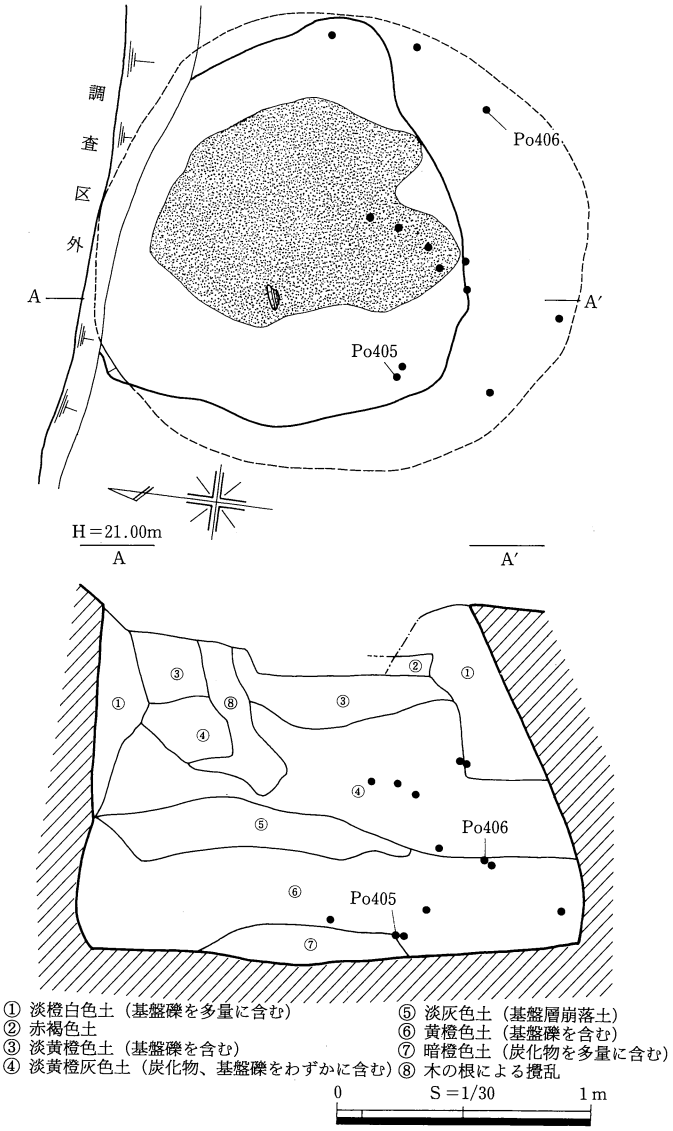
挿図91　ＳＫ22出土遺物実測図

まっていったものと考えられる。このうち、⑦層は炭化物を多量に含み、底面ほぼ中央部分にのみで検出されたことから、上屋の覆いが焼け落ちたものと考えられる。

遺物出土状況　埋土中で弥生土器片が出土しているが、このうち図化できたものに壺Po405、胴部Po406がある。いずれも埋土最下層中からの出土で、Po406は壁際で出土している。

時　期　出土遺物から、岩吉編年Ⅲ（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性　格　断面の形態から、貯蔵穴として使用されたものと考えられる。



挿図92　ＳＫ22遺構図

ＳＫ23（挿図93、図版17）

位　置　堤谷地区Ａ区南側27Ｆグリッドにあり、標高約16.9～17.3mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。北側約１mにはＳＩ12、西側約１mにはＳＫ24がある。

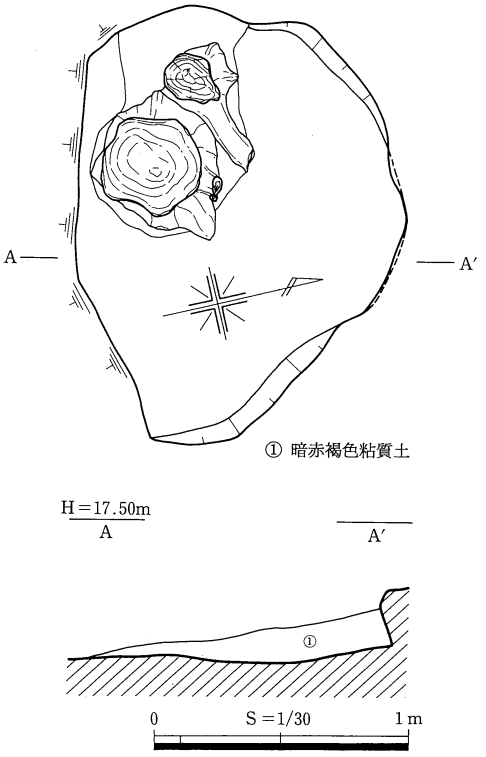
形　態　遺存状況は非常に悪く、南側は流失しており、基底部のみ検出された。平面は不整な半円形、断面袋状を呈す。規模は、基底部で長軸1.63m、短軸1.3 m以上、深さ0.44mを測る。

埋　土　埋土は、暗赤褐色粘質土単層である。

遺　物　遺物は出土していない。

時　期　遺物が出土していないため、確かな時期は不明である。

性　格　断面の形態から、貯蔵穴として使用されたものと考えられる。



挿図93　ＳＫ23遺構図

ＳＫ24（挿図94・95、図版17・44）

位　置　堤谷地区Ａ区南側の26Ｆグリッドにあり、標高約16.4～16.8mの緩やかに西側に傾斜する斜面に位置する。北東側約２mにＳＩ12、東側１mにＳＫ23がある。

形　態　遺存状況は比較的よく、平面は上縁部不整楕円形、底面不整円形、断面袋状を呈す。規模は、上縁

部長軸1.75m、短軸1.31m、底面長軸1.89m、短軸1.8m、深さ1.12mを測る。

埋　土　埋土は、9層に分層できた。③層以下は基盤礫を多量に含みよく締まるもので、壁が崩落した後、一時的にこの面で再使用されたものと考えられる。

遺物出土状況　埋土中で弥生土器片が出土しているが、このうち図化できたものに甕Po407、低脚杯Po408・Po409がある。Po407・409は埋土上層から、Po408は埋土下層からの出土である。

時　期　出土遺物から、岩吉編年III（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性　格　断面の形態から、貯蔵穴として使用されたものと考えられる。

4．中世墓

ＳＫ09（挿図96・97、図版17・44）

位　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃグリッドにあり、標高約20.7mの一段高くなった平坦面に位置する。ＳＫ09の北側約１ｍにはＳＫ18、西側約２ｍにはＳＫ15がある。

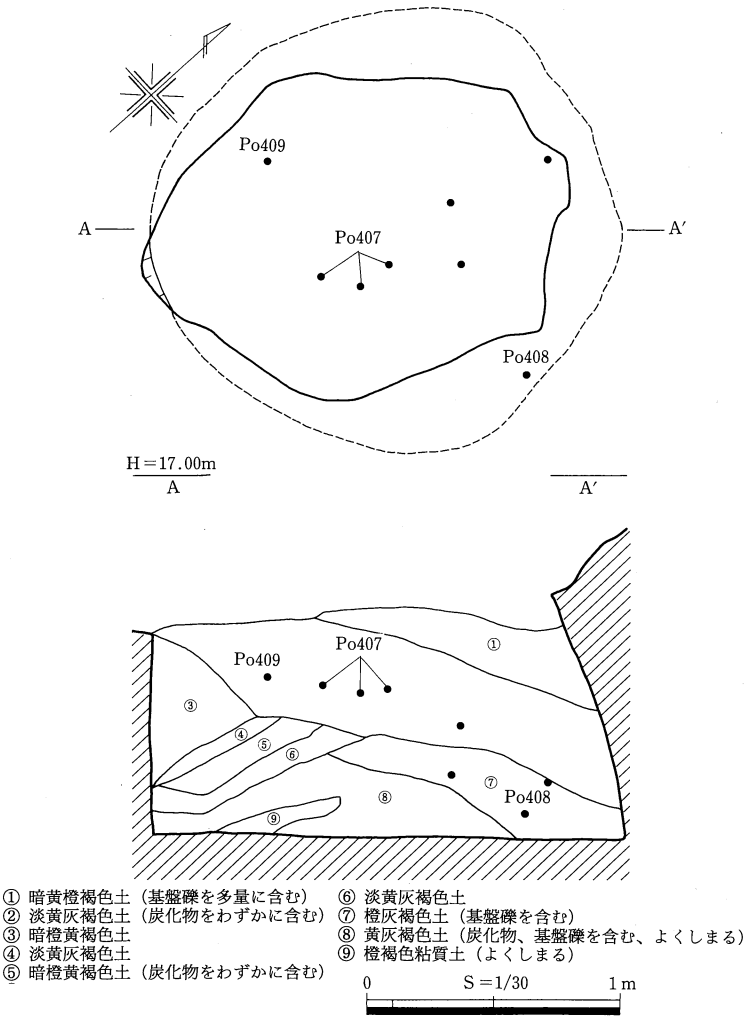
形　態　平面は隅丸長方形を呈し、底面は不整形で凹凸が著しい。規模は、長軸1.20m、短軸1.01m、深さ最大0.44mを測る。長軸方向は、N-42°-Eである。

埋　土　埋土は、４層に分層できた。このうち、底面付近の③層中には、炭化物を多量に含んでいる。

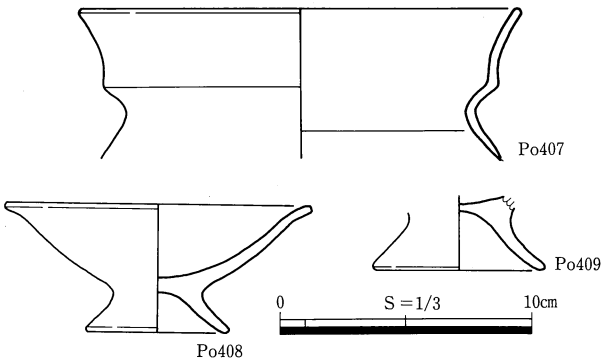
遺　物　底面ほぼ中央部から、原形をとどめないほどに溶けた銅銭と考えられるＢ３が出土している。

時　期　時期を比定する遺物が出土していないため、確かな時期は不明であるが、^{14}Ｃ年代測定の結果、B.P.280±40年という結果が得られた。しかし、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。

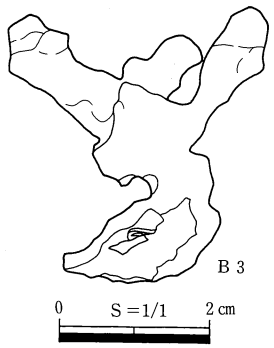
性　格　多量の炭化物及び、熱変した銅銭が出土しているが、焼土面が検出されていないことから、他の場所で荼毘に付した遺体及び遺物を葬ったものと考えられる。



挿図94　ＳＫ24遺構図



挿図95　ＳＫ24出土遺物実測図



挿図96　ＳＫ09出土遺物実測図

ＳＫ10（挿図98・99、図版17・18・44）

位　　置　堤谷地区Ａ区北側の27Ｃグリッドにあり、標高約20.4mの一段高くなった平坦面に位置する。南側約２ｍにはＳＫ14がある。

形　　態　平面は、上縁部・底面とも長方形を呈す。規模は、長軸1.31m、短軸0.69m、深さ最大0.17mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、Ｎ－8°－Ｅである。

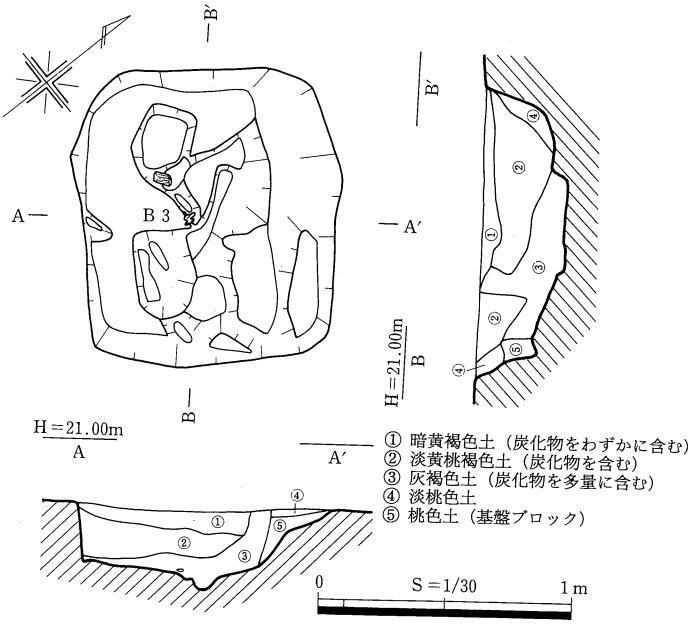
埋　　土　埋土は、２層に分層できた。このうち、①層中には炭化物を含んでいる。

焼 土 面　底面南寄り及び西側長辺壁に、不整形に広がる焼土面が検出された。

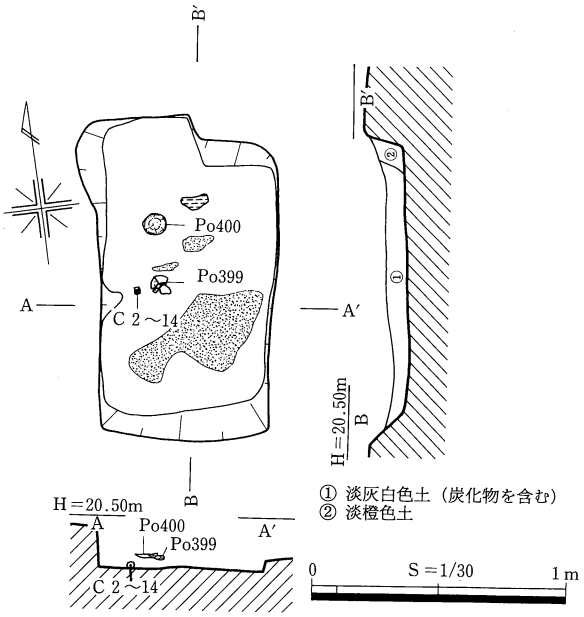
遺物出土状況　底面中央部やや西寄りで、土師器皿Po399～Po401溶着した銅銭Ｃ１～Ｃ13が出土している。また、①層中から鉄釘Ｆ41～Ｆ45、人骨片が出土している。

時　　期　出土遺物から、中世末頃のものと考えられ、また、^{14}Ｃ年代測定の結果B.P.470±40年という結果を得た。

性　　格　埋土中に炭化物及び底面で焼土面が検出されていること、熱で溶着したと考えられる銅銭が出土していることから、この場所で茶毘に付したものと考えられる。



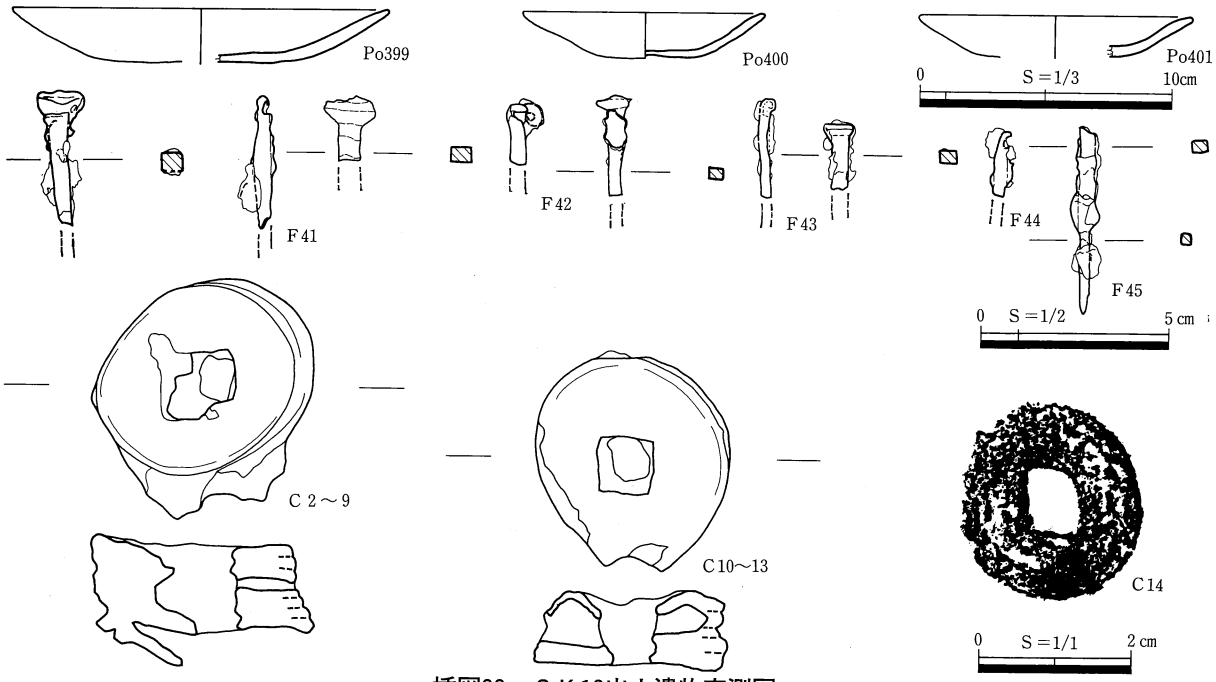
挿図97　ＳＫ09遺構図



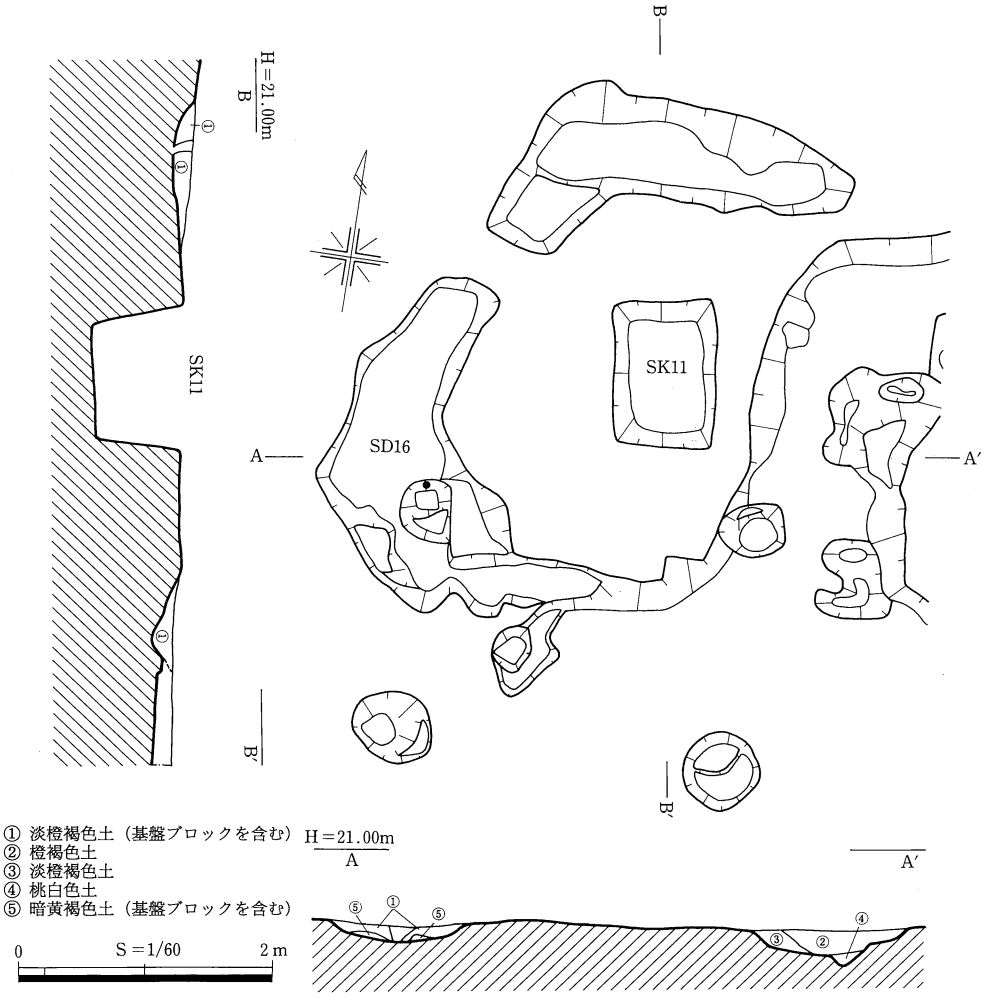
挿図98　ＳＫ10遺構図

ＳＫ11・ＳＤ16（挿図100・101、図版18・44・45）

位　　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃ・27Ｃグリッドにあり、標高約20.4mの一段高くなった平坦面に位置する。



挿図99　ＳＫ10出土遺物実測図



挿図100　ＳＫ11・ＳＤ16遺構図

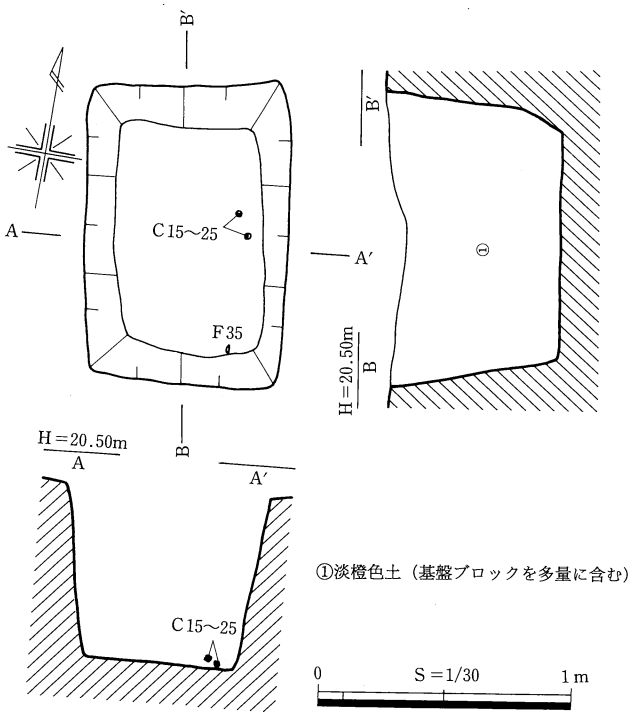
ＳＫ11に伴う周溝ＳＤ16の東側は、ＳＫ14の周溝のＳＤ17と共有している。ＳＫ11の西側約４ｍにはＳＫ15が、東側約２ｍにはＳＫ14がある。

形　態　平面は、上縁部・底面とも長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.21m、短軸0.83m、深さ最大0.73mを測る。底面は、長軸0.92m、短軸0.6mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-8°-Wである。

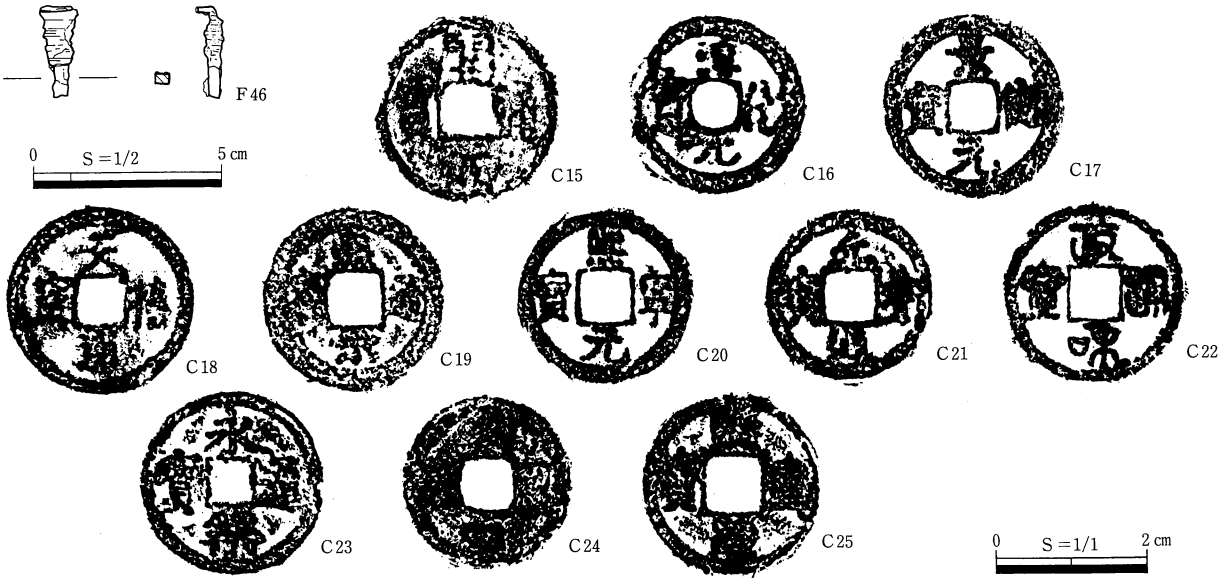
埋　土　埋土は、淡橙色土単層である。

周　溝　周囲には、不整長方形に巡る周溝ＳＤ16がある。東側はＳＤ17と共有し、切り合い関係は確認されなかった。北西側でブリッジ状に途切れる部分がある。幅は一定ではなく、0.58～1.3mを測る。深さは、５～９cmと浅く、最大28cmである。

墓壙は、溝に区画された中心部ではな



挿図101　ＳＫ11遺構図



挿図102　ＳＫ11出土遺物実測図

く、やや東側に偏って掘り込まれている。

遺物出土状況　ＳＫ11底面中央部東壁寄りで、銅銭Ｃ14～Ｃ24が２か所に離れて出土している。また、南壁際で鉄釘Ｆ46が出土している。

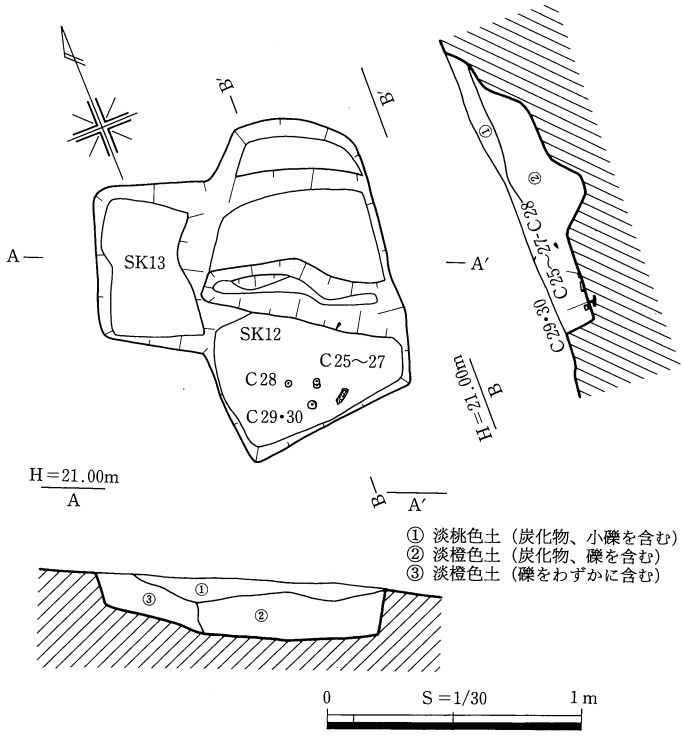
またＳＤ16内では、土師質土器片が出土しているが図化できなかった。

時　期　出土遺物から、中世末頃のものと考えられる。

用　途　炭化物及び焼土面が検出されておらず、掘り込みも深いことから土葬墓と考えられる。

ＳＫ12・13（挿図103 ～105 、図版19・45・46）

位　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃグリッドにあり、標高約20.6mの一段高くなった平坦面に位置する。検出面は不整形な凸形を呈しており、２基の土壙が切りあっているものと判断し、東側のものをＳＫ12、西側のものをＳＫ13とした。ＳＫ13の北西側約２ｍにはＳＫ15が、ＳＫ12の南側約２ｍにはＳＫ19がある。

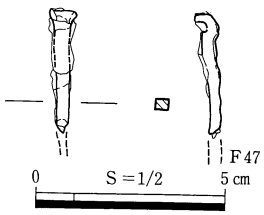


挿図103　ＳＫ12・13遺構図

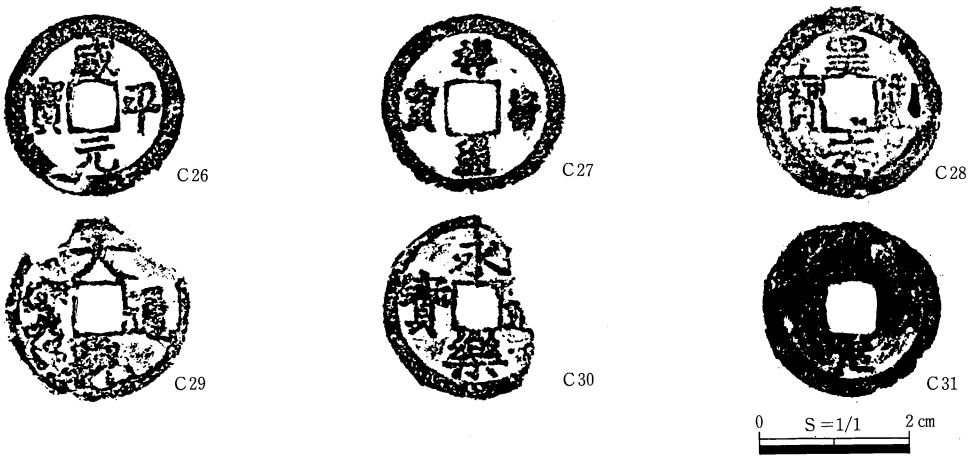
形　態　ＳＫ12は、平面は上縁部・底面とも不整形な長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.24m、短軸0.83m、深さ最大0.22mを測る。底面は、長軸1.15m、短軸0.75mを測る。底面中央は、溝が掘られている。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-1°-Eである。

ＳＫ12

ＳＫ13　ＳＫ13は、ＳＫ12によって切られる形で検出され、ＳＫ12とは直交するものと考えられる。平面形は不明であるが、本来は長方形を呈すものと考えられる。残存規模は、長軸0.4m以上、短軸0.66m、深さ最大0.18mを測る。



挿図104　ＳＫ12出土遺物実測図(1)

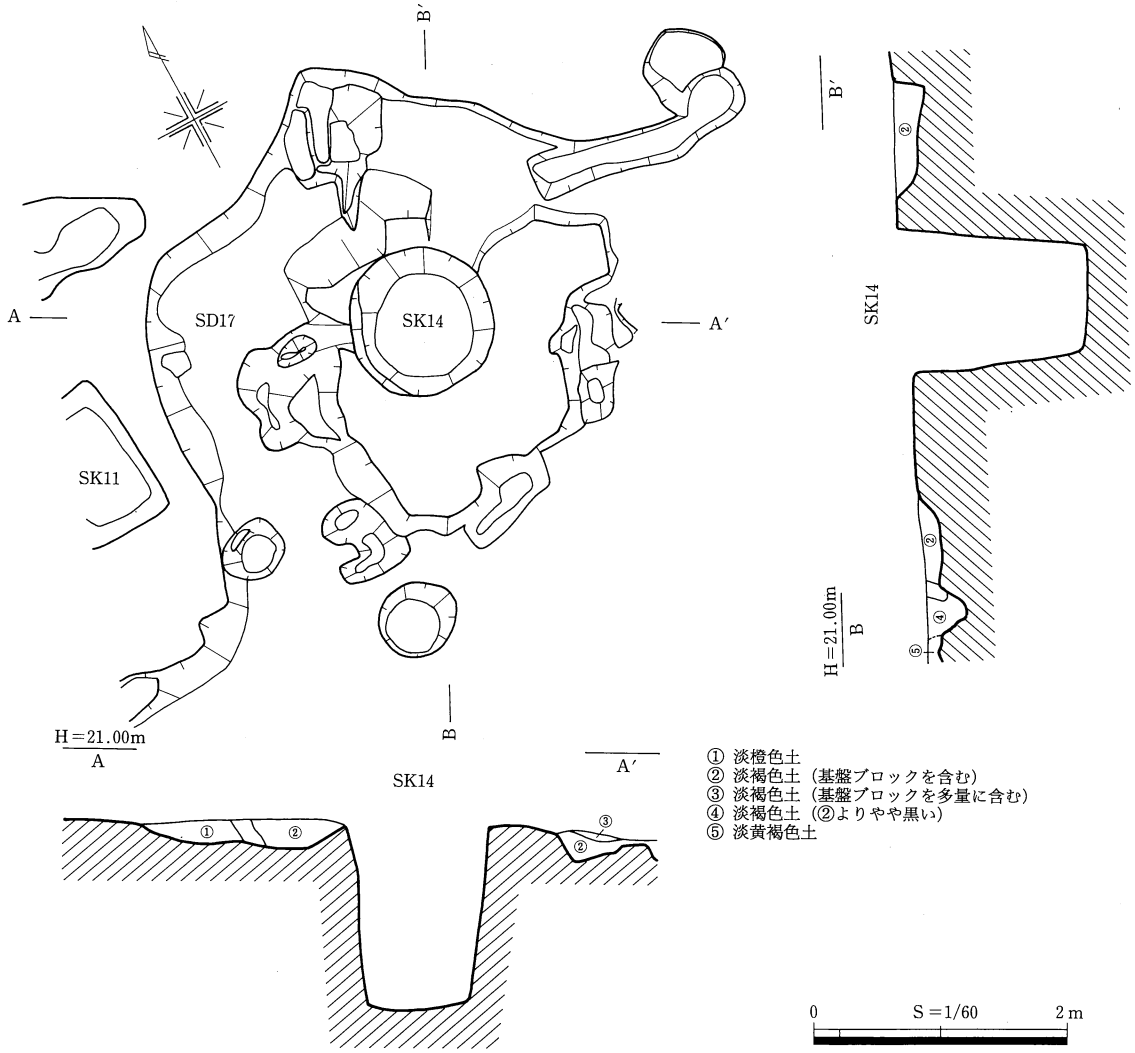


挿図105　ＳＫ12出土遺物実測図(2)

埋　　土　　埋土は、３層に分層できた。①・②層中では炭化物が検出されている。

遺物出土状況　　ＳＫ12底面南壁際で、銅銭Ｃ26～Ｃ31が３か所に離れて出土している。また、やや離れて鉄釘Ｆ47が出土している。

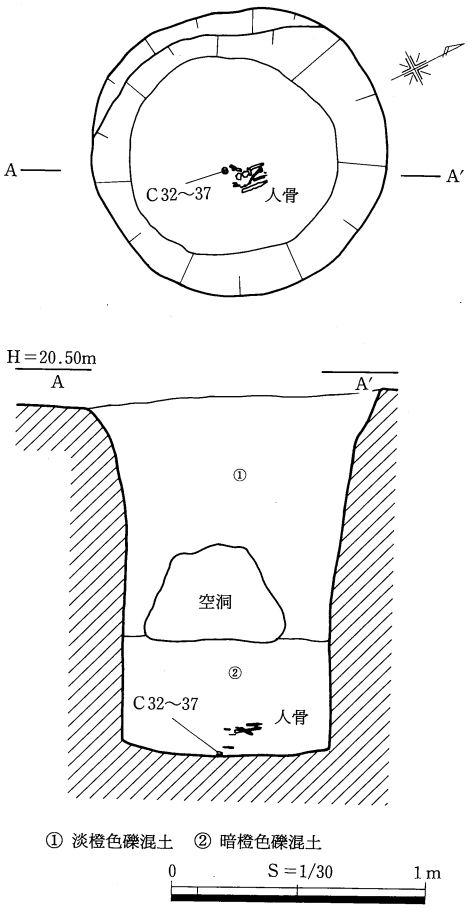
時　　期　　出土遺物から、ＳＫ12は中世末頃のもの、ＳＫ13はこれより若干遡るものといえる。また、ＳＫ12



挿図106　ＳＫ14・ＳＤ17遺構図

出土の炭化物の^{14}C年代測定の結果、B.P.540±30年の結果を得た。

性　格　ＳＫ12の埋土中から炭化物が出土しているが、焼土面が検出されておらず、他所で荼毘に付された後埋葬されたものと考えられる。また、ＳＫ13については、埋土中からは炭化物等が検出されていないことから、土葬墓であった可能性があるが、中世墓の大半が切り合い関係を持たないことから、使用されなかった掘り込みとも考えられる。



挿図107　ＳＫ14遺構図

ＳＫ14・ＳＤ17（挿図106～108 、図版19・20・46）

位　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃグリッドにあり、標高約20.4mの平坦面に位置する。ＳＫ14に伴う周溝ＳＤ17の西側は、ＳＫ11の周溝ＳＤ16と共有している。ＳＫ14の南東側約２ｍにはＳＫ17が、北東側約２ｍにはＳＫ10がある。

形　態　平面は、上縁部・底面とも円形を呈す。規模は、上縁部長軸1.19m、短軸1.17m、深さ最大1.50mを測る、非常に深く掘られたものである。底面は、長軸0.83m、短軸0.8mを測る。断面は、長方形を呈す。

埋　土　埋土は２層に分層でき、②層中から人骨片が出土している。埋土中ほどには、空洞部分がある。

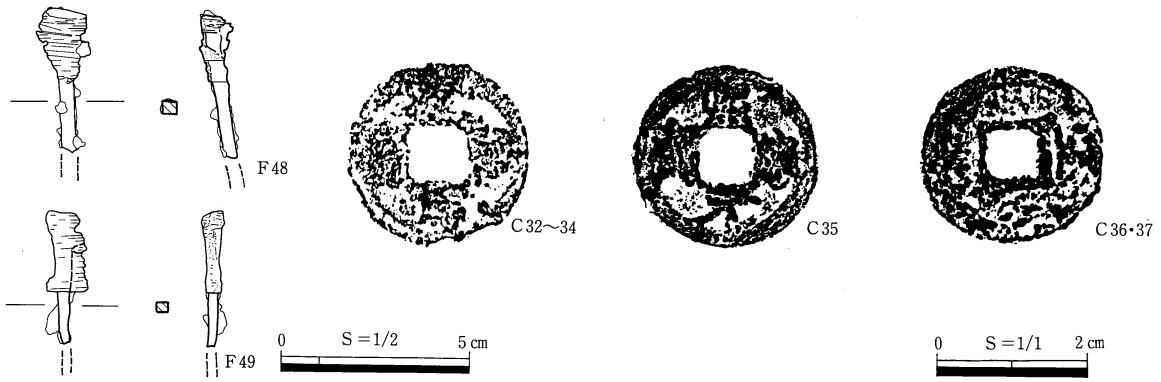
周　溝　北側・西側で不整方形に巡る周溝ＳＤ17がある。西側はＳＤ16と共有し、切り合い関係は確認されなかった。東・南側は遺存状態が非常に悪い。幅は一定ではなく、0.7～1.2mを測る。深さは、10～16cmである。

墓壙は、溝に区画されたほぼ中心部に掘り込まれている。

遺物出土状況　ＳＫ14底面中央部で、人骨片と共に銅銭Ｃ32～Ｃ37、鉄釘Ｆ48・Ｆ49が出土している。人骨は鑑定の結果、壮年男性と考えられ、円形の座棺に納められて埋葬されたものと考えられる。

時　期　時期を比定する遺物は出土していないが、他の遺構から、中世末頃のものと考えられる。

性　格　炭化物及び焼土面が検出されておらず、掘り込みも深いことから土葬墓と考えられる。



挿図108　ＳＫ14出土遺物実測図

ＳＫ15（挿図109・110、図版20・46）

位　　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃグリッドにあり、標高約20.7mの一段高くなった平坦面に位置する。ＳＫ15の南東側約２mにはＳＫ13、東側約1.5mにはＳＫ09がある。

形　　態　平面は不整形な長方形を呈し、底面は不整形で、南側が一段低くなっている。規模は、長軸1.08m、短軸0.77m、深さ最大0.24mを測る。長軸方向は、N-8°-Wである。

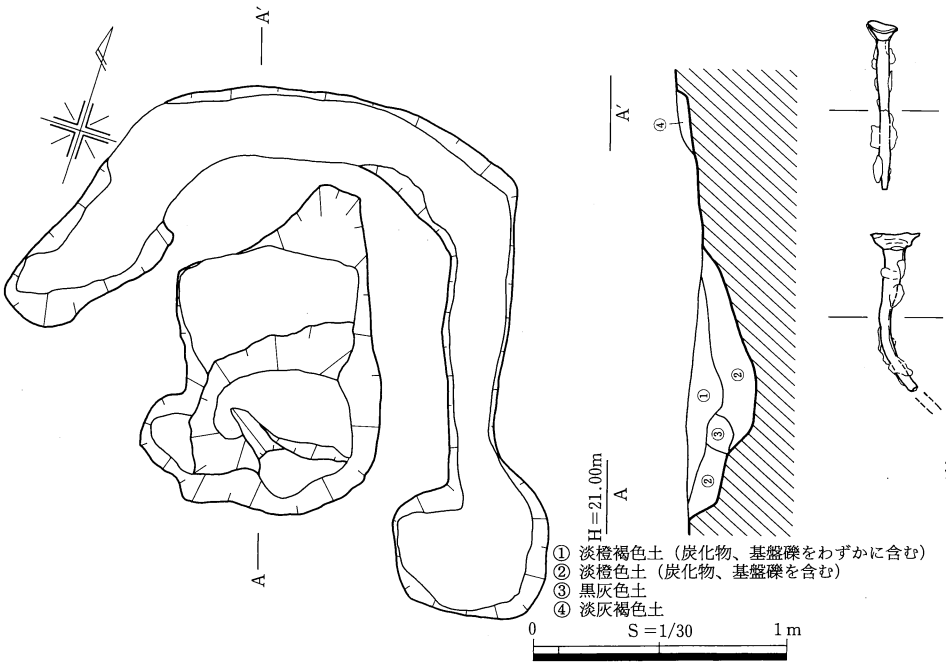
埋　　土　埋土は、３層に分層できた。いずれの層も炭化物を含んでいる。

溝　　墓壙の周囲には、幅19～35cm、深さ４～14cmを測る溝が検出されている。

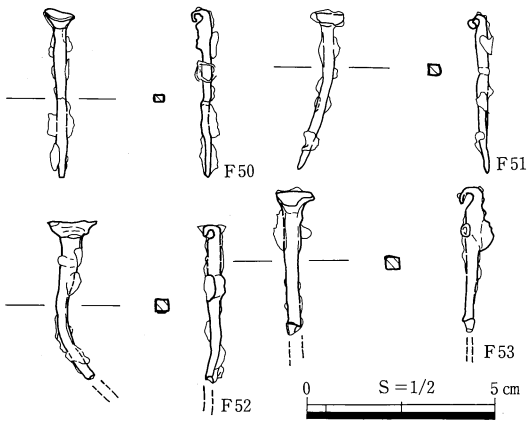
遺　　物　埋土中から鉄釘Ｆ50～Ｆ53が出土している。

時　　期　時期を比定する遺物が出土していないため、確かな時期は不明であるが、^{14}Ｃ年代測定の結果B.P.430±30年の結果を得た。また、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。

性　　格　埋土中から炭化物が出土しているが、焼土面が検出されていないことから、他の場所で荼毘に付した遺体及び遺物を葬ったものと考えられる。



挿図109　ＳＫ15遺構図



挿図110　ＳＫ15出土遺物実測図

ＳＫ16・ＳＤ18（挿図111 ～113 、図版20・21・46）

位　　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｂ・26Ｃ・27Ｂ・27Ｃグリッドにあり、標高約20.4mの平坦面に位置する。周囲には、ＳＫ16に伴う周溝ＳＤ18があるが、北東側は一部調査区外にある。ＳＫ16の南側約６mにはＳＫ11が、南西約3.5 mにはＳＫ18がある。

形　　態　墓壙であるＳＫ16は、平面は上縁部・底面とも隅丸長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.33m、短軸0.89m、深さ最大1.08mを測る。底面は、長軸1.03m、短軸0.67mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-42°-Eである。

墓壙は、溝に区画されたほぼ中央部に掘り込まれている。

埋　　土　埋土は、淡橙灰色土単層である。

周　　溝　周囲には、方形に巡る周溝ＳＤ18があるが、北東部分は調査区外にある。本来は、一辺約４mの方形の墳丘を持っていたものと考えられる。規模は、幅0.65～1.1m、深さは、17～29cmを測る。

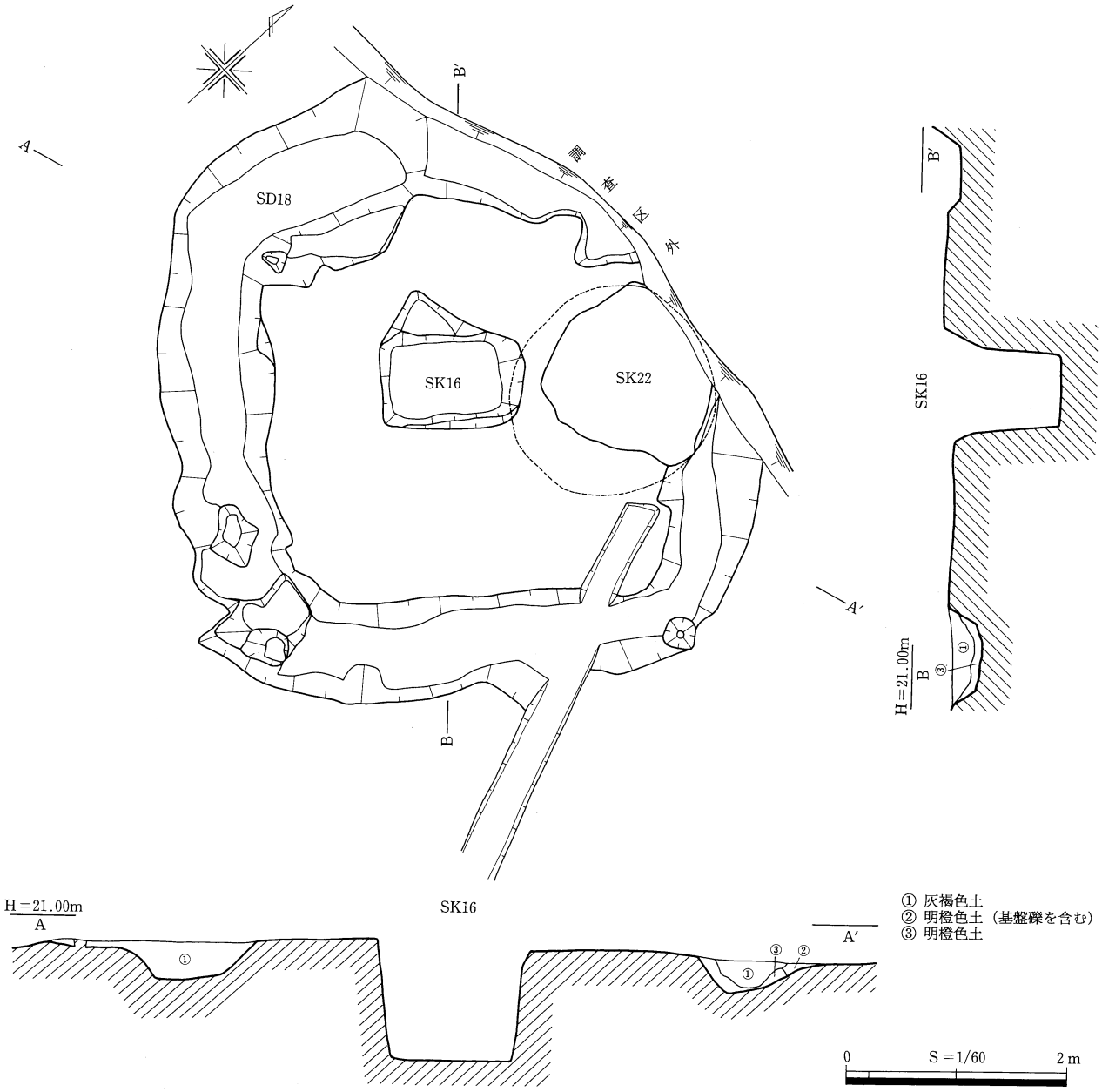
遺物出土状況　出土遺物には、ＳＫ16底面北長側側及び東小口側で、鉄釘Ｆ54～Ｆ59が出土している。その他に、中央やや北側で、漆膜片が出土している。

東側小口付近で、扁平な板石が床面からやや浮いた状態で出土している。

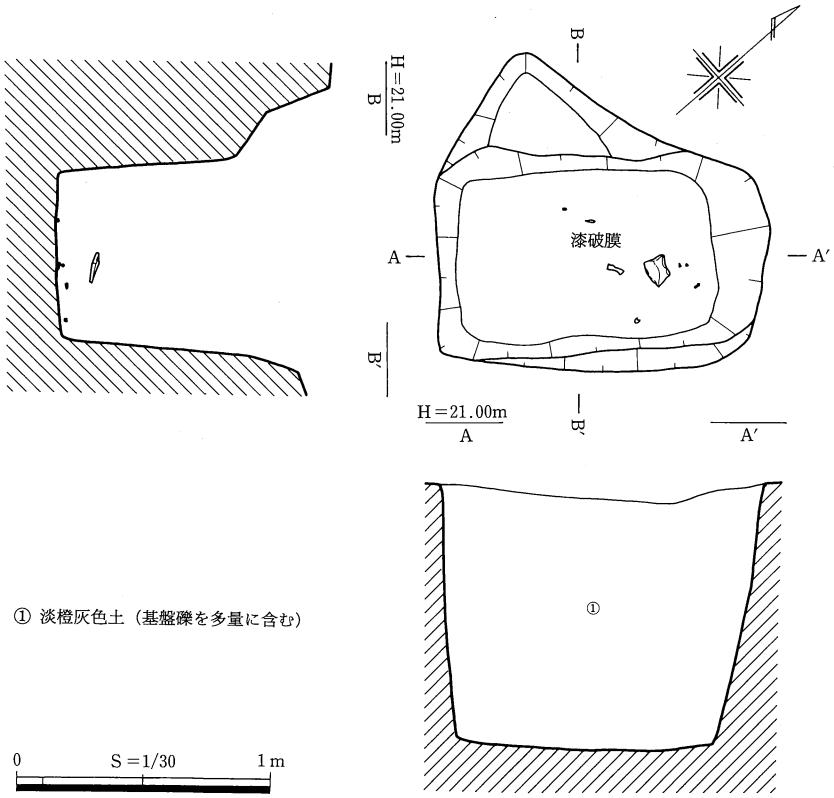
また、ＳＤ18埋土中から土師質土器片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　時期を比定できる遺物は出土していないが、周辺の遺構から、中世末頃のものと考えられる。

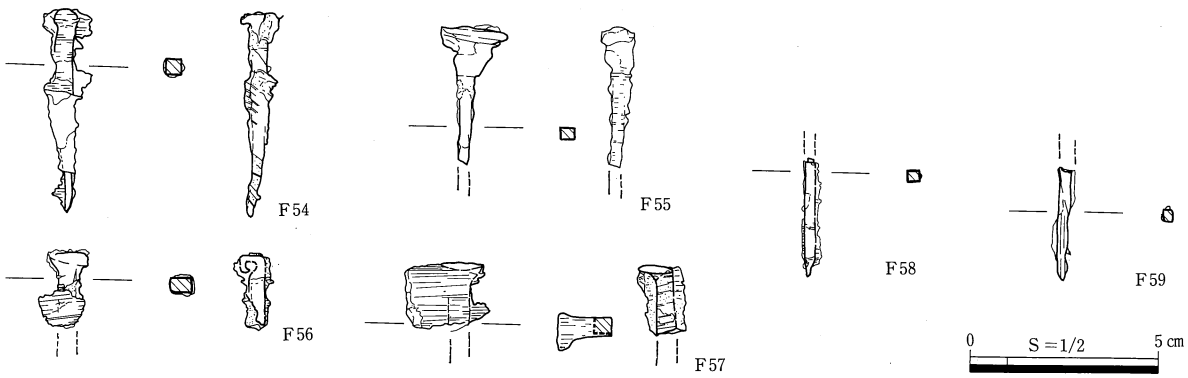
性　格　墳丘は失われているが、本来は、一辺約４ｍ前後の墳丘をもち、墓壙は、炭化物及び焼土面が検出されておらず、掘り込みも深いことから土葬墓と考えられる。



挿図111　ＳＫ16・ＳＤ18遺構図



挿図112　ＳＫ16遺構図



挿図113　ＳＫ16出土遺物実測図

ＳＫ17（挿図114・115、図版21・47）

位　　置　　堤谷地区Ａ区北側の27Ｃグリッドにあり、標高約20.1mの平坦面に位置する。ＳＫ17の北西側約２mにはＳＫ14がある。周囲の中世墳墓との切り合い関係は見られない。

形　　態　　平面は、上縁部・底面ともいびつな長方形を呈す。規模は、上縁部長軸0.97m、短軸0.71m、底面長軸0.7m、短軸0.63m、深さ最大0.18mを測る。断面は、逆台形状を呈す。長軸方向は、N-35°-Eである。

埋　　土　　埋土は、２層に分層できた。このうち、②層中には炭化物・骨片を含んでいる。

焼 土 面　　底面中央部及び南側短辺壁に、不整形に広がる焼土面が検出された。

遺　　物　　底面中央部で、小児の焼骨片と共に鉄釘Ｆ60～Ｆ62が出土している。その他に、溶着した古銭が出土していたが、清掃中に紛失してしまった。

時　期　時期を比定できる遺物は出土しなかったが、周辺の遺構から、中世末頃のものと考えられる。

性　格　埋土中に炭化物及び底面で焼土面が検出されていること、熱で溶着したと考えられる銅銭が出土していることから、火葬墓と考えられる。

ＳＫ18（挿図116・117、図版21・47）

位　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｂ・26Ｃグリッドにあり、標高約20.7mの平坦面に位置する。ＳＫ18の南側約１mにはＳＫ09、東側約４mにはＳＫ16がある。

形　態　平面は、上縁部・底面ともに隅丸長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.03m、短軸0.8m、底面長軸0.67m、短軸0.55m、深さ最大0.63mを測る。長軸方向は、N-76°-Eである。

埋　土　埋土は、３層に分層できた。このうち、上層の①・②層中には、炭化物を含んでいる。

遺　物　底面北西部から、古銭Ｃ38～Ｃ43が出土している。

時　期　時期を比定する遺物が出土していないため、確かな時期は不明であるが、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。

性　格　埋土中からわずかに炭化物が出土しているが、古銭は火を受けた様子はなく、また焼土面が検出されていないことから、土葬墓と考えられる。

ＳＫ19（挿図118、図版21）

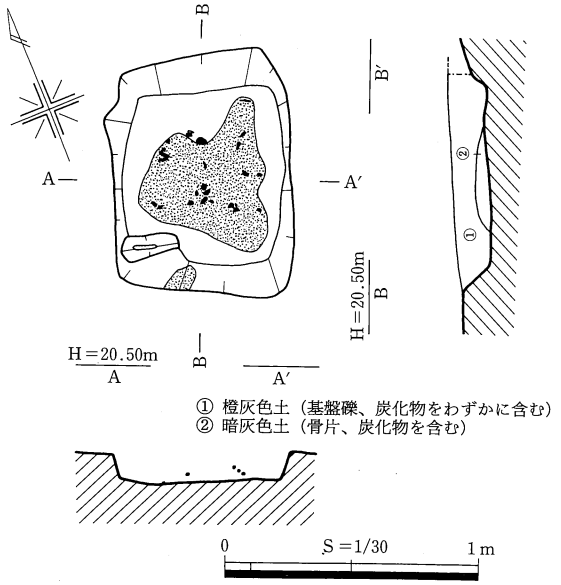
位　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃグリッドにあり、標高約20.5mの一段高くなった平坦面に位置する。ＳＫ19の北側約２mにはＳＫ12、東側約3.5mにはＳＫ11がある。

形　態　平面は長方形を呈し、底面は不整形で凹凸が著しい。規模は、長軸1.10m、短軸0.77m、深さ最大0.24mを測る。長軸方向は、N-1°-Eである。

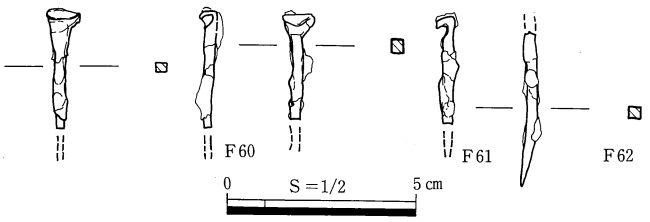
埋　土　埋土は、２層に分層できた。このうち、②層中には、炭化物を多量に含んでいる。

遺　物　埋土中から炭化物が出土しているが、その他の遺物は検出されなかった。

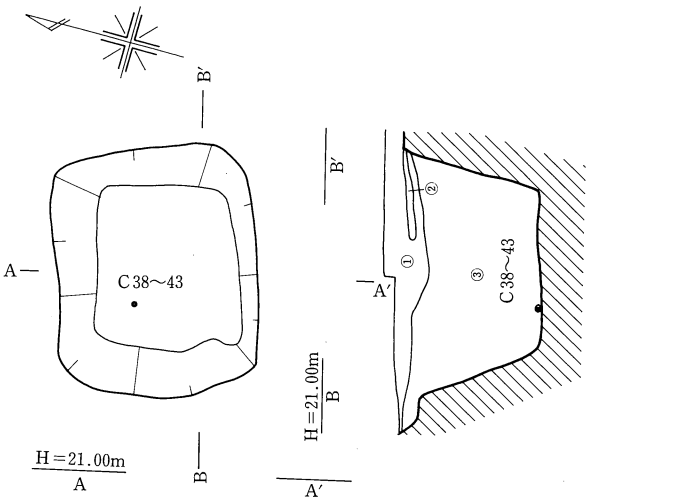
時　期　時期を比定する遺物が出土していないた



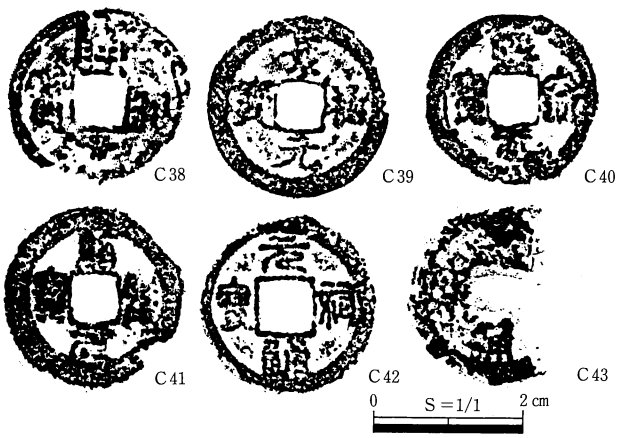
挿図114　ＳＫ17遺構図



挿図115　ＳＫ17出土遺物実測図



挿図116　ＳＫ18遺構図



挿図117　ＳＫ18出土遺物実測図

め、確かな時期は不明であるが、周囲の中世墳墓と切り合い関係は見られないことから、中世のある時期に短期間に造営されたものと考えられる。

性　格　多量の炭化物が出土しているが、焼土面が検出されていないことから、他の場所で荼毘に付した遺体及び遺物を葬ったものと考えられる。

ＳＫ20（挿図119・120、図版22・47・48）

位　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｃ・27Ｄグリッドにあり、標高約20.2～20mの一段高くなった平坦面に位置する。ＳＫ208 の北側約３mにはＳＫ11、東側約３mにはＳＫ21がある。

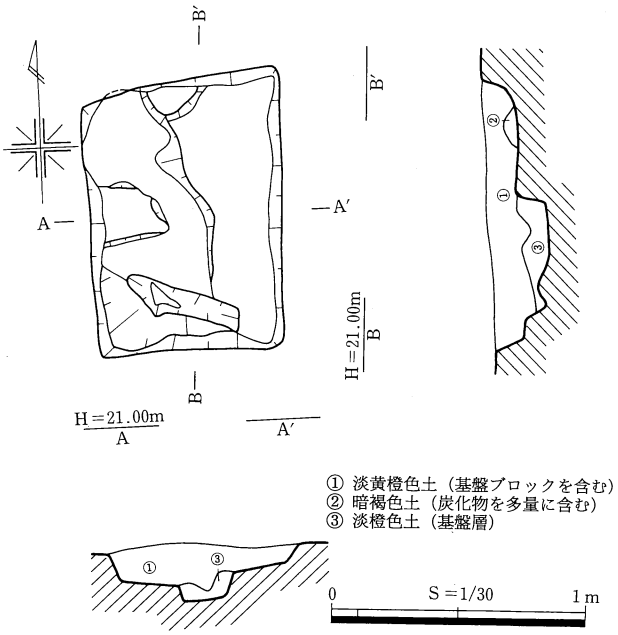
形　態　平面は、上縁部・底面ともに隅丸長方形を呈す。規模は、上縁部長軸1.38m、短軸0.95m、底面長軸1.08m、短軸0.87m、深さ最大0.79mを測る。長軸方向は、N-4°-Eである。

埋　土　埋土は、２層に分層できた。いずれも基盤礫を含むものである。

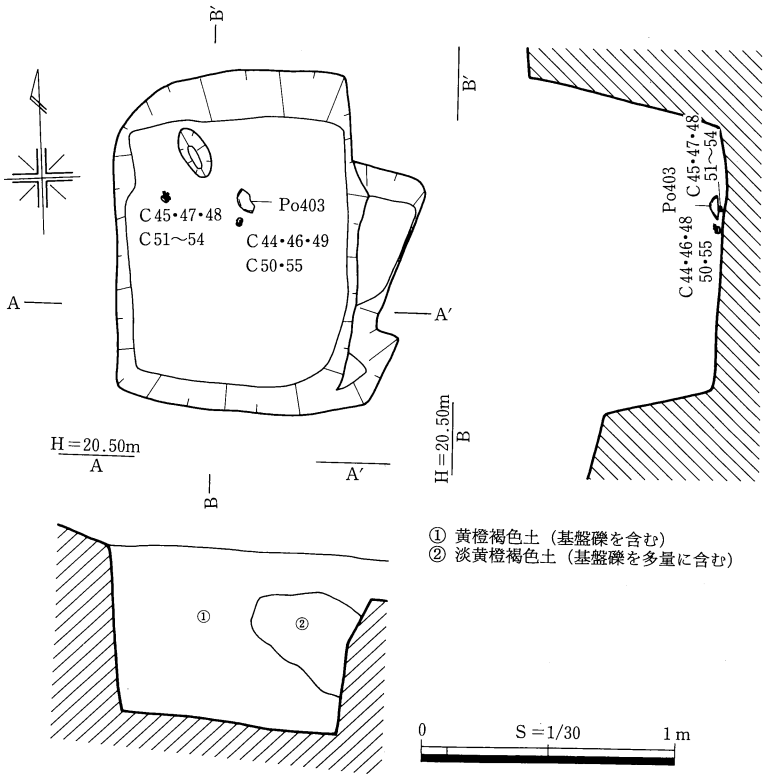
遺　物　底面北側から、大型の土師質土器皿Po402、小型のPo403、ややはなれて古銭Ｃ44～Ｃ55が二ヵ所に分かれて出土している。

性　格　出土遺物から、中世末頃のものと考えられる。

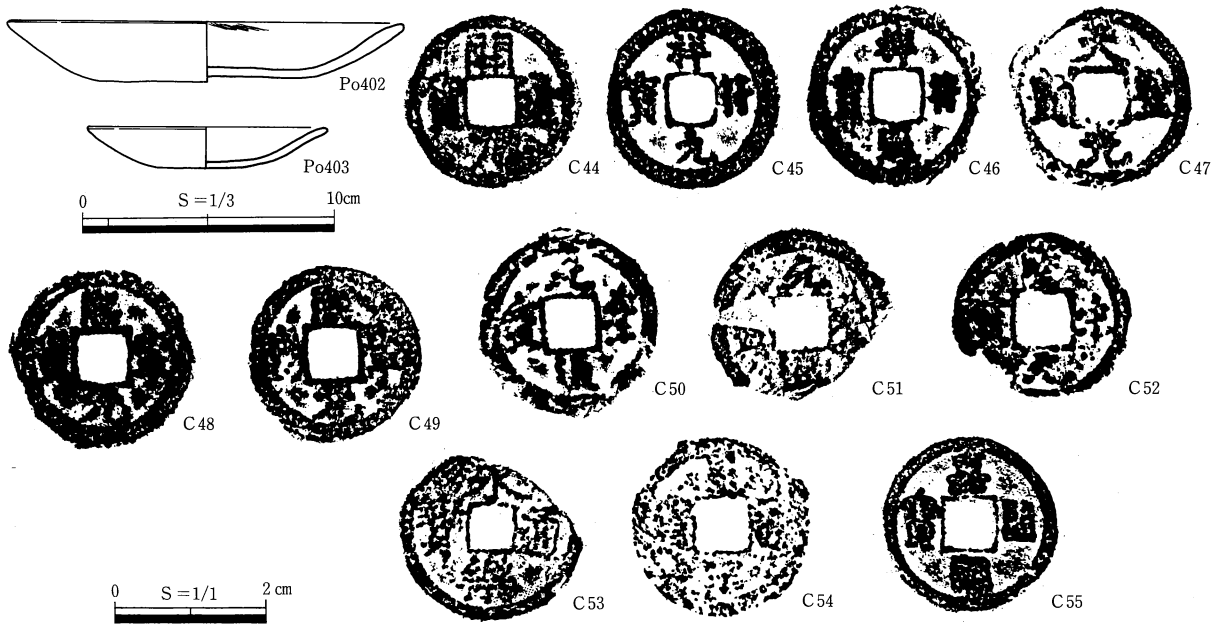
炭化物・焼土面が見られず、掘り込みも深いことから、土葬墓と考えられる。



挿図118　ＳＫ19遺構図



挿図119　ＳＫ20遺構図



挿図120　ＳＫ20出土遺物実測図

ＳＫ21（挿図121・122、図版22・48）

位　　置　堤谷地区Ａ区北側の27Ｃ・27Ｄグリッドにあり、標高約20.1mの一段高くなった平坦面に位置する。ＳＫ21の北側約２ｍにはＳＫ14、北東側約２ｍにはＳＫ17がある。

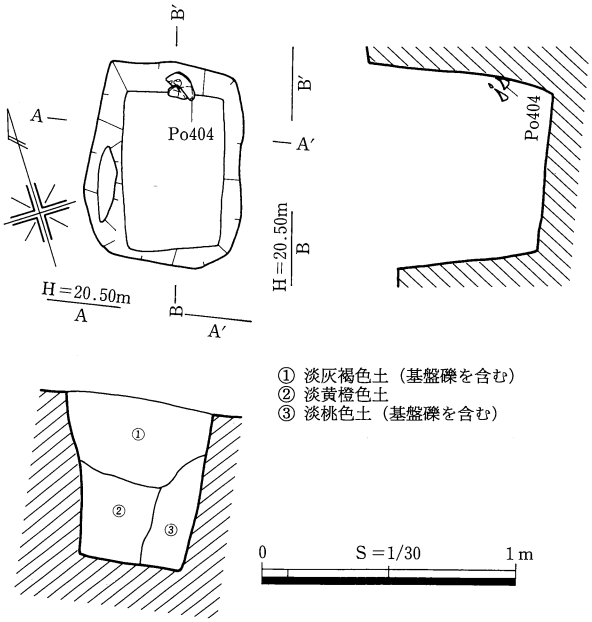
形　　態　平面は、上縁部・底面ともに長方形を呈す。規模は、上縁部長軸0.81m、短軸0.6m、底面長軸0.61m、短軸0.41m、深さ最大0.69ｍを測る。長軸方向は、N-17°-Eである。

埋　　土　埋土は、３層に分層できた。①・③層中には基盤礫を含む。

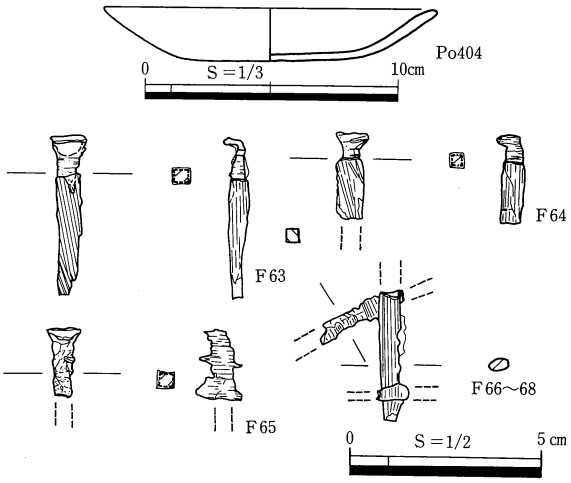
遺物出土状況　北壁際でやや浮いた状態で、大型の土師質土器皿Po404が出土している。また、埋土中から鉄釘Ｆ63～Ｆ68が出土している。

時　　期　出土遺物から、中世末頃のものと考えられる。

性　　格　炭化物・焼土面が見られず、掘り込みも深いことから、土葬墓と考えられる。また、他の土葬墓に比べて規模が小さいことから、小児用であった可能性がある。



挿図121　ＳＫ21遺構図



挿図122　ＳＫ21出土遺物実測図

5．不明土壙

ＳＫ27（挿図123、図版22）

位　　置　堤谷地区Ａ区南側の28Ｅグリッドにあり、標高約16.6～17.3mの緩やかに南西へ傾斜する斜面に位置する。西側約２mにはＳＩ12がある。調査前から大きく凹んでいたものである。

形　　態　遺存状況は比較的よく、平面は上縁部不整楕円形、底面不整形、断面皿状を呈す。規模は、上縁部長軸4.67m、短軸3.72m、深さ1.21mを測る。

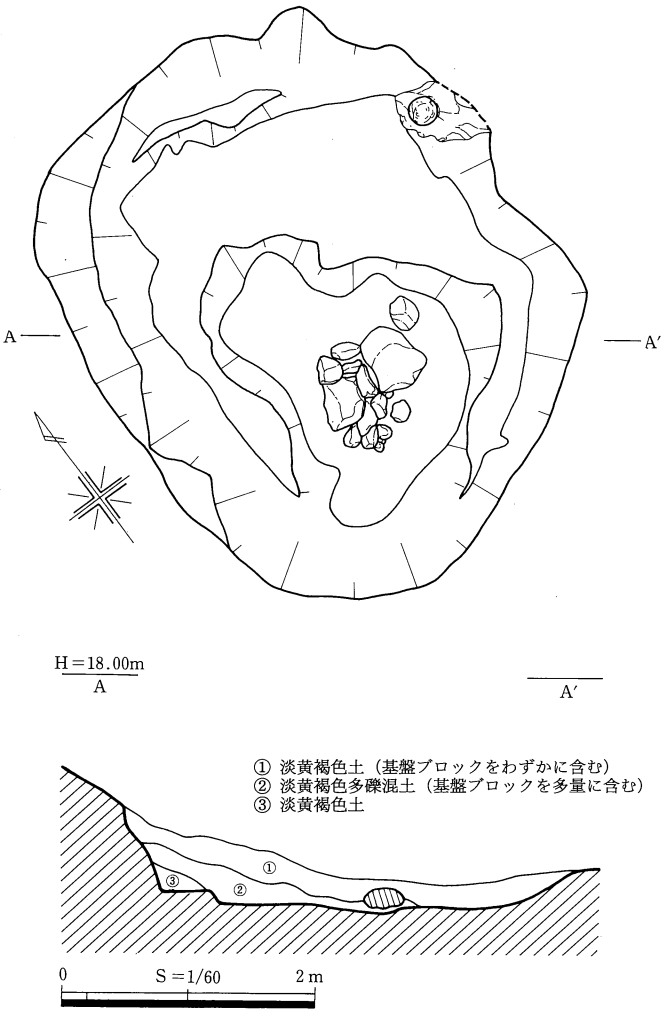
埋　　土　埋土は、基盤ブロックを多量に含む３層に分層できた。

石　　材　また、底面には、人頭大の角礫が多数出土している。

遺　　物　遺物は全く出土していない。

時　　期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

性　　格　性格は不明である。



挿図123　ＳＫ27遺構図

6．ピット群・溝状遺構

ピット群01（挿図124）

位　　置　堤谷地区Ａ区北側の26Ｄ・27Ｂ・27Ｃ・27Ｄグリッドにあり、標高約19.6～20.6mの一段高くなった平坦面の縁辺部に位置する。

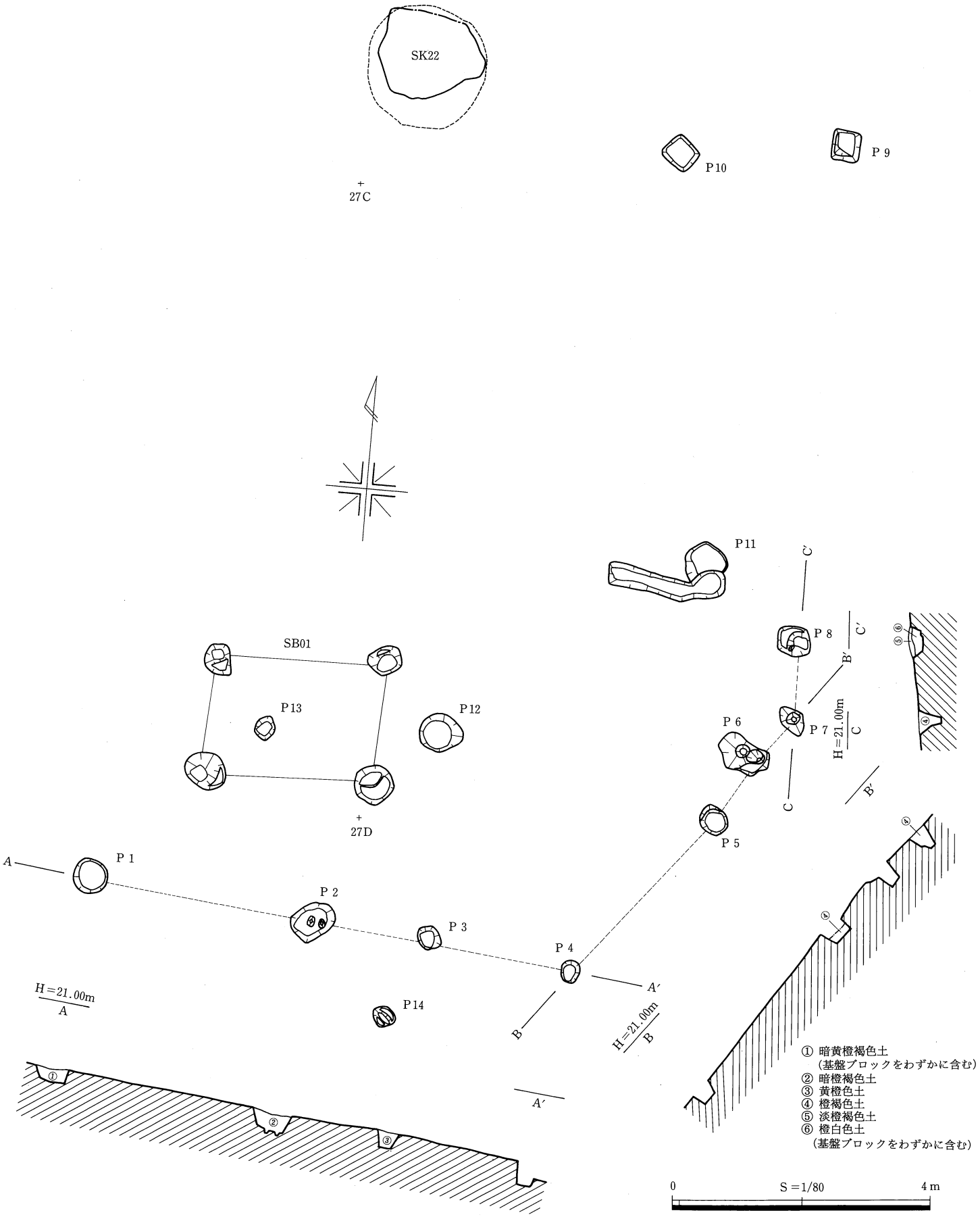
ピットは計14個検出された。それぞれの規模は、Ｐ１（55×53－30）cm、Ｐ２（70×53－43）cm、Ｐ３（38×34－27）cm、Ｐ４（35×30－31）cm、Ｐ５（48×42－38）cm、Ｐ６（86×45－41）cm、Ｐ７（45×32－37）cm、Ｐ８（53×47－22）cm、Ｐ９（48×45－27）cm、Ｐ10（52×45－27）cm、Ｐ11（66×47－17）cm、Ｐ12（67×60－49）cm、Ｐ13（35×30－32）cm、Ｐ14（33×31－36）cmを測る。　特に、Ｐ１～Ｐ８は、鉤状に並んでいる。

埋　　土　埋土は、それぞれ①～④層が単層で入るものが多く、ＳＢ01の埋土に近いものである。

遺　　物　遺物は全く出土していない。

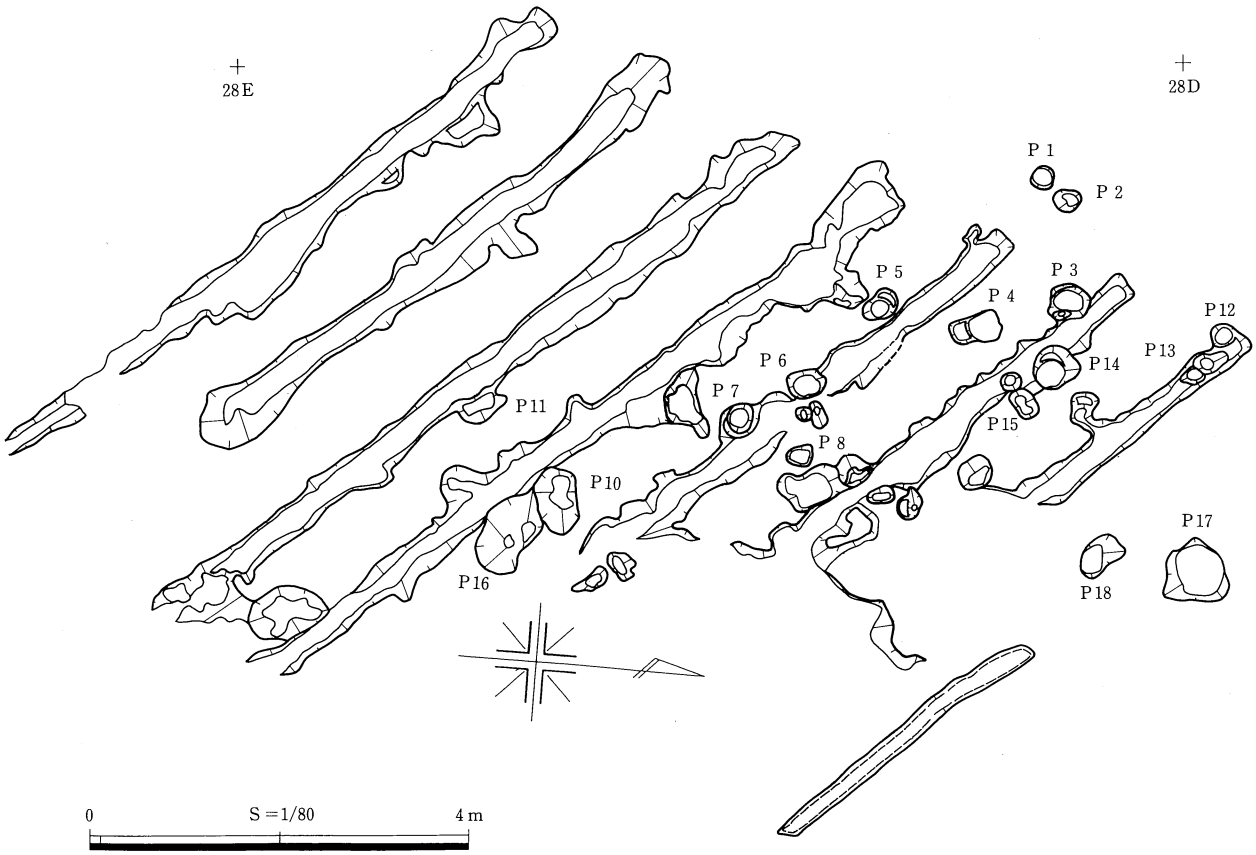
時　　期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

性　　格　Ｐ１～Ｐ８は、鉤状に並んでおり、また、埋土の状況も弥生時代後期と考えられるＳＢ01に近いことを考えると、ＳＢ01に伴う杭列または柵列の可能性があり、この時期の住居跡と住居以外の施設（貯蔵施設？）とを区画するためのものと考えられる。

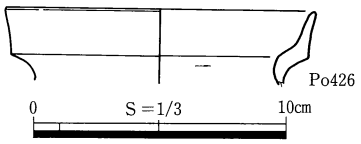


挿図124　ピット群01遺構図

ピット群02・溝状遺構（挿図125・126、図版22）



挿図125　ピット群02・溝状遺構遺構図



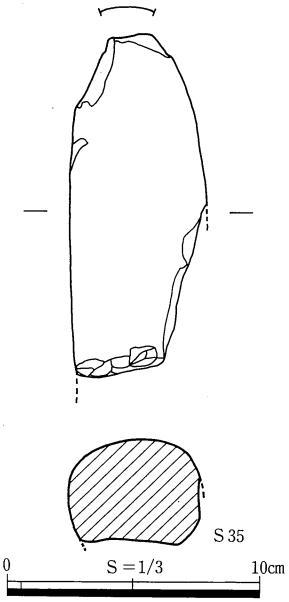
挿図126　ピット群02出土遺物実測図

位　　置　　堤谷地区Ａ区東側の28Ｄグリッドにあり、標高約17.3～17.8mの平坦面に位置する。ピットは計18個検出され、不規則に並んでいる。また、周辺には、幅24～60cm、長さ2.8～8.4mを測る溝が８条検出された。切り合い関係を見ると、ピットが溝状遺構に切られており、ピット群が先行する。

遺　　物　　図化できた遺物には、わずかにＰ４内出土の甕Po426 がある。

時　　期　　出土遺物から、ピット群は岩吉編年Ⅲ（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

性　　格　　ピット群の性格は不明である。溝状遺構は、後世の耕作に関わるものと考えられる。



挿図127　堤谷地区Ａ区遺構外出土遺物実測図

７．堤谷地区Ａ区遺構外遺物（挿図127）

堤谷地区Ａ区27Ｃグリッドで、磨製石斧片Ｓ35が出土している。その他土器片も多数出土しているが図化できなかった。

第３節　西桂見遺跡堤谷地区Ｂ区の概要

位　　置　　Ｂ区は、標高９ｍ～15ｍの丘陵東側斜面部の地区である。現況では、テラス状に加工された段が２段ある。

遺　　構　　この地区で検出した遺構は、弥生時代後期～近世にかけてのもので、竪穴住居跡７棟、中世墓１基、不明土坑１基、ピット群１か所、溝状遺構１基である。

弥生時代後期では竪穴住居跡（ＳＩ14・16）が検出されており、桂見遺跡堤谷東地区のものとほぼ同時期で、堤谷地区Ａ区のものより遡るものである。

古墳時代前期では、竪穴住居跡（ＳＩ17）が検出されている。堤谷地区Ａ区のものとほぼ同時期である。

中世墓であるＳＫ25は、Ａ区のものより遡るもので、形態が異なり、短刀が出土している。

近世では、不明土坑（ＳＫ26）が検出されている。

いずれもテラス状の段上に作られており、この段が近年の耕作等に関わるものではないといえる。

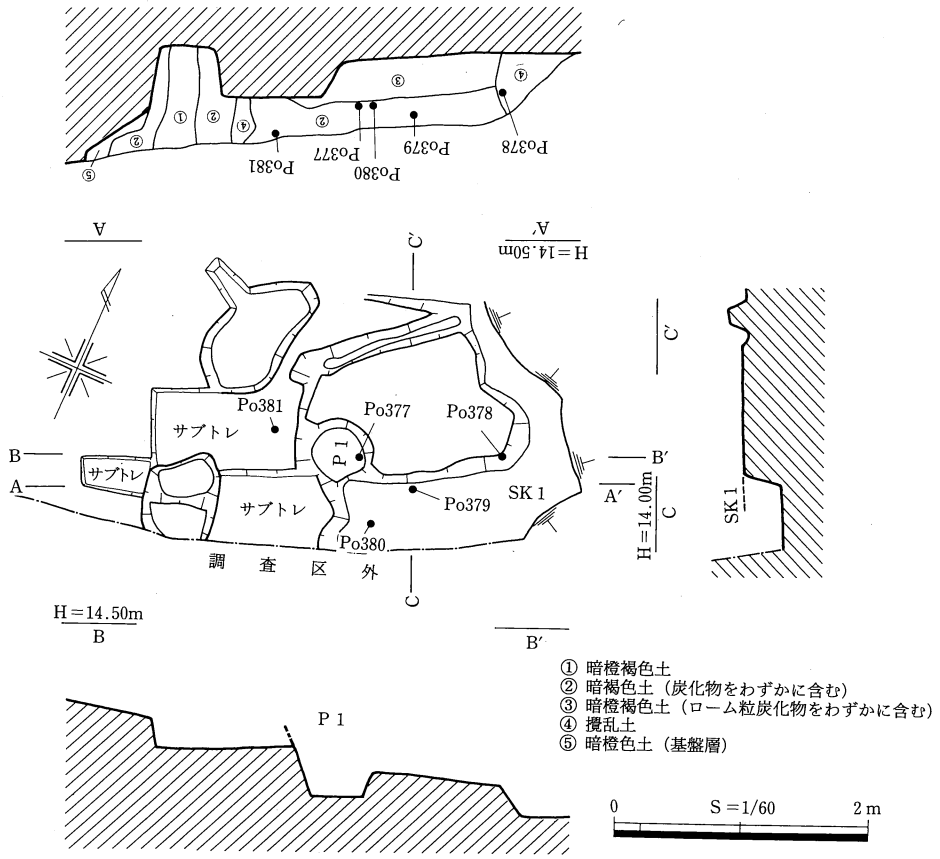
第４節　西桂見遺跡堤谷地区Ｂ区の調査結果

１．竪穴住居跡

ＳＩ14（挿図128・129、図版23・48）

位　　置　　堤谷地区Ｂ区の南側調査区際の30Ｆグリッドにあり、標高13.7ｍの平坦面に位置する。北西側約12ｍにはＳＫ25がある。

形　　態　　遺存状況は非常に悪く、東側半分以上は削り取られ、また、大半が調査区外にある。平面形は、遺



挿図128　ＳＩ14遺構図

存する壁の状態から隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西1.6m以上、南北1.6m以上を測り、床面積は2.8m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.21mを測る。

壁溝は北側のみで検出された。幅10～14cm、深さ３～５cm、断面「U」字状を呈す。

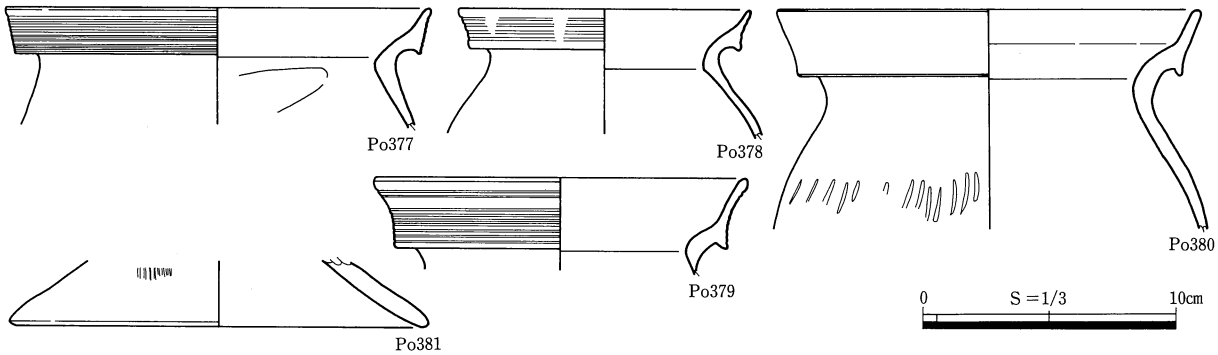
主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、西壁際で（63×51－19）cmを測るＰ１が検出されている。

土　坑　床面中央部には、土坑ＳＫ１が掘り込まれているが、土層を観察すると、ＳＩ14より遡るものと考えられる。

埋　土　埋土は３層に分層できた。②③層中には炭化物をわずかに含んでいる。

遺物出土状況　図化できたものには、甕Po377～Po380、蓋Po381がある。このうち、床面直上からPo377、Po378、Po380が出土している。その他は、埋土中または、周辺からの出土である。

時　期　床面出土の土器から、岩吉編年Ⅲ（新）期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図129　ＳＩ14出土遺物実測図

ＳＩ16（挿図130・131、図版23・49）

位　置　堤谷地区Ｂ区南側の30Ｅグリッドにあり、標高約11.6mの平坦面に位置する。北側約１mにはＳＫ26がある。

形　態　遺存状況は悪く、東側半分以上は流失している。平面形は、遺存する壁の状態から隅丸方形または多角形を呈すものと考えられる。規模は、東西1.5m以上、南北5.7m以上を測り、床面積は4.7m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.31mを測る。

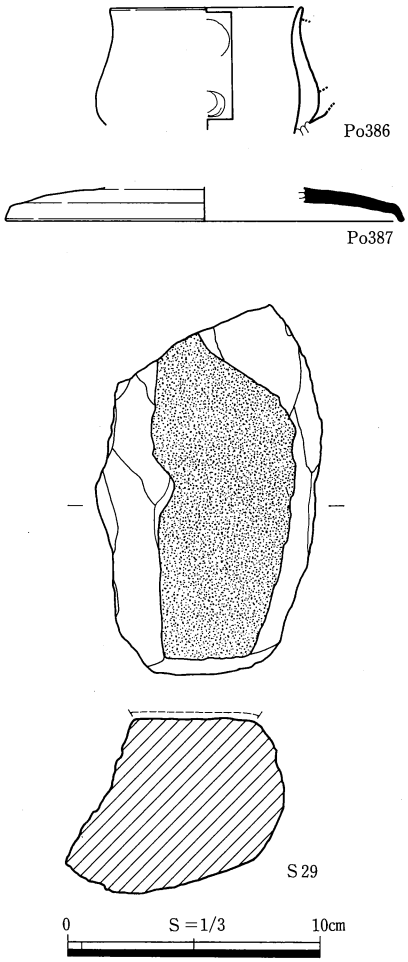
壁溝は周壁際で検出され、ほぼ全周していたものと考えられる。幅18～40cm、深さ６～14cm、断面逆台形状を呈す。

主柱穴と考えられるものはＰ１、Ｐ２のみで、それぞれ（75×56－77）cm、（60×38－69）cmを測る。その他に、Ｐ３・Ｐ４が検出されたが、性格は不明である。

埋　土　現況は①～④層によって平坦面が作られており、ＳＩ16に伴う埋土は⑤層のみである。

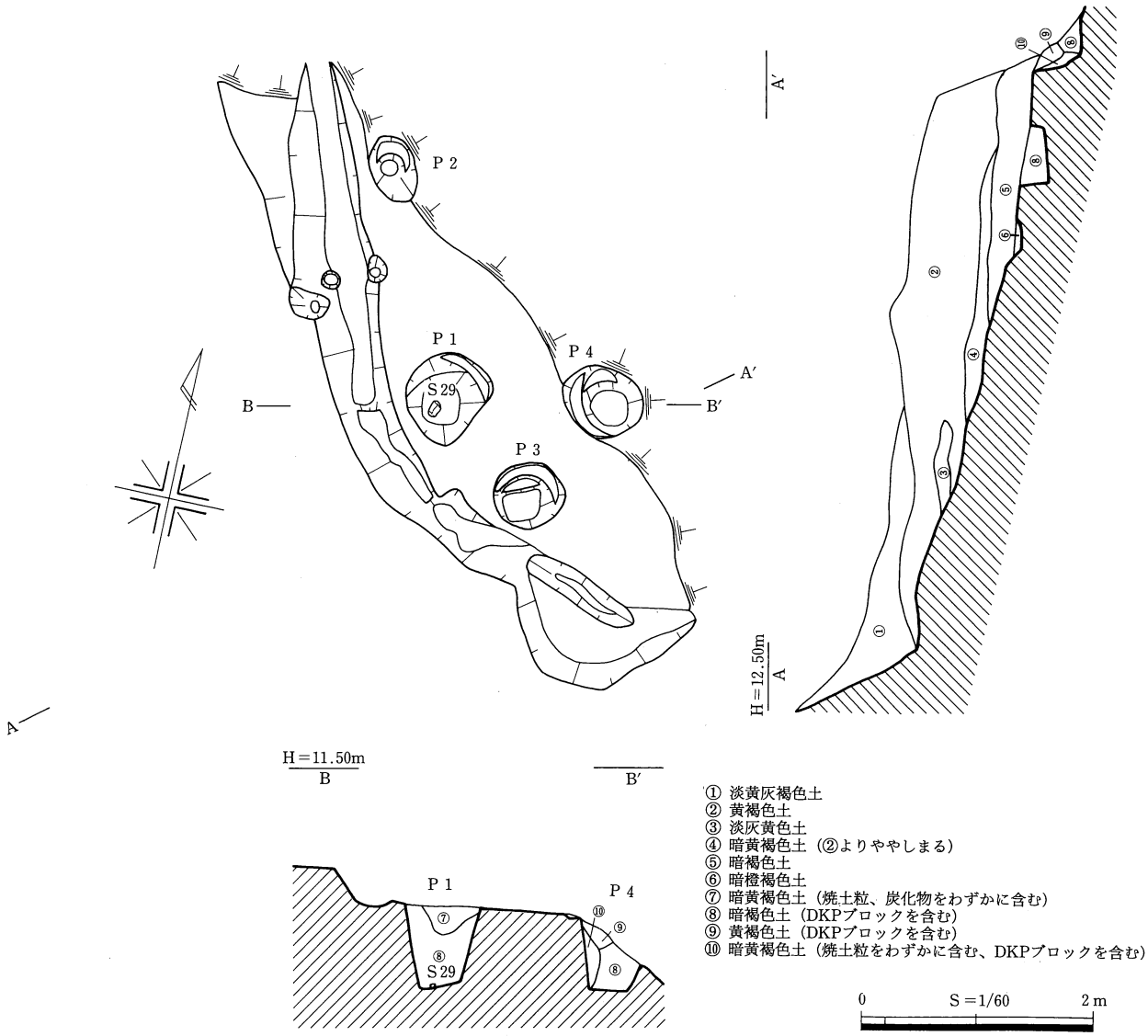
遺物出土状況　図化できたものには、把手付短頸壺Po386、須恵器杯蓋Po387、砥石Ｓ29がある。Ｓ29はＰ１内、その他は周辺からの出土である。床面上からも土器が出土しているが、図化できなかった。

時　期　時期を比定できる土器は出土していないため、確実な時期は



挿図130　ＳＩ16出土遺物実測図

不明であるが、およそ岩吉Ⅲ編年（新）期・弥生時代後期後半頃のものと推察される。



挿図131　ＳＩ16遺構図

ＳＩ17（挿図132、図版23）

位　　置　　堤谷地区Ｂ区北側調査区際の29Ｃグリッドにあり、標高約12～12.5mの東側に傾斜する斜面に位置する。南側約１mにはＳＤ19がある。

形　　態　　遺存状況は悪く、東側半分以上は流失し、北側は大半が調査区外にある。平面形は、不明である。規模は、東西1.6m以上、南北1.8m以上を測り、床面積は2.0m²以上である。壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.25mを測る。壁溝は周壁の内側で検出された。幅14～22cm、深さ６cm、断面逆台形状を呈す。主柱穴と考えられるものはＰ１のみで、（30×16以上－34）cmを測る。

埋　土　埋土は①層のみである。

遺　物　埋土中から土器片が出土しているが、図化することはできなかった。

時　期　時期を比定できる土器が出土していないため、確実な時期は不明である。

2．土坑

ＳＫ25（挿図133～135、図版24・49）

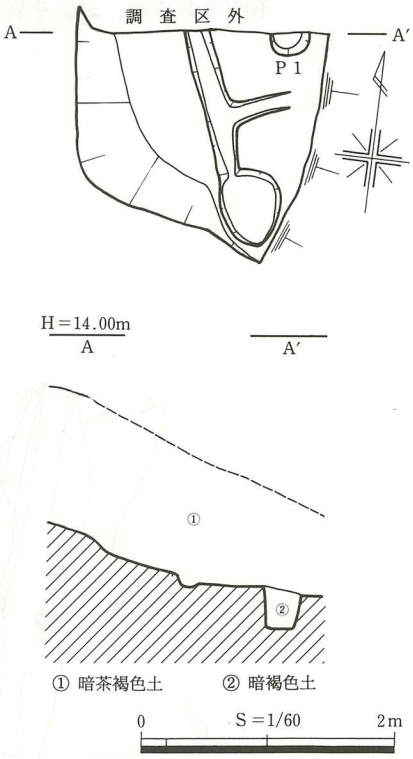
位　置　堤谷地区Ｂ区西側の29Ｅグリッドにあり、標高約14.1mの平坦面に位置する。南側約12mにはＳＩ14がある。

形　態　北東側は崖面で削り取られており、遺存状況はあまりよくない。平面は上縁部不整楕円形、底面不整形、断面逆台形状を呈す。規模は、上縁部長軸1.6m以上、短軸1.2m、深さ0.65mを測る。長軸方向は、N-44°-Eである。

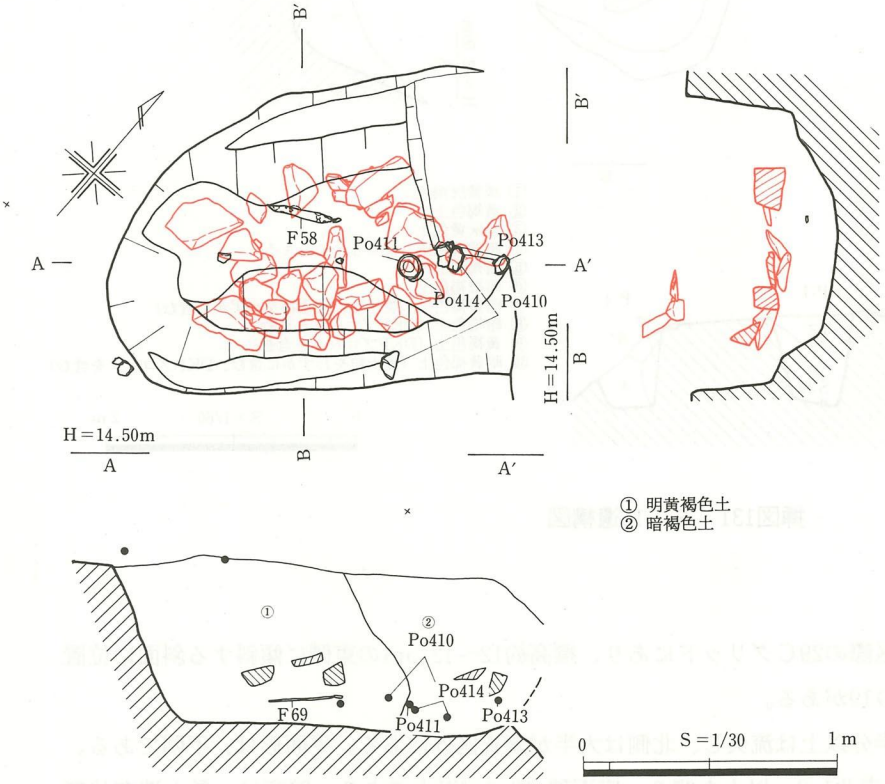
埋　土　埋土は、２層に分層できた。

石　材　また、埋土中から人頭大の角礫が多数出土している。この石材中には、砥石Ｓ30が含まれている。

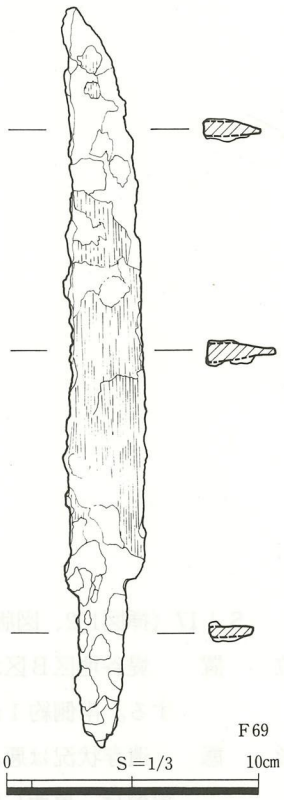
遺物出土状況　埋土中及び底面付近で土師質土器、短刀、砥石が出土している。図化できたものに、回転糸切り痕 が明瞭に残る土師質土



挿図132　ＳＩ17遺構図



挿図133　ＳＫ25遺構図

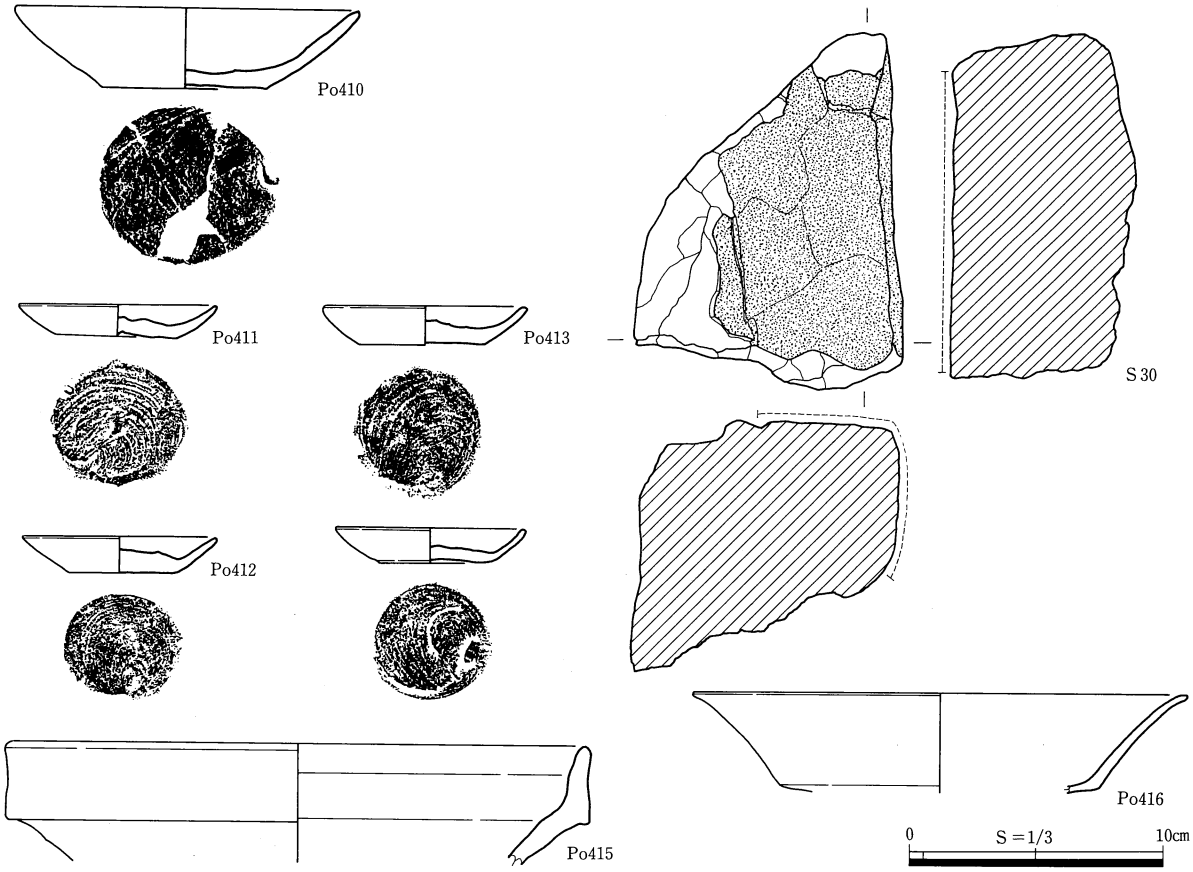


挿図134　ＳＫ25出土遺物実測図(1)

器皿Po410～Po414、備前焼き擂り鉢Po415、土師器高杯Po416、短刀Ｆ69、砥石Ｓ30がある。

時　　期　　出土遺物から、中世前半頃のものと考えられる。

性　　格　　出土遺物等から土壙墓と考えられるが、Ａ区の中世墓より遡るものと考えられ、形態も異なる。



挿図135　ＳＫ25出土遺物実測図

ＳＫ26（挿図136・137、図版24・49）

位　　置　　堤谷地区Ｂ区の東側調査区際の30Ｅグリッドにあり、標高約8.6～10.9mの東側に傾斜する斜面に位置する。南側約１mにはＳＩ16がある。

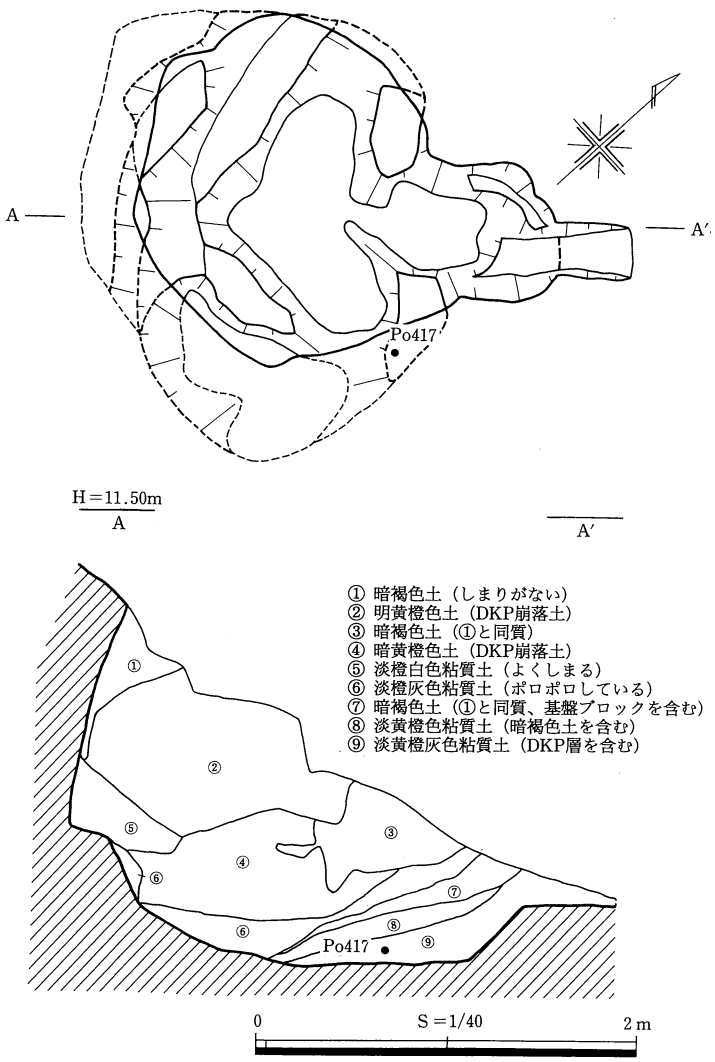
形　　態　　東側は崖面で削り取られており、遺存状況はあまりよくない。平面は上縁部不整柄鏡形、底面不整形、断面袋状を呈す。規模は、上縁部長軸3.35m、短軸2.75m、深さ3.0mを測る。

埋　　土　　埋土は、９層に分層でき、ほとんど崩落土と考えられるＤＫＰを含む層である。

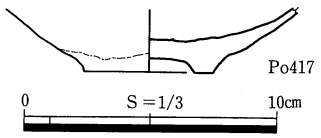
遺　　物　　出土遺物には、図化できたものに南東側底面で出土した施釉陶器Po417がある。

時　　期　　出土遺物から、近世頃のものと考えられる。

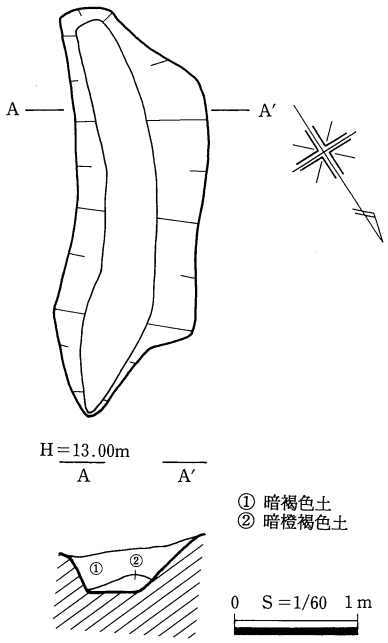
性　　格　　性格は不明である。



挿図136　ＳＫ26遺構図



挿図137　ＳＫ26出土遺物実測図



挿図138　ＳＤ19遺構図

3．溝状遺構

ＳＤ19（挿図138、図版24）

位　　置　堤谷地区Ｂ区北側調査区際の29Ｄグリッドにあり、標高約11.4～12.3mの東側に傾斜する斜面に位置する。北側約１mにはＳＤ19がある。

形　　態　平面形は、緩く三日月状を呈す。規模は、長さ3.3m、幅1.05m、深さ0.47mを測る。

埋　　土　埋土は２層に分層できた。

遺　　物　遺物は出土していない。

時　　期　時期を比定できる土器が出土していないため、確実な時期は不明である。

性　　格　性格は不明である。

4．ピット群

ピット群03（挿図139、図版25）

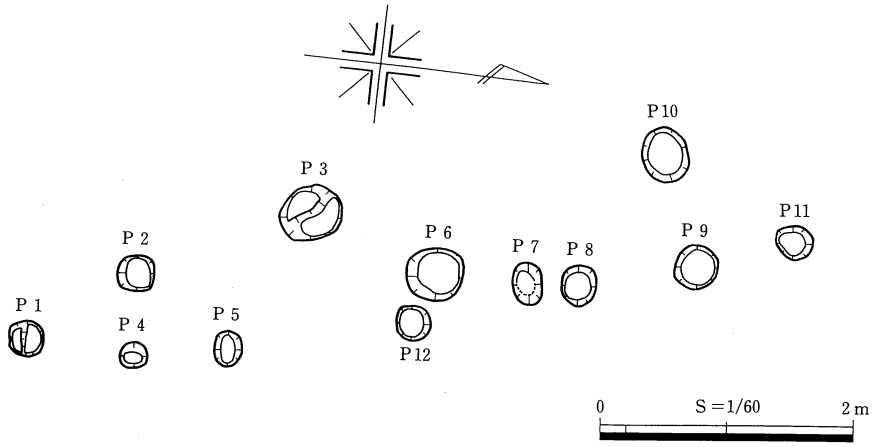
位　　置　　堤谷地区Ｂ区北側調査区際の29Ｄグリッドにあり、標高約12.3mの平坦面に位置する。北側約１ｍにはＳＤ19がある。

不規則に並ぶ計12個のピットを検出した。規模は、挿表11を参照されたい。

遺　　物　　遺物は出土していない。

時　　期　　時期を比定できる土器が出土していないため、確実な時期は不明である。

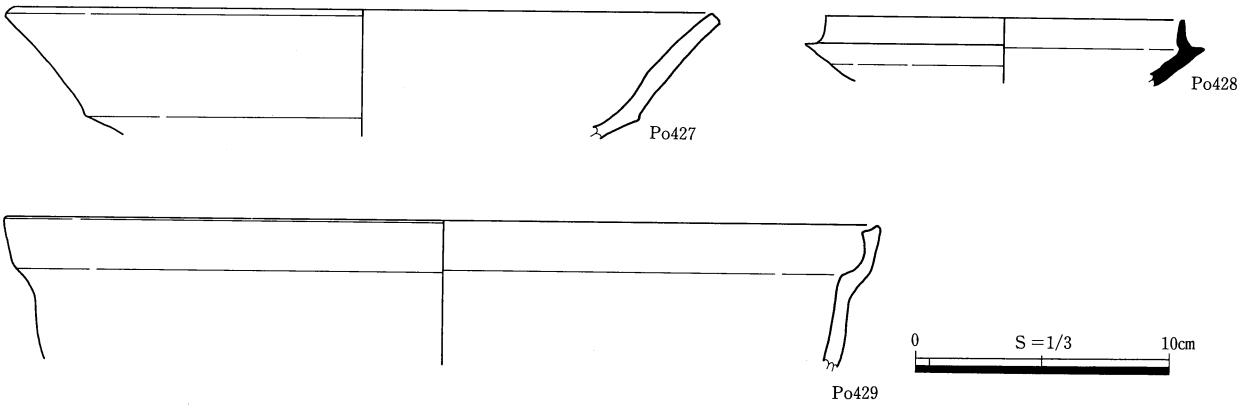
性　　格　　性格は不明である。



挿図139　ピット群03遺構図

5．堤谷地区Ｂ区遺構外遺物（挿図140）

堤谷地区Ｂ区30Ｆグリッドで、鼓形器台Po427、須恵器杯身Po428、瓦質土器土鍋Po429が出土している。Po427は古墳時代前期頃、Po428はＴＫ43並行期[35]・古墳時代後期、Po429は中世のものと考えられる。



挿図140　堤谷地区Ｂ区遺構外遺物実測図

第５節　西桂見遺跡堤谷地区Ｃ区の概要

位　　置　　Ｃ区は、標高８～20mの丘陵西側斜面部の地区である。現況では、調査区南側が大きくカール状に湾曲し、平坦面が作られていた。

遺　　構　　この地区で検出した遺構は、中世の礎石総柱建物跡（ＳＢ02）１棟と、中世以後の盛土遺構（ＳＳ03）である。

ＳＢ02は、南東側約1/3が調査区外にあるものの、２間×５間の規模と考えられる。遺存していた礎石は３個のみであった。また、地鎮具と考えられる土師器皿・円礫が埋納された、ピットが２個検出されている。

ＳＳ03は、ＳＢ02廃絶後、厚さ約１ｍの盛土が施され整形されていた。

第６節　西桂見遺跡堤谷地区Ｃ区の調査結果

１．礎石総柱建物跡

ＳＢ02（挿図141～144、図版25・50）

位　　置　　堤谷地区Ｃ区南側調査区際の25・26Ｅグリッドにあり、標高8.9mの平坦面に位置する。

平 坦 面　　この平坦面は、斜面を大きく加工したもので、現況でも斜面がカール状に抉られているのがわかった。標高９ｍ付近は、東西18.4m以上、南北6.3m以上を測る平坦面となっている。

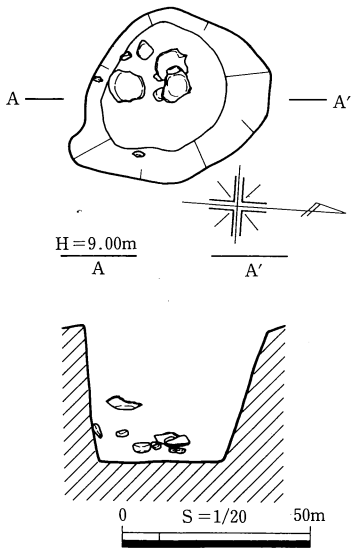
形　　態　　建物はこの平坦面上に作られており、南西側が調査区外にあるものの、桁行２間3.8m、梁行５間11.3mと推定される礎石総柱建物跡である。主軸方向は、Ｎ－49°－Ｗと北西・南東方向を向く。

礎石はＰ５・Ｐ６・Ｐ７のみに遺存しており、その他は抜き取られていた。

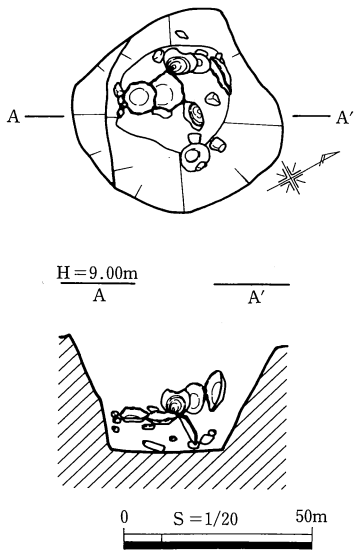
それぞれの掘り方は、Ｐ１（95×71－９）cm、Ｐ２（86×63－９）cm、Ｐ３（112×65－17）cm、Ｐ４（63×60－11）cm、Ｐ５（109×63－11）cm、Ｐ６（65以上×25以上－10）cm、Ｐ７（75×70－18）cm、Ｐ８（110×64－15）cm、Ｐ９（85×67－22）cm、Ｐ10（80×66－17）cm、Ｐ11（72×61－７）cm、Ｐ12（55×53－９）cmを測る。いずれの掘り方も素掘りで浅く、礎石設置に伴う根石等は検出されなかった。

主柱穴間距離は、梁間が2.3m、桁間が1.8～2.1mを測る。

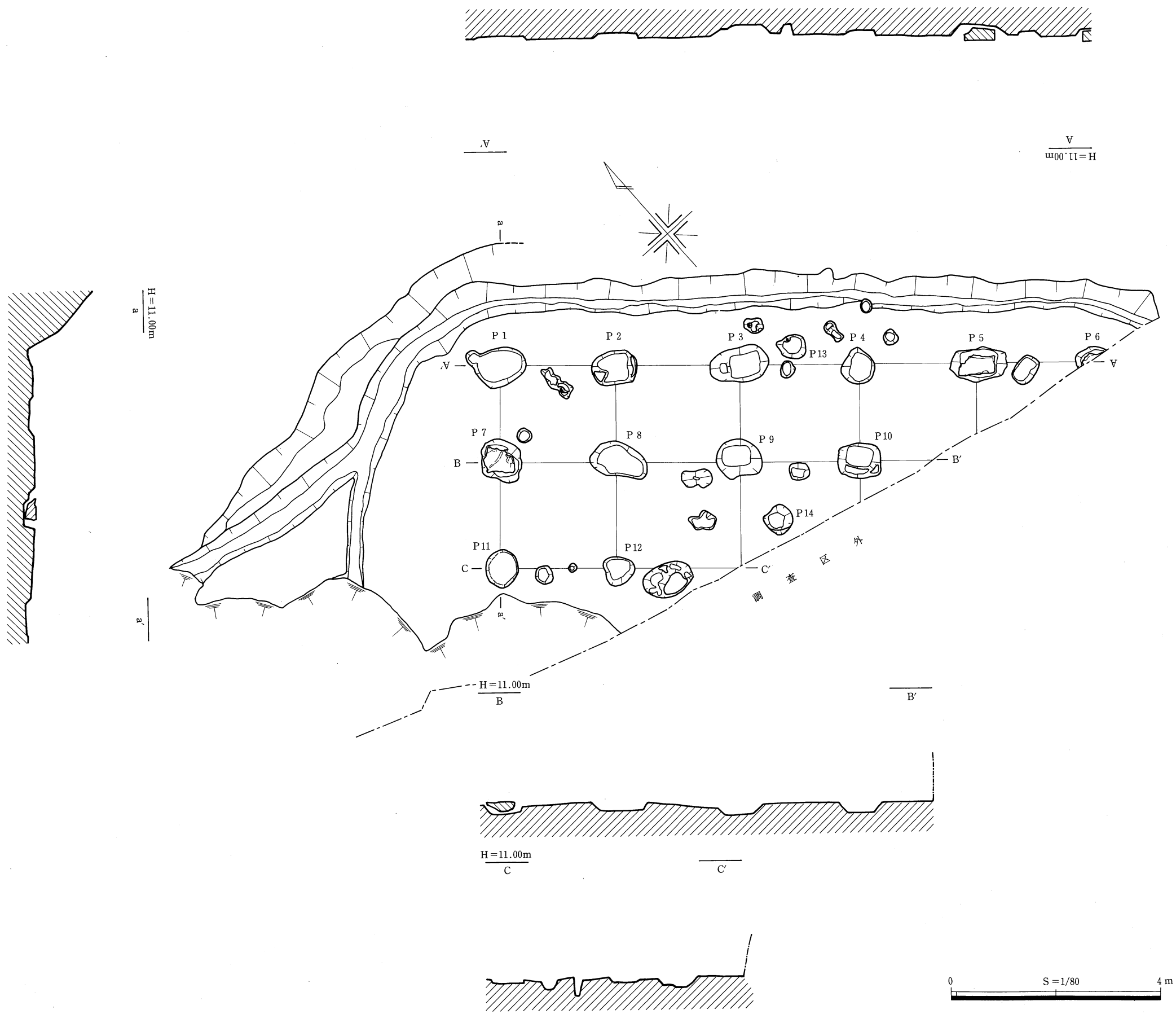
その他平坦面上で数個のピットが検出されたが、このうちＰ13・Ｐ14内からは地鎮具と考えられる土師質土器皿とともに円礫が出土している。Ｐ13・Ｐ14は、建物のほぼ中軸線上に並んでいる。



挿図141　ＳＢ02Ｐ13内遺物出土状況図



挿図142　ＳＢ02Ｐ14内遺物出土状況図



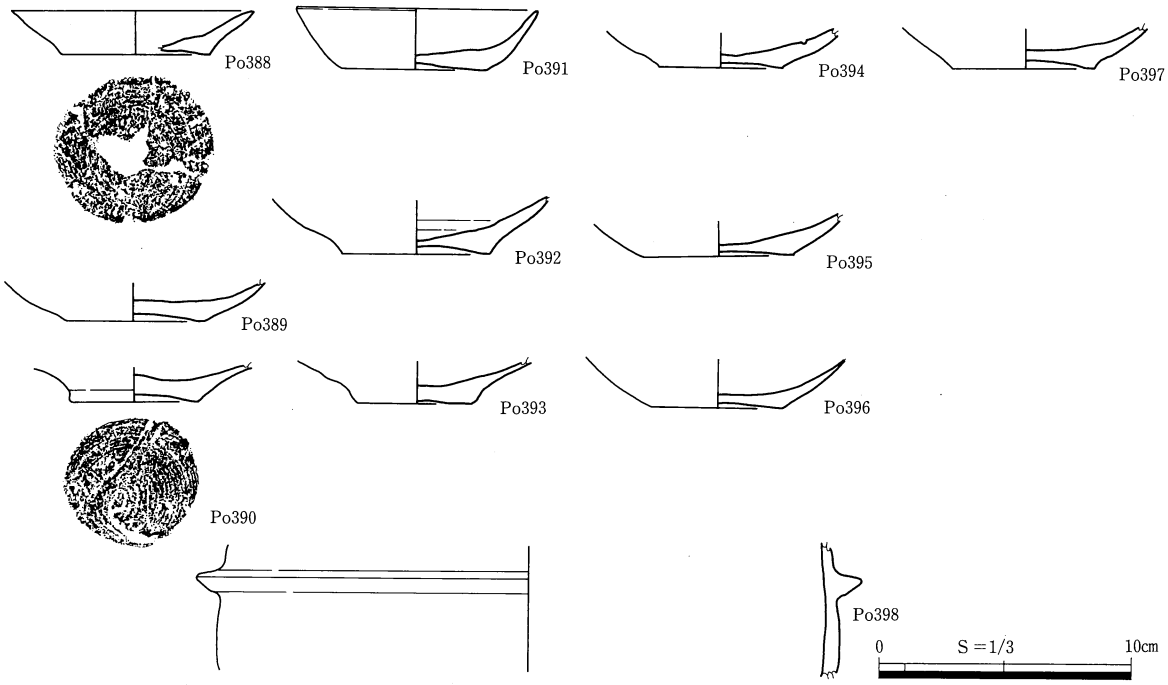
挿図143　ＳＢ02遺構図

排 水 溝　また、建物の周囲には、斜面際に幅20～77cm、深さ１～７cmを測る、排水溝と考えられる溝が巡っており、西側では二股に分かれている。

遺物出土状況　出土遺物には、Ｐ13内で土師質土器皿Po388～Po390、Ｐ14内で土師質土器Po391～Po397、平坦面上で瓦質土器羽釜Po398がある。土師質土器皿は、風化が著しいが底部に糸切り痕が認められる。

時　期　これらの遺物から、中世頃のものと考えられる。

性　格　性格は不明であるが、この時期の建物としては大掛かりなものといえる。



挿図144　ＳＢ02出土遺物実測図

２．盛土遺構

ＳＳ03（挿図145・146、図版26・51）

位　置　堤谷地区Ｃ区南側調査区際の25・26Ｅグリッドにあり、前述のＳＢ02の廃絶後に盛土が行われて成形されたものである。

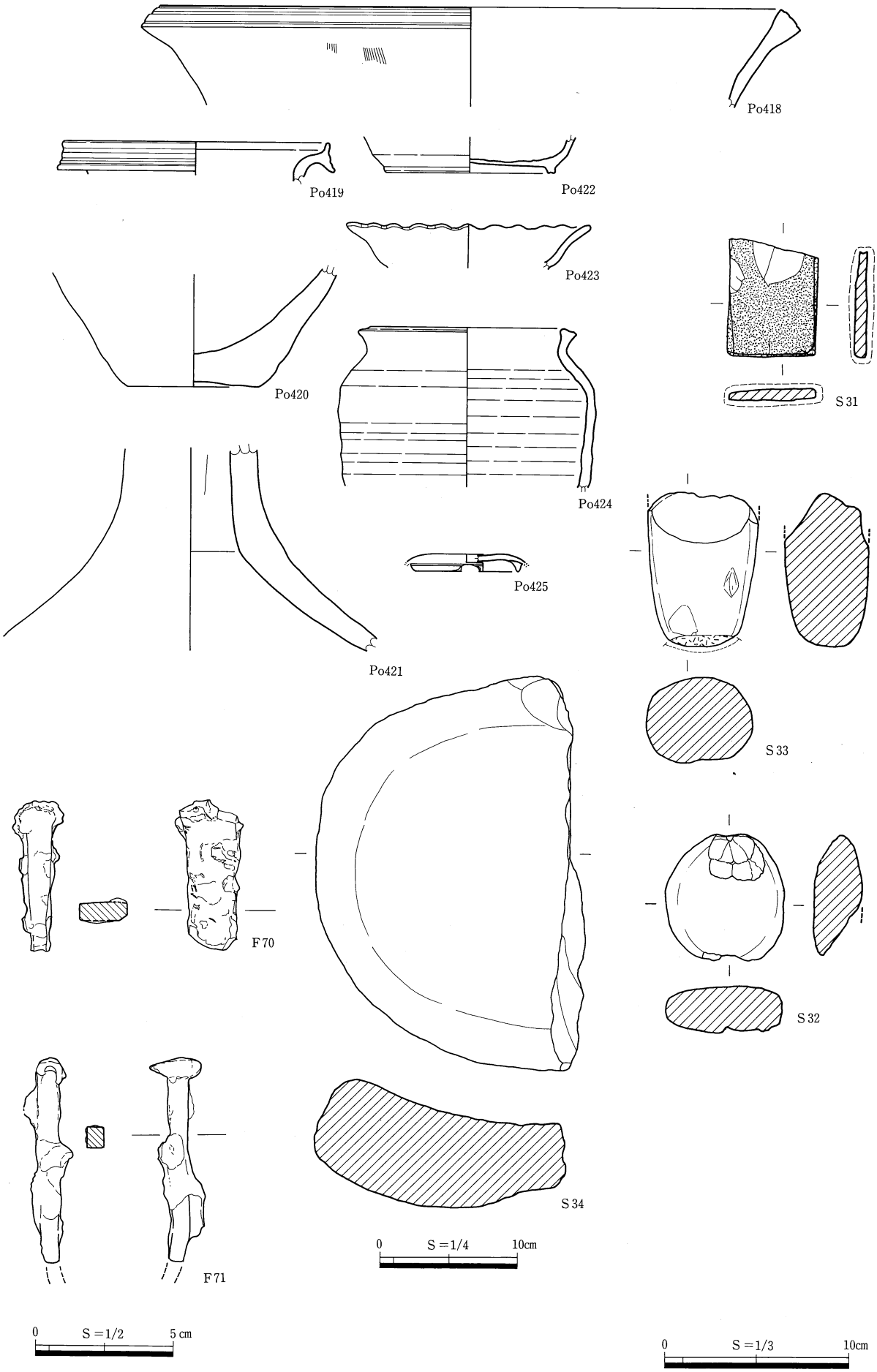
形　態　盛り土上面は、ほぼ平坦面となっているが、平坦面上で遺構等は検出されなかった。

盛土排水溝　土層断面を観察すると、21層に分層できたが、このうち盛土と考えられるのは②層のみである。②層は大型の基盤ブロックを多量に含むもので、厚さ0.6～1.0mを測る。②層以下は盛土以前の二次流土と考えられる。

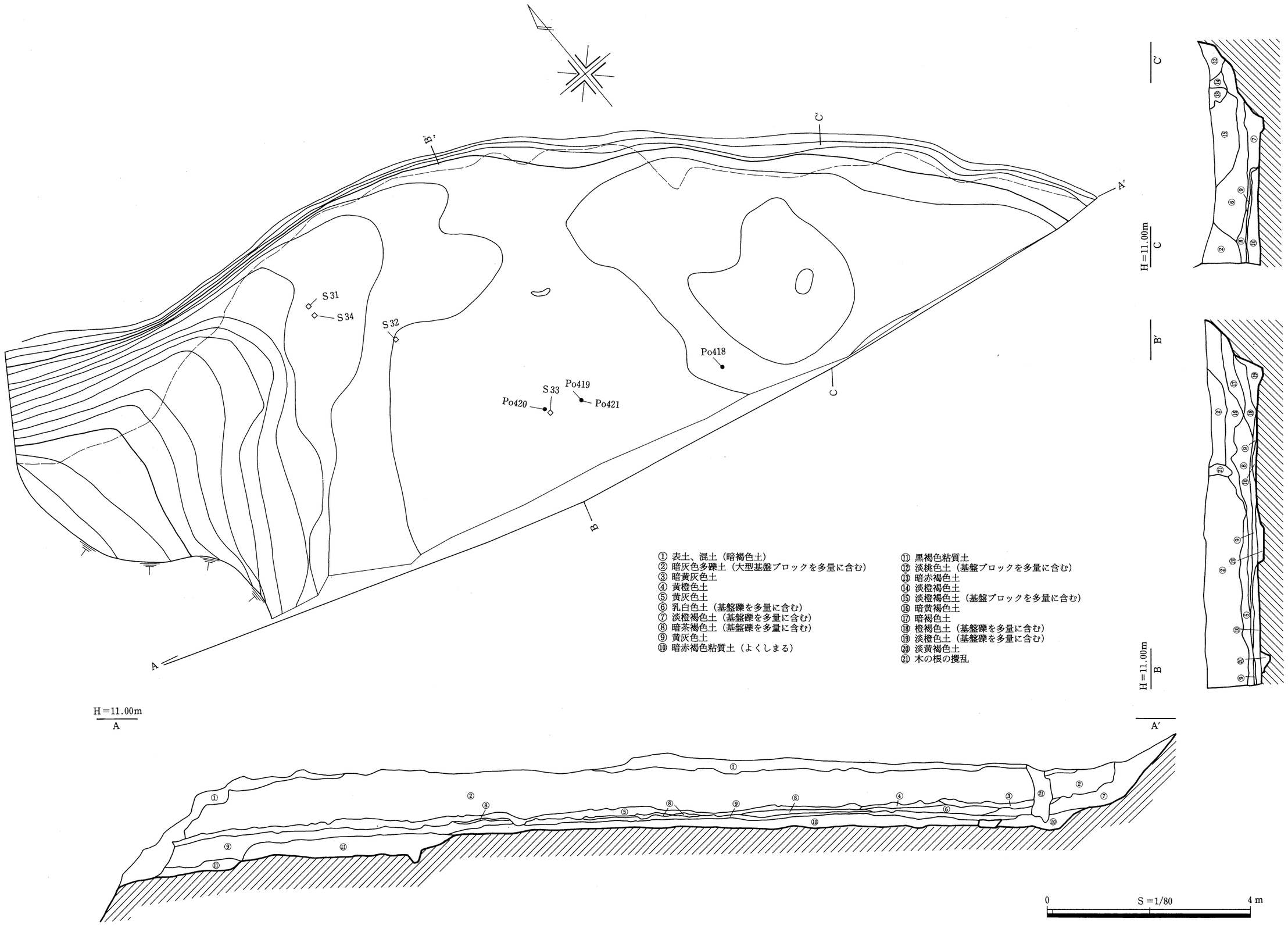
遺物出土状況　出土遺物には、②層中で甕Po418・Po419、底部Po420、器台Po421、瓦質土器高台付杯Po422、青磁Po423、陶器Po424・Po425、砥石Ｓ31、石錘Ｓ32、磨製石斧Ｓ33、石皿Ｓ34、楔と考えられるＦ70、鉄釘Ｆ71がある。

時　期　これらの遺物は、弥生時代中期～中世と幅をもち、ＳＳ03に伴う遺物とは言えない。ＳＢ02が鎌倉時代頃のものと考えられることから、中世以後のものと考えられる。

性　格　性格は不明である。



挿図146　ＳＳ03出土遺物実測図



挿図146　ＳＳ03遺構図

遺構名	形　態	規模（m）	床面積（㎡）	残存壁高	主柱穴	遺　　物	時　期	備　　考
ＳＩ01	隅丸方形	5.17×4.3	19.7↑	0.79	4	甕・器台・蓋・鉄片・管玉・石皿	弥生時代後期後半	中央ピット、貼床、屋内貯蔵穴炭化材、焼土
ＳＩ02	方形？	不明	不明	—	—	甕・高杯・砥石	弥生時代後期後半	
ＳＩ03-1	楕円形	6.06↑×5.24↑	24.9↑	0.56	6？	壺・甕・高杯・注口土器・鼓形器台・椀・鉄片・石錘	弥生時代後期後半	中央ピット
03-2	—	—	—	—	5			
ＳＩ04	隅丸方形	3.98↑×2.37↑	7.7↑	0.57	4？	甕	弥生時代後期後半	
ＳＩ05-1	—	—	—	—	4	壺・甕・高杯・甑・鉄片・砥石	古墳時代前期前半	
05-2	—	—	—	—	4			中央ピット
05-3	隅丸方形	5.27×5.17	23.6	0.6	4			中央ピット、棟持柱、補助柱穴
ＳＩ06-1	楕円形	6.73×6.05	32.2	？	7	甕・高杯・鼓形器台・鉄片・砥石	弥生時代後期後半	中央ピット
06-2	—	—	—	—	6			
ＳＩ07	方形	3.0※×2.6※	7※	？	？	甕・高杯・鼓形器台・鉄片・敲石	弥生時代後期後半	焼土面、屋内貯蔵穴
ＳＩ08	方形	4※×3※	12※	？	—	甕・敲石	弥生時代後期後半	
ＳＩ09	円形	4.54×4.13	15.3	0.67	3	甕・鼓形器台・鉄片・敲石・磨石・擦石	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半	中央ピット、炭化材、焼土
ＳＩ10	隅丸方形	6.5×2.06↑	10.5↑	0.81	—	甕・高杯・敲石・石錘	弥生時代後期後半	焼土面
ＳＩ11	隅丸方形	5.1×4.88	29.7	0.28	4	甕・甑・砥石	古墳時代前期前半	中央ピット、排水溝
ＳＩ12	六角形	9.04×8.8	60.4	0.43	6	甑・低脚杯	弥生時代後期後半	中央ピット、暗渠状排水溝
ＳＩ13	隅丸方形	4.3↑×2.2↑	7.7↑	0.13	4？	底部	弥生時代後期～古墳時代前期	
ＳＩ14	隅丸方形？	1.6↑×1.6↑	2.8↑	0.21	—	甕・蓋	弥生時代後期後半	
ＳＩ15	隅丸方形？	3.8↑×1.4↑	3.7↑	0.97	—	甕・高杯	古墳時代前期前半	
ＳＩ16	不明	5.7↑×1.5↑	4.7↑	0.31	—	把手付短頸壺	弥生時代後期後半	
ＳＩ17	不明	1.8↑×1.7↑	2.0↑	0.26	—	—	不明	

挿表１　西桂見遺跡竪穴住居跡一覧表　　※は推定、↑は数値以上

遺構名	形　態	規　模（m）	長軸方向	種 類	遺　　物	時 期	備　　考
ＳＫ01	長方形	1.10×0.93－0.38	N-27°-W	荼毘墓	土師質土器皿、鉄釘、人骨、炭化物	中世末	焼土面
ＳＫ09	隅丸長方形	1.20×1.01－0.44	N-42°-E	火葬墓	銅銭？、炭化物	中世末	B.P.280±40
ＳＫ10	長方形	1.31×0.69－0.17	N-8°-E	荼毘墓	土師質土器皿、鉄釘、銅銭	中世末	焼土面 B.P.470±40
ＳＫ11	長方形	1.21×0.83－0.73	N-8°-W	土葬墓	鉄釘、銅銭	中世末	周溝
ＳＫ12	不整長方	1.24×0.83－0.22	N-1°-E	火葬墓	鉄釘、銅銭、炭化物	中世末	B.P.540±30
ＳＫ13	長方形？	0.4↑×0.66－0.18	—	不明	—	中世末	
ＳＫ14	円形	1.19×1.17－1.50	—	土葬墓	鉄釘、銅銭、壮年男性骨片	中世末	周溝
ＳＫ15	不整長方形	1.08×0.77－0.24	N-17°-W	火葬墓	鉄釘、炭化物	中世末	溝 B.P.430±30
ＳＫ16	隅丸長方形	1.33×0.89－1.08	N-42°-E	土葬墓	鉄釘、漆被膜	中世末	周溝
ＳＫ17	長方形	0.97×0.71－0.18	N-35°-E	荼毘墓	鉄釘、銅銭、炭化物、小児骨片	中世末	焼土面
ＳＫ18	隅丸長方形	1.03×0.8－0.63	N-76°-E	土葬墓	銅銭	中世末	
ＳＫ19	長方形	1.10×0.77－0.24	N-1°-E	火葬墓	炭化物	中世末	
ＳＫ20	隅丸長方形	1.38×0.95－0.79	N-4°-E	土葬墓	土師質土器皿、銅銭	中世末	
ＳＫ21	長方形	0.81×0.6－0.69	N-17°-E	土葬墓	土師質土器皿、鉄釘	中世末	
ＳＫ25	不整楕円形	2.6↑×1.26－0.65	N-44°-E	土葬墓	土師質土器皿、短刀、砥石	中世	角礫

挿表２　西桂見遺跡鷲谷口・堤谷地区中世墓一覧表

No.	銭 貨 名	国　名	初鋳年	書　体	備　　考
C 2～9 C10～13 C14	熙寧元寶他 不明 不明	北　宋	1068年	真　書	熙寧元寶１枚を含む、計８枚付着 ４枚付着

挿表３　ＳＫ10出土銅銭一覧表

No.	銭 貨 名	国　名	初鋳年	書　体	備　　考
C15	開元通寶	唐	621年	真　書	
C16	淳化元寶	北　宋	990年	真　書	
C17	景徳元寶	北　宋	1004年	真　書	
C18	天禧通寶	北　宋	1017年	真　書	
C19	皇宋通寶	北　宋	1038年	真　書	
C20	熙寧元寶	北　宋	1068年	真　書	
C21	元豊通寶？	北　宋	1078年	行　書	
C22	政和通寶	北　宗	1111年	篆　書	
C23	永楽通寶	明	1408年	真　書	
C24	不明				
C25	不明				

挿表４　ＳＫ11出土銅銭一覧表

No.	銭 貨 名	国　名	初鋳年	書　体	備　　考
C26	咸平元寶	北　宋	998年	真　書	
C27	祥符通寶	北　宋	1009年	真　書	
C28	皇宋通寶	北　宋	1038年	真　書	
C29	大観通寶	北　宋	1107年	真　書	
C30	永楽通寶	明	1408年	真　書	
C31	不明				○○通寶

挿表５　ＳＫ12出土銅銭一覧表

No.	銭 貨 名	国　名	初鋳年	書　体	備　　考
C32～34	皇宋通寶他	北　宋	1038年	真　書	皇宋通寶１枚を含む、計３枚付着。布付着
C35	熙寧元寶	北　宋	1068年	真　書	
C36・37	不明				２枚溶着

挿表６　ＳＫ14出土銅銭一覧表

No.	銭 貨 名	国　名	初鋳年	書　体	備　　考
C38	開元通寶	唐	621年	真　書	
C39	景祐元寶	北　宋	1086年	真　書	
C40	熙寧元寶	北　宋	1068年	真　書	
C41	熙寧元寶	北　宋	1068年	篆　書	
C42	元祐通寶	北　宋	1086年	篆　書	
C43	不明				

挿表７　ＳＫ18出土銅銭一覧表

No.	銭 貨 名	国　名	初鋳年	書　体	備　　考
C44	開元通寶	唐	621年	真　書	
C45	祥符元寶	北　宋	1009年	真　書	
C46	祥符元寶	北　宋	1009年	真　書	
C47	天聖元寶	北　宋	1023年	真　書	
C48	熙寧元寶	北　宋	1068年	真　書	
C49	熙寧元寶	北　宋	1086年	真　書	
C50	元豊通寶	北　宋	1078年	行　書	
C51	元豊通寶？	北　宋	1078年	行　書	熱で変形
C52	聖宋元寶？	北　宋	1101年	行　書	熱で変形
C53	永楽通寶	明	1408年	真　書	
C54	不明				○○通寶
C55	不明				

挿表８　ＳＫ20出土銅銭一覧表

ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ
P 1	55×53－31	P 5	48×41－38	P 9	49×45－26	P13	36×30－28
P 2	71×53－37	P 6	86×49－47	P10	52×45－23	P14	34×31－34
P 3	38×33－27	P 7	42×34－37	P11	62×57－16		
P 4	34×44－23	P 8	52×48－23	P12	62×61－52		

挿表 9　堤谷地区Ａ区ピット群01一覧表

ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ
P 1	28×21－46	P 5	49×23－40	P 9	40×30－26	P13	40×25－24
P 2	36×23－19	P 6	40×31－42	P10	72×43－43	P14	48×46－43
P 3	40×35－45	P 7	45×35－49	P11	46×27－30	P15	34×25－27
P 4	52×32－61	P 8	25×21－27	P12	26×23－37	P16	83×51－53

挿表10　堤谷地区Ａ区ピット群02一覧表

ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ	ピット番号	規模 cm 長軸×短軸－深さ
P 1	28×25－19	P 4	23×21－18	P 7	34×23－16	P10	44×38－15
P 2	29×28－14	P 5	28×22－31	P 8	32×28－28	P11	30×27－27
P 3	50×43－45	P 6	45×40－23	P 9	35×34－17	P12	29×26－31

挿表11　堤谷地区Ｂ区ピット群03一覧表

第５章　倉見古墳群の調査（1994年度）

第１節　倉見古墳群の概要

位　　置　倉見古墳群は、標高約15～32mの尾根頂部に立地する。これまでに標高約30mの南北に延びる丘陵上で７基確認されていたが、今回の調査で、標高約15mの西側に延びる低丘陵上で新たに２基の古墳を検出し、総計９基からなる。

今回調査した７号墳は西桂見遺跡鷲谷奥地区Ａ区、８・９号墳は西桂見遺跡鷲谷口地区で検出された。

倉見７号墳　７号墳は、標高約30mの丘陵上に立地している。古墳時代前期頃の、一辺約14mを測る方墳または長方墳と考えられる。これまで調査された１～６号墳と同じく、高い丘陵上に立地しており、また時期もほぼ同時期と考えられることから、同じ支群として考えてもよかろう。

倉見８号墳　８号墳は、標高約15mの低丘陵上に立地するもので、墳丘南側が半分以上削り取られ、また、盛土もほとんど遺存していなかったが、検出した周溝から、一辺約13mの方墳と考えられる。古墳時代後期頃のものと考えられる。

倉見９号墳　９号墳も、標高約15mの低丘陵上に立地する。南側が８号墳と近接している。墳丘盛土は削平されており、遺存していなかった。径約10mのいびつな円墳と考えられる。主体部は、遺存状態は悪く、基底部のみであったが、湖山池周辺ではあまり知られていない横穴式石室であることが判明した。古墳時代後期頃のものと考えられる。

８・９号墳は、他の古墳と異なる立地条件でありまた、時期も異なることから、異なる支群であることが分かる。

第２節　倉見７号墳（挿図147～149、図版26・27・52）

位　　置　倉見７号墳は、西桂見遺跡鷲谷奥地区Ａ区北側の13Ｃ・14Ｂ～14Ｄグリッドにあり、標高約32mの尾根頂部に立地する。

倉見古墳群はこれまでに７基確認されていたが、今回の調査で新たに２基の古墳を検出し、総計９基からなる。７号墳は、これまで調査された１～６号墳と同じく、高い丘陵上に立地しており、同じ支群として考えてもよかろう。

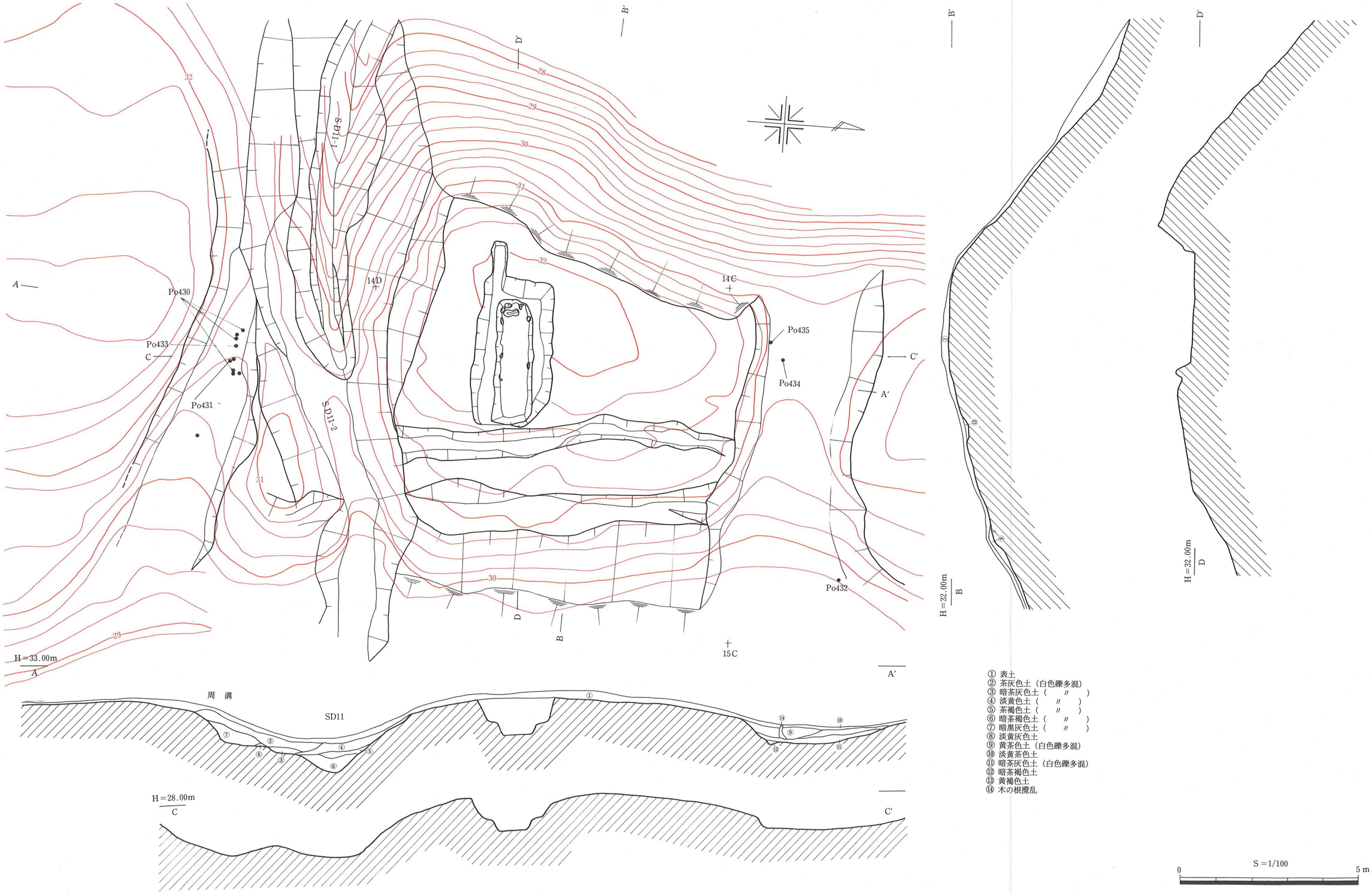
現　　況　調査前の観察では、北側は平坦部分から南は前述のＳＤ11までの範囲が考えられ、径12mの円墳と考えられていた。

墳　　丘　表土を除去したところ、墳丘は狭い尾根を横断する南北２本の周溝によって区画されていることがわかった。そのうち、南側の周溝及び墳丘はＳＤ11に大きく削り取られていることがわかった。また、西側は流失のため、東側はＳＤ12及びＳＤ13によって削平を受けており、遺存状態は必ずしも良好ではない。

墳形は、方墳または長方墳と考えられる。

墳丘は地山削り出しと盛土によって造られたものと考えられるが、表土下はすべて地山で、盛土は流失したものと考えられる。旧表土も検出されていないことから、盛土に先立って地山を大きく整形したものと推察される。

残存する墳丘規模は、南北14.45m、東西11.5m以上を測る。高さは、北側周溝底から1.35m、南側周溝底から1.6mを測る。



挿図147　倉見７号墳墳丘測量図

葺石等の外表施設は検出されなかった。

周　溝　周溝は、周辺の地形から考えると全周するものではなく、尾根を直線的に横断する南北２本の周溝で墳丘を区画したものと考えられる。南側のものについては、やや斜めに横断するもので、実際の墳形はいびつな方墳またはいびつな長方墳を呈す。規模は、北側周溝は幅3.6～4.4m、深さ0.6m、南側周溝は幅2.6m、深さ0.7mを測り、断面逆台形状を呈す。

埋土の状況を見ると、北側周溝では４層に分層できたが、②層は周溝埋没後に掘り込まれたものである。南側周溝では９層に分層できたが、②～⑥層はＳＤ11の埋土であり、周溝の埋土は⑦～⑨層である。いずれも基盤礫を含むものである。

主体部　主体部は、墳丘中央で検出された二段掘り土壙をもつものである。東側はＳＤ12によって削られている。棺痕跡は認められなかったが、木棺が埋納されたものと考えられる。なお、底面西側には壁際に深さ３～７cmの小ピットが掘り込まれているが、用途は不明である。

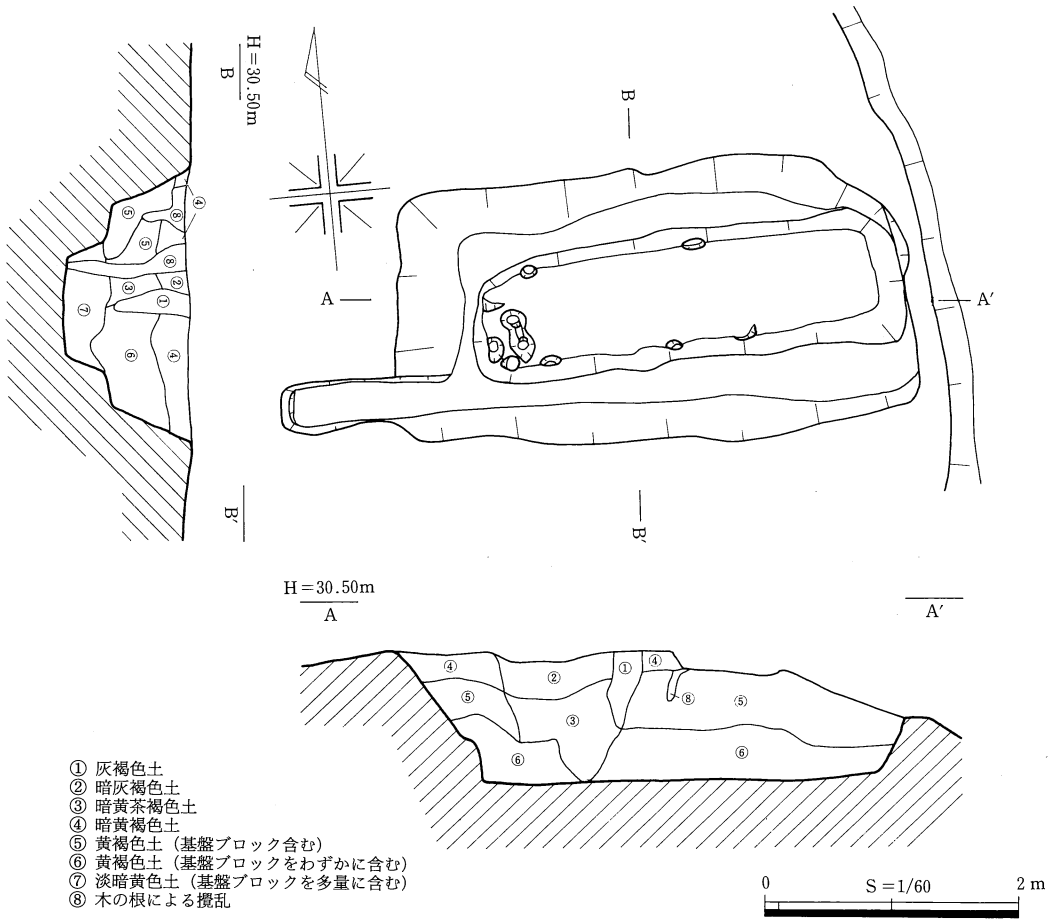
また、西小口側南辺には、長さ1.4m、幅0.4m、深さ0.29～0.42mを測る狭い溝が掘り込まれている。この溝の底面は、墓壙テラス部分のレベルと同じで、また、プランも南長側辺につながることから、この墓壙に伴うものと考えられる。

残存する墓壙の規模は、上縁部長さ4.1m以上、幅2.1～2.3m、深さ0.60mを測る。テラス部分の幅は、0.15～0.5mである。下段は、長さ3.5m、幅1.05m、深さ0.28～0.37mを測る。

主軸方向は、Ｎ－97°－Ｅと東西を向く。頭位方向は不明である。

埋土の状況を見ると、中央部やや西側で盗掘を受けたと思われる土層の乱れが認められる。

遺物出土状況　図化できた遺物はすべて周溝内からの出土である。主体部は盗掘を受けたものと思われ、遺物は全く出土しなかった。



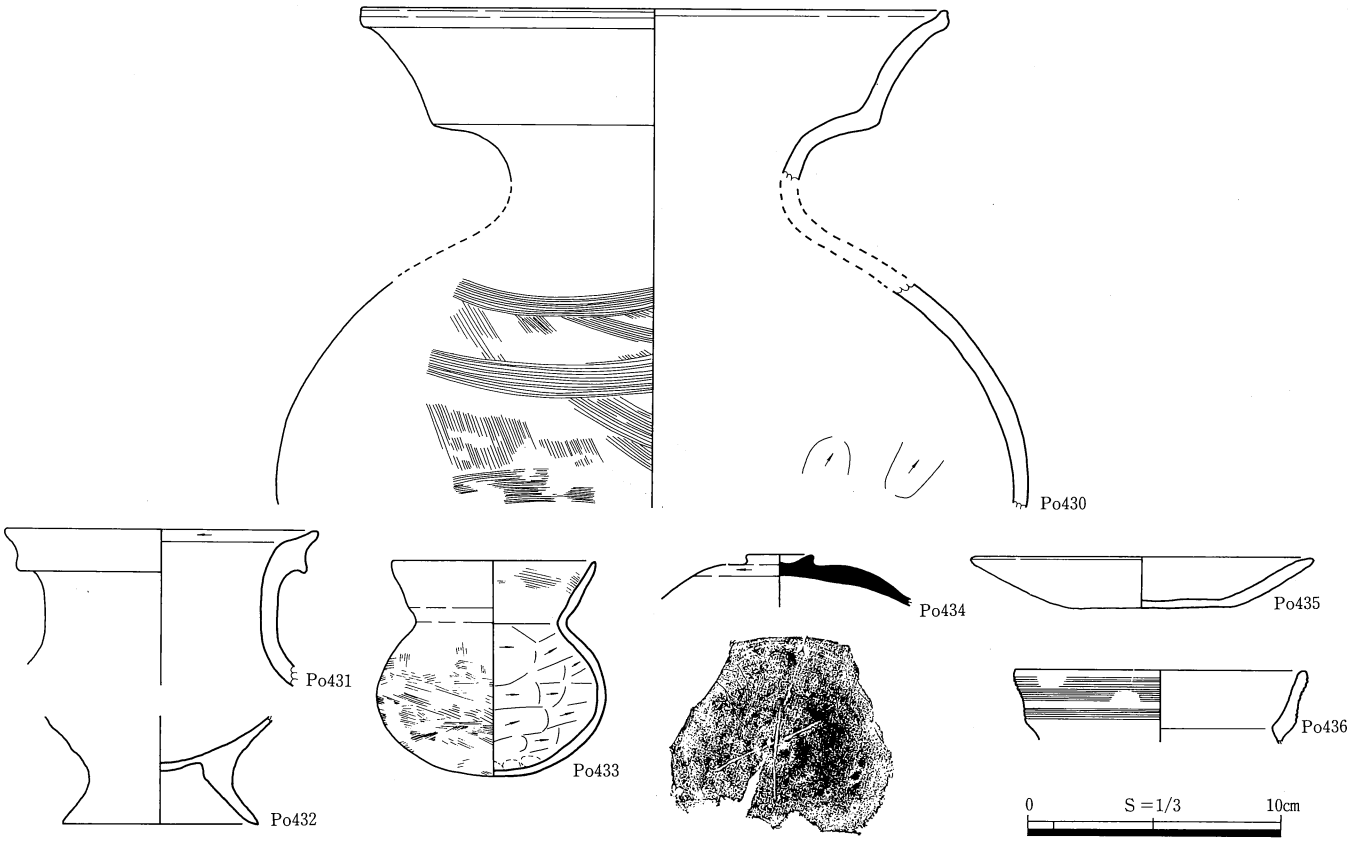
挿図148　倉見７号墳主体部遺構図

南側周溝内からは、埋土中から土師器壺Po430・Po431、小型丸底壺Po433が出土している。北側周溝内からは、埋土中から低脚杯Po432、土師質土器皿Po435、須恵器杯蓋Po434、弥生土器甕Po436が出土している。

時　期　北側周溝内からの遺物のうち、Po434、Po435に関しては、周辺からの混入または後世の流れ込みのものと考えられ、この古墳に伴う遺物は南側周溝内から出土しているものと考えられる。これらは布留中～新段階、古墳時代前期後半～中期初頭頃のものと考えられる。

特に、Po430は畿内系の二重口縁壺と考えられ、端部がわずかに上方へつまみ出されるが、口縁部下端部は屈曲するのみであり、退化傾向が認められる。Po433は口縁部径が胴部最大径を上回るものではなく、口縁部も高くない。

倉見７号墳は、後述する８・９号墳とは時期が異なり、また立地条件も異なる。既に調査が行われた倉見２～６号墳とは同じ立地条件であり、時期もほぼ同時期と考えられる。



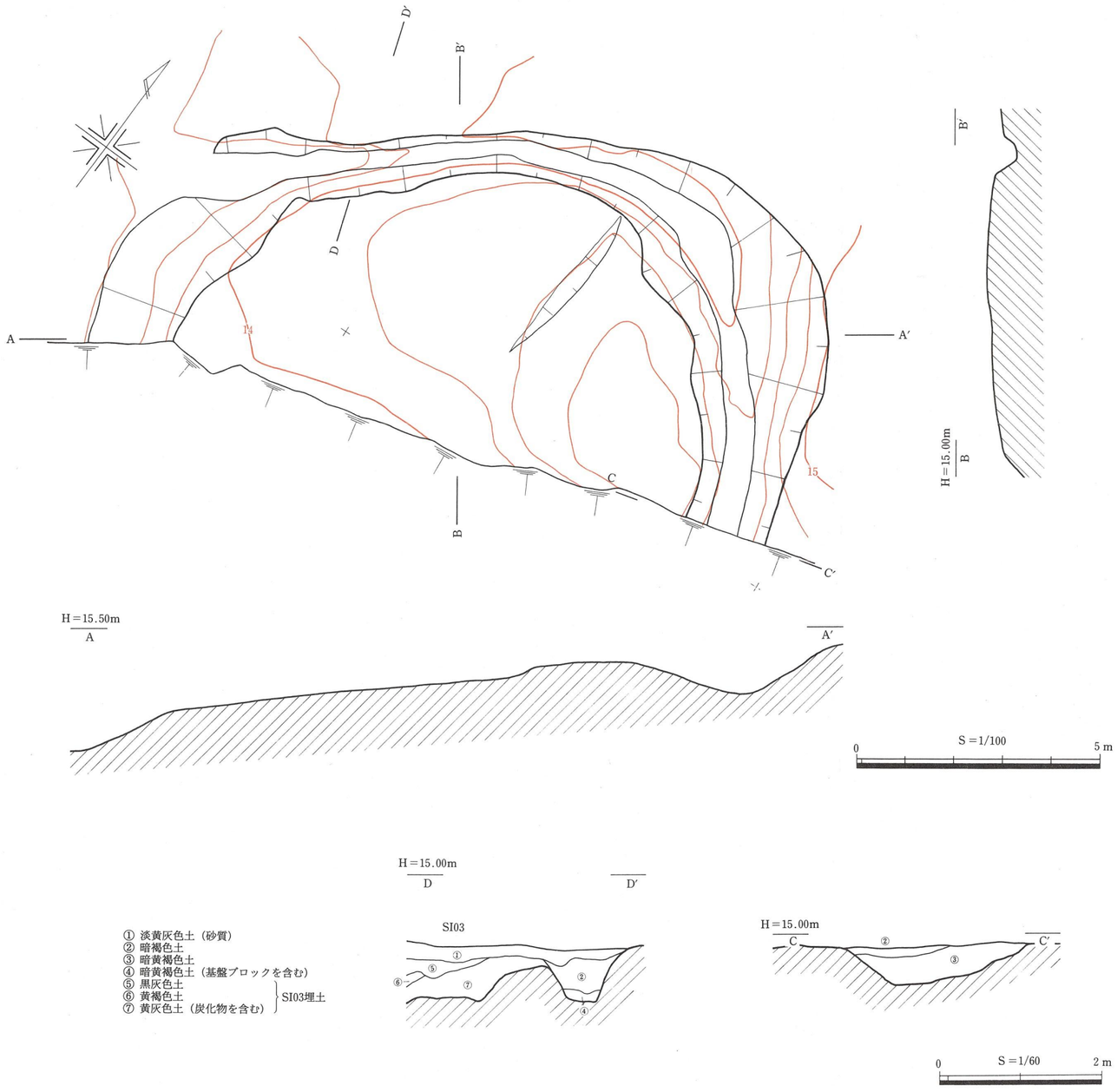
挿図149　倉見７号墳出土遺物実測図

第３節　倉見８号墳（挿図150～152、図版27・52）

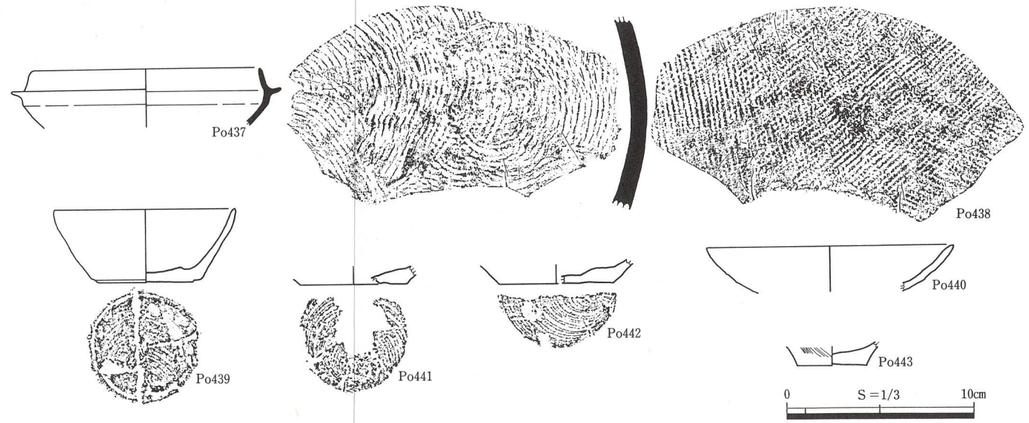
位置と現況　倉見８号墳は、西桂見遺跡Ａ区西側の５Ｄ・５Ｅ・６Ｄ・６Ｅグリッドにあり、標高約15mの尾根頂部に立地する。北側約１ｍには倉見９号墳がある。倉見８号墳は、９号墳と合せ、今回の調査で新たに検出されたものである。

調査前の状況は、周辺は後世の耕作等が行われていたものと思われ、西側にやや傾斜しながらも二段の平坦面が形成されていた。また、南側については、ＳＤ04によって大きく削り取られている。なお、北側にはＳＩ01・03があるが、いずれも８号墳周溝によって削られている。

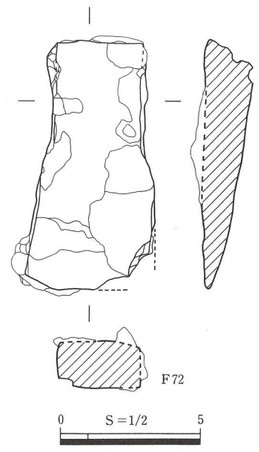
墳　丘　表土を除去したところ、墳丘はほとんど削平され、周溝を検出した結果存在を確認した。



挿図150　倉見８号墳墳丘測量図



挿図151　倉見８号墳出土遺物実測図(1)



挿図152　倉見８号墳出土遺物実測図(2)

墳形は、遺存する周溝から方墳と考えられる。

墳丘東側で、若干の盛土が認められた。盛土は旧表土上に行われており、盛土を行う際、旧地形を整地する作業は行われなかったものと推定される。

残存する墳丘規模は、南北6.5m以上、東西13.2mを測る。南側を復元すると一辺約13m程度のものと考えられる。高さは、北側周溝底から1.0m、東側周溝底から0.5mを測る。

葺石等の外表施設は検出されなかった。

周　溝　周溝は、西側・南側で削平・掘削を受けており、全形は不明である。形態は、東側はやや広く掘り込まれているが、北側に関しては周溝幅が非常に狭くなっている。コーナー部分は不明瞭で、丸味をもって折れている。規模は、北側周溝は幅0.8～1.0m、深さ0.5m、東側周溝は幅1.7～2.9m、深さ0.4mを測り、断面北側は逆台形状、東側は「U」字状を呈す。

埋土の状況を見ると、北側周溝では4層に分層できたが、②層は周溝埋没後に掘り込まれたものである。南側周溝では9層に分層できたが、②～⑥層はＳＤ11の埋土であり、周溝の埋土は⑦～⑨層である。いずれも基盤礫を含むものである。

主体部　主体部は、削平を受けており、検出されなかった。

遺物出土状況　図化できた遺物は周溝内・墳丘及び周辺からの出土である。

時　期　北側周溝内からは、埋土中から須恵器杯身Po437、須恵器甕Po438、袋状鉄斧Ｆ72が出土している。墳丘東側では、土師器杯Po439～Po442が出土している。北側周辺から弥生土器底部Po443が出土している。

この古墳にともなう遺物は北側周溝内出土のものである。このうち、Po437は底部が欠損しており全形はわからないが、立ち上がりが比較的高く、ＴＫ43並行期と考えられる。

また、土師器杯は底部に糸切り痕をもち、平安時代～鎌倉時代頃のものと考えられ、この時期には墳丘が削平されていたものと考えられる。

北側周辺から出土しているPo443はＳＩ03に伴うものと考えられる。

第4節　倉見9号墳（挿図153～157、図版27～29・52）

位置と現況　倉見9号墳は、西桂見遺跡鷲谷口地区西側の５Ｃ・５Ｄ・６Ｃ・６Ｄグリッドにあり、標高約15mの尾根平坦面に立地する。南東側約１mには倉見9号墳がある。また、東側のＳＩ01、南側のＳＩ03を、それぞれ周溝・墓壙掘り方によって切っている。

調査前の状況は、周囲は後世の耕作等が行われていたものと思われ、西側にやや傾斜しながらも二段の平坦面が形成されていた。特に西側は、大きく削り取られ、崖面をなしている。北側は丘陵斜面をそのまま墳丘に利用したものと考えられ、墳丘範囲を捉えることはできなかった。また、北側には、後述する横穴式石室の石材と考えられる、大型の石材が見られた。

墳　丘　表土を除去したところ、周溝を検出した結果存在を確認した。

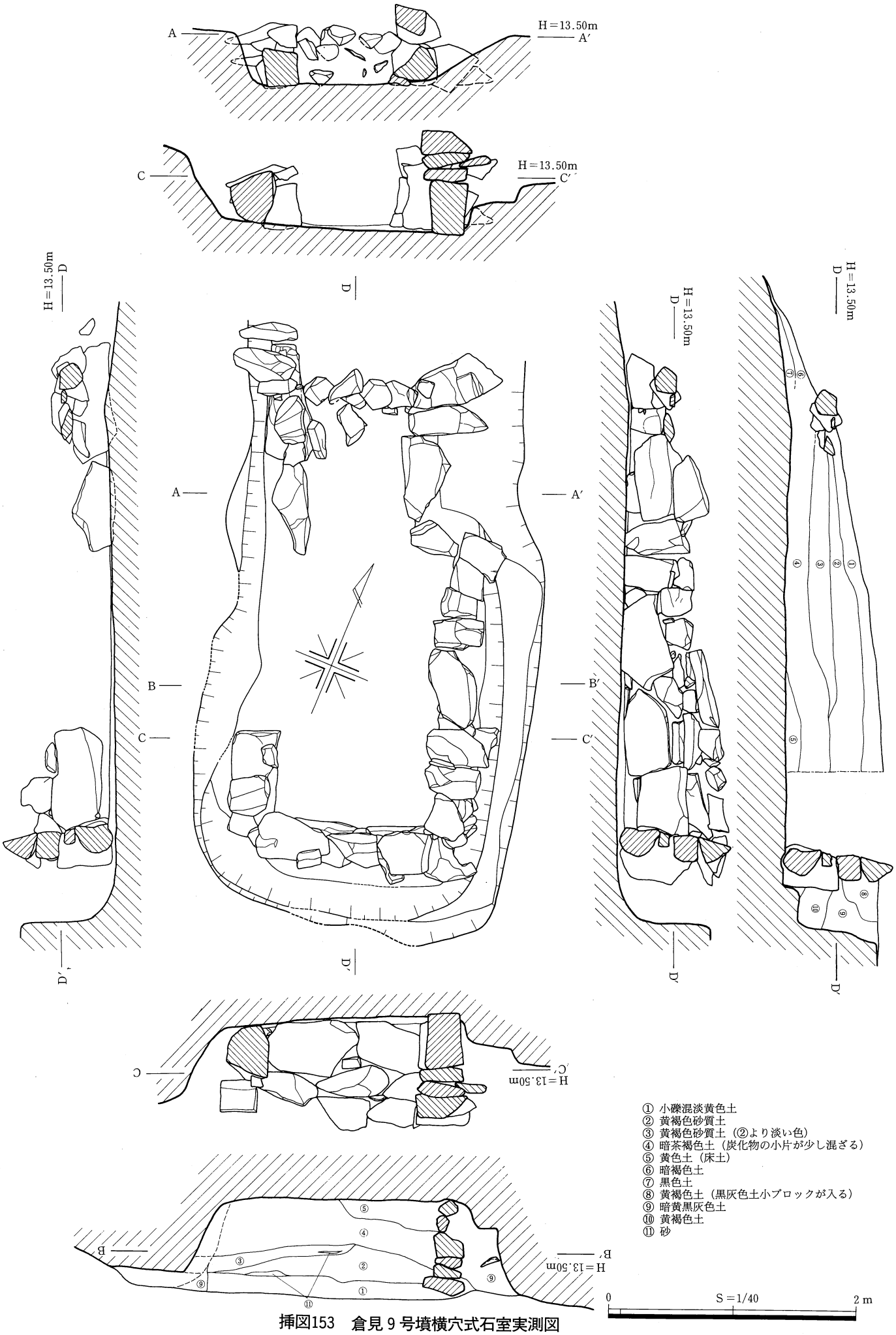
墳形は、遺存する周溝からいびつな円墳と考えられる。

墳丘西側で、若干の盛土が認められた。盛土は旧表土上に行われており、盛土を行う際、旧地形を整地する作業は行われなかったものと推定される。

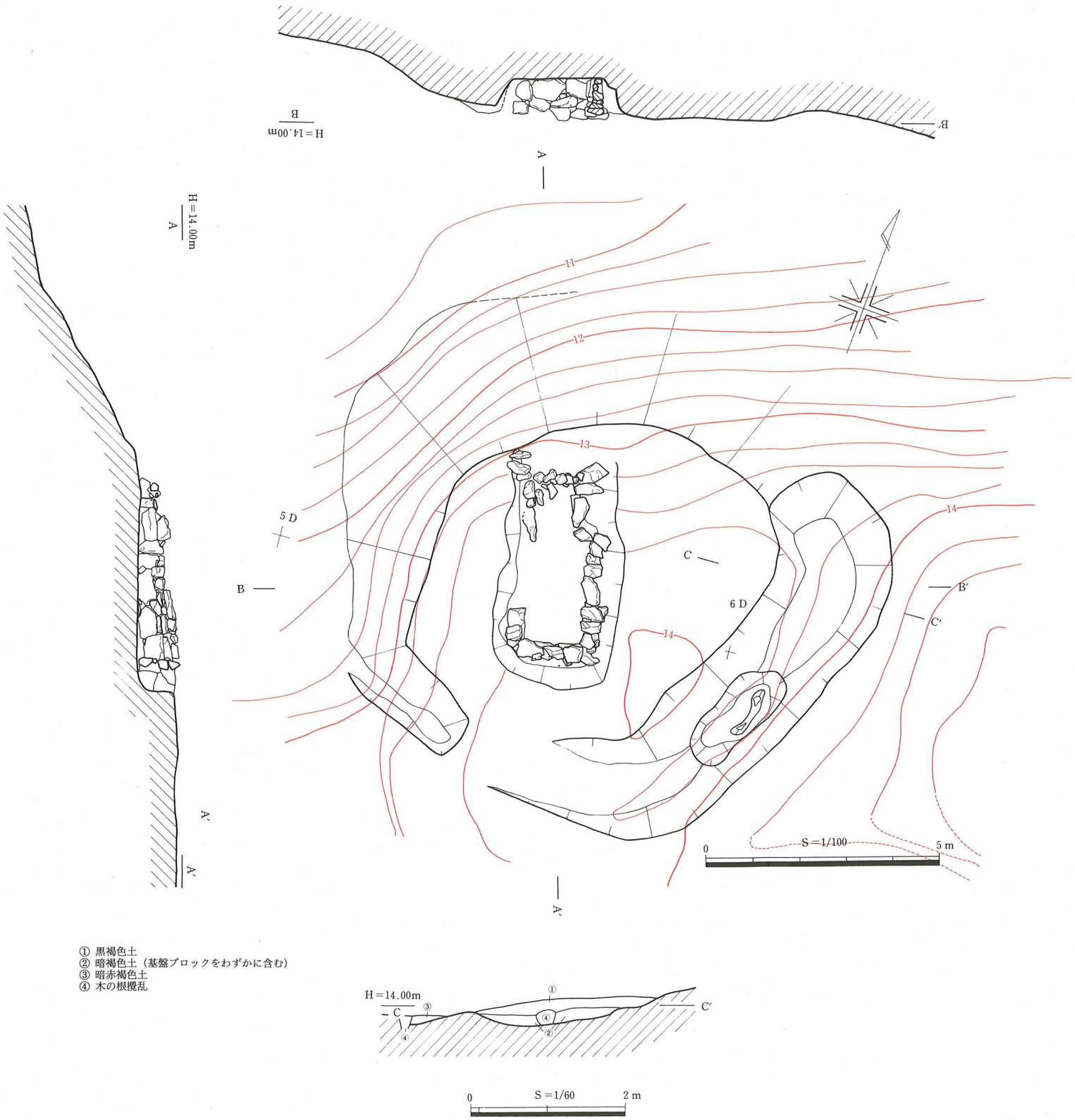
残存する墳丘規模は、南北約10m、東西9.6mを測る。復元すると径約10m程度のものと考えられる。高さは、東側周溝底から0.2mを測る。

葺石等の外表施設は検出されなかった。

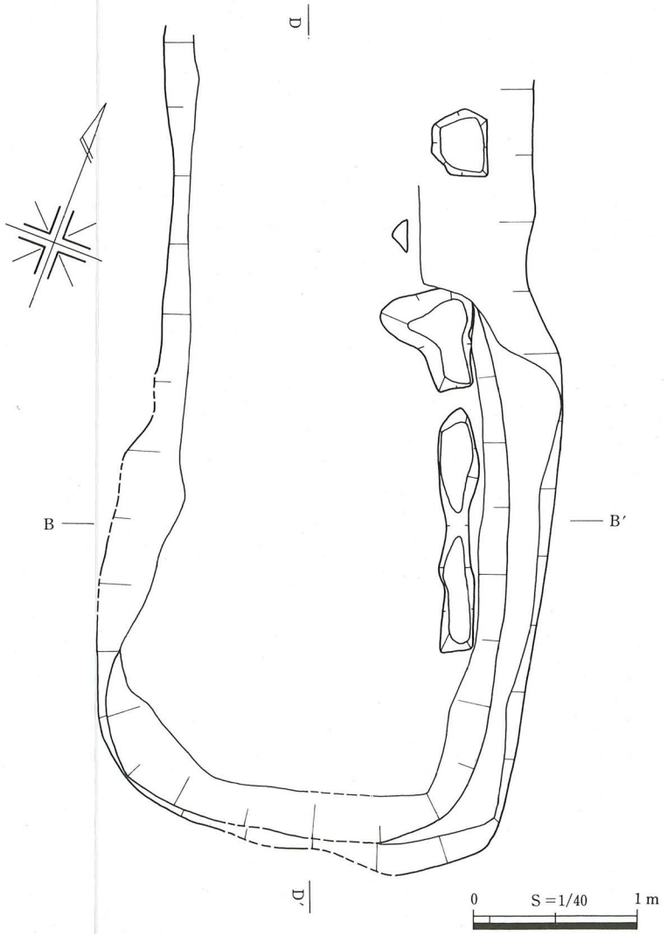
周　溝　周溝は、西側・南側で削平・掘削を受けており、遺存状態は悪い。地形的に見て全周するものではなく、墳丘後背部のみに掘り込まれたものと考えられる。形態は、東側はやや広く掘り込まれている



挿図153　倉見９号墳横穴式石室実測図



挿図154　倉見９号墳墳丘測量図



挿図155　倉見９号墳石室墓壙実測図

が、南側は狭くなっている。これは、後述する周溝内埋葬が東側周溝底にある関係で広くなったものと考えられる。

規模は、幅1.7〜2.3m、深さ0.3mを測り、断面「U」字状を呈す。

埋土の状況を見ると、東側周溝では2層に分層できた。いずれも締まりのないものである。

横穴式石室　主体部は、墳丘中央部で検出された、N−21°−Wとほぼ北に開口する左片袖式の割り石積みの横穴式石室である。全長は4.1mを測る。石室の遺存状態は悪く、天井部及び左側壁の一部の石材が抜かれており、基底部と2〜3段の石積みが遺存していたに過ぎない。

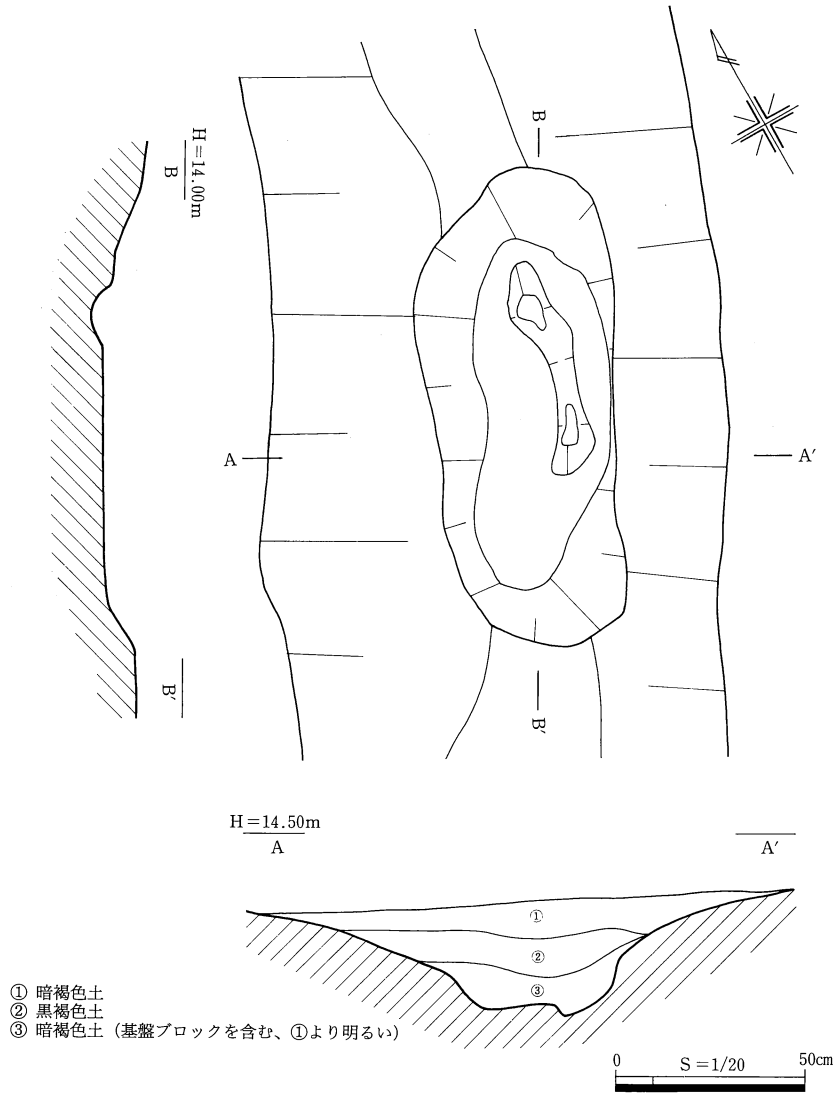
使用石材は、すべて石英安山岩の割石を使用している。

石室内埋土を観察すると、砂質の層が互層状に堆積していることから、後世に掘り返されたものと考えられる。

墓　壙　石室墓壙は、長さ5m以上、幅2.2〜2.7m、深さ0.9mを測る。上縁部は隅丸長方形を呈し、底部は片袖形に掘り込まれている。西側壁側・奥壁側は一段掘りであるが、東側壁側は二段に掘り込まれ、基底石を置く掘り方が掘り込まれている。

石室裏込めの埋土を観察すると、奥壁側では黄褐色土と暗黄黒灰色土が交互に裏込めされていた。

玄　室　玄室は、長さ2.3m、奥壁幅1.3m、玄門幅1.2mを測り、平面長方形を呈す。遺存する高さは、奥壁側で0.85mを測る。壁体構成は、各壁とも基底部にはやや大型の割石石材を腰石とし、その上に塊



挿図156　倉見9号墳周溝内埋葬施設実測図

石または扁平な割石を積みあげて構成している。

側壁の腰石はそれぞれ不均等な大きさであるために、間隙を複数の石材によって補塡し、奥壁の腰石の高さにそろえてから、さらに石積みを行っている。壁面はほぼ垂直である。

袖部は、やや扁平な縦長の石材を立ている。

羨　道　羨道は、長さ1.8m、幅は玄門側で0.85m、羨門側で0.95mを測る。壁体構成は玄室と同様で、腰石上に石積みが行われている。

羨門部では、石材を横長に使用し他の箇所と石材の使い方が異なり、羨門を意識している。

閉塞部　閉塞は羨道部で行われていると考えられ、人頭大の塊石が２～３段積まれている。しかし、これらはいずれも床面から浮いた状態で検出されたものであり、原位置を保つものかどうか疑わしい。

周溝内埋葬施設　東側周溝内で、長軸2.55m、短軸0.95m、深さ0.24mを測る、平面不整楕円形の周溝内埋葬と考えられる土壙を検出した。断面は逆台形状を呈し、一部溝状に掘り込まれる。

埋土は周溝埋土と合せ３層に分層できたが、いずれも皿状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

遺物出土状況　遺物には、石室内、周溝内、墳丘周辺から出土したものがある。図化できたものには、須恵器甕Po444・Po445、弥生土器底部Po446、高杯Po447、鍍金を施した足金具Ｂ４、釣り針Ｆ73、鎌Ｆ74がある。

このうち、玄室埋土中からは、Po446、Ｂ４、Ｆ73がある。また、周溝内からはPo447、Ｆ74が出土している。その他のものは墳丘周辺からの出土である。

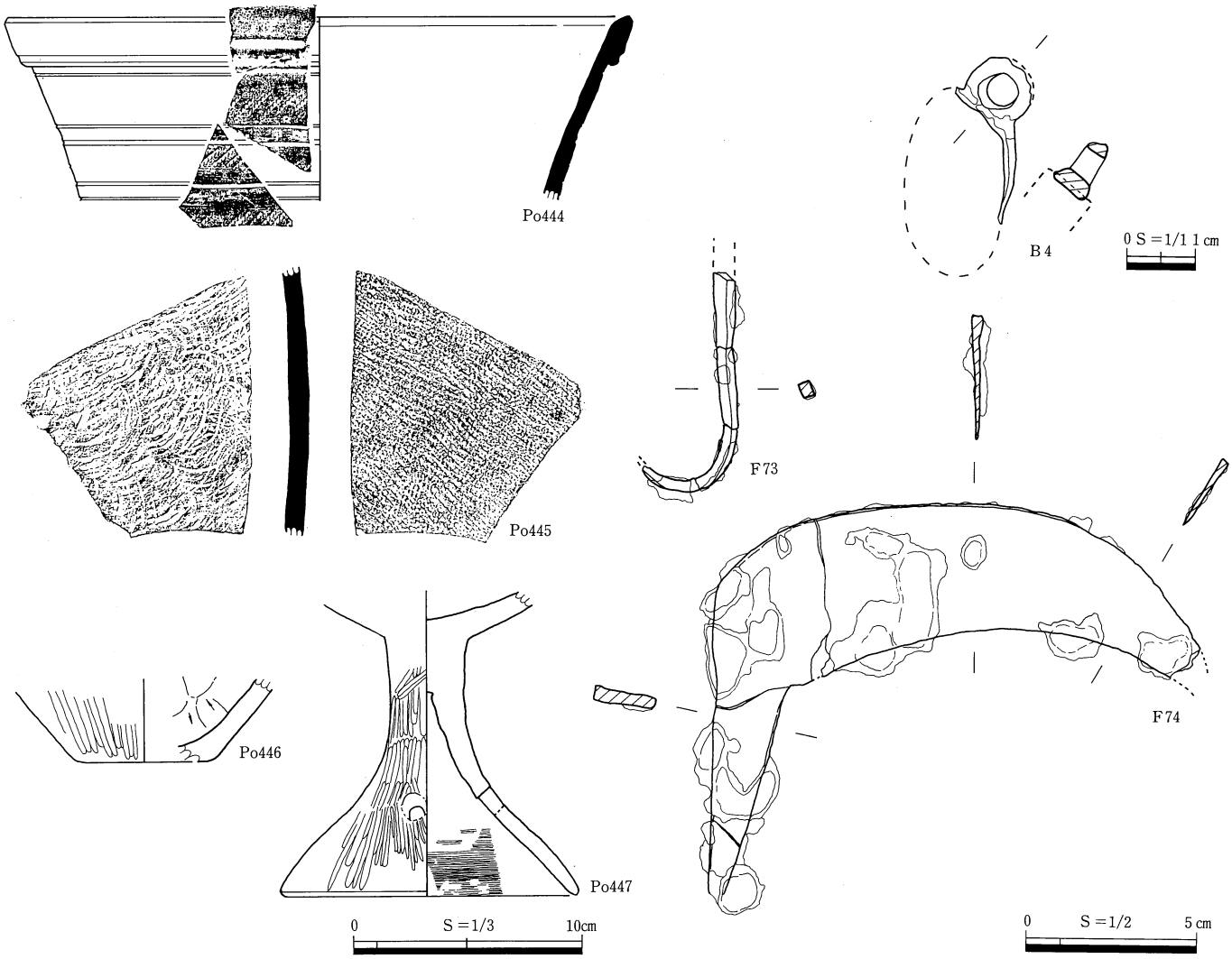
この古墳に伴う遺物はほとんどなく、わずかに玄室内から出土した足金具、墳丘周辺から出土している須恵器甕片が、この古墳に伴うものと考えられる。

足金具は、半分以上欠損しているが、卵形を呈し釣り手が頂点からずれるものである。足金具の釣り手の位置は、頂点からずれるものから頂点につくものへと変化していると考えられている(36)ことから、やや古相を呈すものと考えられる。

なお、玄室内から出土したPo446、周溝内から出土したPo447は弥生時代後期のもので、周辺のＳＩ01・ＳＩ03に伴うものと考えられる。また、釣り針、鎌については後世のものと考えられる。

時　期　この古墳の時期は、周辺の須恵器から、古墳時代後期後半頃のものと考えられる。石室の形態・立地からも導入期の石室形態とは考えられず、この地域で普及した石室形態と考えられる。

また、切り合い関係ははっきりとはしないが、出土遺物を比べるかぎり、南側の倉見８号墳とほぼ同時期のものと考えられる。



挿図157　倉見9号墳出土遺物実測図

第6章　考　察

第1節　西桂見遺跡・桂見遺跡における集落構造

1994年～1995年の調査によって、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落跡がまとまって検出された。

西桂見遺跡では、標高15mの西側に延びる丘陵上（鷲谷口地区）で竪穴住居跡3棟、貯蔵穴と考えられる土坑1基、段状遺構1基、標高約30mの南北に延びる丘陵上～東斜面（鷲谷奥地区）で竪穴住居跡7棟、貯蔵穴と考えられる土坑3基、不明土坑1基、標高約20mの南東側に延びる丘陵上（堤谷地区）で竪穴住居跡7棟、杭列または柵列に区画された掘立柱建物跡1棟、貯蔵穴と考えられる土坑3基が検出されている。

また、西桂見遺跡堤谷地区の東側に接続する桂見遺跡堤谷東地区でも、竪穴住居跡5棟、布掘りの掘立柱建物跡1棟、土坑2基が検出されている（以下、遺跡名省略）。

1．集落の変遷

これらの遺構の時期をさらに細かく見ると、岩吉編年Ⅲ（古）期～岩吉編年Ⅵ（古）期にかけてのものと考えられ、時期毎に集落様相の推移について考えてみたい。

［岩吉Ⅲ（古）期］

鷲谷口地区でＳＩ01、ＳＳ01、鷲谷奥地区でＳＫ07、堤谷東地区でＳＩ02・03・04・05が密集している。堤谷東地区の竪穴住居跡は、非常に接近しておりそれぞれ別々の建物ではなく、同時期内の建て替えによるものと考えられるが、ＳＩ02は隅丸方形、ＳＩ03は五角形を呈しており、単なる建て替えではないことが考えられる。

［岩吉Ⅲ（新）期］

この時期、鷲谷奥地区ではＳＩ04・06・07・10、ＳＫ04・06、堤谷地区ではＳＩ14がある。集落としては、この時期が最も大きくなる。竪穴住居の平面形は、隅丸方形、方形、楕円形とバラエティーに富む。規模は、全形がわかるＳＩ06が32m²と大型で、この時期の中心住居であったと思われる。貯蔵穴は、屋外・屋内両方が見られる。

［岩吉Ⅳ期］

鷲谷口地区ではＳＩ02・03、ＳＫ02、鷲谷奥地区ではＳＩ08、ＳＫ03がある。前時期に比べて、集落の規模は小さくなっている。竪穴住居の平面形は、方形・楕円形が主流となる。貯蔵穴は、屋外のもののみである。

［岩吉Ⅴ（古）期］

堤谷地区ではＳＩ12、ＳＫ22・24、堤谷東地区でＳＫ12がある。堤谷地区のＳＩ12は非常に大型の多角形住居跡で、少なくとも3回の建て替えが確認されている。また、屋外に延びる暗渠状の排水溝をもっている。また、確実な時期は不明であるが、この地区のＳＢ01も同時期のものと考えられる。ＳＫ22・24は屋外貯蔵穴で、このうちＳＫ24はＳＩ12に近接しており、ＳＫ23と合わせて個人所有のものと考えられる。

［岩吉Ⅴ（新）期］

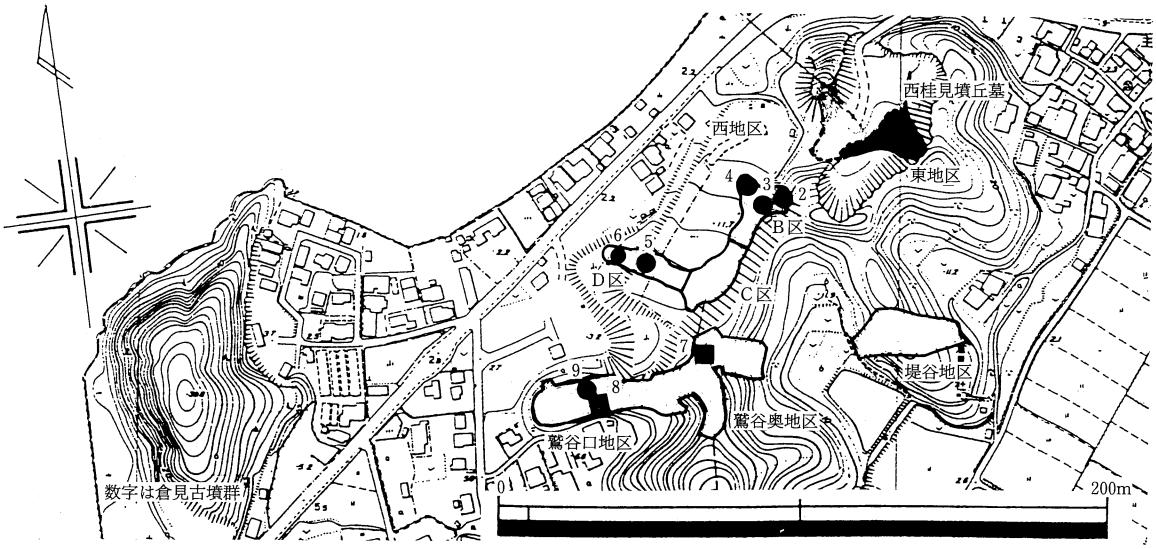
鷲谷奥地区ではＳＩ05・09、堤谷地区でＳＩ11・13、堤谷東地区でＳＳ01、ＳＫ15がある。堤谷地区のＳＩ11は、大型の隅丸方形を呈すもので、屋外に延びる排水溝を備えている。鷲谷奥地区のＳＩ09の周囲には、いわゆる外周溝であるＳＤ15が巡っている。

［岩吉Ⅵ（古）期］

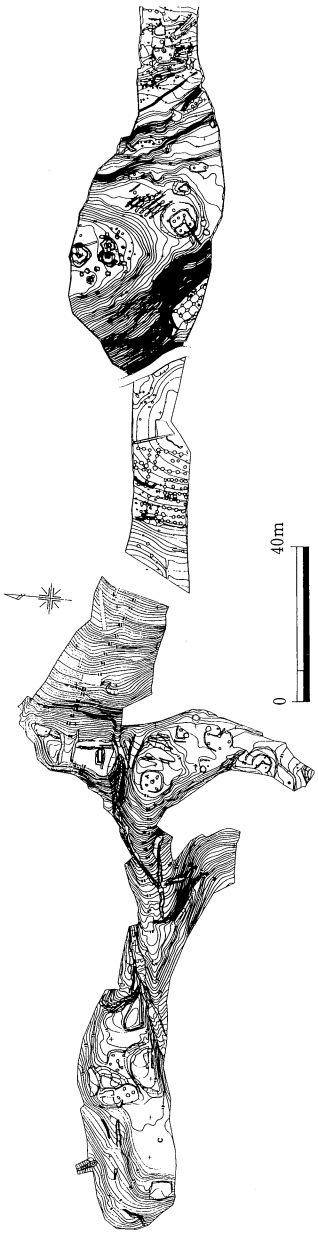
堤谷地区でＳＩ15、堤谷東地区でＳＢ01がある。竪穴住居と掘立柱建物跡は、やや離れて建てられているが、この時期は、高い位置に竪穴住居があり（ＳＩ15）、岩吉Ⅴ（古）期とは逆の位置関係にある。

いずれの時期も、各地区毎に住居跡1～4棟という小さな単位で、散在した状態で住居が見られる。また、同時期の遺構のセット関係をみると、各地区とも竪穴住居と袋状土坑がだいたいセットで見られ、それぞれの地区で独立した集落経営が行われていたものと考えられる。

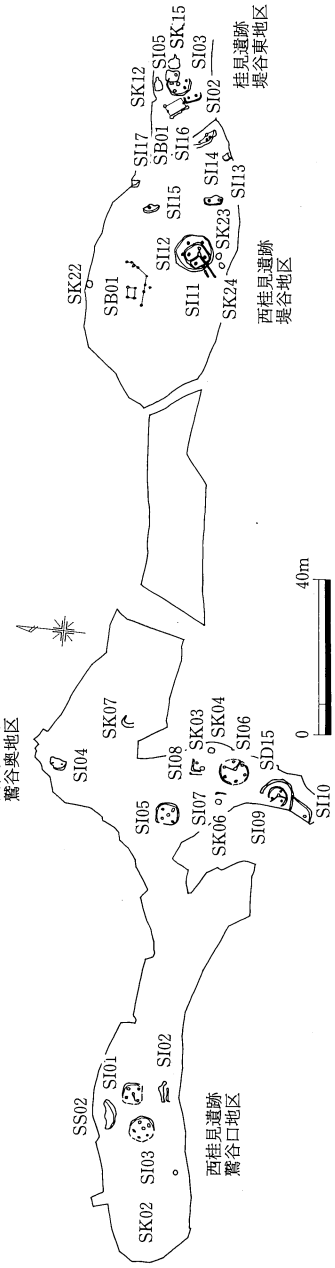
掘立柱建物跡は堤谷地区、堤谷東地区のみに検出され、その時期は岩吉Ⅴ期（古）以降と考えられる。岩吉Ⅴ



挿図158　西桂見遺跡調査区位置図



挿図159　西桂見遺跡・桂見遺跡遺構全体図



挿図159　西桂見遺跡・桂見遺跡集落変遷図

期（古）段階では、堤谷地区で、貯蔵穴と掘立柱建物が同時併存し、かつ、非常に大型の多角形住居（ＳＩ12）を中心とする居住区と掘立柱建物跡がある地区は、杭列または柵列によって区画されている。区画された地区は貯蔵区と考えられ、集落内の機能的分化が明瞭である。特に、ＳＩ12の周囲には、屋外貯蔵穴ＳＫ23・24が隣接し、生産物の所有を独占的に行っていたものと考えられ、ＳＩ12が首長居館である可能性もある。

堤谷東地区の掘立柱建物跡は、岩吉Ⅵ期（古）段階のもので、この時期には、堤谷地区のＳＩ15がある。堤谷東地区ＳＢ01は、布掘りを呈すもので、西桂見遺跡のものとは構造が異なる。

２．集落の性格

西桂見遺跡の集落は、標高15～30ｍの狭い丘陵上に立地していることが特徴である。特に、鷲谷奥地区に展開する集落は広義の“高地性集落”と呼んでもよい立地である。しかし、武器類は出土しておらず、瀬戸内海沿岸部の高地性集落とは異なる性格であったといえる。この時期の鳥取県内の遺跡を見ても、現在のところ、いわゆる高地性集落と呼べるものは確認されていない。

遺物の面から考えると、鷲谷口地区・鷲谷奥地区のほとんどの住居跡から製品とは考えられない鉄片が出土していることが特徴である。このうち、ＳＩ09の外周溝である[37]ＳＤ15内からは、鉄錆が付着している砥石とともに鉄片も出土している。また、ＳＩ07からは、炭化物が付着している鉄片も出土している。

フイゴ羽口等の鍛治遺物は検出されなかったが、これらの鉄片は小鍛治の際に出たものと考えられ[38]、この地区の各住居毎で、鉄器の制作が行われていた可能性がある。

また、その他の遺物としては、漁撈具と考えられる石錘が、ＳＩ03・10でわずかに見られる程度で、積極的な漁撈の痕跡は認められない。

３．他地域との関係

遺構の構造から見ると、岩吉Ⅴ期のＳＩ09の外周溝、ＳＩ11・12の屋外に延び出す排水溝は、ともに、岡山県地方に広く認められるものであり[39]、弥生時代終末～古墳時代前期にかけて彼地との関係が十分に窺われる。しかし、この交渉が地域全体にわたってのものか、集団間のみのものであるのかは、今後の資料の増加を待ちたい。

４．墳墓との関係

弥生時代後期の西桂見遺跡では、これまでに四隅突出型墳丘墓（以下、西桂見墳丘墓）をはじめ土壙墓群が、丘陵の先端部で調査されている。

西桂見墳丘墓は、大半が掘削されていたが、遺存する部分から、突出部を含めた規模が一辺64～65ｍ、高さ５ｍと考えられており、四隅突出型墳丘墓としては最大規模を誇るものである。墳裾には、立石をもつ貼石が巡らされ、墳頂部には複数の埋葬施設が掘り込まれていたものと推察されている。出土遺物から岩吉Ⅲ（新）期並行と考えられている。

土壙墓群は、西桂見墳丘墓から南西に約120ｍ離れたＣ地区、さらにＣ地区から西方に延びる丘陵上に（Ｄ地区）の２か所に作られている。Ｃ地区のものは、尾根に直交する溝を掘り、その両側に６基（Ｃ１群）、７基（Ｃ２群）の土壙墓が切り合いながら存在する。時期は出土遺物がほとんどなく確実な時期は不明であるとされ、調査者は弥生時代後期～古墳時代前期にかけてのものと考えているが、ＳＫ119 出土のものは岩吉Ⅲ（新）～Ⅳ期にかけてのものであり、ほぼ墳丘墓と同時期か後続するもので、ほぼ弥生時代後期の範疇で納まるものと考えてよいと思われる。

今回報告した集落との位置関係を見ると、丘陵先端部に最有力首長墓である西桂見墳丘墓が築かれ、やや離れて土壙墓群が、さらに南側に集落が作られていることになる。

墳墓群とほぼ同時期と考えられる集落で、最も有力と考えられるＳＩ06の床面積が約32㎡と、それほど卓越した規模をもたないこと、付属施設も貧弱であること、また集落自体の規模も大きくないことから、墳丘墓との直接的な関係は窺われない。しかし、遺構外ではあるが、小型特殊壺形土器が検出されており、特に鷲谷奥地区の集落が、土壙墓群を含めた〝墓域〟と何らかの関係をもっていたものと推察され、西桂見墳丘墓の被葬者を支える集団成員の集落と考えてよいであろう。

第２節　湖山池周辺の横穴式石室について

因幡地域の横穴式石室については、比較的密集している鳥取市～岩美町にかけての千代川以東の因幡東部地域について検討されており、盛行期の石室形態は、玄室天井部中央が一段高くなる特徴をもつものが多く、この特徴から「中高式天井石室」と呼ばれている[40]。因幡西部に目を向けると、青谷町・気高町周辺では、各壁に大型の一枚石を用いる石室形態が知られており[41]、小地域毎で異なる石室形態が採用されていることに気づく。

さて、湖山池周辺の横穴式石室は、現在確認されているものは、倉見９号墳の他、石場山５号墳、高住12号墳、葦岡長者古墳（吉岡１号墳）のみと極端に少ない上、千代川右岸域とは異なる石室形態が見られる。

１．湖山池周辺の横穴式石室の概要

倉見９号墳は、現在確認されているかぎりでは９基からなる倉見古墳群に属する。１～７号墳は標高約30mの高い尾根上にあるが、８・９号墳は、標高約15mの低い西側に延びる丘陵上にあり、異なる立地条件にある。さらに、高い尾根上のものは前期古墳であるが、低い尾根上のものは後期古墳と時期・性格も異なる。

さて、倉見９号墳の横穴式石室は、全長4.1m、玄室長2.3m、幅1.3m、羨道長1.8m、幅0.85mを測る。玄室比は、1.8と狭長な長方形を呈す。右片袖式である。玄室は、各壁ともに腰石上に割り石をほぼ垂直に、横目地が通るように積みあげている。天井の形態は不明である。遺物には、玄室内から鍍金を施した装飾大刀足金具、釣針、周辺から須恵器片が出土している。およそ６世紀後半頃のものと考えてよいであろう。

石場山５号墳は、５基からなる石場山古墳群中にある。羨道部は埋没し、天井部を欠いている。玄室長1.6m以上、幅1.5mを測る。玄門部が埋没しているため玄室全体の形態は不明であるが、長方形プランであろう。石室主軸に沿って長さ約1.5m、幅0.7mを測る箱式石棺が内包されている。出土遺物は知られていない。

高住12号墳は、12基からなる高住古墳群中にあるが、12号墳周辺には古墳は知られておらず、単独で存在するものであり、他の古墳とは支群を異にしている。墳丘は大半が流失しており、石室が露出している。石室は、玄室内に流土が堆積しており、詳細は不明であるが、玄室長4.2m以上、幅2.1m、現在高2.1mを測る。玄室比は2.0以上で長方形を呈す。壁体構成は、基底石上に割石をやや持ち送りながら塊石積みするもので、目地が通っていない。天井は、玄門部に向かって階段状に傾斜する平天井をもつ。この地域では唯一天井形態がわかるものである。玄門形態は、流入土のため不明である。出土遺物は知られていない。

葦岡長者古墳（吉岡１号墳）は、15基からなる吉岡古墳群中にあり、1983年に調査が行われている。墳丘は径約14mと推定されている。石室は、玄室長3.34m、幅2.31m、現存高1.83mを測る。玄室比は1.4と幅広の長方形を呈す。平面形は、左袖部は失われているが、両袖式に、幅0.67m、長さ2.21mを測る狭長な羨道が接続するものであったと考えられている。壁体は、腰石上に割り石をほぼ垂直に積むもので、横目地が通っている。玄室内には、奥壁に向かって右側に板石を組み合わせた箱式石棺が安置されているが、原位置を保つものかどうかは不明である。出土遺物は、須恵器蓋杯、高杯、台付壺、横瓶、大型甕、鉄刀、刀子、鉄鏃、飾金具、銜（？）、釣針など豊富に出土している。これらの出土遺物のうち最も遡る須恵器類はＴＫ10の新相並行と考えられ、６世紀中葉頃に築造されたものと考えられる。

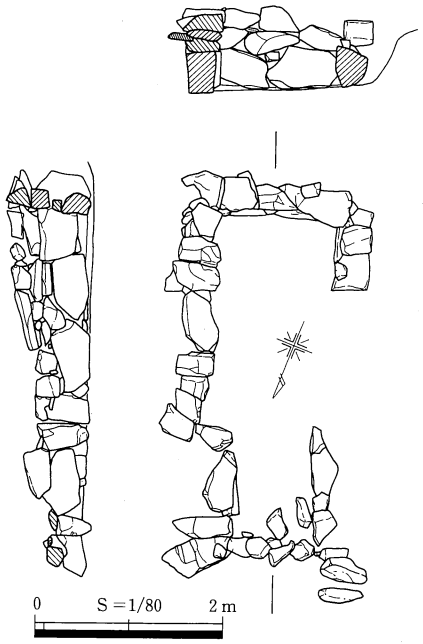
２．形態的特徴

これらの石室を見ると、形態的には、石室平面形は片袖、両袖の両形式が認められるが、玄室の平面形態は長方形が基本となっていることが共通している。壁体構成についても、腰石上に割り石、塊石をほぼ垂直に積みあげる手法は共通しているものといえる。また、唯一天井形態が判明する高住12号墳は、玄門部に向かって傾斜する平天井形態で、千代川右岸域の中高式天井とは異なる形態を示している。玄門部の形態は、立石を立てるものはなく、羨道幅と同じ袖部が構成される。また、石場山５号墳、葦岡長者古墳に見られるように玄室内に主軸に平行する箱式石棺を安置するものがこの地域の特徴である。

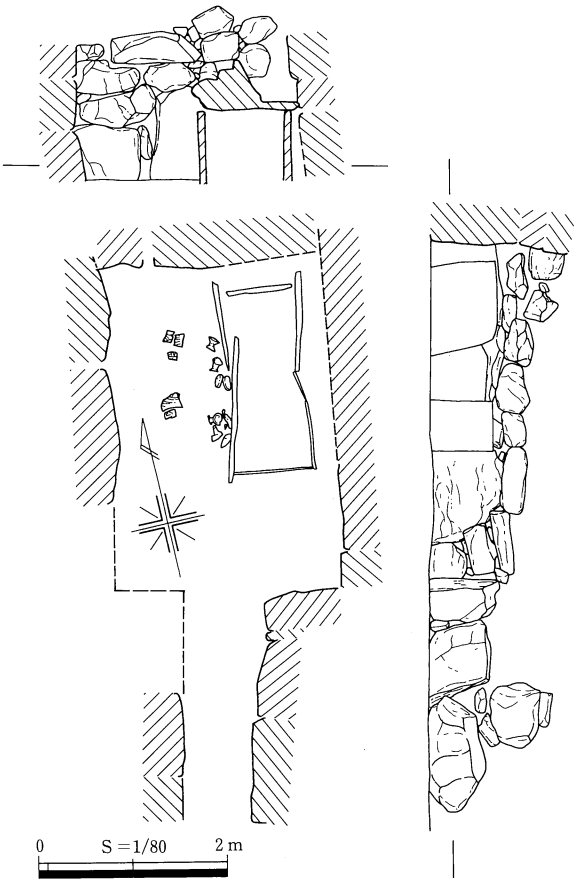
さて、湖山池からはやや離れるが、山ケ鼻古墳（古海13号墳）は、13基からなる古海古墳群中にあり、一辺約

11〜13mの方墳と考えられている。墳丘上半部は完全に失われており、石室が露出している。石室は、全長5.1m、玄室長2.0m、幅1.08m、高さ0.71〜0.94m、羨道長3.1m、幅1.4〜1.5mを測り、凝灰岩を刳り抜いた形態のものである。玄室は、1枚の床石の上に巨石を刳り抜いて天井部・壁からなる部分を乗せるものである。床石には蓋石を受けるための刳り込みが施されている。平面形は右袖部をもつ片袖式で、羨道部にあたる部分は、大型の一枚石を3枚組み合わせている。出土遺物は、開口が古く全く知られていない。このため、この古墳の時期は不明であるが、形態的には大阪府石の宝殿古墳、奈良県鬼の俎・廁古墳など、7世紀中頃と推定される畿内の横口式石槨と類似しており、同時期と考えられる。

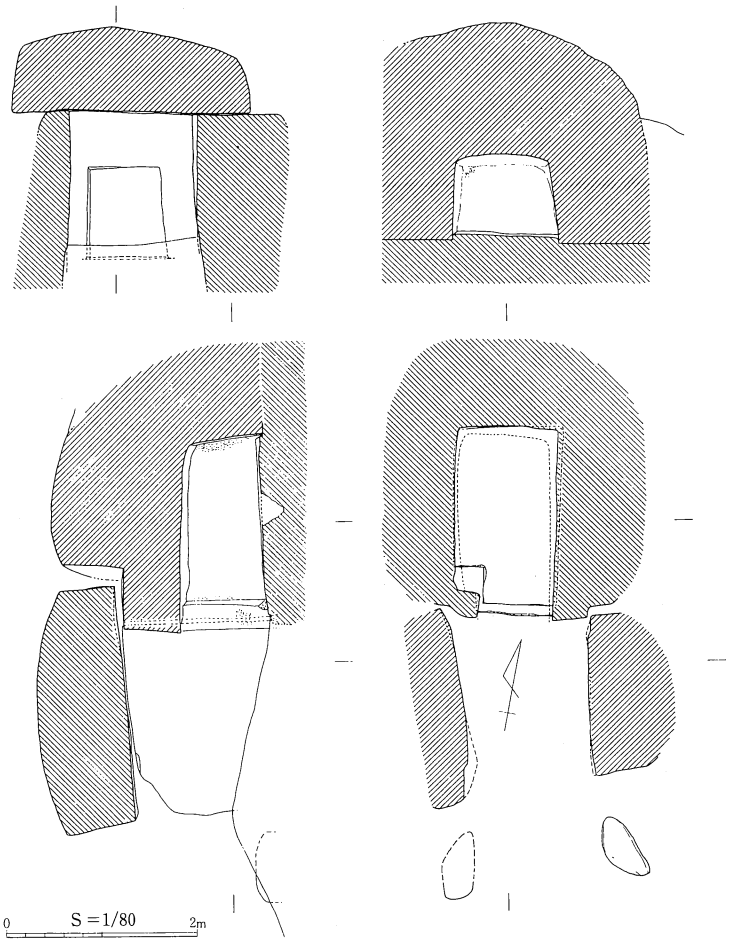
おおむね、因幡地方の横穴式石室は、畿内的な様相が強く、長方形のプランが主流で、岩美町小田川流域の高野坂2号墳・高野坂9号墳・高野坂10号墳など、および袋川中流域の神垣8号墳・新井2号墳・橋本38号墳では石室内に家形石棺を内包するものがある[42]ほか、箱式石棺を内包するものがあり、埋葬形態に上下関係が認められる。湖山池周辺の横穴式石室は、家形石棺を内包する首長層に比べて下位の存在であることが考えられる。しかし、その中で山ケ鼻古墳は後に高草郡の中心地にあり、より先進的に畿内との関係をもって出現したものと考えられる。



挿図161　倉見9号墳石室実測図



挿図162　葦岡長者古墳（吉岡1号墳）石室実測図
（註28より再トレース。一部変更。）



挿図163　山ケ鼻古墳（古海13号墳）石室実測図
（註29より。一部変更。）

第３節　西桂見遺跡の土塁状遺構について

西桂見遺跡では、鷲谷奥地区Ａ区尾根筋に長さ45m以上、幅10m、盛土の厚さ最大1.7mを測る土塁状遺構が検出された。この遺構は、現在確認できる範囲では、途中、県立鳥取少年自然の家の建築物によって削り取られているが、南側へ延びているようである。また、東側へ分岐する部分も確認され、かなり大規模な遺構である。

確かな時期については不明であるが、遺構の切り合い関係から判断すると、平安時代頃と考えられるＳＤ11が完全に埋ってから築かれていることから、平安時代以降のものといえる。また、表土中から備前Ｖ期の擂鉢、倉見７号墳周溝埋土から、16世紀頃と思われる土師質土器が出土しており、この時期に近いものとも考えられる。

さて、この遺構の特徴を挙げると、①立地は狭い尾根上に作られていること、②全て盛土によって築造され、断面台形状を呈すが、西側は緩やかで、東側は急になり、平坦面になっていること、③頂部平坦面は尾根中心より西側にあること、④調査区中央部で二股状に分かれる部分があること、⑤盛土の中心部は岩盤破砕礫層と暗灰褐色砂質土層と明黄橙色土が互層状に非常に固く突き固められ、柱状に見られる。この層の断面は、ジグザグになっており、盛土を行う際に中心部のみを突き固めていったものと考えられること、⑥盛土下には、盛土に先立って溝が掘り込まれていること、⑦丘陵支脈にも築かれていることがあげられる。

県内の中・近世の土塁状遺構の発掘例は限られており、わずかに、鳥取市・太閤ケ平[43]、ヒル山砦跡[44]、庵ノ城砦跡[45]、古屋敷砦跡[45]、中尾土塁[45]、羽合町・馬ノ山遺跡[46]、乳母ケ谷第２遺跡[47]、長瀬高浜遺跡[48]がある。

これらの土塁状遺構の特徴について見ると、立地的には、低地にある長瀬高浜遺跡を除いて、そのすべてが丘陵の頂部に築かれている。

また、形態的には、太閤ケ平、ヒル山砦跡、庵ノ城砦跡、古屋敷砦跡、馬ノ山遺跡、長瀬高浜遺跡が郭の周囲に土塁を巡らすもので、中尾土塁、乳母ケ谷第２遺跡のものは丘陵に沿って築かれるものであり、大きく２通りの形態が認められる。

このうち、尾根頂部に沿って築かれる、中尾土塁・乳母ケ谷第２遺跡のものが西桂見遺跡のものと形態的に類似している。中尾土塁は尾根頂部を平坦面にし、その北側縁辺部に盛土による土塁が築かれている。乳母ケ谷第２遺跡のものは立地・形態とも非常に類似し、土塁が築かれる前に溝が掘り込まれていることも共通しているが、盛土の仕方が西桂見遺跡のものほど丁寧ではなく、雑な作りである。

明らかに用途が判明しているものとして、太閤ケ平、ヒル山砦跡、庵ノ城砦跡、古屋敷砦跡がある。これらは羽柴秀吉による鳥取城攻囲網の一部の陣跡に伴うもので、郭の周囲を取り囲むように土塁が巡っている。ヒル山山頂部は高野駿府守、南裾の台地は垣屋隠岐守が陣を張ったものといわれ、庵ノ城砦・古屋敷砦は垣屋播磨守が陣を張った場所であるといわれている。また、馬ノ山遺跡のものは羽柴秀吉と吉川元春が対峙した際に、吉川方が作ったものと考えられており、全形は不明であるが、郭の周囲に土塁が築かれているものと考えられている。

このようにして見ると、中世末期の戦略的意味合いをもつ土塁状遺構は、必ずといってよいほど郭に付属するもので、郭の周囲を巡る特徴がある。尾根上に単独で見られる土塁状遺構とは異なる構造であることが特徴である。

さて、尾根上の土塁状遺構の性格を考える時に、まず考えられることが、この土塁状遺構を境にして字名が変わることである。西桂見遺跡の場合は東は字堤谷、西は字鷲谷奥、乳母ケ谷第２遺跡では東は字馬隠、西は字乳母ケ谷と変わっている。現在の地名がどの時代からそう呼ばれていたのかは不明であるが、地境の目的で築かれたものとするにはあまりにも丁寧過ぎるものといえる。

さて、県外に目を向けると、岡山県・みそのお遺跡[49]で土塁状遺構が調査されている。立地的特徴、形態的特徴、盛土の特徴も西桂見遺跡のものと非常に類似している。みそのお遺跡の土塁状遺構の性格を、調査者は古道と考えており、今後土塁の性格を考える上で参考になろう。

第４節　中世墓について

湖山池周辺は、布勢鶴指奥墳墓群・桂見墳墓群など、中世墓の調査が進んでいる地域である。また、「天神山城絵図」には、葬地として「弦サシ屋舗」「テヌケカハナ」の地名が残っており、中世の墓制を考える上で格好の地域である。今回の西桂見遺跡の調査においても、15基の中世墓が検出され、さらに、周辺には多くの中世墓の存在が考えられる。

今回調査した中世墓のうち、ＳＫ11・14・16が周囲に溝をもつものである。確実に墳丘をもつものは確認できなかったが、ＳＫ16が１辺約４ｍの方形の墳丘をもつ可能性がある。これらは、いずれも墓壙から釘が検出されており、木棺墓と考えられる。このうち、ＳＫ14は他のものとは異なり、平面円形を呈すもので、座棺であった可能性がある。墳丘・周溝をもつものは他のものに比べて階層的に上位のものと考えられており、ＳＫ16の被葬者は上位階層のものと考えられるが、副葬品は少なく、漆被膜が検出されているに過ぎない。まして、他のものに見られる冥土銭の出土もない。他の墳丘・周溝をもつ墳墓の副葬品について見ると、徳尾遺跡群の中世墓のように大量の冥土銭以外は、傑出した副葬品の例はない。階層差は、墳丘や石塔などの外表施設、徳尾中世墓[50]のような墓堂の有無であったものといえる。

上記以外のものは、墓壙のみのものである。なお、ＳＫ15の周辺にも溝が検出されているが、上記のもののようにしっかりとしたものではない。これらには、土葬墓（ＳＫ18・20・21・25)、火葬墓（ＳＫ01・09・10・12・15・17・19）の両方が認められる。土葬墓のうち、ＳＫ21のみに鉄釘が認められ、木棺墓と考えられる。木棺墓は墓壙の形態から、箱形に組まれたものと、円形のものが同時に存在していたと思われる。その他のものは、釘等が検出されていないため、直接遺体を埋葬した可能性がある。火葬墓のうち、ＳＫ01・ＳＫ10・ＳＫ17は、墓壙底面に焼土面があり、墓壙内で遺体を焼いた荼毘墓と考えられる。その他のものは、炭化物・熱変した古銭が検出されてはいるが、焼土面は検出されておらず、他所で荼毘に付したものを埋葬したものと考えられる。

また、規模の面においては、土葬墓には長軸0.8m～1.38mと大小が認められ、成人と子供の両方が土葬で埋葬されたといえる。火葬墓は１ｍ程度、荼毘墓も長方形で長軸１ｍ、深さは非常に浅いものである。荼毘墓は、熱効率を高めるために浅く掘り込まれたものと考えられている。

なお、堤谷地区の中世墓は密集形態で検出されているが、鷲谷口地区の荼毘墓であるＳＫ01は、単独で検出されており、特異なものである。

さて、この地域の中世墓を見ると、さまざまな形態のものが認められ、中世墓の形態には、（Ａ）墳丘・周溝をもつもの、（Ｂ）周溝を伴うもの、（Ｃ）墓壙のみのものが確認されている。

さらに、埋葬の形態を見ると（ａ）土葬墓、（ｂ）火葬墓、（ｃ）蔵骨器を埋置するものの３種類が認められるが、土葬墓にはⓐ木棺墓、ⓑ直葬墓に分かれ、火葬墓には、ⓐ他所で荼毘に付した火葬骨を埋葬するもの、ⓑ浅い墓壙を掘りそこで荼毘に付したもの（荼毘墓）[51]のそれぞれ２種類に分かれる。

さらに、荼毘墓にも、①素掘りの土壙で荼毘に付すもの、②土壙底部に石を敷きつめ荼毘に付すもの、③底部と側面を平石で囲い、その中で荼毘に付すものの３種類が知られている。[52]

これらの時期について考えると、土師質土器は京都系の皿をもっていること、副葬された古銭のうち、最も新しい時期を示すものが、初鋳年1408年の永楽通寶であることから、15世紀以後のものと考えられる。また、西桂見遺跡の火葬墓出土の炭化物の^{14}Ｃ年代測定値が、B.P.280±40～B.P.540±30、およそ15世紀初頭～17世紀中頃と幅がある値を示した。しかし、遺構に切り合い関係が見られないことから、造営時期は測定値が示すほど長期ではなく、短期間であったものと思われ、ほぼ15世紀～16世紀のものと考えることができよう。

以上簡単に西桂見遺跡の中世墓について触れてみたが、今後、葬法の違いが何を示すものか、また、時期を設定するに当たっては、土師質土器の編年の確立と共に、^{14}Ｃ年代測定など自然科学分野との応用で、より確かな時期決定を行う必要があり、今後の課題としたい。

遺跡名	遺構名	規模 長軸×短軸－深さ cm	平面形	断面形	長軸方向	出土遺物 古銭	出土遺物 その他	備考	埋葬法
西桂見遺跡鷲谷口地区	ＳＫ01	110×93－38	長方形	逆台形	N-27°-W		土師質土器皿・鉄釘・人骨片・炭化物	焼土面	荼毘墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ09	120×101－44	隅丸長方形	凹凸著しい	N-42°-E	溶変した銅銭	炭化物		火葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ10	131×69－17	長方形	逆台形	N-8°-E	熙寧元寶１他７不明５	土師質土器皿・鉄釘・人骨片・炭化物	焼土面	荼毘墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ11	121×83－73	長方形	逆台形	N-8°-W	開元通寶１淳化元寶１ 景徳元寶１天禧通寶１ 皇宋通寶１熙寧元寶１ 元豊通寶１政和通寶１ 永楽通寶１不明２	土師質土器皿・鉄釘	周溝を巡らす。	土葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ12	124×83－22	不整な長方形	逆台形	N-1°-E	咸平元寶１祥符元寶１ 皇宋通寶１大観通寶１ 永楽通寶１不明１	鉄釘・炭化物		火葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ13	(40)×66－18	長方形？	逆台形	－				不明
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ14	119×117－150	円形	長方形	－	皇宋通寶１他２熙寧元寶１不明２	鉄釘・人骨	壮年男性・周溝を巡らす。	土葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ15	108×77－24	不整な長方形	凹凸著しい	N-17°-W		鉄釘・炭化物	周囲に溝を巡らす。	火葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ16	133×89－108	隅丸長方形	逆台形	N-42°-E		鉄釘・漆被膜	一辺約４ｍの周溝を巡らす。	土葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ17	97×71－18	長方形	逆台形	N-35°-E	古銭	鉄釘・人骨片・炭化物	小児骨・焼土面	荼毘墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ18	103×80－63	隅丸長方形	逆台形	N-76°-E	開元通寶１景祐元寶１ 熙寧元寶２元祐通寶１ 不明１			土葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ19	110×77－24	長方形	凹凸が著しい	N-1°-E				火葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ20	138×95－79	隅丸長方形	逆台形	N-4°-E	開元通寶１祥符元寶２ 天聖元寶１熙寧元寶２ 元豊通寶１聖宋元寶１ 永楽通寶１不明２	土師質土器皿		土葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ21	81×60－69	長方形	逆台形	N-17°-E		土師質土器皿・鉄釘		土葬墓
西桂見遺跡堤谷地区	ＳＫ25	(260)×126－65	不整長楕円形	逆台形	N-44°-E		土師質土器皿・短刀・砥石	埋土中に多数の角礫	土葬墓
西桂見遺跡	ＳＫ04	(110)×90－41.5	長方形	逆台形 床面凹凸	N-30°-E		鉄釘・毛抜状鉄器・人骨片・炭化物	焼土面・上面に集石	荼毘墓
西桂見遺跡	ＳＫ06	150×98.5－56	隅丸長方形	逆台形 小口部に段	N-31°-E	天聖通寶１皇宋通寶１ 聖宋元寶１永楽通寶３	布片・歯		土葬墓
西桂見遺跡	ＳＫ07	74×65－(20)	ほぼ方形	逆台形				南片に石１個。	不明
西桂見遺跡	ＳＫ08	102×80－(19.5)	隅丸長方形	逆台形			鉄釘・須恵器片・炭化物	両端に各３個の石。	荼毘墓
西桂見遺跡	ＳＫ09	100×61－(52)	長楕円形	逆台形 床面凹凸					不明
西桂見遺跡	ＳＫ10	89×53－(23.7)	長楕円形	逆台形				南辺に接して石１個。	不明
西桂見遺跡	ＳＫ11	78×64－(16)	略円形	逆台形					不明
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ01	115×95－10	不整円形	浅い平底	N-34°-W	開元通寶１咸平元寶１ 至和元寶１熙寧元寶１ 元祐通寶１聖宋元寶１		人頭大角礫３個。	不明
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ02	116×82－25	長方形	平底逆台形	N-23°-E	開元通寶１景徳元寶１ 天聖元寶１皇宋通寶３ 嘉祐通寶１熙寧元寶３ 元豊通寶１元■通寶１	鉄釘・頭骨・歯		土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ03	－×95－13	隅丸長方形	平底逆台形					土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ04	102×65－50	長方形	平底箱形	N-13°-E		鉄釘		土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ05	100×67－25	楕円形	床面凹凸					土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ06	85×71－30	楕円形	不整Ｕ字形	N-5°-E	開元通寶１皇宋通寶１ 熙寧元寶１大観通寶１ 永楽通寶２			土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ07	85×70－55	楕円形	平底逆台形	N-32°-E				土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ08	107×77－79	隅丸長方形	平底	N-24°-E			中位で若干膨らむ。	土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ09	(120)×89－56	隅丸長方形	平底逆台形	N-22°-E		土師質土器皿・人骨片		土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ10	125×89－28	隅丸長方形	平底不整逆台形	N-41°-E		鉄釘・土師質土器皿・人骨片		荼毘墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ11	118×100－108	円形	Ｕ字形	N-25°-E	皇宋通寶１紹聖通寶１ 元豊通寶１永楽通寶２ 元■通寶３不明７	越前焼大甕	一辺約3.5ｍの方形周溝・棺座用板石２	甕棺墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ12	110×73－21	長方形	平底逆台形	N-25°-E	融解した銅銭	鉄釘・人骨片・炭化物・土師質土器皿・五輪塔（火輪）	一辺約3.5ｍの方形周溝。	荼毘墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ13	(110)×79－9	楕円形	平底逆台形	N-37°-E				土葬墓
西桂見遺跡Ⅱ （Ｂ・Ｃ地区）	ＳＫ14	107×(66)－18	楕円形	傾斜底逆台形	N-52°-W				土葬墓

挿表12　中世墓一覧表(1)

遺跡名	遺構名	規模 長軸×短軸－深さ cm	平面形	断面形	長軸方向	出土遺物 古銭	出土遺物 その他	備考	埋葬法
西桂見遺跡II (B・C地区)	SK15	113×98－37	長方形	傾斜底U字形	N-41°-E		備前焼大甕	土器棺床	土器床墓
西桂見遺跡II (B・C地区)	SK16	124×95－81	長方形	平底箱形	N-32°-E				土葬墓
西桂見遺跡II (B・C地区)	SK17	－×－－41	隅丸長方形	平底逆台形	N-42°-E				土葬墓
桂見墳墓群	SK101	120×91－6	不整な隅丸方形	盆状逆台形	N-45°-E		鉄釘・人骨片・炭化物		茶毘墓
桂見墳墓群	SK102	106×93－26	不整な方形	逆台形	N-43°-E	皇宋通寶1元豊通寶1天聖元寶1	人骨片・炭化物	棺床	茶毘墓
桂見墳墓群	SK103	98×73－66	不整な方形	逆台形	N-33°-E	至道元寶1皇宋通寶2開元通寶1不明2			土葬墓
桂見墳墓群	SK104	114×(80)－8	不整な隅丸方形	盆状逆台形	N-42°-E		炭化物		茶毘墓
桂見墳墓群	SK105	159×132－37	不整な楕円形	逆台形	N-53°-E		土師質土器片	床面にピット状遺構	土葬墓
桂見墳墓群	SK106	131×122－75	不整な楕円形	逆台形	N-4°-E	天禧通寶1紹聖元寶3元祐通寶1天符通寶1咸平元寶1聖宋元寶2皇宋通寶3開元通寶1不明1	鉄釘	棺材厚さ約2cm	土葬墓
桂見墳墓群	SK201	97×72－30	隅丸方形	逆台形	N-63°-E	不明1	鉄釘・人骨片・炭化物・石ぞく・土師質土器皿・鉄釘・止金状銅製品・人骨片・炭化物	短軸3.5mの盛土	茶毘墓
桂見墳墓群	SK202	120×73－10	不整な隅丸方形	逆台形	N-45°-E	不明13	土師質土器皿・鉄釘・止金状銅製品・人骨片・炭化物	3.3×3.1mの盛土・棺内に焼石	茶毘墓
桂見墳墓群	SK203	129×93－23	方形	逆台形	N-44°-E		人骨片・炭化物	3.5×3.4mの盛土・棺内に敷石	茶毘墓
桂見墳墓群	SK204	129×82－24	不整な隅丸方形	逆台形	N-44°-E	不明3以上	宝篋印塔(相輪)・人骨片・炭化物	3.1×2.6mの盛土。	茶毘墓
桂見墳墓群	SK205	124×97－9	不整な隅丸方形	逆台形	N-90°-E	皇宋通寶1元豊通寶1不明1	土師質土器片		土葬墓
桂見墳墓群	SK206	(144)×(106)－(60)	不整な隅丸方形	逆台形	N-42°-E	開元通寶1不明6	鉄釘・人骨片・歯	3.8×3.0mの盛土	土葬墓
桂見墳墓群	SK207	151×104－8	長方形	盆状逆台形	N-46°-E				土葬墓
桂見墳墓群	SK208	272×137－17	不整な隅丸方形	逆台形	N-85°-E		土器片		土葬墓
桂見墳墓群	SK209	152×128－51	隅丸方形	逆台形	N-30°-E				土葬墓
桂見墳墓群	SK210	109×96－112	不整な隅丸方形	逆台形	N-41°-E		人骨(30代女性)・漆器塗膜片		土葬墓
桂見墳墓群	SK211	69×30－13	不整な楕円形	弧状	N-52°-E	天聖元寶1		角礫1個	土葬墓
桂見墳墓群	SK212	95×(75)－37	長方形	逆台形	N-70°-E	銅溶解片	炭化物	角礫1個	茶毘墓
桂見墳墓群	SK301	152×95－28	不整な隅丸長方形	逆台形	N-68°-E		炭化物	角礫3個	茶毘墓
桂見墳墓群	SK302	(149)×103－43	不整な隅丸長方形	逆台形	N-88°-E				土葬墓
徳尾遺跡群	中世墓	110×70－50	長方形	逆台形	N-7°-E	開元通寶5太平通寶1至道元寶2祥符元寶5天聖元寶3景祐元寶2皇宋通寶10嘉祐通寶2治平元寶3熙寧元寶7元豊通寶8元祐通寶3紹聖元寶4聖宋元寶1政和通寶2大定通寶1淳熙元寶1永楽通寶2不明22	鉄釘	呂ノ字基壇(5.0×4.3、高さ1.0m)、1×1間建物	土葬墓？
徳尾遺跡群	土壙1	250×70－40	不整な長方形	逆台形	N-10°-W				土葬墓？
徳尾遺跡群	土壙2	100×100－60	方形	逆台形	N-10°-W				土葬墓
徳尾遺跡群	土壙3	130×100－40	長方形	逆台形	N-68°-W				土葬墓
里仁古墳群	第1号集石	(92)×63－35	隅丸長方形	逆台形	N-17°-W		土師質土器皿	角礫	
里仁古墳群	第2号集石	124×93－45	隅丸長方形	弱弧状	N-11°-W			角礫	
里仁古墳群	第3号集石	100×74－80	楕円形	弱尖底状	N-6°-E			角礫	
三浦遺跡	第2土壙墓	112×74－30	隅丸長方形	逆台形	N-8°-W	開元通寶1天禧通寶1皇祐通寶1大定通寶1不明3	刀子		
三浦遺跡	第3土壙墓	100×72－14	隅丸長方形	U字形平底	N-12°-W				
三浦遺跡	第4土壙墓	153×118－35	長方形	逆台形	N-89°-W				
大熊段遺跡	1号墓	112×78－55	長方形	逆台形	N-20°-E		鉄釘・土師質土器皿・人骨	壮年骨・焼土面・方形周溝(3.8×3.3m)	茶毘墓
大熊段遺跡	2号墓	106×79－88	長方形	略方形	N-16°-E	皇宋通寶2嘉祐通寶1熙寧元寶2元豊通寶3元祐通寶1永楽通寶2不明1	鉄釘・土師質土器皿・人骨片	成人骨・コ字形周溝(一辺約4.5m)	土葬墓
大熊段遺跡	3号墓	78×47－76	長方形	略方形	N-48°-E		土師質土器皿		土葬墓
大熊段遺跡	4号墓	101×72－82	不整な長方形	逆台形	N-33°-E	祥符元寶1嘉祐通寶1元豊通寶1元祐通寶1政和通寶1永楽通寶1	土師質土器皿・竹籠・歯	女性？	土葬墓
大熊段遺跡	5号墓	66×61－56	隅丸方形	逆台形	N-60°-W		土師質土器皿・白磁		土葬墓？
大熊段遺跡	6号墓	105×81－115	隅丸長方形	長方形	N-17°-E		夾紵製容器漆片・銅製座金具・刀子・人骨片	壮年男性？	土葬墓

挿表13　中世墓一覧表(2)

遺　跡　名	遺構名	規　模 長軸×短軸－深さ cm	平　面　形	断　面　形	長軸方向	出　土　遺　物 古　　銭	出　土　遺　物 そ　の　他	備　　考	埋葬法
布勢鶴指奥墳墓群（試掘）	ＳＫ01	不明	長方形？	不明	不明		人骨	壮年女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群（試掘）	ＳＫ02	102×70－20	長方形	逆台形	N-10°-E		土師質土器皿・人骨・炭化物	子供？	荼毘墓
布勢鶴指奥墳墓群（試掘）	ＳＫ03	78×55－25	長方形	逆台形	N-18°-E		人骨・炭化物		荼毘墓
布勢鶴指奥墳墓群（試掘）	表採	不明	不明	不明	不明		火葬骨	備前焼大甕	甕棺墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ01	118×95－82	長方形	逆台形	N-15°-E		鉄釘・人骨	壮年女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ02	81×55－53	不整隅丸長方形	逆台形	N-27°-E	天聖通寶１永楽通寶１ 熙寧元寶？	人骨	壮年前期女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ03	97×70－58	隅丸長方形	逆台形	N-8°-E		鉄釘		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ04	75×64－13	不整方形	凹凸著しい	N-15°-E	景徳元寶１天聖元寶１ 永楽通寶４熙寧元寶？ １	土師質土器皿・銅製金具・人骨片		火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ05	92×(70)－15	隅丸長方形	逆台形	N-10°-E	元豊通寶２元祐通寶１ 聖宋元寶１不明２	鉄釘・人骨	成人骨	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ06	112×91－67	不整隅丸長方形	逆台形	N-15°-E	淳化元寶１天禧通寶１ 皇宋通寶１治平元寶１ 元祐通寶１不明１	土師質土器皿・鉄釘・人骨	20歳前後女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ07	104×68－80	長方形	長方形	N-9°-E	太平通寶１天聖元寶１ 皇宋通寶１熙寧元寶１ 元豊通寶２	人骨	壮年前期女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ08	(92)×？－23	隅丸長方形	逆台形	N-3°-E		土師質火舎・人骨	成人	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ09	(70)×(45)－13	隅丸長方形	不整形	N-9°-E			焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ10	110×85－50	隅丸長方形	逆台形	N-4°-E	淳化元寶１天聖元寶１ 皇宋通寶１熙寧元寶１ 元豊通寶１不明１	土師質土器皿・鉄釘		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ11	118×73－98	隅丸長方形	長方形	N-8°-E	開元通寶１至道元寶１ 天禧通寶１皇宋通寶１ 元豊通寶１元祐通寶１	土師質土器皿・人骨	壮年男性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ12	118×87－68	隅丸長方形	逆台形	N-0°-E		土師質土器皿		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ13	118×84－75	長方形	長方形	N-2°-E	景祐元寶１皇宋通寶１ 治平元寶１元祐通寶１ 正隆元寶１至元通寶１	鉄釘・人骨	壮年男性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ14	106×79－25	隅丸長方形	逆台形	N-12°-E	太平通寶２景徳元寶１ 祥符元寶１天禧通寶３ 天聖元寶１景祐元寶１ 皇宋通寶２元豊通寶２ 聖宋元寶２皇宋元寶１ 至元通寶１	鉄釘・人骨	小児骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ15	116×102－19	不整隅丸長方形	逆台形	N-100°-E	祥符元寶１元豊通寶１ 紹聖元寶１不明１	人骨・炭化物	成人女性？	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ16	122×80－25	隅丸長方形	逆台形	N-15°-E		鉄釘・人骨・炭化物	小児骨	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ17	108×75－33	隅丸長方形	逆台形	N-13°-E		鉄釘・人骨・炭化物	青年	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ18	94×67－20	不整隅丸長方形	逆台形	N-19°-E	景徳元寶１皇宋通寶１ 永楽通寶１	人骨	成人？	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ19	110×75－70	不整長方形	逆台形	N-0°-E		鉄釘・人骨	成人女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ20	94×77－80	不整隅丸長方形	逆台形	N-5°-E		土師質土器耳皿・漆器片・鉄釘		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ21	111×79－20	長方形	逆台形	N-19°-E		人骨	小児骨？	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ22	65×50－32	不整楕円形	不整逆台形	N-70°-W				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ23	120×86－85	不整隅丸長方形	逆台形	N-19°-E	天禧通寶１熙寧元寶２ 元祐通寶１洪武通寶１ 不明１	鉄釘・人骨	壮年男性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ24	100×80－38	不整隅丸長方形	逆台形	N-14°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ25	96×81－38	不整長方形	不整逆台形	N-29°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ26	109×67－89	不整隅丸長方形	長方形	N-12°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ27	92×67－15	不整隅丸長方形	不整形	N-18°-E	元祐通寶１	土師質土器皿・人骨片	焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ28	81×71－46	不整隅丸長方形	逆台形	N-21°-E		五輪塔(地輪)		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ29	(135)×80－10	隅丸長方形	不整形	N-19°-E		土師質土器皿・人骨	焼土面・小児骨	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ30	(80)×65－8	隅丸長方形	不整形	N-10°-E			焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ31	104×65－15	隅丸長方形	逆台形	N-22°-E	開元通寶１皇宋通寶１ 熙寧元寶１不明２	人骨片	焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ32	106×73－84	隅丸長方形	逆台形	N-26°-W	開元通寶１祥符元寶１ 天禧通寶１元祐通寶１ 紹聖元寶１	土師質土器皿・鉄釘・人骨	成人男性？	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ33	93×84－56	不整隅丸長方形	逆台形	N-36°-E		人骨	女性？	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ34	107×75－50	隅丸長方形	逆台形	N-11°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ35	108×81－55	不整隅丸長方形	逆台形	N-17°-E		人骨	青年女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ36	(135)×100－9	不整隅丸長方形	不整形	N-4°-E		鉄釘	焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ37	120×76－38	隅丸長方形	不整逆台形	N-5°-E		小刀		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ38	130×76－80	不整隅丸長方形	逆台形	N-38°-E	開元通寶１明道元寶１ 皇宋通寶１元豊通寶２ 大観通寶１	人骨	熟年女性	土葬墓

挿表14　中世墓一覧表(3)

遺跡名	遺構名	規模 長軸×短軸－深さ cm	平面形	断面形	長軸方向	出土遺物 古銭	出土遺物 その他	備考	埋葬法
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ39	117×90－84	不整長方形	逆台形	N-16°-E	開元通寶１皇宋通寶２至和元寶１熙寧元寶１元豊通寶４元祐通寶２政和通寶１	櫛・鉄釘・人骨	青年女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ40	116×(60)－6	隅丸長方形	不整形	N-1°-E		土師質土器皿・人骨	小児？・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ41	99×85－39	不整方形	逆台形	N-19°-E		人骨	壮年男性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ42	111×90－45	不定形	不整形	N-54°-E	祥符元寶１景祐元寶１不明３	人骨	壮年女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ43	98×76－109	長楕円形	逆台形	N-3°-E		人骨	20歳前後女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ45	111×100－42	不整楕円形	不整形	N-7°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ46	115×?－7	隅丸長方形	不整形	N-16°-W			焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ47	116×94－38	不整隅丸長方形	不整形	N-3°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ48	110×85－71	隅丸長方形	逆台形	N-2°-E		鉄釘・人骨	20歳前後女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ49	113×91－12	不整隅丸長方形	不整形	N-100°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ50	110×82－62	不整隅丸長方形	逆台形	N-12°-E	皇宋通寶１元祐通寶１紹聖元寶２宣和通寶１永楽通寶１	鉄釘・人骨		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ51	121×72－94	長方形	逆台形	N-20°-E	開元通寶１景徳元寶１祥符元寶１天聖元寶１至和元寶１至和通寶１熙寧元寶１元豊通寶２元祐通寶１紹聖元寶１淳熙元寶１永楽通寶１	人骨片		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ52	104×80－48	長方形	逆台形	N-14°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ53	84×(60)－45	隅丸長方形	逆台形	N-5°-E		土師質土器皿		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ54	不明	不明	不明	不明			焼けた自然角礫	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ55	120×85－47	隅丸長方形	逆台形	N-5°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ56	115×80－45	不整長方形	不整逆台形	N-13°-E		鉄釘	埋土中に自然角礫	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ57	?×?－10	不明	不明	不明		鉄釘・人骨・炭化物	焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ58	100×86－11	隅丸方形	逆台形	N-9°-E	開元通寶？１	鉄釘	底面に赤変した配石	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ59	113×78－15	隅丸長方形	不整逆台形	N-4°-E		土師質土器皿・鉄釘・人骨	小児骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ60	109×69－20	長方形	逆台形	N-14°-E		鉄釘・人骨	小児骨・焼土面・底面に配石	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ61	92×(80)－10	隅丸方形	逆台形	N-15°-E	永楽通寶１不明２	鉄釘・人骨	小児骨・焼土面・底面に配石・溝	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ62	100×(70)－19	隅丸長方形	不整逆台形	N-2°-E		人骨	成人骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ63	118×65－22	不整隅丸長方形	逆台形	N-20°-E	咸平元寶１祥符元寶１皇宋通寶１元祐通寶２紹聖元寶１	鉄釘・人骨・炭化物	成人骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ64	83×?－14	不明	逆台形	N-72°-W		人骨・炭化物	小児骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ65	68×50－7	不整長方形	逆台形	N-25°-E	熙寧元寶１元豊通寶１不明１	鉄釘・人骨・炭化物	小児骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ66	100×71－51	不整隅丸長方形	不整形	N-7°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ67	65×62－17	隅丸方形	逆台形	N-2°-E	咸平元寶１	炭化物		火葬墓？
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ68	75×63－30	不整方形	逆台形	N-1°-E		土師質土器火舎		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ69	85×50－28	長楕円形	逆台形	N-10°-E		人骨	小児骨・焼土面	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ70	97×?－15	隅丸方形？	不整逆台形	N-13°-E	元豊通寶１元符通寶１不明１	鉄釘・不明鉄製品・人骨	成人骨・焼土面・底面に配石	火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ71	95×75－44	不整方形	不整形	N-41°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ72	121×87－61	不整隅丸長方形	逆台形	N-8°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ73	?×?－10	隅丸長方形？	逆台形	N-38°-W				火葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ74	160×90－40	不整舟形	逆台形	N-16°-E	皇宋通寶１政和通寶１至元通寶２永楽通寶１不明１	人骨	10代？	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ75	100×68－37	隅丸長方形	不整逆台形	N-16°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ76	65×62－73	隅丸方形	逆台形	N-6°-E				土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ77	94×68－64	隅丸長方形	長方形	N-70°-W		人骨	青年～壮年前期	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ78	72×60－37	不整楕円形	逆台形	N-70°-W				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ79	72×69－42	不整円形	逆台形	N-7°-E				不明
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ80	129×68－46	隅丸長方形	逆台形	N-22°-E		鉄釘		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ81	97×69－48	隅丸長方形	逆台形	N-20°-E		土師質土器皿・鉄釘		土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ82	107×74－44	隅丸長方形	逆台形	N-13°-E		人骨	若年者女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ84	87×55－61	長方形	長方形	N-5°-E		人骨	壮年男性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ85	100×74－38	長方形	逆台形	N-98°-E		鉄釘・人骨	成人女性	土葬墓
布勢鶴指奥墳墓群	ＳＫ86	不明	不明	不明	不明	景徳元寶１皇宋通寶３元祐通寶１紹聖元寶１		ＳＤ01埋土中	土葬墓

挿表15　中世墓一覧表(4)

註・参考文献

1．鳥取市教育委員会『西桂見遺跡』1981
2．鳥取市教育委員会『西桂見遺跡II』1984
3．新日本海新聞社『鳥取県大百科事典』1984
4．鳥取市『新修鳥取市史』1984
5．梅原末治「鳥取県に於ける有史以前の遺跡」『鳥取県史蹟勝地調査報告書』第1冊 1922
6．鳥取県教育文化財団『布勢遺跡発掘調査報告書』1981
7．鳥取県教育文化財団『東桂見遺跡・布勢鶴指奥墳墓群』1992
8．鳥取市教育委員会『桂見遺跡発掘調査報告書』1978
9．鳥取市教育委員会『大桙遺跡Ⅰ』1978
10．鳥取県教育委員会『天神山遺跡発掘調査概報』1973
11．鳥取県教育文化財団『湖山第2遺跡』1982
12．鳥取市教育福祉振興会『山ケ鼻遺跡』1995
13．鳥取市教育委員会『岩吉遺跡発掘調査報告書』1976
14．鳥取県「原始・古代」『鳥取県史』1　1972
15．鳥取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』1985
16．鳥取市教育委員会『帆城遺跡・天神山遺跡調査報告』1982
17．鳥取市教育委員会『松原谷田遺跡・大路川遺跡発掘調査概報』1976
18．鳥取県教育文化財団『湖山第1遺跡』
19．鳥取市教育委員会『古海遺跡発掘調査概報』1981
20．鳥取市教育委員会『秋里遺跡Ⅰ』1976
21．鳥取市教育委員会『桂見墳墓群』1984
22．鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取県の古墳』
23．鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書』第11集 1979
24．鳥取大学『三浦古墳』1977
25．野田久雄・清水真一『日本の古代遺跡・鳥取』保育社　1985
26．鳥取県教育文化財団『里仁古墳群』1985
27．鳥取市教育福祉振興会『桂見墳墓群II』1993
28．明日の湖南を考える会『葦岡長者古墳発掘調査報告書』1984
29．出雲考古学研究会『石棺式石室の研究』1987
30．鳥取県教育委員会『菖蒲廃寺発掘調査概報』1968
31．鳥取県教育文化財団『大熊段遺跡』1985
32．鳥取県教育文化財団『三浦遺跡』1982
33．鳥取県教育委員会『天神山遺跡発掘調査概報』1973
34．谷口恭子「土器」『岩吉遺跡III』鳥取市教育委員会　1991
35．田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
36．新納泉「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻3号　1987
37．藤田憲司「単位集団の居住領域－集落研究の基礎作業として－」『考古学研究』第31巻第2号　考古学研究会　1984
38．村上恭通「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻3号考古学研究会　1994
39．津山市小原遺跡・東蔵坊遺跡・押入西遺跡、岡山市・天神坂遺跡などで検出されている。
40．下高瑞哉「鳥取県東部における中高式天井石室に関する一考察」『島根考古学会誌』第6集　1989
41．近藤哲雄「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第4集　1986
42．牧本哲雄「鳥取県における家形石棺について」『古墳時代後期の棺－家形石棺を中心に－』第23回山陰考古学研究集会資料　1995
43．鳥取市教育委員会『史跡鳥取城附太閤ケ平保存管理計画策定報告書』1984
鳥取県立博物館「久松山鳥取城」『鳥取県の自然と歴史』6　1984
44．鳥取市教育委員会『ヒル山砦跡・熊田古墳発掘調査報告書』1980
45．鳥取県教育文化財団『円護寺遺跡群』1983
46．羽合町『羽合町史』前編　1967
47．鳥取県教育文化財団『南谷ヒジリ遺跡・南谷夫婦塚遺跡・乳母ケ谷第2遺跡・南谷19～23号墳・宇野3～9号墳』1991
48．鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』VI 1983
49．岡山県教育委員会『みそのお遺跡』1993
50．鳥取県教育委員会『徳尾遺跡群発掘調査報告書』1985
51．鳥取県教育委員会『布勢鶴指奥墳墓群試掘調査報告書』1992
52．倉吉市教育委員会『不入岡遺跡群発掘調査概報』1995

むすびにかえて

西桂見遺跡の発掘調査は、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路整備事業に伴う発掘調査の一環として1993年から1995年にかけて行われた。この結果、湖山池周辺の弥生時代から古墳時代の集落、特に、弥生時代後期の日本最大の四隅突出型墳丘墓と同時期の集落が検出され、当時の集団関係を考える上で貴重な資料を提供できたとともに、まとまって中世墓が検出され、近年注目されてきた中世の生活様相を解明する上で、新たな資料を追加できた。

桂見遺跡とあわせて3カ年の継続調査を、関係各位のご協力により終了することができ、ここに、ようやく報告書をまとめることができた。本報告書は、事実記載に力点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりである。本報告書に納めた内容が、歴史研究の一助となれば幸いである。

最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、指導・協力・助言をいただいた各位に深く感謝申し上げたい。

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土番号	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底部径(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調内面	色調外面	備考	実測番
S I 01	Po1	9	30	242・263	埋土下層	弥生土器	甕	※17.8	△6.2			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。肩部ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部位下右方向ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	浅黄橙色	外面スス付着	FK-35
S I 01	Po2	9	30	247	埋土上層	弥生土器	甕	※12.6	△3.8			外反する鈍い複合口縁をもつ。内外面口縁部横方向ミガキ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	外面スス付着	FK-71
S I 01	Po3	9		244	埋土上層	弥生土器	甕	※7.2	△2.6			短く直立する口縁部をもつ。外面口縁部平行沈線。内面ヨコナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	明黄褐色	外面スス付着	FK-36
S I 01	Po4	9		238	埋土上層	弥生土器	器台		△2.2		※11.6	小型の鼓形器台脚台部と思われる。外面端部平行沈線。内面ナデ。	密（砂粒を多く含む。）	良好	橙色	鈍い黄橙色		FK-38
S I 01	Po5	9		241・245	埋土上層	弥生土器	蓋？		△2.8		※12.8	「ハ」字状に広がる蓋と思われる。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-37
S I 02	Po6	11	30	297・312	埋土上層	弥生土器	甕	※18.3	△7.4			大きく外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	外面スス付着	FK-15
S I 02	Po7	11		295	埋土上層	弥生土器	甕	※4.0	△2.5			端部が肥厚し、複合口縁状を呈す口縁部をもつ。内外面ともにヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-26
S I 02	Po8	11	30	295・303 310・343	埋土上層	弥生土器	高杯		△12.7		※17.0	ラッパ状に大きく広がる高杯脚部。内外面ともに風化のため調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	浅黄橙～鈍い橙色	浅黄橙～鈍い橙色		FK-25
S I 03	Po9	13	30	323	埋土下層	弥生土器	壺	※16.0	△4.5			ほぼ直立する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部横方向ミガキ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	鈍い橙色	外面スス付着	FK-12
S I 03	Po10	13	30	324・405 412・413 414・435	埋土下層	弥生土器	甕	※17.8	△9.9			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。肩部貝殻腹縁による刺突文。以下斜方向ハケメ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下横方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FK-14
S I 03	Po11	13	30	315	埋土上層	弥生土器	甕	※23.4	△3.3			短く外傾する鈍い複合口縁をもつ。外面ハケ目。内面口縁部ハケ目。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	黒褐色	黒褐色		FK-24
S I 03	Po12	13	30	322	埋土下層	弥生土器	甕	※14.0	△4.1			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線後ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下横方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FK-23
S I 03	Po13	13	30	407・435	埋土下層	弥生土器	甕	※15.3	△6.1			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。肩部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。肩部以下右方向ケズリ。	密（1～4㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	外面スス付着	FK-20
S I 03	Po14	13	30	403	埋土下層	弥生土器	甕	※16.8	△5.1			内湾気味の「く」字状口縁をもつ。内外面ともに風化のため調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙～橙色	鈍い橙～橙色	外面スス付着	FK-16
S I 03	Po15	13	30	310・311 417	埋土上層	弥生土器	胴部		△11.5		※6.4	肉厚でしっかりとした底部をもつ。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着。黒斑あり	FK-18
S I 03	Po16	13		316	埋土上層	弥生土器	底部		△3.1		※7.0	しっかりとした底部。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	鈍い黄橙色	橙色		FK-21
S I 03	Po17	13		326	床面	弥生土器	底部		△2.2		※9.0	大きくしっかりした底部。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	灰黄色		FK-19
S I 03	Po18	13	30	308	埋土下層	弥生土器	脚部		△2.7		※12.6	おおきく「ハ」字状に開く脚付き甕と思われる。内外面ともにナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-22
S I 03	Po19	13	30	404	埋土上層	弥生土器	注口土器					細い筒状の注口土器注口部。外面ナデ。内面シボリ目残る。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-33
S I 03	Po20	13		65	埋土上層	土師器	高杯		△1.6			高杯杯底部破片。外面ハケ目。内面ナデ。	密（砂粒を多く含む。）	良好	赤褐色	赤褐色	内外面赤色塗彩	FK-45
S I 03	Po21	13	30	319	埋土下層	弥生土器	鼓形器台	※15.0	△4.4			大きく外反する鼓形器台上台部。外面口縁部平行沈線。内面口縁部横方向ミガキ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FK-13
S I 03	Po22	13	30	314・417	埋土上層	弥生土器	鉢	※16.2	△4.3			端部が肥厚する。外面ハケ目後ミガキ。内面ケズリ後ミガキ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	外面スス付着	FK-17
S I 03	Po23	13		417	埋土上層		土錘	長さ2.95	径0.85	穴径0.2	重さ1.5g	長紡錘形を呈す。中心に孔あり。手捏ね成形後ナデ。	密	良好	黒褐色			FK-70
S I 04	Po24	37	35	892	床面	弥生土器	甕	※15.8	△4.4			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	外面口縁部スス付着	Y-32
S I 05	Po25	40	35	505	埋土上層	弥生土器	壺	※13.0	△5.8			内湾気味に立ち上がる複合口縁をもつ。	密（1～5㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	橙色	橙色	外面スス付着	FK-54
S I 05	Po26	40	35	544	床面	弥生土器	甕	※17.8	△4.0			外反する複合口縁をもつ。内外面ともにナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FK-55
S I 05	Po27	40		546	床面	弥生土器	甕					外傾する複合口縁をもつ。外面風化のため調整不明。内面ヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	黄橙色	黄橙色		FK-75
S I 05	Po28	40		578	床面	弥生土器	甕	※13.2	△2.8			短く内湾する口縁部をもつ。外面ナデ。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	鈍い褐色	外面スス付着	FK-76
S I 05	Po29	40		570	床面	弥生土器	高杯	※16.4	△5.4			湾状を呈す高杯杯部。外面ナデ。内面風化著しい。ナデか。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	黄橙色	外面スス付着	FK-78
S I 05	Po30	40		572	埋土下層	弥生土器	脚部		△4.0		△12.4	「ハ」字状に開く脚部。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-77

挿表16　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(1)

S I05	Po31	40		508	埋土上層	弥生土器	甑		△13.6			円筒状の胴部を持つ甑。外面風化のため調整不明。内面ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	淡黄色	外面黒斑あり	FK-81
S I05	Po32	40		514	床面	弥生土器	甑把手					断面円形を呈する甑把手。ケズリ後ナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好		黄橙色		FK-82
S I06	Po33	41	35	638	床面	弥生土器	甕	※19.3	△4.0			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部10条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（0.5～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	灰褐色		I-34
S I06	Po34	41	35	641	埋土下層	弥生土器	甕	※16.3	△4.0			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部8条の平行沈線。内面調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明褐色	外面スス付着	I-30
S I06	Po35	41	35	638	床面	弥生土器	甕	※14.3	△3.4			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部わずかに平行沈線が認められる。内面調整不明。	やや粗（0.5～1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	淡褐色	淡褐色		I-33
S I06	Po36	41	35	529	埋土下層	弥生土器	甕	※16.6	△3.1			短く大きく外傾する複合口縁をもつ。内外面ともに調整不明。	密（1～2.5㎜大の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明褐色		I-29
S I06	Po37	41		533	埋土下層	弥生土器	甕	※14.6	△3.4			短く外反する複合口縁をもつ。内外面とも調整不明。	やや粗（1㎜程度の砂粒を多く含む。）	良好	明褐色	明褐色		I-31
S I06	Po38	41		787	P 1内	弥生土器	甕		△5.8			複合口縁をもつ甕胴部破片。肩部はなだらか。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（0.5～3㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	淡褐色	淡褐色		I-45
S I06	Po39	41		523	埋土下層	弥生土器	底部		△2.4		※4.4	わずかに平底を呈す底部。内外面とも調整不明。	密（0.5～1㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	明褐色		I-28
S I06	Po40	41		522	埋土下層	弥生土器	高杯		△6.9			ラッパ状に開く中実の高杯筒部。4方の円形透かし孔有り。内外面ともにナデ。	密（1～1.5㎜大の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		I-27
S I06	Po41	41		639	床面	弥生土器	鼓形器台		△4.1			ラッパ状に開く鼓形器台脚台部と思われる。内外面ともに調整不明。	やや粗（0.5～1.5㎜程度の砂粒を含む。）	不良	明褐色	明褐色		I-35
S I07	Po42	45	35	587	埋土下層	弥生土器	甕	※19.0	△6.3			やや外反気味に外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線がわずかに認められる。頸部貝殻腹縁による刺突文有り。内面口縁部ヨコナデ。肩部以下右方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を多く含む。）	良好	淡褐色	淡褐色		I-36
S I07	Po43	45	35	587・604	埋土下層	弥生土器	甕	※14.0	△4.4			短く外反する複合口縁をもつ。外面ナデ。内面風化のため調整不明。	密（1～3㎜程度の石英・砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色	外面スス付着	FN-189
S I07	Po44	45		580	埋土下層	弥生土器	甕	※17.1	△4.1			緩やかに「ハ」字状に開く口縁部をもつ。端部は肥厚する。内外面ともに調整不明。	やや粗（0.5～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色		I-37
S I07	Po45	45	35	584	埋土下層	弥生土器	甕	※15.2	△14.5	※17.3		外反する「く」字状口縁、球形の胴部をもつ。外面ハケ目後ミガキ。内面口縁部ナデ。胴部ハケメ。	密（1～3㎜程度の砂粒を多くむ。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	外面スス付着	FK-56
S I07	Po46	45	36	586	埋土下層	弥生土器	高杯		△9.5		※12.2	ラッパ状に開く高杯脚部。外面縦方向ミガキ。内面筒部ハケメ。裾部ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒をわずかに含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-57
S I07	Po47	45		584	埋土下層	弥生土器	鼓形器台		△4.3			鼓形器台上台部の破片と思われる。内外面ともに調整不明。	やや粗（0.5～1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	淡明赤褐色	淡明褐色～淡灰褐色		I-42
S I08	Po48	47	36	645	P 1内	弥生土器	甕	※19.2	※27.9	※21.6		大きく外反する複合口縁をもつ。胴部倒卵形を呈し、底部は平底。外面口縁部平行沈線。肩部横方向ハケメ。胴部下半ハケメ後ナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部位下ケズリ。底部付近上方向ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を多く含む。）	良好	淡褐色～暗褐色	黄橙色	外面スス付着	FK-58
S I09	Po49	55	36	789	床面	弥生土器	甕	※29.2	△18.8			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。肩部タテ後ヨコ方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	やや粗（細砂を多く含む。）	やや不良	灰白色～鈍い黄橙色	灰白色～鈍い黄橙色	外面黒斑あり	FK-93
S I09	Po50	55	36	789	床面	弥生土器	甕	※33.0	△15.2			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線後ナデ消し。肩部平行沈線・波状文。内面風化のため調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	不良	鈍い黄橙色～明黄褐色	鈍い黄橙色～明黄褐色		FK-101
S I09	Po51	55	36	685	埋土下層	弥生土器	甕	※16.0	△10.6			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。肩部横方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色～橙色	外面スス付着	FK-60
S I09	Po52	55		684	埋土下層	弥生土器	甕	※14.8	△5.0			外反する複合口縁をもつ。内外面ともに風化のため調整不明。ナデか。	やや粗（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-63
S I09	Po53	55		472	埋土上層	弥生土器	底部		△2.2		1.4	小さく尖る平底をもつ。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色	外面スス付着	FN-50
S I09	Po54	55		695	埋土下層	弥生土器	鼓形器台	※20.6	△7.5			外反気味の複合口縁状を呈す鼓形器台上台部。外面平行沈線。内面風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-62
S I10	Po55	57	37	726	埋土下層	弥生土器	甕	※18.8	△5.8			ほぼ直立する鈍い複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	明黄褐色	外面スス付着	FK-87

挿表17　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(2)

S I 10	Po56	57	37	701・702	周辺	弥生土器	甕	※17.0	△6.2			ほぼ直立する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色		FK-86
S I 10	Po57	57	37	657	埋土下層	弥生土器	甕	※19.2	△5.1			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡黄色～浅黄色	淡黄色～浅黄色		FK-88
S I 10	Po58	57		716	埋土下層	弥生土器	甕		△3.8			やや内傾気味の複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-91
S I 10	Po59	57		711	埋土下層	弥生土器	甕	※14.0	△4.7			「く」字状口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	橙色	外面スス付着	FK-90
S I 10	Po60	57	37	728	埋土下層	弥生土器	底部		△13.1		※6.0	倒卵形の胴部～やや上げ底気味の底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰褐色～黒褐色	橙色	外面スス付着	FK-85
S I 10	Po61	57		705・706 709	埋土上層	弥生土器	底部		△6.2		※7.2	やや上げ底気味の底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	灰黄色～黄灰色	外面スス付着	FK-83
S I 10	Po62	57		717	埋土上層	弥生土器	底部		△5.2		※5.4	やや上げ底気味の底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FK-84
S I 10	Po63	57		658	埋土下層	弥生土器	高杯		△2.8			椀状を呈する高杯杯底部。外面縦方向ハケ目。内面風化のため調整不明。	やや粗（砂粒を含む。）	やや不良	黒褐色	鈍い黄橙色		FK-92
S I 10	Po64	57		724	埋土下層	弥生土器	甕	※9.6	△4.1			短く直立する口縁部をもつ。外面風化のため調整不明。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	浅黄色		FK-89
S K01	Po65	15	31	112	埋土下層	土師質土器	皿	※10.2	△1.8			浅い土師質土器皿。底部は丸みをもつ。内外面ともナデ。	密	良好	にぶい橙色	にぶい橙色		FN-181
S K02	Po66	17	31	221	床面	弥生土器	甕	※18.4	△3.7			完成品の外側に粘土を張り付け、分厚く鈍い複合口縁にする。内外面ともミガキ。	緻密	良好	橙色	橙色	口縁部内面黒斑あり	S-14
S K02	Po67	17	31	213・223	床面	弥生土器	甕		△21.0	※27.0		ほぼ球形を呈す胴部。外面細かいミガキ。内面ケズリ。	密	良好	黒褐色	橙色～暗赤褐色	外面スス付着	S-13
S K02	Po68	17	31	224・226	床面	弥生土器	小型甕	※15.4	△9.5	※13.9		内湾気味の「く」字状口縁をもつ。胴部は球形を呈す。外面ナデ。内面口縁部ナデ。胴部左方向ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	褐灰色～淡黄色	淡黄色		S-17
S K02	Po69	17		225	床面	弥生土器	高杯		△3.9			低い椀状を呈す底部から屈曲する口縁部をもつ。外面風化のため調整不明。内面丁寧なナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	やや不良	黄橙色～黒褐色	橙色	内面黒斑あり	S-15
S K04	Po70	60	37	594・636	埋土上層	弥生土器	壺	※15.0	△9.2			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部2条の擬凹線。内面口縁部～頸部ナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～5㎜の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色～黒褐色	橙褐色		FN-61
S K04	Po71	60		596	埋土下層	弥生土器	壺	※14.0	△4.6			直立する短い複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部～頸部ナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	灰白色～黄橙色	外面黒斑あり	FN-67
S K04	Po72	60		590	埋土上層	弥生土器	壺	※15.2	△5.0			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。頸部ナデ。内面ナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		FN-69
S K04	Po73	60		636	埋土下層	弥生土器	壺	※12.6	△4.3			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線後一部ナデ消し。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-175
S K04	Po74	60		590	埋土上層	弥生土器	壺	※13.0	△6.1			外反する「く」字状口縁をもつ。外面風化のため調整不明。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	赤橙色	赤橙色		FN-71
S K04	Po75	60	37	590	埋土上層	弥生土器	甕	※19.4	△4.6			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-72
S K04	Po76	60	37	563	埋土上層	弥生土器	甕	※16.8	△4.0			外反する複合口縁をもつ。外面ナデ。内面口縁部ケズリ後ナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色	外面スス付着	FN-68
S K04	Po77	60	37	636	埋土下層	弥生土器	甕	※15.0	△3.0			内湾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデか。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色	外面スス付着	FN-179
S K04	Po78	60	37	562・591	埋土上層	弥生土器	甕	※15.4	△2.8			短く外反する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色	外面スス付着	FN-177
S K04	Po79	60	37	563	埋土上層	弥生土器	甕		△2.5			複合口縁をもつ甕。頸部に円孔あり。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色	外面黒斑あり	FN-178
S K04	Po80	60	38	590	埋土上層	弥生土器	甕	※19.0	△4.2			外反する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	外面スス付着	FN-73
S K04	Po81	60	38	562	埋土上層	弥生土器	甕	※15.6	△3.4			短く外反する複合口縁をもつ。内外面ともに調整不明。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を多く含む。）	良好	淡褐色	明赤褐色		I-38
S K04	Po82	60	38	636	埋土下層	弥生土器	甕	※14.0	△3.0			短く外反する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-174
S K04	Po83	60	38	636	埋土下層	弥生土器	甕	※17.4	△4.9			外反する複合口縁をもつ。外面風化のため調整不明。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-176

挿表18　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(3)

S K04	Po84	60	38	563	埋土上層	弥生土器	甕		△6.6			複合口縁をもつ甕口縁部～胴部。外面肩部貝殻腹縁による刺突文。内面ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰褐色～明黄褐色	明黄褐色	外面スス付着	FN-70
S K04	Po85	60	38	593	埋土上層	弥生土器	甕	※16.0	△8.4			大きく開く「く」字状口縁をもつ。外面口縁部ナデ。胴部縦方向ハケ目。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	橙色	外面スス付着	FN-60
S K04	Po86	60		562	埋土上層	弥生土器	鉢	※12.8	△6.1			「く」字状口縁をもつ。胴部は球形を呈す。外面口縁部ナデ。胴部斜方向細かいハケ目。内面口縁部ハケ目。胴部ケズリ後ナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-66
S K04	Po87	60		563	埋土上層	弥生土器	甕	※11.4	△3.2			「く」字状口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	外面スス付着	FN-74
S K04	Po88	60		562	埋土上層	弥生土器	底部		△5.5		※5.7	やや上げ底の底部。外面ナデ。内面ケズリ。	やや粗（1～3㎜の砂粒を含む。）	良好	橙色～灰褐色	茶褐色	外面黒斑あり	FN-62
S K04	Po89	60		563・590	埋土上層	弥生土器	底部		△2.5		※3.3	しっかりとした底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黒褐色	灰褐色～明赤褐色		FN-77
S K04	Po90	60	38	562・563 595・637	埋土上層	弥生土器	器台	※21.4	20.2		14.1	上台部はロウト状に開き、端部は複合口縁状を呈す。脚部はラッパ状に開く。脚部に円形透かし3カ所。外面口縁部5条の平行沈線。筒部～裾部縦方向ミガキ。脚部縦方向ミガキ。内面上台部ナデ。筒部ケズリ。裾部ナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色～赤褐色	鈍い黄橙色～赤褐色		FN-64
S K04	Po91	60		562	埋土上層	弥生土器	器台	※20.7	△4.4			口縁部は短く複合口縁状になり、大きく広がる。外面口縁部平行沈線。内面ナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	外面黒斑あり	FN-63
S K04	Po92	60	38	591・597	埋土上層	弥生土器	鼓形器台		△4.1		※10.8	小型の鼓形器台脚台部。外面平行沈線後3重圏のスタンプ文。内面ケズリ後ハケ目。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	淡黄色		FN-78
S K04	Po93	60		598	埋土上層	弥生土器	低脚杯		△2.6		※5.7	大きく広がる低脚杯脚部。内外面ともナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		FN-204
S K04	Po94	60		563・601	埋土上層	弥生土器	蓋		△4.7		※13.4	「ハ」字状に開く蓋。外面縦方向ミガキ。内面ケズリ後ナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	赤褐色～明赤褐色	赤褐色～明赤褐色		FN-76
S K06	Po95	46	36	862	床面	弥生土器	甕	※20.2	△5.4			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部調整不明。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明褐色		I-43
S K06	Po96	46	36	860	床面	弥生土器	甕	※17.7	△5.2			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線がわずかに認められる。内面調整不明。	やや粗（1～1.5㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明褐色～明赤褐色		I-46
S K06	Po97	46	36	629・632	埋土上層	弥生土器	甕	※17.9	△4.8			外反する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～1.5㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明赤褐色	Po96と同一個体か	I-40
S K06	Po98	46	36	632	埋土上層	弥生土器	甕	※17.0	△4.7			やや外反する複合口縁をもつ。内外面ともに調整不明。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	明褐色	明褐色		I-44
S K07	Po99	73	39	766	埋土中	弥生土器	壺	※15.6	△7.2			口縁端部が肥厚する。外面風化のため調整不明。内面横～斜方向ミガキ。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-98
S K07	Po100	73	39	777	埋土中	弥生土器	壺	※13.3	△3.9			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部3条の平行沈線。頸部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下剝離のため調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明褐色～淡褐色		I-57
S K07	Po101	73	39	767・769 772	埋土中	弥生土器	甕	※32.6	※30.8	※35.2	※11.0	繰り上げ口縁をもつ。胴部は中位以上に最大径をもつ。底部はしっかりとした平底を呈す。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	胴部外面黒斑あり	FN-96・97
S K07	Po102	73	39	719	埋土中	弥生土器	甕	※13.3	△3.8			内傾する繰り上げ口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。頸部ヨコナデ後刺突文。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	赤褐色	赤褐色		I-59
S K07	Po103	73		722	埋土中	弥生土器	甕	※14.2	△2.8			短く内傾する複合口縁をもつ。外面口縁部4条の平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（1㎜前後の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色	外面スス付着	I-50
S K07	Po104	73	39	778	埋土中	弥生土器	甕	※17.7	△3.6			短く内傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色		I-52
S K07	Po105	73	39	722	埋土中	弥生土器	甕	※17.6	△3.3			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部5条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色	外面スス付着	I-51
S K07	Po106	73	39	722	埋土中	弥生土器	甕	※24.7	△3.9			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部5条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡明褐色	淡明褐色		I-56
S K07	Po107	73	39	765	埋土中	弥生土器	甕	※18.2	△4.7			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部4条の擬凹線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	外面スス付着	FN-173
S K07	Po108	73		765	埋土中	弥生土器	甕	※22.2	△7.6			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	明赤褐色		I-48

挿表19　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(4)

S K07	Po109	73	39	719	埋土中	弥生土器	甕	※18.3	△4.0			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部３条の擬凹線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡明褐色	淡明赤褐色	口縁部外面スス付着	I-55
S K07	Po110	73		786	埋土中	弥生土器	甕	※27.6	△4.4			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（１～３㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡明褐色	淡明褐色		I-53
S K07	Po111	73	39	719	埋土中	弥生土器	甕	※18.4	△3.8			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部９条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（１㎜前後の砂粒を含む。）	良好	淡褐色～灰褐色	暗褐色	外面スス付着	I-62
S K07	Po112	73		765・783	埋土中	弥生土器	甕	※17.9	△3.8			ほぼ直立する複合口縁をもつ。外面口縁部４条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（１～２㎜の砂粒を含む。）	良好	淡明赤褐色	淡明褐色～明赤褐色		I-47
S K07	Po113	73	39	775	埋土中	弥生土器	甕	※20.1	△6.5			やや外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（１㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡明赤褐色	淡明赤褐色		I-58
S K07	Po114	73	39	720	埋土中	弥生土器	甕	※16.6	△4.9			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（１～２㎜の砂粒を含む。）	良好	明褐色	淡明赤褐色	外面スス付着	I-66
S K07	Po115	73		775	埋土中	弥生土器	甕	※16.3	△5.3			高く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（１～２㎜の砂粒を含む。）	良好	淡明褐色	淡褐色	口縁部外面スス付着	I-61
S K07	Po116	73		769	埋土中	弥生土器	甕	※20.1	△5.5			外反する複合口縁をもつ。外面風化のため調整不明。内面口縁部調整不明。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	明褐色～褐色	淡明赤褐色		I-49
S K07	Po117	73	40	768	埋土中	弥生土器	小型甕	※11.2	△5.7			ややアクセントがある「く」字状口縁をもつ。外面風化のため調整不明。内面口縁部ナデか。肩部以下ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	明褐色～淡明赤褐色	赤褐色	外面スス付着	I-63
S K07	Po118	73	40	721	埋土中	弥生土器	小型甕	※9.6	△4.6			端部がやや肥厚する「く」字状口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ナデか。肩部以下ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡明赤褐色～明赤褐色	明赤褐色		I-60
S K07	Po119	74	40	777	埋土中	弥生土器	把手付き甕		△6.9			断面円形、半環状の把手付甕の把手。外面調整不明。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡茶褐色	淡茶褐色		I-69
S K07	Po120	74	40	770	埋土中	弥生土器	高杯	14.0	10.3		9.7	浅い椀状を呈す杯部、やや短い脚部をもつ。外面杯部調整不明。脚部ハケ目。内面口縁部調整不明。脚部ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-94
S K07	Po121	74		777	埋土中	弥生土器	高杯		△4.8			短い中実の筒部に、大きく広がる裾部をもつ。外面ナデ。内面杯部ナデ。脚部ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色	外面赤色塗彩痕	I-67
S K07	Po122	74	40	768	埋土中	弥生土器	鼓形器台	※17.8	※19.0		※14.4	筒部が高く、口縁・脚端部があまり発達しない。外面口縁部２条の平行沈線。筒部調整不明。脚部縦方向ミガキ。脚端部ナデ。内面上台部調整不明。筒部ケズリ。脚台部ナデ。	やや粗（１～５㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-95
S K07	Po123	74	40	771	埋土中	弥生土器	甑把手		△9.8			半環状の甑把手。外面調整不明。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好		明褐色	外面スス付着	I-68
S K08	Po124	76	40	881	埋土中	弥生土器	甕	※20.0	△5.5			端部が上下に肥厚し、やや内傾する面をもつ。外面口縁部３条の擬凹線。肩部縦方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		I-54
S D01	Po125	19		469	埋土中	弥生土器	甕	※19.2	△4.2			外傾する鈍い複合口縁をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-206
S D05	Po126	21		261	埋土中	備前焼	擂鉢					内面細かい摺り目。	密	良好	赤褐色	赤褐色		FN-183
S D08	Po127	23		423	埋土中	須恵器	高杯		△5.9			高く「ハ」字状に開く高杯脚部。内外面とも回転ナデ。外面凹線がめぐる。	密（１～２㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰色～明黄褐色	暗灰色		FN-202
S D09	Po128	24		457	埋土中	施釉陶器	甕	※20.2	△2.1			玉縁口縁をもつ。内外面共ナデ。	密	良好	灰白色	灰白色		FN-182
S D10	Po129	25		444	埋土上層	備前焼	甕	※19.4	△5.7			やや肥厚する口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（１～３㎜の砂粒を含む。）	良好	赤褐色	赤褐色		FN-184
S D11	Po130	65		478	埋土下層	弥生土器	甕		△3.5			やや外傾する複合口縁をもつ。端部を欠く。外面調整不明。内面口縁部ナデ。	やや粗（１～３㎜の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-185
S D11	Po131	65	38	478	埋土下層	弥生土器	甕		△2.6			外傾する複合口縁をもつ。端部を欠く。内外面とも調整不明。	やや粗（１㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-186
S D11	Po132	65	38	468	埋土上層	須恵器	杯		△1.0		※10.3	低い高台をもつ須恵器杯。内外面とも回転ナデ。	密（１～２㎜の砂粒を含む。）	良好	暗赤灰色	赤褐色		FN-187
S D14	Po133	63	38	576	黒灰褐色土中	土師器	杯		△0.7		※6.6	低い高台をもつ土師器杯。内外面とも調整不明。	やや粗（１㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰色	灰色		FN-188
S D15	Po134	56		736	埋土中	弥生土器	甕		△10.3			肉薄で外傾する複合口縁をもつ。大きく張る肩をもつ。内外面ともに風化のため調整不明。	粗（１～２㎜の砂粒を含む。）	不良	黒褐色～明黄褐色	黒褐色～明黄褐色		FN-194
S S02	Po135	28	31	339	埋土中	弥生土器	壺	※12.8	△9.2			大きく外反するなだらかな「く」字状口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。肩部縦方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。	密（１～３㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色～鈍い黄褐色	橙色		FN-190

挿表20　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(5)

ＳＳ02	Po136	28		422	埋土中	弥生土器	甕	※12.3	△1.4			内傾する繰り上げ口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面ヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	褐色	褐色		FN-193
ＳＳ02	Po137	28	31	341・420	埋土中	弥生土器	甕	※19.2	△8.3			やや内傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部3条の擬凹線。胴部横方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FK-28
ＳＳ02	Po138	28		445	埋土中	弥生土器	甕	※15.4	△5.1			内傾する繰り上げ口縁をもつ。外面口縁部3条の擬凹線。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-31
ＳＳ02	Po139	28	31	422	埋土中	弥生土器	甕	※21.3	△3.3			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部8条の平行沈線。内面ヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	外面スス付着	FN-192
ＳＳ02	Po140	28	31	292	埋土中	弥生土器	甕	※14.2	△2.9			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部横方向ミガキ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄褐色	鈍い黄褐色		FK-27
ＳＳ02	Po141	28	31	421	埋土中	弥生土器	甕	※13.6	△5.3			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FK-32
ＳＳ02	Po142	28		290	埋土中	弥生土器	底部		△2.8		※5.6	しっかりとした平底を呈す底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	褐色		FK-9
ＳＳ02	Po143	28		289・292	埋土中	弥生土器	底部		△1.8		※7.2	しっかりとした平底を呈す底部。外面縦方向ハケ目。内面ケズリ後ナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	橙色	外面黒斑あり	FK-7
ＳＳ02	Po144	28	31	387	埋土中	弥生土器	底部		△3.1		※3.2	上げ底の小さな底部。外面縦方向ミガキ。内面ケズリ後縦方向ミガキ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	橙色	外面スス付着	FK-29
ＳＳ02	Po145	28	31	278	埋土中	弥生土器	底部		△1.8		※6.7	低い「ハ」字状に開く脚付甕。外面胴部縦方向ハケ目。脚部ナデ。内面ケズリ後ナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-47
ＳＳ02	Po146	28	31	386	埋土中	弥生土器	高杯		△6.8		10.5	なだらかに「ハ」字状に開く高杯脚部。外面ナデ。内面ケズリ後ヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		FN-191
ＳＳ02	Po147	28		277	埋土中	弥生土器	高杯		△3.4		※6.8	大きく開く高杯裾部。端部は肥厚し、内傾する面をもつ。外面ヨコナデ。端部4条の平行沈線。内面ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い赤褐色	鈍い赤褐色	外面黒斑あり	FK-10
ＳＳ02	Po148	28		287	埋土中	弥生土器	脚部		△3.7		※7.8	肉厚で「ハ」字状に開く脚部。外面ヨコナデ。内面ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い褐色	鈍い褐色	外面黒斑あり	FK-11
ＳＳ02	Po149	28	32	340	埋土中	弥生土器	甑	※49.6	△9.4			筒状を呈す甑口縁部。外面細かいハケ目後ミガキ。内面ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	浅黄色～鈍い黄橙色	外面黒斑あり	FK-34
ＳＳ02	Po150	28	32	281	埋土中	弥生土器	甑		△10.5			筒状の体部に太い半環状の把手が下向きに接続する。外面体部細かい縦方向ハケ目。把手ケズリ後ナデ。内面上方向ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰色～黄橙色	灰色～黄橙色	外面黒斑あり	FN-199
土墓状遺構	Po151	70	38	553	旧表土中	須恵器	甕	※14.0	△2.9			肩が大きく張る。外面平行叩き。内面同心円文叩き。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		FK-94
土墓状遺構	Po152	70	38	498	盛土最下層	須恵器	杯身		△2.5		※8.8	「ハ」字状に開く高台をもつ。高台端部は内方へ肥厚する。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	青灰色	灰白色		FK-96
土墓状遺構	Po153	70		619	盛土中	須恵器	甕					外面平行叩き。内面同心円文叩き。	密（砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		FK-95
土墓状遺構	Po154	70		619	盛土中	須恵器	底部		△2.1		※14.8	大きくしっかりとした平底を呈す。外面ナデ、底部ケズリ。内面ナデ。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	灰色	灰色		FK-98
土墓状遺構	Po155	70	38	474	表土中	備前焼	擂鉢					備前焼擂鉢。口縁部は直立する。外面ナデ。内面斜方向摺り目	密	良好	橙色	橙～灰赤色		FK-99
鷲谷口地区土器溜り	Po156	31	32	178		弥生土器	壺	※16.6	△3.9			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部3条の擬凹線。内面口縁部ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	橙色	橙色	外面スス付着	S-5
鷲谷口地区土器溜り	Po157	31	32	61		弥生土器	壺	※14.8	△3.8			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部4条の擬凹線か。内面ヨコナデ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を多く含む。）	やや不良	橙色	橙色		N-9
鷲谷口地区土器溜り	Po158	31	32	90		弥生土器	壺	※19.2	△5.7			外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。内外面ともに風化著しい。内面頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	橙色	橙色	外面スス付着	N-7
鷲谷口地区土器溜り	Po159	31	32	135		土師器	壺	※15.8	△8.6			外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は鋭くつまみ出される。外面口縁部ヨコナデ。頸部以下縦方向ハケ目。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色	褐灰色～灰黄褐色		FN-5
鷲谷口地区土器溜り	Po160	31	32	149		土師器	壺	※14.6	△7.6			器壁は薄く、外傾する複合口縁をもつ。内外面ともに風化著しい。内面ナデか。	やや粗（砂粒をわずかに含む。）	やや不良	橙色	橙色		N-2
鷲谷口地区土器溜り	Po161	31	32	86		土師器	壺	※26.5	△8.3			高く外反気味に内傾する複合口縁をもつ。端部は平坦面をなし、口縁部下端は鋭い。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1㎜程度の砂粒を多く含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		S-1
鷲谷口地区土器溜り	Po162	31	32	63		土師器	壺	※14.0	△5.6			短く外傾する複合口縁をもつ。端部は平坦面をなす。内外面とも調整不明。	やや粗（4㎜前後の石英を含む。）	やや不良	橙色	橙色		S-9
鷲谷口地区土器溜り	Po163	31	32	63		土師器	壺	※11.0	△6.1			端部が肥厚して折れる。内外面とも風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FN-207

挿表21　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(6)

鷲谷口地区土器溜り	Po164	31		253		弥生土器	壺		△8.4			壺頸部と思われる。外面7条の凹線。内面風化のため調整不明。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-33
鷲谷口地区土器溜り	Po165	31	32	91		弥生土器	壺	※13.2	△5.9			外傾する「く」字状口縁をもつ。外面ナデ。内面横方向ミガキ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		YH-6
鷲谷口地区土器溜り	Po166	31	32	173		弥生土器	壺	※10.2	△4.6			外反する「く」字状口縁をもつ。外面縦方向ハケ目残る。内面口縁部横方向ハケ目。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FN-22
鷲谷口地区土器溜り	Po167	31	32	153		弥生土器	壺	※12.2	△4.9			外傾する「く」字状口縁をもつ。外面ナデ。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		I-12
鷲谷口地区土器溜り	Po168	31	32	132		弥生土器	壺	※14.8	△4.5			内湾気味に直立する「く」字状口縁をもつ。内外面ともにナデか。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		I-13
鷲谷口地区土器溜り	Po169	31	32	38		土師器	小型壺	※9.6	△5.4			外反する「く」字状口縁をもつ。大きく張る肩部をもつ。内外面ともにナデ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		KY-3
鷲谷口地区土器溜り	Po170	31	32	63・160		土師器	小型壺	※9.8	△6.8	※10.2		短く外反する「く」字状口縁をもつ。偏球形の胴部をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色～明赤褐色	鈍い橙色～明赤褐色	外面スス付着	KY-4
鷲谷口地区土器溜り	Po171	31	32	167		弥生土器	甕	※26.0	△4.9			短く内湾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部6条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデか。	密（1～2㎜前後の石英を多く含む。）	やや不良	浅黄橙色	橙色		S-12
鷲谷口地区土器溜り	Po172	31	32	62		弥生土器	甕	※16.8	△4.1			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部3条の擬凹線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜前後の砂粒をふくむ。）	良好	赤黒色	赤黒色		S-23
鷲谷口地区土器溜り	Po173	31	32	166		弥生土器	甕	※14.5	△4.9			短くやや外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	茶褐色～褐色	茶褐色～褐色	外面スス付着	I-20
鷲谷口地区土器溜り	Po174	31		113		弥生土器	甕	※17.0	△3.3			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部擬凹線。内面調整不明。	密（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		S-35
鷲谷口地区土器溜り	Po175	31	32	33		弥生土器	甕	※16.4	△3.6			短く内傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部5条の平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1㎜前後の砂粒をふくむ。）	やや不良	赤灰色	赤灰色～橙色		S-22
鷲谷口地区土器溜り	Po176	31	32	177		弥生土器	甕	※20.8	△3.9			短く外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部平行沈線。内面調整不明。	粗（1～5㎜程度の砂粒を多く含む。）	不良	暗赤褐色～明褐色	暗赤褐色～明褐色		S-2
鷲谷口地区土器溜り	Po177	31	32	100		弥生土器	甕	※17.2	△6.6			繰り上げ口縁気味に内傾する口縁部をもつ。口縁部下端は下垂する。内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗（2～3㎜程度の砂粒を含む。）	不良	橙色	橙色	外面スス付着	N-8
鷲谷口地区土器溜り	Po178	32		256		弥生土器	甕	※19.8	△11.4			外反する複合口縁をもつ。胴部は倒卵形を呈すものか。外面口縁部平行沈線が認められる。胴部縦方向ハケ目。内面風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色	外面スス付着	FN-4
鷲谷口地区土器溜り	Po179	32	33	71		弥生土器	甕	※18.5	△5.6			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。肩部平行沈線・刺突文。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FN-19
鷲谷口地区土器溜り	Po180	32	33	85		弥生土器	甕	※17.0	△8.3			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部横～斜方向ハケ目。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	灰褐色		I-15
鷲谷口地区土器溜り	Po181	32		100		弥生土器	甕	※18.4	△4.2			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色～黄橙色	褐灰色～黄橙色		S-34
鷲谷口地区土器溜り	Po182	32	33	183		弥生土器	甕	※24.6	△4.7			外反する複合口縁をもつ。外面多条化した平行沈線後一部ナデ消し。内面風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		FN-26
鷲谷口地区土器溜り	Po183	32	33	63		弥生土器	甕	※21.6	△5.6			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜前後の砂粒をふくむ。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	外面スス付着	S-26
鷲谷口地区土器溜り	Po184	32	33	94		弥生土器	甕	※18.8	△5.4			肉厚で外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色		I-14
鷲谷口地区土器溜り	Po185	32		194		弥生土器	甕	※17.1	△4.9			ほぼ直立する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	淡褐色		FN-7
鷲谷口地区土器溜り	Po186	32		152		弥生土器	甕	※17.1	△5.6			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部調整不明。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～5㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-34
鷲谷口地区土器溜り	Po187	32	33	152		弥生土器	甕	※18.4	△4.4			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリか。	密（砂粒をわずかに含む。）	やや不良	鈍い橙色	鈍い橙色	外面スス付着	N-5
鷲谷口地区土器溜り	Po188	32	33	50		弥生土器	甕	※14.8	△3.7			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部乱れた平行沈線。内面口縁部横方向ミガキ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-1

挿表22　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(7)

鷲谷口地区土器溜り	Po189	32	33	145		弥生土器	甕	※14.6	△3.9			やや外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。頸部刺突文。内面調整不明。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色		FN-8
鷲谷口地区土器溜り	Po190	32		195		弥生土器	甕	※15.6	△3.7			短く外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部平行沈線後ナデ消し。内面口縁部ヨコナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	黄灰褐色	外面スス付着	N-10
鷲谷口地区土器溜り	Po191	32		168		弥生土器	甕	※17.4	△3.6			短く外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。外面口縁部平行沈線後ナデ消し。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ後ミガキ。	密（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		YH-5
鷲谷口地区土器溜り	Po192	32		70		弥生土器	甕	※14.6	△3.5			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FN-37
鷲谷口地区土器溜り	Po193	32		207		弥生土器	甕	※16.6	△4.0			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡灰褐色	淡灰褐色		I-8
鷲谷口地区土器溜り	Po194	32		96		弥生土器	甕	※14.4	△4.2			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色	褐灰色		S-32
鷲谷口地区土器溜り	Po195	32		37		弥生土器	甕	※13.6	△3.7			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線後一部ナデ消し。頸部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密	良好	鈍い橙色	鈍い橙色	外面スス付着	S-28
鷲谷口地区土器溜り	Po196	32		69		弥生土器	甕	※15.4	△4.3			外反する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。外面口縁部多条化した平行沈線。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FN-31
鷲谷口地区土器溜り	Po197	32		88・194		弥生土器	甕	※17.0	△4.1			大きく外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄色	浅黄橙色		YH-3
鷲谷口地区土器溜り	Po198	32		147		弥生土器	甕	※14.6	△3.6			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡明褐色	淡灰褐色～灰褐色		I-10
鷲谷口地区土器溜り	Po199	32		63		弥生土器	甕	※16.4	△5.2			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリか。	密（1㎜前後の砂粒をふくむ。）	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色	外面スス付着	S-27
鷲谷口地区土器溜り	Po200	32		129		弥生土器	甕	※15.2	△5.8			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（砂粒をわずかに含む。）	やや不良	黄橙色	黄橙色	外面スス付着	N-6
鷲谷口地区土器溜り	Po201	32		115		弥生土器	甕	※15.6	△5.2			大きく外反する複合口縁をもつ。内外面とも風化著しい。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデか。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	橙色	橙色		S-4
鷲谷口地区土器溜り	Po202	32		63		弥生土器	甕	※12.6	△3.7			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した乱れた平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜前後の砂粒をふくむ。）	良好	黒褐色	鈍い橙色	外面スス付着	S-29
鷲谷口地区土器溜り	Po203	32		63		弥生土器	甕	※10.6	△2.7			大きく外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		S-36
鷲谷口地区土器溜り	Po204	32		113		弥生土器	甕		△2.7			外傾する複合口縁をもつ。端部を欠く。外面口縁部二段の平行沈線間に三重圏スタンプ文。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色～鈍い黄橙色	鈍い黄褐色		KY-9
鷲谷口地区土器溜り	Po205	33	33	125		弥生土器	甕	※19.0	△10.5			高く外傾する複合口縁をもつ。内外面とも風化のため調整不明。内面胴部ケズリ。	やや粗（1～4㎜前後の石英を含む。）	不良	黄橙色	黄橙色		S-10
鷲谷口地区土器溜り	Po206	33	33	120		弥生土器	甕	※21.4	△8.4			やや外傾する複合口縁をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（1～5㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		YH-4
鷲谷口地区土器溜り	Po207	33		118		弥生土器	甕	※28.2	△5.7			外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。内外面とも風化のため調整不明。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄褐色	黄褐色		FN-32
鷲谷口地区土器溜り	Po208	33		139		弥生土器	甕	※21.6	△5.8			直立する複合口縁をもつ。内外面ともナデ。	やや粗（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FN-21
鷲谷口地区土器溜り	Po209	33		86		弥生土器	甕	※23.4	△5.8			外反する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色～灰黄褐色	褐灰色～灰黄褐色		FN-6
鷲谷口地区土器溜り	Po210	33		172		弥生土器	甕	※23.6	△5.9			短く外傾する複合口縁をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色		I-22
鷲谷口地区土器溜り	Po211	33		137		弥生土器	甕	※22.8	△5.0			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部調整不明。内面口縁部ヨコナデか。頸部屈曲部以下ケズリ。	粗（1～2㎜程度の砂粒を多く含む。）	良好	浅黄色	浅黄色		N-11
鷲谷口地区土器溜り	Po212	33		165		弥生土器	甕	※22.0	△5.1			外反する複合口縁をもつ。内外面とも風化著しい。外面ナデか。内面口縁部ナデか。頸部屈曲部以下ケズリ。	粗（1～2㎜程度の砂粒を多く含む。）	不良	淡黄色	淡黄色		N-3
鷲谷口地区土器溜り	Po213	33	33	67		弥生土器	甕	※20.0	△3.4			短く外反する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を多く含む。）	やや不良	橙色	橙色	外面スス付着	N-12

挿表23　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(8)

鷲谷口地区土器溜り	Po214	33	33	185		弥生土器	甕	※18.9	△4.8			やや外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。内外面とも風化著しい。外面口縁部平行沈線か。内面口縁部ナデか。	やや粗（1～5㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	明赤褐色		I-9
鷲谷口地区土器溜り	Po215	33	33	251		弥生土器	甕	※18.6	△8.6			外傾する複合口縁をもつ。内外面ともに風化のため調整不明。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	淡黄色		YH-2
鷲谷口地区土器溜り	Po216	33	33	153		弥生土器	甕	※17.4	△5.6			やや外反する複合口縁をもつ。内外面とも風化著しい。外面口縁部平行沈線か。内面口縁部ナデか。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明褐色	明褐色～褐色		I-21
鷲谷口地区土器溜り	Po217	33		79		弥生土器	甕	※16.8	△4.5			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部強いヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。	密（1㎜前後の石英を多く含む。）	良好	橙色	鈍い黄橙色		S-21
鷲谷口地区土器溜り	Po218	33		88		弥生土器	甕	※15.3	△4.3			外傾する複合口縁をもつ。内外面とも調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡褐色～灰褐色	淡褐色		I-24
鷲谷口地区土器溜り	Po219	33		100		弥生土器	甕	※15.2	△4.7			ほぼ直立する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付着	N-4
鷲谷口地区土器溜り	Po220	33		82		弥生土器	甕	※13.1	△12.0	※15.3		器壁は薄く、外反する複合口縁をもつ。胴部は倒卵形を呈す。外面風化のため調整不明。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	橙色～鈍い黄橙色	外面スス付着	FN-18
鷲谷口地区土器溜り	Po221	33	33	194・205		弥生土器	甕	※11.8	※12.5	※11.8	※1.9	外傾する複合口縁をもつ。胴部は寸詰まりの倒卵形を呈し、小さな尖り気味の平底をもつ。外面口縁部～肩部調整不明。胴部下半縦方向ハケ目。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～4㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FN-2
鷲谷口地区土器溜り	Po222	33	33	63		弥生土器	甕	※10.4	△4.1			やや外反する複合口縁をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-58
鷲谷口地区土器溜り	Po223	33	33	82		土師器	甕	※15.6	△5.5			器壁は薄く、外傾する複合口縁をもつ。端部は平坦面をなし、口縁部下端は鋭く突出する。外面ヨコナデ。内面調整不明。	密（1㎜前後の石英を多く含む。）	やや不良	黒褐色	浅黄橙色	外面スス付着	S-18
鷲谷口地区土器溜り	Po224	33	33	84・134		土師器	甕	※16.4	△6.7			器壁は薄く、外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。内外面ともに風化著しい。	密	やや不良	橙色	橙色	外面スス付着	I-17
鷲谷口地区土器溜り	Po225	33	33	91		土師器	甕	※21.0	△4.7			外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。外面調整不明。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色		S-33
鷲谷口地区土器溜り	Po226	34		62		弥生土器	甕	※16.0	△4.3			「く」字状口縁をもつ甕と思われる。端部は面をもつ。外面口縁部ヨコナデ。端部ハケ状工具によるナデ。頸部以下ハケ目。内面ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1㎜前後の石英を多く含む。）	良好	赤褐色	赤褐色		S-20
鷲谷口地区土器溜り	Po227	34		113		弥生土器	甕？	※14.4	△3.8			端部が肥厚する鈍い「く」字状口縁をもつ甕と思われる。外面口縁部ヨコナデ。端部ミガキ。内面ナデ。	密（3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色	褐灰色		S-37
鷲谷口地区土器溜り	Po228	34		80		土師器	甕	※21.8	△4.5			大きく外反する「く」字状口縁をもつ。端部がやや内方へ肥厚する。内外面ともヨコナデか。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FN-36
鷲谷口地区土器溜り	Po229	34	33	55		弥生土器	甕		△5.0			甕胴部と考えられる。外面4条1単位の平行沈線が二段に施される。その間に円形連続スタンプ文が施される。内面左方向ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄褐色～褐灰色	鈍い黄褐色	外面黒斑あり	FN-38
鷲谷口地区土器溜り	Po230	34	33	119・176		弥生土器	底部		△13.5		※11.4	大型で、しっかりとした平底を呈す。外面斜方向ハケ目。内面ケズリ。	やや粗（1～3㎜程度の砂粒を多量に含む。）	良好	橙色	淡橙色～赤橙色	外面黒斑あり	FN-1
鷲谷口地区土器溜り	Po231	34	33	138		弥生土器	底部		△4.2		7.8	大きくしっかりとした平底を呈す。外面縦方向ハケ目。内面ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡明褐色	淡明赤褐色	内外面黒斑あり	I-5
鷲谷口地区土器溜り	Po232	34		72・155		弥生土器	底部		△7.0		※7.0	しっかりとした平底を呈す。内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	赤褐色	外面スス付着	FN-12
鷲谷口地区土器溜り	Po233	34	33	182		弥生土器	底部		△3.0		※5.6	やや上げ底気味の底部。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	灰褐色	外面黒斑あり	I-23
鷲谷口地区土器溜り	Po234	34		128		弥生土器	底部		△3.2		4.1	しっかりとした平底を呈す。内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-11
鷲谷口地区土器溜り	Po235	34		100		弥生土器	底部		△5.2		※5.2	しっかりとした平底を呈す底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黒褐色	灰黄褐色	外面スス付着	YH-9
鷲谷口地区土器溜り	Po236	34		146		弥生土器	底部		△4.2		※5.0	しっかりとした平底を呈す底部。外面縦方向ハケ目。内面ケズリ後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡灰褐色	灰褐色	外面スス付着	I-6
鷲谷口地区土器溜り	Po237	34		63		弥生土器	底部		△2.0		※5.8	しっかりとした平底を呈す。外面ナデ。内面上方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰色	褐灰色	外面スス付着	FN-59
鷲谷口地区土器溜り	Po238	34	33	1・46		弥生土器	底部		△5.8		※7.8	やや「ハ」字状に開き、上げ底気味の底部。内外面ともに風化著しい。外面ナデか。	密（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色～淡橙褐色	橙色～淡橙褐色		FN-16
鷲谷口地区土器溜り	Po239	34	33	152・250		弥生土器	底部		△3.2		※4.0	小さくしっかりとした平底を呈す。外面縦方向ハケ目。内面ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	不良	暗赤褐色	灰白色～鈍い黄橙色	外面スス付着	S-3
鷲谷口地区土器溜り	Po240	34		53		弥生土器	底部		△3.5		6.0	しっかりとした平底を呈す。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-24

挿表24　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(9)

鷲谷口地区土器溜り	Po241	34		61		弥生土器	底部		△2.2		※3.4	小さくしっかりとした平底を呈す。外面横方向ハケ目？。内面指頭圧痕残る。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色～鈍い黄橙色	褐灰色～鈍い黄橙色		KY-7
鷲谷口地区土器溜り	Po242	34		128		弥生土器	底部		△3.1		※6.0	不明瞭な平底を呈す。外面不整方向ハケ目。内面調整不明。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	橙色		YH-16
鷲谷口地区土器溜り	Po243	34		184		弥生土器	高杯	※14.8	△3.1			湾曲した底部から屈曲内傾する口縁部をもつ高杯と思われる。外面口縁部2条の凹線。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色		FN-30
鷲谷口地区土器溜り	Po244	34	34	12・74		弥生土器	高杯	※22.4	△4.8			湾曲した底部から屈曲外反する口縁部をもつ。外面ヨコナデ。内面横方向ミガキ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	内面スス付着	YH-1
鷲谷口地区土器溜り	Po245	34	34	85		弥生土器	高杯	※16.8	△7.3			深い椀状の杯部をもつ。端部は外反する。外面ハケ目後ヨコナデ。内面横方向ハケ目。	密（1㎜前後の砂粒を含む。）	良好	淡灰褐色～淡赤褐色	明褐色～灰褐色		I-26
鷲谷口地区土器溜り	Po246	34		183		土師器	高杯	※18.7	△5.1			浅い椀状を呈す高杯杯部。端部は大きく外反する。外面横方向ミガキ。内面ナデか。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡赤褐色～赤褐色	淡赤褐色	内面黒斑あり	I-2
鷲谷口地区土器溜り	Po247	34		67		土師器	高杯	※17.7	△4.9			浅い椀状を呈す高杯杯部。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色～淡明褐色	淡褐色		I-16
鷲谷口地区土器溜り	Po248	34		144		弥生土器	高杯	※16.4	△3.7			湾曲した底部から屈曲外反する口縁部をもつ。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	褐灰色		FN-29
鷲谷口地区土器溜り	Po249	34		125		弥生土器	高杯		△11.2			高く細い高杯筒部。外面縦方向ミガキ。内面ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		S-7
鷲谷口地区土器溜り	Po250	34		166		弥生土器	高杯		△4.7		※12.5	緩やかに「ハ」字状に開く高杯脚部。端部は直立する。外面縦方向ミガキ。内面風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡赤褐色		I-18
鷲谷口地区土器溜り	Po251	34	34	62・81		弥生土器	鼓形器台	21.4	△6.3			短く外傾する複合口縁状を呈す鼓形器台上台部。内外面ともに風化著しい。	やや粗（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色～赤橙色		FN-3
鷲谷口地区土器溜り	Po252	34	34	72		弥生土器	鼓形器台		△6.3		※16.0	高く外反して開く鼓形器台脚台部。内外面とも風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		KY-2
鷲谷口地区土器溜り	Po253	35	34	122		弥生土器	鼓形器台	※18.7	△15.1			大きく外反する複合口縁状を呈す鼓形器台上台部～高い筒部。外面上台部多条化した平行沈線。筒部縦方向ミガキ。内面上台部横方向ミガキ。筒部ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色～灰褐色	淡褐色～灰褐色	外面黒斑あり	I-1
鷲谷口地区土器溜り	Po254	35	34	155		弥生土器	鼓形器台		△8.0		※11.5	高い筒部に、「ハ」字状に開く複合口縁状の裾部をもつ鼓形器台脚台部。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡橙褐色	淡橙褐色		FN-17
鷲谷口地区土器溜り	Po255	35		92・131		弥生土器	鼓形器台		△7.0		※18.6	大きく「ハ」字状に開く複合口縁状の鼓形器台脚台部。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡橙色～褐色	淡橙色		FN-9
鷲谷口地区土器溜り	Po256	35		84		土師器	鼓形器台		△5.6		※20.2	低く外反して開く鼓形器台脚台部。外面ヨコナデ。内面ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	暗灰褐色	黒褐色		I-11
鷲谷口地区土器溜り	Po257	35	34	69・168		弥生土器	蓋		△5.8		※12.2	大きく中くぼみのつまみをもつ。体部は内湾気味に大きく開く。端部は肥厚する。外面つまみナデ。体部ハケ目。内面つまみナデ。体部ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡褐色	淡褐色～褐色	外面黒斑あり	I-7
鷲谷口地区土器溜り	Po258	35	34	252		弥生土器	蓋？		△4.8		※10.5	大きく「ハ」字状に開く蓋と思われる。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-10
鷲谷口地区土器溜り	Po259	35		130		土師器	低脚杯		△3.9		※6.1	椀状のやや深い杯部、小さく「ハ」字状に開く脚部をもつ。内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗（1㎜以下の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FN-20
鷲谷口地区土器溜り	Po260	35		137		土師器	低脚杯		△1.8		4.6	小さく「ハ」字状に開く低脚杯脚部。内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	淡黄色	内面黒斑あり	FN-14
鷲谷口地区土器溜り	Po261	35	34	173・195		弥生土器	甕		△10.6			円筒状の体部に、大型で断面円形の把手が上向きに付く。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	やや粗（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面黒斑あり	FN-41
鷲谷口地区土器溜り	Po262	35		83・87		弥生土器	甕		△14.1			円筒状の体部をもつ。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色	外面黒斑あり	FN-198
鷲谷口地区土器溜り	Po263	35	34	78		弥生土器	甕		△7.7			円筒状の体部をもち、低いタガ状の突帯がつく。外面縦方向ハケ目。内面ケズリ後ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰色	黄褐色～灰色	外面黒斑あり	FN-197
鷲谷口地区土器溜り	Po264	35	35	30		波佐見焼	椀	※10.4	5.5		4.5	体部は深く、高台をもつ。全面に施釉。外面手描きによる染め付け文。底面印あり。	密	良好	明緑灰色	明緑灰色		KM-1
鷲谷奥地区土器溜り	Po265	78	40	840	埋土中	弥生土器	壺	※13.4	△6.1			短く内傾する口縁部をもつ。外面口縁部擬凹線。頸部縦方向ハケ目後凹線。内面ヨコナデ。	密（1～4㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		FN-106
鷲谷奥地区土器溜り	Po266	78	40	840	埋土中	弥生土器	壺	※14.4	△4.4			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部擬凹線。頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-107
鷲谷奥地区土器溜り	Po267	78	40	840	埋土中	弥生土器	壺	※17.5	△4.0			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部3条の擬凹線。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-150
鷲谷奥地区土器溜り	Po268	78	40	888	埋土中	弥生土器	壺	※11.7	△12.1			大きくラッパ状に開く「く」字状口縁をもつ。外面風化のため調整不明。頸部刺突文あり。内面口縁部風化のため調整不明。肩部以下ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色		FN-102

挿表25　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表⑩

鷲谷奥地区土器溜り	Po269	78		871	埋土中	弥生土器	壺	※13.0	△6.6			大きく開く「く」字状口縁をもつ。外面ナデか。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	橙色		FN-141
鷲谷奥地区土器溜り	Po270	78	40	868	埋土中	弥生土器	壺	※14.2	△9.5			「く」字状口縁をもつ。外面横方向細かいミガキ。内面口縁部ナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色	内外面黒斑あり	FN-101
鷲谷奥地区土器溜り	Po271	78	40	875・880	埋土中	弥生土器	甕	※46.0	△39.8	※48.0		外傾する複合口縁をもつ非常に大型の甕。胴部は倒卵形を呈す。外面口縁部多条化した平行沈線。胴部縦～斜方向ハケ目後ミガキ。内面口縁部横方向ミガキ。頸部屈曲部以下ケズリ後粗いミガキ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	明褐色～明赤褐色	明赤褐色	胴部外面スス付着。内外面に黒斑あり	I-70
鷲谷奥地区土器溜り	Po272	78	41	886・888	埋土中	弥生土器	甕	※19.8	△8.0			外傾する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。肩部波状文。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰黄色	灰黄色	外面スス付着	FN-132
鷲谷奥地区土器溜り	Po273	78	41	875・880	埋土中	弥生土器	甕	※21.2	△7.5			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡黄色～褐色	淡黄色～褐色	口縁部外面黒斑あり	FN-134
鷲谷奥地区土器溜り	Po274	78	41	872	埋土中	弥生土器	甕	※23.5	△5.0			外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-139
鷲谷奥地区土器溜り	Po275	78	41	888	埋土中	弥生土器	甕	※17.6	△7.2			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。肩部波状文。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-135
鷲谷奥地区土器溜り	Po276	78	41	883	埋土中	弥生土器	甕	※16.4	△4.9			大きく外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡黄色～灰褐色	淡黄色～灰褐色	口縁部外面スス付着	FN-138
鷲谷奥地区土器溜り	Po277	78		885	埋土中	弥生土器	甕	※16.4	△4.9			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	不良	明黄褐色	明黄褐色	外面スス付着	FN-142
鷲谷奥地区土器溜り	Po278	78	41	840	埋土中	弥生土器	甕	※15.6	△4.7			やや内傾する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～4㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-137
鷲谷奥地区土器溜り	Po279	77	41	840	埋土中	弥生土器	甕	※28.9	△6.7			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線後一部ナデ消し。内面口縁部ヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-140
鷲谷奥地区土器溜り	Po280	77		877	埋土中	弥生土器	甕	※17.8	△3.8			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部風化のため調整不明。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～4㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰褐色～黄橙色	灰褐色～黄橙色		FN-146
鷲谷奥地区土器溜り	Po281	77	41	840	埋土中	弥生土器	甕	※20.6	△4.7			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	暗褐色	暗褐色	外面スス付着	FN-149
鷲谷奥地区土器溜り	Po282	77	41	840	埋土中	弥生土器	甕	※22.8	△4.2			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部5条の平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄褐色	黄褐色	外面スス付着	FN-148
鷲谷奥地区土器溜り	Po283	77		844	埋土中	弥生土器	甕	※17.3	△4.9			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部横方向細かいミガキ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	外面黒斑あり	FN-144
鷲谷奥地区土器溜り	Po284	77	41	844・867 874	埋土中	弥生土器	甕	※18.6	△4.5			外傾する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰黄色	灰黄色	外面スス付着	FN-133
鷲谷奥地区土器溜り	Po285	77		844	埋土中	弥生土器	甕	※13.3	△2.3			短く外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。内外面ともに丁寧なナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	灰褐色		FN-159
鷲谷奥地区土器溜り	Po286	77	41	873	埋土中	弥生土器	甕		△6.1			大きく張る肩部をもつ。外面横方向ハケ目後ミガキ。肩部二段にわたり刺突文。内面風化のため調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	暗褐色～橙色	外面スス付着	FN-162
鷲谷奥地区土器溜り	Po287	77		874・890	埋土中	弥生土器	甕		△8.0			大きく張る肩部をもつ。外面ハケ目後ミガキ。内面頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰黄褐色～鈍い黄橙色	灰黄褐色～鈍い黄橙色	外面スス付着	FN-151
鷲谷奥地区土器溜り	Po288	77	41	884	埋土中	弥生土器	底部		△6.1		※4.5	やや上げ底の小さな底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	鈍い橙色	外面スス付着	FN-156
鷲谷奥地区土器溜り	Po289	77	41	840	埋土中	弥生土器	底部		△4.6		※8.8	しっかりとした平底を呈す底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-164
鷲谷奥地区土器溜り	Po290	77		844	埋土中	弥生土器	底部		△3.4		※7.0	しっかりとした底部。内外面ともに風化のため調整不明。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	外面黒斑あり	FN-152
鷲谷奥地区土器溜り	Po291	77	41	888	埋土中	弥生土器	底部		△2.8		3.5	やや上げ底の小さな底部。外面ナデか。内面ケズリ後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐色	褐色	内外面スス付着	FN-153
鷲谷奥地区土器溜り	Po292	77		844	埋土中	弥生土器	底部		△3.6		※5.5	しっかりとした底部。外面ナデか。内面ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	赤褐色	赤褐色	外面スス付着	FN-154
鷲谷奥地区土器溜り	Po293	77		840	埋土中	弥生土器	底部		△2.7		※3.8	上げ底の小さな底部。外面ナデ。内面上方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	外面スス付着	FN-168
鷲谷奥地区土器溜り	Po294	77	41	840	埋土中	弥生土器	底部		△3.1		※4.0	やや上げ底の底部。外面縦方向ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～5㎜大の砂粒を含む。）	良好	褐色	橙色	外面スス付着	FN-170

挿表26　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(11)

鷲谷奥地区土器溜り	Po295	77	42	889	埋土中	弥生土器	鼓形器台	※15.7	△3.9			ほぼ直立する複合口縁状を呈す鼓形器台上台部。外面口縁部擬凹線。内面ヨコナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-145
鷲谷奥地区土器溜り	Po296	77		879	埋土中	弥生土器	鼓形器台	※19.5	△6.4			大きく外反する複合口縁状を呈す鼓形器台上台部。内外面ともに調整不明。	粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色		FN-157
鷲谷奥地区土器溜り	Po297	77	42	840	埋土中	弥生土器	鼓形器台		△5.5		※17.2	低く複合口縁状に開く鼓形器台脚台部。外面3条の擬凹線。筒部縦方向ハケ目後ナデ。内面端部ナデ。筒部ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-110
鷲谷奥地区土器溜り	Po298	77		876	埋土中	弥生土器	鼓形器台		△8.8		△12.8	高い筒部に、低い脚台部をもつ。内外面ともに風化著しい。外面筒部3条1単位の沈線が3段にわたって施される。	やや粗（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-161
鷲谷奥地区土器溜り	Po299	77	41	844	埋土中	弥生土器	把手	幅1.8	厚さ1.0			断面長方形を呈す把手。手捏ね成形後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好		灰黄褐色		FN-172
鷲谷奥地区土器溜り	Po300	77	41	840	埋土中	弥生土器	把手	幅1.5	厚さ1.4			断面方形を呈す把手。手捏ね成形後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好		橙色		FN-171
鷲谷口地区遺構外	Po301	36	35	270		弥生土器	甕	※21.6	△3.3			やや外反する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-3
鷲谷口地区遺構外	Po302	36	35	276		弥生土器	甕	※17.4	△3.5			短くやや外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部乱れた平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	灰褐色	外面スス付着	FN-48
鷲谷口地区遺構外	Po303	36	35	58		弥生土器	甕	※16.6	△5.8			やや外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は引き出される。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-5
鷲谷口地区遺構外	Po304	36	35	267		弥生土器	甕	※14.2	△2.5			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部沈線。内面口縁部ヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色		FK-4
鷲谷口地区遺構外	Po305	36		56		弥生土器	底部		△4.7		※9.4	大きくしっかりした平底を呈す底部。外面ハケ目後ミガキ。内面上方向ケズリ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面黒斑、スス付着	FK-6
鷲谷口地区遺構外	Po306	36	35	56		弥生土器	鼓形器台	※18.0	△4.3			大きく外傾する複合口縁状を呈す鼓形器台上台部。外面多条化した平行沈線。内面ミガキ。	密（2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-2
鷲谷口地区遺構外	Po307	36	35	265		須恵器	壺		△4.5	※9.8		偏球形を呈す壺胴部と思われる。外面肩部1条の凹線。下半回転ケズリ。内面回転ナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰色	青灰色		FN-201
鷲谷口地区遺構外	Po308	36		8		土師質土器	皿	※14.8	△1.9			浅く偏平な皿。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	内面黒斑あり	FN-42
鷲谷口地区遺構外	Po309	36		24		土師質土器	皿	※8.9	△2.2			やや深く小型の皿。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	内面黒斑あり	FN-43
鷲谷口地区遺構外	Po310	36		12		土師質土器	皿	※7.4	△2.1			やや深く小型の皿。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面黒斑あり	FN-44
鷲谷奥地区A区遺構外	Po311	71	39	465		弥生土器	壺	※11.3	△4.4			短く立ち上がる直口壺。外面風化のため調整不明。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色		FN-51
鷲谷奥地区A区遺構外	Po312	71	39	487		弥生土器	甕	※24.0	△3.8			短く外傾する複合口縁をもつ。内外面とも風化著しい。外面口縁部擬凹線か。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FN-49
鷲谷奥地区A区遺構外	Po313	71	39	600		弥生土器	甕	※17.9	△8.0			短く外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部4条の平行沈線。肩部刺突文。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	胴部外面スス付着	FN-65
鷲谷奥地区A区遺構外	Po314	71	39	462		弥生土器	甕	※19.8	△5.5			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線後一部ナデ消し。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色	外面スス付着	FN-45
鷲谷奥地区A区遺構外	Po315	71	39	465		弥生土器	甕	※18.7	△5.6			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	外面スス付着	FN-52
鷲谷奥地区A区遺構外	Po316	71		331		弥生土器	甕	※17.3	△3.2			端部が肥厚する「く」字状口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	赤茶色	赤茶色		FN-54
鷲谷奥地区A区遺構外	Po317	71	39	463		弥生土器	甕	※15.0	16.6		4.4	短く外反する鈍い複合口縁をもつ。胴部卵形を呈し、しっかりとした平底をもつ。外面口縁部ヨコナデ。胴部縦方向細かいハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。多条化した平行沈線後一部ナデ消し。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色	褐灰色	胴部外面黒斑あり	FN-46
鷲谷奥地区A区遺構外	Po318	71	39	465		弥生土器	蓋		△4.5		※8.4	端部に段をもつ「ハ」字状に開く蓋。つまみは中くぼみ。内外面ともに風化著しい。外面ナデか。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色		FN-15
鷲谷奥地区A区遺構外	Po319	71	39	455		土師器	低脚杯		△2.1		※6.2	低く大きく広がる低脚杯脚部。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色～明黄褐色	橙色～明黄褐色		FK-30

挿表27　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表⑫

鷲谷奥地区A区遺構外	Po320	71	39	467		弥生土器	甑		△14.2			円筒状を呈す甑。体部に平行する半環状の把手をもつ。外面風化のため調整不明。内面ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色～明黄褐色	褐灰色～明黄褐色		FN-57
鷲谷奥地区A区遺構外	Po321	71		447		須恵器	壺		△14.6			大きく肩が張る壺胴部。外面肩部カキ目。胴部中央平行叩き。内面肩部回転ナデ。胴部中央粘土つなぎ残る。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰色～鈍い黄褐色	灰色～鈍い黄褐色		FN-200
鷲谷奥地区B区遺構外	Po322	80	42	837		弥生土器	壺	※15.6	△5.9			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	橙色		FN-87
鷲谷奥地区B区遺構外	Po323	80	42	488		弥生土器	壺	※12.5	△3.2			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FN-56
鷲谷奥地区B区遺構外	Po324	80		839・840		弥生土器	壺	※16.8	△7.8			大きくラッパ状に開く「く」字状口縁をもつ。端部がやや肥厚する。外面口縁部～頸部ヨコナデ。肩部縦方向細かいハケ目。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	淡橙色		FN-103
鷲谷奥地区B区遺構外	Po325	80		842		弥生土器	壺	※12.4	△5.7			外反する「く」字状口縁をもつ。外面口縁部～頸部ヨコナデ。肩部縦方向ハケ目。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-105
鷲谷奥地区B区遺構外	Po326	80		806		弥生土器	壺	※12.7	△6.4			外反する「く」字状口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部～頸部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-85
鷲谷奥地区B区遺構外	Po327	80		804		弥生土器	甕	※21.8	△3.7			短くやや内傾する複合口縁をもつ。外面口縁部2条の擬凹線。内面ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-125
鷲谷奥地区B区遺構外	Po328	80	42	835		弥生土器	甕	※20.6	△3.7			短く直立する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-118
鷲谷奥地区B区遺構外	Po329	80		799		弥生土器	甕	※27.0	△5.0			内傾する複合口縁をもつ。外面口縁部3条の平行沈線。胴部縦方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い褐色	鈍い褐色		FN-119
鷲谷奥地区B区遺構外	Po330	80		800		弥生土器	甕	※26.6	△6.3			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-91
鷲谷奥地区B区遺構外	Po331	80	42	808・813 840		弥生土器	甕	※21.3	△6.8			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下右方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄褐色	灰褐色～鈍い黄褐色	外面スス付着。外面黒斑あり	FN-83
鷲谷奥地区B区遺構外	Po332	80		821		弥生土器	甕	※22.6	△4.6			外傾する複合口縁をもつ。口縁部下端は下垂する。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色	褐灰色		FN-86
鷲谷奥地区B区遺構外	Po333	80		800		弥生土器	甕	※22.7	△5.3			外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部多条化した平行沈線。内面口縁部横方向ミガキ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	明黄褐色	外面黒斑あり	FN-123
鷲谷奥地区B区遺構外	Po334	80		827		弥生土器	甕	※20.6	△6.3			ほぼ直立する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	鈍い橙色	鈍い橙色	外面スス付着	FN-88
鷲谷奥地区B区遺構外	Po335	80		785		弥生土器	甕	※17.6	△5.6			やや外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	鈍い黄褐色	外面黒斑あり	FN-122
鷲谷奥地区B区遺構外	Po336	80		795		弥生土器	甕	※17.2	△4.7			やや内湾する複合口縁をもつ。外面口縁部乱れた平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面赤色塗彩痕	FN-126
鷲谷奥地区B区遺構外	Po337	80		832		弥生土器	甕	※18.0	△5.0			やや外傾する鈍い複合口縁をもつ。風化著しい。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-120
鷲谷奥地区B区遺構外	Po338	80		819		弥生土器	甕	※14.3	△4.9			外反する複合口縁をもつ。口縁部下端はわずかに下垂する。外面口縁部平行沈線後一部ナデ消し。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色	外面スス付着	FN-113
鷲谷奥地区B区遺構外	Po339	80	42	781		弥生土器	甕	※17.4	△4.8			やや外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線後一部ナデ消し。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色～灰黄褐色	明黄褐色～灰黄褐色	外面スス付着	FN-116
鷲谷奥地区B区遺構外	Po340	80		830		弥生土器	甕	※16.4	△3.6			やや外傾する複合口縁をもつ。風化著しい。外面口縁部平行沈線か。内面風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黒褐色～鈍い黄褐色	鈍い黄褐色		FN-121
鷲谷奥地区B区遺構外	Po341	80		780		弥生土器	甕	※16.8	△4.3			ほぼ直立する複合口縁をもつ。外面風化著しい。口縁部平行沈線。内面口縁部丁寧なナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	淡黄色	外面スス付着	FN-111

挿表28　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(13)

鷲谷奥地区B区遺構外	Po342	80	42	774		弥生土器	甕	※12.0	12.0	12.2	2.5	短く外傾する複合口縁をもつ。胴部は倒卵形を呈し、小さな尖り気味の平底をもつ。外面口縁部平行沈線。胴部調整不明。内面口縁部ナデ。胴部ケズリ後ナデ。	やや粗（1～3㎜大の砂粒を含む。）	やや不良	黄褐色	赤褐色～褐色	外面スス付着	FN-195
鷲谷奥地区B区遺構外	Po343	80		819		弥生土器	甕	※20.4	△5.8			ほぼ直立する複合口縁をもつ。外面風化のため調整不明。内面口縁部丁寧なミガキ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色	外面スス付着	FN-114
鷲谷奥地区B区遺構外	Po344	80		832		弥生土器	甕	※12.7	△3.5			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-124
鷲谷奥地区B区遺構外	Po345	80	42	805		弥生土器	甕	※16.6	△4.9			やや内湾気味に外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部屈曲部以下ケズリ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-117
鷲谷奥地区B区遺構外	Po346	80		822		弥生土器	甕	※17.8	△4.0			やや外反する複合口縁をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-112
鷲谷奥地区B区遺構外	Po347	81	42	794		土師器	甕	※21.6	△5.1			大きく外反する複合口縁をもつ。口縁部下端は鋭く突出する。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-115
鷲谷奥地区B区遺構外	Po348	81	42	800		弥生土器	甕	※12.8	△8.9			大きく外傾する「く」字状口縁をもつ。外面口縁部ハケ状工具によるヨコナデ。肩部横方向ミガキ。内面口縁部ハケ状工具によるヨコナデ。頸部屈曲部以下左方向ケズリ。	密（1～6㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	外面スス付着	FN-104
鷲谷奥地区B区遺構外	Po349	81		795・796		弥生土器	底部		△6.5		※6.9	しっかりとしたやや上げ底の平底をもつ。外面ナデ。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	橙色	外面スス付着	FN-165
鷲谷奥地区B区遺構外	Po350	81		775		弥生土器	底部		△6.8		※4.2	しっかりとした小さな平底をもつ。外面縦方向細かいハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰褐色	明黄褐色	外面スス付着	FN-155
鷲谷奥地区B区遺構外	Po351	81		796		弥生土器	底部		△3.4		※6.9	しっかりとした平底をもつ。外面縦方向ハケ目。底部ハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡橙色	灰褐色～淡橙色		FN-99
鷲谷奥地区B区遺構外	Po352	81		843		弥生土器	底部		△3.4		※5.2	しっかりとした平底をもつ。内外面ともに風化のため調整不明。	やや粗（1～4㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐色	褐色		FN-166
鷲谷奥地区B区遺構外	Po353	81		815		弥生土器	底部		△2.8		※4.0	丸味をもった平底をもつ。外面縦方向細かいハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙色	外面黒斑あり	FN-89
鷲谷奥地区B区遺構外	Po354	81		799		弥生土器	底部		△3.6		※5.2	しっかりとした平底をもつ。外面縦方向細かいハケ目。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	淡黄色～橙色		FN-100
鷲谷奥地区B区遺構外	Po355	81		849		弥生土器	底部		△3.1		※6.3	しっかりとした平底をもつ。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	褐色	外面スス付着	FN-163
鷲谷奥地区B区遺構外	Po356	81		810		弥生土器	底部		△2.6		※6.8	しっかりとした平底をもつ。外面ナデ。内面上方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙色		FN-90
鷲谷奥地区B区遺構外	Po357	81		842		土師器	杯底部		△1.3		※6.3	しっかりとした平底をもつ。外面ナデ。底部糸切痕あり。内面ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		FN-169
鷲谷奥地区B区遺構外	Po358	81		797		弥生土器	注口土器	長さ△6.0	径2.7			筒状の注口。外面ヨコナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰黄色	灰黄色	外面スス付着	FN-129
鷲谷奥地区B区遺構外	Po359	81	42	450		弥生土器	特殊壺		△3.1	※17.4		玉ねぎ形の特殊壺胴部。胴部中央に2条の突帯をもつ。外面肩部・突帯間に爪形スタンプ文。突帯下部に三重圏スタンプ文。内面左方向ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	淡黄色		FN-79
鷲谷奥地区B区遺構外	Po360	81	42	773・840		弥生土器	高杯		△11.7			浅い湾状の底部から屈曲外反する口縁部をもつ高杯杯部。端部を欠く。筒部は太い。外面杯部ヨコナデ。筒部縦方向ミガキ。内面杯部調整不明。筒部ケズリ。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-108
鷲谷奥地区B区遺構外	Po361	81		839		弥生土器	高杯	※27.4	△4.2			浅い湾状の底部から屈曲外反する口縁部をもつ高杯杯部。内外面とも横方向ミガキ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-92
鷲谷奥地区B区遺構外	Po362	81		471		弥生土器	高杯		△3.4		※13.7	大きく「ハ」字状に開く高杯裾部と思われる。外面ナデ。内面横方向ハケ目。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	褐灰色	鈍い黄橙色		FN-55
鷲谷奥地区B区遺構外	Po363	81		798		弥生土器	鼓形器台		△5.5		※17.2	複合口縁状に発達した鼓形器台脚台部。外面多条化した平行沈線。内面右方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-82
鷲谷奥地区B区遺構外	Po364	81		798・840 844		弥生土器	鼓形器台		△8.0		※17.2	複合口縁状を呈す鼓形器台上台部～筒部。外面上台部平行沈線。筒部縦方向粗いハケ目。円孔あり。内面上台部ナデ。筒部ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-109
鷲谷奥地区B区遺構外	Po365	81		779		弥生土器	鼓形器台		△7.3			高い筒部をもつ鼓形器台。内外面ともに風化著しい。外面3条1単位の沈線が2段認められる。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FN-131

挿表29　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表⑭

鷲谷奥地区B区遺構外	Po366	81	42	831		弥生土器	脚付椀	※16.6	△7.7			大型の椀状を呈す杯部に、脚が接続する。外面丁寧なナデ。内面杯部丁寧なナデ。一部横方向ミガキ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	外面スス付着	FN-80
鷲谷奥地区B区遺構外	Po367	81		823		弥生土器	低脚杯？		△3.6			深い「ハ」字状に開く低脚杯杯部と思われる。外面ヨコナデ。内面杯部ヨコナデ。底部円盤充塡。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FN-128
鷲谷奥地区B区遺構外	Po368	81	42	821		弥生土器	蓋		4.7		※11.3	大きく「ハ」字状に開く蓋。つまみは中くぼみする。内外面ともにヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		FN-81
S I 11	Po369	84	43	2170	床面	土師器	甕	※14.2	14.6	18.3		やや外傾する複合口縁をもつ。胴部は玉ねぎ形を呈す。外面風化のため調整不明。内面口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ後ナデ。	やや粗（1㎜以下の砂粒を多く含む。）	やや不良	黄橙色	黄橙色		FK-132
S I 11	Po370	84	43	2085	埋土中	土師器	甕	※39.8	△7.4			大型で外傾する複合口縁をもつ。外面ナデ。内面風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	にぶい黄橙色		FK-121
S I 11	Po371	84		2077	埋土中	土師器	把手					甑の把手と考えられる。手捏ね成形。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好		浅黄橙色		FK-122
S I 12	Po372	85		2102 2120	埋土中	弥生土器	甑	※41	△10			甑口縁部。外面ナデ。内面ケズリ。	密（1～3㎜の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	にぶい黄橙色		FK-125
S I 12	Po373	85	43	2148	埋土中	弥生土器	低脚杯		△2.1		※5.8	低脚杯脚部。外面ヨコナデ。内面ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-127
S I 12	Po374	85		2113	埋土中	弥生土器	低脚杯		△2.7			低脚杯脚部。外面ヨコナデ。内面ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい橙色	浅黄橙色		FK-128
S I 12	Po375	85		2115	埋土中	弥生土器	脚部		△2.7		※12.2	脚部破片。内外面ともに風化のため調整不明。	密（1～2㎜の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-126
S I 13	Po376	86		2230	床面	弥生土器	底部		△2.3		※3.6	わずかに平底をもつ。内外面ともヨコナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	黄橙色		FK-129
S I 14	Po377	129	48	2237	床面	弥生土器	甕	※	△			短く直立する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	褐灰色		FK-134
S I 14	Po378	129	48	2241	床面	弥生土器	甕	※11.6	△5.1			短く外傾する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	黄橙色	褐色	外面スス付着	FK-131
S I 14	Po379	129	48	2210	埋土中	弥生土器	甕	※14.8	△3.8			外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FK-175
S I 14	Po380	129	49	2208	床面	弥生土器	甕	※16.8	△9.0			外傾する複合口縁をもつ。肩部はなだらか。外面口縁部ナデ。肩部貝殻腹縁による刺突文。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗	やや不良	黄橙色	黄橙色		FK-174
S I 14	Po381	129		2236	埋土中	弥生土器	蓋		△2.7		※16.4	「ハ」字状に開く蓋。外面縦ハケ目。内面ケズリ後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙～黄橙色	橙～黄橙色	内面スス付着	FK-130
S I 15	Po382	89	43	2251 2253	埋土中	土師器	甕	※12.6	△10.2			外傾する複合口縁をもつ。胴部は球形。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		FK-150
S I 15	Po383	89	43	2269	埋土中	土師器	甕	※16.4	△5.2			外傾する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		FK-147
S I 15	Po384	89	43	2253 2269	埋土中	土師器	甕	※15.8	△4.7			外傾する複合口縁をもつ。外面ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	黄橙色		FK-149
S I 15	Po385	89	43	2058 2255	埋土中	土師器	高杯		△9.3		※14.2	高い筒部に大きく開く裾部をもつ。外面筒部縦方向ミガキ。裾部ナデ。内面筒部ナデ。裾部ハケ目。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-148
S I 16	Po386	130	49	2327	埋土中	弥生土器	把手付短頸壺	※7.6	△4.8			コップ状を呈す把手付短頸壺。内外面ともヨコナデ。把手剝離。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-168
S I 16	Po387	130		2327	埋土中	須恵器	杯蓋	※15.8	△1.4			天井部が低く、端部が下方へ折れる。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	灰白色	灰白色		FK-169
S B02	Po388	143	50	2309	P13内	土師質土器	皿	9.8	1.8		※6.0	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-153
S B02	Po389	143	50	2307	P13内	土師質土器	皿		△1.6		5.6	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-151
S B02	Po390	143	50	2308	P13内	土師質土器	皿		△1.4		5.1	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	黄橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-152
S B02	Po391	143	50	2312	P14内	土師質土器	皿	※9.7	2.5		5.8	やや深く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-156
S B02	Po392	143	50	2317	P14内	土師質土器	皿		△2.2		5.9	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-155
S B02	Po393	143	50	2311	P14内	土師質土器	皿		△1.7		4.6	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	黄橙色		FK-154
S B02	Po394	143	50	2313	P14内	土師質土器	皿		△1.4		5.0	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-157
S B02	Po395	143	50	2314	P14内	土師質土器	皿		△1.4		6.0	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-158
S B02	Po396	143	50	2315	P14内	土師質土器	皿		△2.0		5.2	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-159

挿表30　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(15)

ＳＢ02	Po397	143	50	2316	Ｐ14内	土師質土器	皿		△1.6		5.7	低く、大きく広がる口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-160
ＳＢ02	Po398	143		2299	底面	土器	羽釜		△5.0			タガ状の突帯をもつ。内外面ともナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰色	灰色	外面スス付着	FK-161
ＳＫ10	Po399	99		2010	床面	土師質土器	皿	※15.0	△2.3			低く、口縁部大きく開く。内外面ともヨコナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		FK-117
ＳＫ10	Po400	99	44	2009	床面	土師質土器	皿	9.6	1.9			低く、口縁部大きく開く。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		FK-115
ＳＫ10	Po401	99		2010	床面	土師質土器	皿	※10.8	△1.7			低く、口縁部大きく開く。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		FK-116
ＳＫ20	Po402	120	47	2045	埋土中	土師質土器	皿	15.7	2.5			低く、口縁部大きく開く。外面ヨコナデ。内面口縁部ハケ目後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい橙色	にぶい橙色		FK-119
ＳＫ20	Po403	120	47	2054	床面	土師質土器	皿	9.4	1.7			低く、口縁部大きく開く。内外面とも風化著しい。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-135
ＳＫ21	Po404	122	48	2058	埋土中	土師質土器	皿	13.2	2.1			低く、口縁部大きく開く。内外面ともヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい橙色	にぶい橙色		FK-120
ＳＫ22	Po405	91	43	2141	埋土中	弥生土器	壺		△6.0			外反気味の複合口縁をもつ。外面風化のため調整不明。ハケ目認められる。内面ヨコナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	明黄褐色		FK-138
ＳＫ22	Po406	91	43	2164	埋土中	弥生土器	胴部		△18.6		※6.0	大型の胴部破片。わずかに平底を呈す。内外面ともに風化著しい。外面ハケ目認められる。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	にぶい橙色	橙色		FK-133
ＳＫ24	Po407	95	44	2247	埋土中	弥生土器	甕	※17.6	△6.1			外反する複合口縁をもつ。外面ナデ。内面口縁部ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	浅黄橙色	口縁部外面黒斑あり	FK-146
ＳＫ24	Po408	95	44	2261	埋土中	弥生土器	低脚杯	※12.2	5.2		5.6	深く「ハ」字状に広がる杯部、低い脚部をもつ。内外面ともナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-137
ＳＫ24	Po409	95	44	2242	埋土中	弥生土器	低脚杯		△2.5		6.6	「ハ」字状に広がる低脚杯脚部。外面ナデ。内面ヨコナデ。	やや粗（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-136
ＳＫ25	Po410	135	49	2249 2262	埋土中	土師質土器	皿	13.8	3.3		6.1	やや深く外傾する体部をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-144
ＳＫ25	Po411	135	49	2263	埋土中	土師質土器	皿	7.9	1.3		4.9	小型でやや内湾する体部をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	底部回転糸切り痕	FK-140
ＳＫ25	Po412	135	49	2249	埋土中	土師質土器	皿	7.7	1.5		4.2	小型で外傾する体部をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	底部回転糸切り痕	FK-143
ＳＫ25	Po413	135	49	2267	埋土中	土師質土器	皿	7.9	1.6		5.0	小型でやや内湾する体部をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り痕	FK-142
ＳＫ25	Po414	135	49	2266	埋土中	土師質土器	皿	7.6	1.5		4.3	小型でやや内湾する体部をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明黄褐色	明黄褐色	底部回転糸切り痕	FK-139
ＳＫ25	Po415	135		2249	埋土中	備前焼	擂鉢	※23.2	△4.8			直立する口縁部をもつ。内外面ともナデ。	密	良好	灰褐色～にぶい赤褐色	灰褐色～にぶい赤褐色		FK-145
ＳＫ25	Po416	135		2249	埋土中	土師器	高杯	※19.6	△4.1			外反する口縁部をもつ。内外面とも風化のため調整不明。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色	橙色		FK-141
ＳＫ26	Po417	137	49	2335	底面	唐津焼	椀		△2.5		5.2	削り出し高台をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙～褐灰色	赤褐色	内面砂目	FK-173
ＳＳ03	Po418	146		2285	盛土中	弥生土器	甕	※35.6	△5.5			ラッパ状に開く口縁部をもつ。端部は肥厚する。外面口縁部凹線。頸部縦方向ハケ目。内面風化のため調整不明。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		FK-165
ＳＳ03	Po419	146		2288	盛土中	弥生土器	甕	※14.4	△1.9			繰り上げ口縁をもつ。外面口縁部3条の凹線。内面ヨコナデ。	密（1㎜以下の砂粒を含む。）	良好	橙色	褐色		FK-166
ＳＳ03	Po420	146		2283	盛土中	弥生土器	底部		△5.8		※7.2	スマートな底部。内外面とも風化のため調整不明。	密（1～5㎜大の砂粒を含む。）	良好	灰白色	浅黄橙色	外面スス付着	FK-164
ＳＳ03	Po421	146		2288	盛土中	弥生土器	器台？		△11.2			鼓形器台脚台部。内外面ともに風化のため調整不明。	密（1～3㎜大の砂粒を含む。）	良好	淡赤褐色	淡赤褐色		FK-163
ＳＳ03	Po422	146	51	2305	盛土中	瓦質土器	杯身		△2.0		※9.2	椀状の体部、低い高台をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡灰色	暗灰色	底部回転糸切り痕	FK-167
ＳＳ03	Po423	146	51	2295	盛土中	青磁	皿	※13.2	△2.5			波状口縁をもつ。全面に施釉。	密	良好	オリーブ灰色	オリーブ灰色		FK-172
ＳＳ03	Po424	146	51	2306	盛土中	施釉陶器	壺	※10.4	△8.9			小型で、肥厚する口縁部をもつ。内外面とも回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	暗赤褐色	暗赤褐色		FK-170
ＳＳ03	Po425	146	51	2305	盛土中	備前焼	蓋	※5.6	1.0			小型で、天井部との境に稜、かえりに片口をもつ。外面天井部回転ケズリ。内面回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色		FK-171
ピット群02	Po426	126		2271	Ｐ４内	弥生土器	甕	※10.8	△3.2			短く外傾する複合口縁をもつ。外面ナデ。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		FK-162
堤谷地区Ｂ区遺構外	Po427	140		2218		弥生土器	鼓形器台	※28.4	△5.1			大きく外反する鼓形器台上台部。外面風化のため調整不明。内面ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	にぶい黄橙色	淡黄色		FK-177
堤谷地区Ｂ区遺構外	Po428	140		2190		須恵器	杯身	※14.4	△2.7			立ち上がりはやや高く、受け部は水平に引き出される。内外面ともに回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		FK-176
堤谷地区Ｂ区遺構外	Po429	140		2221		瓦質土器	土鍋	※35.4	△5.8			屈曲する口縁部をもつ。内外面ともにナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-178

挿表31　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(16)

倉見7号墳	Po430	149	52	481・490	南側周溝埋土	土師器	壺	※23.6	△7.0			口縁部は大きく外反する鈍い複合口縁状を呈す。端部はわずかに上方へ肥厚する。胴部は球形を呈す。外面口縁端部凹線。頸部ヨコナデ。胴部縦後横方向ハケ目。口縁部内面ヨコナデ。胴部ケズリか。	密（1㎜程度の砂粒をわずかに含む。）	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-51・53
倉見7号墳	Po431	149	52	498	南側周溝埋土	土師器	壺	※12.6	△5.5			端部が肥厚し、短く外反する複合口縁状を呈す。外面ヨコナデ。内面口縁端部ケズリ。以下ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	やや不良	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-97
倉見7号墳	Po432	149		489	北側周溝埋土	土師器	低脚杯		△4.3		※7.8	深い杯部に、低く大きく開く脚部をもつ。杯底部円盤充填。内外面とも風化著しい。ナデか。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	淡黄色	淡黄色		FK-48
倉見7号墳	Po433	149	52	482	南側周溝埋土	土師器	小型丸底壺	8.1	8.8	9.2		やや短く外傾する「く」字状口縁をもつ。胴部は偏球形を呈す。外面口縁部ヨコナデ。胴部横～斜方向ハケ目。内面口縁部ヨコナデ。胴部右方向ケズリ。底部指頭圧痕。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	明赤褐色	胴部外面スス付着	I-3
倉見7号墳	Po434	149	52	484	北側周溝埋土	須恵器	蓋		△1.8	つまみ径 2.8		低く小さな輪状のつまみをもつ。端部を欠く。外面天井部回転ケズリ。体部回転ナデ。内面天井部不整方向ナデ。体部回転ナデ。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰黄色	灰黄色	内面天井部ヘラ記号	FK-65
倉見7号墳	Po435	149	52	477	北側周溝埋土	土師質土器	皿	13.6	2.2			低く大きく開く。外面端部回転ナデ。底部ヨコナデ。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密（1㎜程度の砂粒をわずかに含む。）	良好	淡明赤褐色	淡明赤褐色		I-4
倉見7号墳	Po436	149		495	南側周溝埋土	弥生土器	甕	※11.6	△2.9			短く外反する複合口縁をもつ。外面口縁部平行沈線。内面口縁部ヨコナデ。	密（1～2㎜大の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-50
倉見8号墳	Po437	151		262	北側周溝埋土	須恵器	杯身	※12.4	△3.2			立ち上がりはやや高く外傾し、受け部はやや上方へ引き出される。底部を欠く。内外面とも回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		FK-67
倉見8号墳	Po438	151		234	北側周溝埋土	須恵器	甕					須恵器甕胴部破片。外面平行叩き。内面同心円文叩き。	密（1～2㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰白色	灰白色		FK-64
倉見8号墳	Po439	151	52	197・198 203	東側墳丘	土師質土器	杯	※9.9	△4.0		6.0	深く開く杯。外面体部強い回転ナデ。底部回転糸切り痕。内面回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い黄橙色	鈍い黄橙色		FK-42
倉見8号墳	Po440	151		202	東側墳丘	土師質土器	杯	※13.4	△2.5			大きく開く杯口縁部。内外面とも強い回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		FK-41
倉見8号墳	Po441	151		201・204	東側墳丘	土師質土器	杯		△0.5		※5.8	杯底部破片。外面底部回転糸切り痕。内面回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い橙色	鈍い橙色		FK-43
倉見8号墳	Po442	151		196	東側墳丘	土師質土器	杯		△1.0		※6.2	杯底部破片。外面底部回転糸切り痕。内面回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	浅黄橙色	浅黄橙色		FK-44
倉見8号墳	Po443	151		235	周溝内	弥生土器	底部		△1.0		※3.8	平底を呈す底部。外面縦方向ハケ目。内面ケズリ後ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	鈍い赤褐色～褐色	鈍い赤褐色～褐色		FK-46
倉見9号墳	Po444	157		56	北西斜面	須恵器	甕	※28.0	△8.2			大きく開く甕口縁部。端部は肥厚し、沈線が巡る。外面回転ナデ。口縁部2条1単位の沈線が2段以上巡り、その間に貝殻腹縁による刺突文。内面回転ナデ。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	灰オリーブ色	灰色	自然釉かかる	FK-66
倉見9号墳	Po445	157		25	西側周辺	須恵器	甕					須恵器甕胴部破片。外面平行叩き。内面同心円文叩き。	密（1㎜程度の砂粒を含む。）	良好	青灰色	青灰色		FK-103
倉見9号墳	Po446	157		58・227 293	石室埋土中	弥生土器	底部		△3.2		※6.2	平底を呈す底部。外面縦方向ミガキ。内面ケズリ。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	明赤褐色	橙色		FK-39
倉見9号墳	Po447	157	52	159・214	南東側周溝埋土	弥生土器	高杯		△13.0		※13.1	細く高い筒部から大きく開く裾部をもつ。外面縦方向ミガキ。裾部に円形透かし4カ所ある。内面筒部ケズリ。裾部横方向ハケ目。	密（1～3㎜程度の砂粒を含む。）	良好	橙色～鈍い橙色	鈍い黄橙色	外面黒斑あり	FK-40

挿表32　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（土器）観察表(17)

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土地点	種　類	最大長	最大幅	最大厚	重さ	形態上の特徴	備　考	実測者
SI01	F1	9	30	243	埋土下層	鉄片	△2.8	2.2	0.3	△5.6	偏平で、五角形状を呈す。		IW-24
SI01	F2	9	30	458	埋土下層	鉄片	△3.9	1.6	0.4	△6.0	板状で不整長方形を呈す。ほぼ中央で折れ曲がる。		IW-23
SI01	F3	9	30	306	埋土下層	鉄片	4.0	1.3	0.3	4.4	板状で不整長方形を呈す。		IW-26
SI01	F4	9	30	459	埋土下層	鉄片	3.5	1.0	0.9	4.8	棒状を呈す。断面円形。		IW-25
SI03	F5	13	31	399	埋土下層	鉄片	4.6	3.8	0.3	10.6	板状で不整三角形状を呈す。		IW-12
SI03	F6	13	31	401	埋土下層	鉄片	2.3	1.2	0.2	1.6	板状で長方形を呈す。		IW-13
SI03	F7	13	31	414	埋土下層	鉄片	2.1	1.5	0.2	1.6	板状で三角形状を呈す。		IW-15
SI03	F8	13	31	435	埋土下層	鉄片	△1.8	2.2	0.1	△2.2	板状で不整三角形状を呈す。		IW-14
SI03	F9	13	31	332	埋土下層	鉄片	4.2	1.1	0.3	3.3	板状で三角形状を呈す。		IW-16
SI05	F10	40		510	埋土下層	鉄片	3.9	2.2	0.6	7.6	板状で不整三角形状を呈す。		IW-19
SI05	F11	40		568	床面	鉄片	2.4	2.6	0.4	8.0	板状で不整長方形を呈す。		IW-21
SI05	F12	40		571	埋土下層	鉄片	2.6	1.5	0.3	2.6	板状で不整三角形状を呈す。		IW-18
SI05	F13	40		567	埋土下層	鉄片	1.7	1.7	0.2	1.3	板状で無茎三角形鏃状を呈す。		IW-22
SI05	F14	40		535	埋土下層	鉄片	4.7	0.7	0.5	4.3	棒状を呈す。断面方形。		IW-17
SI05	F15	40		516	埋土下層	鉄片	△2.6	0.9	0.15	△1.4	板状で不整長方形状を呈す。		IW-20

挿表33　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（鉄器・青銅器）観察表(1)

ＳＩ06	F16	41	35	534	埋土下層	鉄片	4.2	3.3	1.7	21.2	偏平で不整形な鉄片が３～４枚付着している。		IW-45
ＳＩ07	F17	45	36	582	埋土下層	鉄片	5.1	6.5	0.6	73.5	やや厚手のいびつなバチ形を呈す。		IW-40
ＳＩ07	F18	45	36	589	埋土下層	鉄片	△3.4	4.9	0.5	△21.0	やや湾曲する板状で不整長方形を呈す。一方端を欠く。折り返しの痕跡が認められる。		IW-42
ＳＩ07	F19	45	36	608	埋土下層	鉄片	3.7	3.2	0.9	12.8	不整三角形状を呈す。	表面に炭化物付着	IW-43
ＳＩ07	F20	45	36	606	埋土下層	鉄片	5.0	2.4	0.3	9.4	腸三角形鏃形を呈す。	表面に炭化物付着	IW-39
ＳＩ07	F21	45	36	605	埋土下層	鉄片	5.0	1.8	0.4	15.8	不整長台形を呈す。	表面に炭化物付着	IW-41
ＳＩ09	F22	55	36	697	埋土下層	鉄片	4.1	3.3	0.4	15.4	板状で不整長方形状を呈す。側面が折れ曲がる。		IW-34
ＳＩ09	F23	55	36	698	埋土下層	鉄片	5.8	1.9	0.6	23.8	棒状を呈す。断面長方形。鉄鏃茎部の可能性あり。		IW-37
ＳＩ09	F24	55	36	480	埋土下層	鉄片	3.4	2.2	0.7	6.4	厚手の不整台形状を呈す。	表面に炭化物付着	IW-44
ＳＩ09	F25	55	36	666	埋土下層	鉄片	1.7	2.5	0.3	2.5	板状で無茎三角茎鏃状を呈す。		IW-36
ＳＩ09	F26	55	36	699	埋土下層	鉄片	3.1	0.6	0.2	1.0	板状で長紡錘状を呈す。		IW-35
ＳK01	F27	15	31	162	床面	鉄釘	6.0	0.45	0.5	3.1	直線状を呈す。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-1
ＳK01	F28	15	31	103	埋土中	鉄釘	6.2	0.3	0.4	2.2	直線状を呈す。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-31
ＳK01	F29	15	31	107	埋土中	鉄釘	△5.3	0.5	0.4	△2.6	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-3
ＳK01	F30	15	31	13	埋土中	鉄釘	△5.2	0.6	0.6	△5.4	直線状を呈す鉄釘片。両端部を欠く。断面方形。		IW-2
ＳK01	F31	15	31	102	埋土中	鉄釘	5.7	0.3	0.3	2.5	「し」状に折れ曲がる鉄釘。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-7
ＳK01	F32	15	31	161	床面	鉄釘	4.7	0.4	0.3	2.9	「し」状に折れ曲がる鉄釘。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-6
ＳK01	F33	15	31	101	埋土中	鉄釘	△4.5	0.4	0.3	2.2	「し」状に折れ曲がる鉄釘。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-4
ＳK01	F34	15	31	107	埋土中	鉄釘	△4.4	0.45	0.3	△2.2	「し」状に折れ曲がる鉄釘。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		IW-38
ＳK03	F35	51	36	618	埋土中	鉄片	3.8	2.7	0.2	10.2	いびつなバチ形を呈す。端部が折れ曲がる。		IW-30
ＳK03	F36	51	36	620	埋土中	鉄片	△3.2	1.4	0.25	△7.2	偏平な長方形を呈す。一方端を欠く。		IW-29
ＳK03	F37	51	36	620	埋土中	鉄片	2.2	1.2	0.3	1.7	偏平で、いびつな三角形状を呈す。		IW-28
ＳK04	F38	61	38	563	埋土中	鉄片	4.8	△4.6	0.5	△32.2	やや厚手のバチ形を呈す。		IW-27
土墓状遺構	F39	70	38	559	旧表土中	鉄刀	△8.2	4.1	0.6	△65	鉄刀の破片と思われる。断面くさび状を呈す。		IW-8
鷲谷口地区土器溜り	F40	29	35	175		袋状鉄斧	△4.9	3.0	0.6	△29.2	刃部幅3.0cmと狭い。挿入部は両側を折り曲げる。		IW-33
鷲谷口地区遺構外	B1	36		97		煙管雁首	△3.6	1.8	0.9	△2.3	火皿は大型で深く、首部は直線状を呈す。		IW-10
鷲谷口地区遺構外	B2	36		23		不明銅製品	△4.3	0.6	0.5	△6.9	棒状の銅製品。断面円形を呈し、面取りが施される。		IW-9
ＳK09	B3	96	44	2012	底面	溶着古銭				△6.9	熱変した古銭と思われる。		FN-
ＳK10	F41	99	44	2002	底面	鉄釘	△3.1	0.5	0.45	△	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、わずかに折れる。断面方形を呈す。		MT-2
ＳK10	F42	99	44	2002	底面	鉄釘	△1.7	0.5	0.45	△	鉄釘頭部片。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		MT-3
ＳK10	F43	99	44	2002	底面	鉄釘	△2.6	0.35	0.25	△	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面長方形。		MT-4
ＳK10	F44	99	44	2002	底面	鉄釘	△1.7	0.45	0.35	△	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面長方形。		MT-5
ＳK10	F45	99	44	2002	底面	鉄釘	△5.0	0.4	0.3	△	直線状を呈す。頭部を欠く。断面長方形。		MT-6
ＳK11	F46	102	44	2023	埋土中	鉄釘	△2.4	0.35	0.25	△	鉄釘頭部片。頭部は「L」字形に折れる。	横方向木質付着	MT-7
ＳK12	F47	104	45	2021	底面やや上	鉄釘	△3.3	0.3	0.3	△	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、「L」字形に折れる。断面方形。		MT-16
ＳK14	F48	108	46	2034	埋土中	鉄釘	△3.8	0.4	0.35	△	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は「L」字形に折れる。断面長方形。	横方向木質付着	MT-11
ＳK14	F49	108	46	2035	埋土中	鉄釘	△3.6	0.3	0.25	△	直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は「L」字形に折れる。断面長方形。	横方向木質付着	MT-12
ＳK15	F50	110	46	2007	底面やや上	鉄釘	4.5	0.25	0.2		直線状を呈す。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		MT-17

挿表34　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（鉄器・青銅器）観察表(2)

ＳＫ15	Ｆ51	110	46	2007	底面やや上	鉄釘	4.7	0.3	0.3		やや曲がる。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		MT-20
ＳＫ15	Ｆ52	110	46	2007	底面やや上	鉄釘	△4.5	0.3	0.3		やや曲がる。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		MT-18
ＳＫ15	Ｆ53	110	46	2007	底面やや上	鉄釘	△3.9	0.35	0.35		直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面方形。		MT-19
ＳＫ16	Ｆ54	113	46	2032	底面	鉄釘	5.4	0.4	0.4		直線状を呈す。頭部は切れ込みをもうけ、「Ｌ」字形に折れる。断面方形。	横方向木質付着	MT-8
ＳＫ16	Ｆ55	113	46	2032	底面	鉄釘	△3.7	0.35	0.3		直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、「Ｌ」字形に折れる。断面方形。	横方向木質付着	MT-9
ＳＫ16	Ｆ56	113	46	2029	底面	鉄釘	△2.1	0.6	0.4		鉄釘頭部片。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面長方形。	横方向木質付着	MT-13
ＳＫ16	Ｆ57	113	46	2030	底面	鉄釘	△1.8	0.5	0.5		鉄釘頭部片。頭部は切れ込みをもうけ、折れ曲がる。断面長方形。	上半横方向、下半縦方向木質付着	MT-15
ＳＫ16	Ｆ58	113	46	2032	底面	鉄釘	△3.1	0.4	0.35		頭部欠く。断面方形。	縦方向木質付着	MT-10
ＳＫ16	Ｆ59	113	46	2029	底面	鉄釘	△3.2	0.3	0.3		頭部欠く。断面方形。	横方向木質付着	MT-14
ＳＫ17	Ｆ60	115	47	2048	埋土中	鉄釘	△3.2	0.3	0.25		直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、「Ｌ」字形に折れる。断面方形。		MT-21
ＳＫ17	Ｆ61	115	47	2048	埋土中	鉄釘	△2.8	0.3	0.35		直線状を呈す。先端部を欠く。頭部は切れ込みをもうけ、「Ｌ」字形に折れる。断面長方形。		MT-22
ＳＫ17	Ｆ62	115	47	2055	底面	鉄釘	△4.1	0.3	0.3		直線状を呈す。頭部を欠く。断面方形。		MT-23
ＳＫ21	Ｆ63	122	48	2042	埋土中	鉄釘	4.3	※0.4	※0.4		直線状を呈す。頭部は「Ｌ」字形に折れる。断面方形。	上半横、下半縦方向木質付着	MT-24
ＳＫ21	Ｆ64	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△2.3	※0.4	※0.4		直線状を呈す。頭部は「Ｌ」字形に折れる。断面方形。	上半横、下半縦方向木質付着	MT-25
ＳＫ21	Ｆ65	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△1.8	※0.4	※0.4		直線状を呈す。頭部は「Ｌ」字形に折れる。断面方形。	横方向木質付着	MT-26
ＳＫ21	Ｆ66	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△3.5	※0.4	0.3		直線状を呈す。頭部・先端部を欠く。断面方形。	縦方向木質付着	MT-27
ＳＫ21	Ｆ67	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△2.5	0.35	0.3		直線状を呈す。頭部・先端部を欠く。断面方形。	横方向木質付着	MT-27
ＳＫ21	Ｆ68	122	48	2042	埋土中	鉄釘	△0.8	0.35	0.3		直線状を呈す。頭部・先端部を欠く。断面方形。	横方向木質付着	MT-27
ＳＫ25	Ｆ69	134	49	2258	底面	短刀	25.1	2.7	0.7		刀身は短く、カマス切先。関は不均等両関。茎は粟尻。	木質付着	Y-10
ＳＳ03	Ｆ70	146	51	2286	②層中	クサビ？	5.5	1.3	0.6	36.0	厚手の板状を呈す。頭部はつぶれたように肥厚する。	鋳造？	MT-29
ＳＳ03	Ｆ71	146	51	2294	⑤層中	鉄釘	△7.4	0.65	0.8	△13.8	ほぼ直線状を呈す。頭部は切れ込みをもうけ折れ曲がる。断面長方形。		MT-28
倉見８号墳	Ｆ72	152	52	903	周溝埋土中	鉄斧	△8.9	△4.9	1.9	△151	断面クサビ状を呈す。先端部、袋部を欠く。		FN-127
倉見９号墳	Ｂ4	157	52	210	玄室埋土中	足金具					楕円形の足金具と考えられる。頂点よりややずれて円形の佩環がつく。青銅地に鍍金が施される。		IW-11
倉見９号墳	Ｆ73	157	52	212	玄室埋土中	釣針	△8.5	0.5	0.4	△3.8	「し」状に折れ曲がる釣針。両端部を欠く。逆刺をもたないものか。断面方形。		IW-32
倉見９号墳	Ｆ74	157	52	98	東側周溝埋土中	鎌	刃長△11.6	4.4	0.4	△79.5	曲刃鎌。先端部を欠く。茎はやや鈍角に付く。		IW-5

挿表35　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（鉄器・青銅器）観察表(3)

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土地点	種　類	石　材	最大長	最大幅	最大厚	重さ	形態上の特徴	備　考	実測番
ＳＩ01	S1	9	30	456	Ｐ２内	石皿	花崗岩	27.6	24.5	17.5	16700	不整形な長方形を呈す。両面に敲打面があり、くぼんでいる。		FN-208
ＳＩ02	S2	11	30	301	埋土上層	砥石	細粒花崗岩	△11.9	5.1	4.8	△448	平面長楕円形、断面六角形を呈す。主な砥面は３面有る。一部欠損。		FK-104
ＳＩ02	S3	11		299	埋土上層	砥石	緑色頁岩	△6.8	△2.7	△0.6	△10.8	偏平な砥石破片。砥面は２面ある。		FK-72
ＳＩ03	S4	13	31	406	埋土上層	石錘	三郡変成岩（黒色変岩）	5.7	5.5	1.3	60	楕円形を呈す。両端を打ち欠く。	粘板岩が変成	FK-73
ＳＩ05	S5	39		566	埋土下層	砥石	赤色頁岩	△5.0	2.5	△0.4	△6.0	砥石の破片。砥面は１面ある。		FK-80
ＳＩ05	S6	39		544	埋土下層	砥石	緑色頁岩	△11.1	5.1	△0.6	△39.8	偏平な砥石の破片。砥面は２面ある。		FK-79
ＳＩ06	S7	40	35	525	埋土下層	砥石	蠟石質頁岩	△11.5	4.3	1.4	△66.5	偏平で、不整形を呈す。主な砥面は４面ある。刺突痕が２カ所認められる。		FN-210
ＳＩ07	S8	44		585	床面	敲石	風化安山岩	△6.1	△3.8	4.3	△142	端部に敲打痕有り。欠損。		FK-110
ＳＩ08	S9	46	36	644	Ｐ１内	敲石	細粒花崗岩	7.2	3.4	3.3	98.5	楕円形を呈す。両端部に敲打痕有り。		FN-216

挿表36　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（石器）観察表(1)

ＳＩ09	S10	54	37	665	埋土下層	敲石	細粒花崗岩	9.2	4.5	2.4	154	偏平な楕円形を呈す。両端部及び側面に敲打痕をもつ。		FK-107
ＳＩ09	S11	54	37	691	埋土下層	磨石	微粒花崗岩	6.9	5.0	1.9	110	楕円形を呈す。全体を磨いている。		FK-213
ＳＩ09	S12	54	37	683	埋土下層	擦石	微粒花崗岩	7.7	7.6	4.7	437	円形を呈す。周縁部及び両面に敲打痕。	有色鉱物が少ない。等粒状組織。	FN-211
ＳＤ15	S13	55	37	680	埋土中	砥石	細粒花崗岩	△21.2	14.0	8.9	△3145	ばち形を呈す。主な砥面は４面あり、よく使い込まれ湾曲している。		I-71
ＳＤ15	S14	55	37	847	床面	砥石	細粒花崗岩	△16.1	10.0	5.8	△1569	長方形を呈す。主な砥面は３面あり、よく使い込まれ湾曲している。		FN-209
ＳＩ10	S15	56	37	725	床面	敲石	安山岩質凝灰岩	7.5	6.8	4.5	373	楕円形を呈す。端部に敲打痕有り。		FK-118
ＳＩ10	S16	56	37	730	埋土下層	石錘？	硅岩（コウサイト）	△7.1	3.4	1.3	△42.2	偏平な長楕円形を呈す。端部を両側から打ち欠く。一方端欠損。		FN-212
土塁状遺構	S17	69	38	551	旧表土中	不明石器	粘板岩	△7.1	△3.8	△0.35	△15.4	偏平。表面には擦痕、直線紋が認められる。		FK-100
土塁状遺構	S18	69	38	561	旧表土中	管玉未製品	碧玉	△2.8	△1.2	△1.1	4.3	荒割未製品。一部面取りがある。		FK-114
鷲谷口地区土器溜り	S19	28	35	169	黒色土中	砥石	流紋岩質凝灰岩	△13.0	5.3	5.0	692	断面長方形を呈す。主な砥面は４面有る。一部欠損。		FK-105
鷲谷口地区土器溜り	S20	28	35	40		砥石	流紋岩質凝灰岩	△8.7	6.9	2.3	△223	偏平な長方形を呈す。主な砥面は５面有る。一部欠損。		FK-106
鷲谷口地区土器溜り	S21	28		74		砥石	細粒花崗岩	△7.4	7.3	3.0	△151	主な砥面は２面有る。欠損。		FK-109
鷲谷口地区土器溜り	S22	28		57		石皿	安山岩	△12.3	△6.3	8.5	△905	石皿の破片と思われる。上面は湾曲している。	安山岩質溶岩	FN-217
鷲谷口地区遺構外	S23	35		59		砥石	砂岩	△5.6	3.1	1.1	34.2	偏平な長方形を呈す。砥面は４面有る。端部欠損。		FK-111
鷲谷口地区遺構外	S24	35		31		砥石	灰緑色頁岩	△4.1		1.8		砥石の破片。砥面は３面ある。		FK-113
鷲谷口地区遺構外	S25	35	35	219		五輪塔（空風輪）	角閃石安山岩	21.1	13.0	11.7	3542	五輪塔空風輪部分。風化著しい。		I-72
鷲谷口地区遺構外	S26	35	35	2		硯？	緑色頁岩	5.1	3.2	0.3	△7.1	偏平で、長方形を呈す。周縁部にくり込みがある。	硅質流紋岩	FN-218
ＳＩ11	S27	83	43	2088	埋土中	砥石	流文岩質凝灰岩	△9.9	8.3	5.1	△562	半分欠損。主な砥面は３面あり、よく使い込まれている。		山-3
ＳＩ11	S28	83	43	2083	埋土中	砥石	流文岩質凝灰岩	5.3	3.6	0.8	30	偏平な長方形を呈す。全面研磨される。		北-13
ＳＩ16	S29	129	49	2236	Ｐ１内	砥石	花崗岩	△14.2	△8.9	7.0	△1220	砥石破片。主な砥面は１面である。		Y-5
ＳＫ25	S30	134	49	2319	埋土中	砥石	細粒花崗岩	△14.4	△10.8	△8.8	△1916	砥石破片。主な砥面は２面である。		T-9
ＳＳ03	S31	145	51	2292	盛土中	砥石？	灰緑色頁岩	△6.6	5.0	△0.6	△37	偏平な砥石破片。全面研磨される。		T-11
ＳＳ03	S32	145	51	2289	盛土中	石錘	角閃石花崗岩	6.8	6.6	2.7	171	楕円形を呈す。両端を打ち欠く。		T-6
ＳＳ03	S33	145	51	2284	盛土中	磨製石斧	閃緑岩	△8.4	6.2	4.6	△388	磨製石斧基部。刃部を欠く。断面楕円形。		北-12
ＳＳ03	S34	145	51	2291	盛土中	石皿	安山岩	29.1			△7.0 Kg	楕円形を呈す。半損。中央部はよく使い込まれ、くぼんでいる。底面は平坦。		北-41
堤谷地区Ａ区遺構外	S35	126		2024		磨製石斧	細粒花崗岩	△13.8	5.5	△4.2	△531	磨製石斧破片。刃部・基部欠く。		FK-108

挿図37　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（石器）観察表(2)

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土地点	種類(銭名)	国名	初鋳年(西暦)	書体	最大径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
鷲谷口地区遺構外	Ｃ1	36	35	920		寛永通寶	日本	1636年	楷書	2.3		0.15	2.6	
ＳＫ10	Ｃ２～Ｃ９	99	44	2011	底面	熙寧元寶他	北宋	1068年	真書	3.13	短径2.57	1.43	25.2	計8枚付着。FN-209
ＳＫ10	Ｃ10～Ｃ13	99	44	2011	底面	不明				2.88	短径2.6	0.77	12.0	計4枚付着。FN-210
ＳＫ10	Ｃ14	99	44	2011	底面	不明				2.67	短径2.355	0.175	3.8	変形
ＳＫ11	Ｃ15	102	44・45	2022	底面	開元通寶	唐	621年	真書	2.51	2.205	0.115	2.4	
ＳＫ11	Ｃ16	102	44・45	2022	底面	淳化元寶	北宋	990年	真書	2.4	1.845	0.1	2.6	
ＳＫ11	Ｃ17	102	44・45	2022	底面	景徳元寶	北宋	1004年	真書	2.46	1.9	0.1	3.1	
ＳＫ11	Ｃ18	102	44・45	2022	底面	天禧通寶	北宋	1017年	真書	2.53	2.085	0.1	3.0	
ＳＫ11	Ｃ19	102	44・45	2022	底面	皇宋通寶	北宋	1038年	真書	2.455	1.835	0.13	3.2	
ＳＫ11	Ｃ20	102	44・45	2022	底面	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	2.375	1.9	0.135	3.0	
ＳＫ11	Ｃ21	102	44	2022	底面	元豊通寶？	北宋	1078年	行書	2.275	1.91	0.12	2.4	
ＳＫ11	Ｃ22	102	44・45	2022	底面	政和通寶	北宋	1111年	篆書	2.405	2.14	0.115	2.9	

挿表38　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（古銭）観察表(1)

ＳＫ11	Ｃ23	102	44・45	2022	底面	永楽通寶	明	1408年	真書	2.5	2.085	0.135	4.2	
ＳＫ11	Ｃ24	102	44	2022	底面	不明				2.32	1.845	0.1	2.2	
ＳＫ11	Ｃ25	102	44	2022	底面	不明				2.385	2.085	0.13	3.6	
ＳＫ12	Ｃ26	105	45・46	2016	底面	咸平元寶	北宋	998年	真書	2.455	1.91	0.1	2.8	
ＳＫ12	Ｃ27	105	45・46	2016	底面	祥符通寶	北宋	1009年	真書	2.49	2.0	0.13	3.0	
ＳＫ12	Ｃ28	105	45・46	2016	底面	皇宋通寶	北宋	1038年	真書	2.53	1.925	0..095	2.9	
ＳＫ12	Ｃ29	105	45・46	2017	底面	大観通寶	北宋	1107年	真書	2.46	2.14	0.115	△2.4	
ＳＫ12	Ｃ30	105	45・46	2015	底面	永楽通寶	明	1408年	真書	2.49	2.09	0.14	1.9	
ＳＫ12	Ｃ31	105	45・46	2015	底面	不明				2.4	1.86	0.12	3.2	○○通寶
ＳＫ14	Ｃ32～Ｃ34	108	46	2051	底面	皇宋通寶他	北宋	1038年	真書	2.585	短径2.435	0.39	9.0	計３枚付着。布付着
ＳＫ14	Ｃ35	108	46	2051	底面	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	2.46	2.0	0.095	2.8	
ＳＫ14	Ｃ36・Ｃ37	108	46	2051	底面	不明				2.53	短径2.435	0.21	6.1	計２枚付着
ＳＫ18	Ｃ38	117	47	2033	底面	開元通寶	唐	621年	真書	2.48	2.18	0.09	1.7	
ＳＫ18	Ｃ39	117	47	2033	底面	景祐元寶	北宋	1034年	真書	2.405	1.955	0.105	2.8	
ＳＫ18	Ｃ40	117	47	2033	底面	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	2.355	1.79	0.1	2.4	
ＳＫ18	Ｃ41	117	47	2033	底面	熙寧元寶	北宋	1068年	篆書	2.46	1.8	0.13	2.9	
ＳＫ18	Ｃ42	117	47	2033	底面	元祐通寶	北宋	1068年	篆書	2.43	2.0	0.1	2.5	
ＳＫ18	Ｃ43	117	47	2033	底面	不明				2.37	1.9	0.12	1.4	
ＳＫ20	Ｃ44	120	47	2053	底面	開元通寶	唐	621年	真書	2.32	1.97	0.11	2.6	
ＳＫ20	Ｃ45	120	47	2052	底面	祥符元寶	北宋	1009年	真書	2.41	1.855	0.13	3.7	
ＳＫ20	Ｃ46	120	47	2052	底面	祥符元寶	北宋	1009年	真書	2.41	1.975	0.115	2.9	
ＳＫ20	Ｃ47	120	47	2052	底面	天聖通寶	北宋	1023年	真書	2.38	2.015	0.09	3.3	
ＳＫ20	Ｃ48	120	47・48	2052	底面	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	2.39	1.915	0.115	2.4	
ＳＫ20	Ｃ49	120	47	2053	底面	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	2.39	1.825	0.13	3.7	
ＳＫ20	Ｃ50	120	47・48	2053	底面	元豊通寶	北宋	1078年	行書	2.37	1.935	0.14	2.9	
ＳＫ20	Ｃ51	120	47	2052	底面	元豊通寶？	北宋	1078年	行書	2.235	1.815	0.11	△1.4	熱で変形
ＳＫ20	Ｃ52	120	47・48	2044・2052	底面	聖宋元寶	北宋	1101年	行書	2.365	1.995	0.11	1.8	熱で変形
ＳＫ20	Ｃ53	120	47	2052	底面	永楽通寶	明	1408年	真書	2.46	2.16	0.145	△1.6	
ＳＫ20	Ｃ54	120	47・48	2052	底面	不明				2.38	2.04	0.1	2.2	○○通寶
ＳＫ20	Ｃ55	120	47	2053	底面	不明				2.355	1.98	0.125	3.6	

挿表39　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（古銭）観察表(2)

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	出土地点	種類	材質	最大長	最大幅	最大厚	重さ	形態上の特徴	備　　考	実測者
ＳＩ01	Ｊ１	9	30	309	床面	管玉	碧玉	△1.4	0.75	孔径0.2～0.25	△0.9	断面円形を呈す。一方端を欠く。両側穿孔。		FK-69

挿表40　西桂見遺跡・倉見古墳群出土遺物（玉製品）観察表